

日本中國學會報 第七十二集
二〇二〇年十月十日 發行 拔刷

『型世言』評者・陸雲龍の出版活動と復社

表野和江

『型世言』評者・陸雲龍の出版活動と復社

表野和江

はじめに

陸雲龍と陸人龍兄弟は、明末の崇禎年間に杭州で活動した書肆である。彼らの名を一躍高めた白話短編小説集『型世言』は、八十年代に韓國ソウル大學奎章閣で発見されて以来、明末清初の小説に大きな影響を與えた作品として、「三言二拍一型」とも稱される。しかしその刊行状況は多くの點が不明であり、陸氏兄弟の生平に關しても詳しいことはわかっていない。

兄弟のうち兄の陸雲龍（一五八七—一六六六¹、字は雨侯、室名は翠娛閣）は、『型世言』の序者また評者として知られるほか、多數の書籍を刊行した出版家として一定の名聲をもち、また小説『魏忠賢小説奸書』や『清夜鐘』の作者とも目されることから、従來から主たる研究対象とされてきた。そのなかで論者の多くが指摘するのが、彼の著述・出版書に通底する「愛國忠義」への表彰と、そこにみえる復社、および復社傘下にあつた幾社の影響である。従來の研究では、その影響關係は認めるものの、實際の交際に關しては、これを證明する資料が無いことを理由に、否定的な意見が大勢を占めてきた。²

『型世言』評者・陸雲龍の出版活動と復社

本稿では陸雲龍と復社・幾社の交際を明らかにする資料を紹介するとともに、その交際が陸雲龍の出版に與えた具體的な影響を指摘したい。なお本稿は、今なお陸雲龍の作か決定的な證據を缺く『清夜鐘』に關しても、これを裏付ける資料を提供するものである。

一 陸雲龍の著述等に見える復社・幾社

まずは復社・幾社の影響について、陸雲龍の著述等に、實際にその名がみえるものを確認したい。

最も早いのは、崇禎七年（一六三四）序をもつ陸雲龍の詩文集『翠娛閣近言』である。³そこには、「用陳臥子韻」「俱用幾社韻」等、幾社および幾社の領袖陳子龍（字は臥子）の韻を用いたと注記する詩が、五〇首近く見えている。ただしこれらの詩は、巻頭に「甲戌」（崇禎七年）の作と明記されており、胡蓮玉氏によれば、その詩題と脚韻はすべて崇禎五年刊『幾社壬申合稿』から出るもので、幾社と實際に唱和した作ではないという。⁴

『翠娛閣近言』は他にも、復社のリーダー張溥撰「五人墓碑記」に言及する文章を二つ、収録する。周知のごとく五人墓は、蘇州で起こ

つた反魏忠賢派の暴動によつて死んだ烈士の墓である。陸雲龍は「五人之墓、張天如（溥）所記也」（文卷一「遊虎丘記」）、「張天如有碑、以傳其事」（文卷三「吊五人墓文」題注）と記している。

同じく崇禎七年序刊『翠娛閣評選明文歸初集』は、陳子龍「屍蟲說」（卷一二）を収録し、そこには幾社の「愛國忠義」の思想を高く評價する、陸雲龍の次の評が附される。（カッコ内は筆者補、以下同）

幾社之文、情深旨遠、效忠極殷、字字皆針砭、字字皆熱血。若僅云儷秦偶漢、奴隸六朝、恐抹殺諸賢一段隱心。

幾社の文は情深く旨遠く、忠を效すこと極めて殷ん、字字皆な針砭（病を癒す石針）、字字皆な熱血。若し僅かに秦に儷び、漢に偶び、六朝に奴隸たるとのみ云わば、恐らくは諸賢の一段の隱心を抹殺せん。

なおこの「屍蟲說」に着想を得たと思われる「屍蟲辨」が、『翠娛閣近言』に見えており（文卷二）、以上は復社・幾社への傾倒を、如實に示すものといえるだろう。

次いで、崇禎九年（一六三六）序刊『翠娛閣評選鍾伯敬先生合集』には、作者鍾惺の弟子で、復社成員の許彥が序を贈っている。許彥、字は玉史、福建侯官の人、崇禎四年の進士。序では、友人譚元春らから寄せられた鍾惺の遺稿を刊行しようとしたが果たせず、遺憾に思っていたと言い、次のように述べて陸雲龍の書籍刊行を歓迎する。

今年余筦海四明、會錢塘陸生雲龍彙刻先生全集。陸生之志、猶余志乎。乃喜爲序。

今年、余、四明（寧波）に海を筦（管と同じ）するに、錢塘の陸生雲龍が（鍾）先生の全集を彙刻するに會う。陸生の志は、猶お余の志のごときか。乃ち喜んで序を爲す。

署名に「書于明州官舍」とあるように、許彥は當時、浙江寧紹道臺として寧波に赴任していた。なおこの書について王重民氏は、序と、書名「合集」から、許彥が所藏する鍾惺の遺稿を陸雲龍に提供した、とされている。

さらに陸雲龍の死後、息子陸敏樹が書いた「陸蛻庵先生家傳」（康熙十二年序刊『新鐫啓牘大乘備體』、以下「家傳」）には、かつて張溥が陸雲龍に手紙を寄越し、書籍の改訂を求めたことが、こう記されている。

選明文成、張西銘寄語。去艾東鄉文、當以東西浙領袖相屬。答曰、何所見而選耶。時東鄉、太倉相左、太倉方執復社牛耳、人競思附、終不爲改也。

選明文（書名不明）成り、張西銘（溥）語を寄す。「艾東郷（南英）の文を去り、當に東西浙の領袖を以て相い屬すべし」と。答えて曰く、「何の見る所にして選ぶや」と。時に東郷、太倉（張溥）は相い左にし、太倉は方に復社の牛耳を執れば、人は競い附かんと思うも、終に改むることを爲さざるなり。

以上はいずれも、復社との具體的な接觸を示している。このように、陸雲龍に對する復社・幾社の明らかな影響が認められるものの、より直接的な交際に關しては證明する資料は無い、とされてきたこと、冒頭述べたとおりである。

しかしこれを證明する資料が實はある。そのカギを握る人物は、陸雲龍の友人で、彼の書籍にしばしば名がみえる寧波慈谿の人、馮元仲、字は次牧であった。次節から詳しく見て行くことにしよう。

二 陸雲龍と馮元仲の關係

馮元仲は、陸雲龍の出版活動に關わつてゐる。

崇禎六年序刊『皇明十六名家小品』は、屠赤水（隆）、徐文長（渭）、李本寧（維禎）、董思白（其昌）、湯若士（顯祖）、虞德園（淳熙）、黃貞父（汝亨）、王季重（思任）、鍾伯敬（惺）、袁中郎（宏道）、文太青（翔鳳）、曹能始（學佐）、張侗初（鼐）、陳明卿（仁錫）、陳眉公（繼儒）、袁小脩（中道）ら十六家の小品文、各二卷からなる書で、その序者と、『王季重先生小品』の選者に、馮元仲の名がみえる。序では、陸雲龍を「友」と呼び、また十六名家について次のように述べてゐる。

少時、先方伯與屠緯眞先生賦詩飲酒、如見黃面瞿曇。迨長侍貞父師、從帷帳間望見虞公德園。最後眉公、本寧、季重三先生、或誼竝講世、或書疏。當面此十六公、僅得六、七。

少き時、先方伯（布政使。元仲の祖父叔吉）、屠維眞（隆）先生と詩を賦し酒を飲めば、黃面瞿曇（釋迦）を見るが如し。長ずるに迨び貞父師に侍り、帷帳の間より虞公德園を望見す。最後に眉公、本寧、季重三先生は、或いは誼ありて竝に世を講じ、或いは書疏あり。當面せしは此の十六公の、僅かに六、七を得るのみ。

十六名家の半數近くを直に知つてゐること、このうち複數とは密接な關係があつたことをいう。序はさらに、免職等の經歷が原因で作品が雜多な状態となつてゐる文壇の大家、王世貞と黃道周の小品文を速やかに刊行するよう勧めた上で、もし出版するつもりならこの二人に加えて、寧波の著名な文人、余寅、徐時進、錢文薦ら五人の小品文を合わせた「七品」を提供しよう、と述べていて、陸雲龍の出版活動に大きなメリットをもたらす人物だつたことがうかがえる。そして恐ら

くはそのためであろう、陸雲龍は彼の出版書に、馮元仲に關わる文章を複數載せてゐる。

たとえば同書の「陳眉公小品」には、馮元仲の父の傳（卷二「馮甄甫傳」と、馮元仲宛て書簡（同「答馮次牧書」）を収録する。その書簡の評で陸雲龍は、刊行豫定の書籍には馮元仲が陳繼儒に宛てた書簡を收めるつもりだと述べ、且つ「黃石齋曰く」として、「次牧の眉公に與うる書は矜踔絶倫」「又曰く、馮（元）仲は個儻、讀書を善くし、典墳に控送し（古文に巧みで）布衣雄世の思ひ有り」と述べて、馮元仲の人物と文才を高く評價する、黃道周の言葉を用いる。なおこれらはいずれも陳繼儒、黃道周の文集にも見えてゐる。

また崇禎七年序刊の先掲『翠娛閣評選明文奇艷』には、馮元仲刊行『孫月峰先生批評禮記』に寄せた陸雲龍の序が収録されており（文卷一）、ここでは陸雲龍が馮元仲を「友」と呼ぶ。

さらに、崇禎九年序刊『翠娛閣評選明文奇艷』では、當時寧波の推官だつた李清が序を寄せ、『皇明十六名家小品』の序者馮元仲に觸れて次のようにいう。

余既李四明、日逐逐簿書間。（中略）湖上陸雨侯、爲諸生、有名、博古搜奧。（中略）已刻有文歸、行笈、及十六家小品、句章諸生馮次牧、爲序以傳。（中略）嗣有明文奇艷之選、時時對余商略。余始出家本、以小小筆墨佐之、從與以幾於成。

余既に四明に李法官たりて、日び簿書の間に逐逐たり。（中略）湖上の陸雨侯は、諸生と爲り、有名、博古搜奧。（中略）已に刻すに『明文歸』『行笈（必携）』及び『十六家小品』有り、句章（慈谿の古名）の諸生馮次牧、序を爲し以て傳う。（中略）嗣いで『明文奇艷』の選有り、時時余に對かい商略す。余始めて家本を出し、

小小の筆墨を以て之を佐け、從史して(勵まして)以て成るに幾し。李清、字は心水、號は映碧、江蘇興化の人、崇禎四年の進士。張溥、許彥とは同年である。李清は、陸雲龍が生涯「師」と仰いだ人物で、崇禎九年に寧波を離任する際には陸雲龍が『李映碧公餘錄』を編集刊行しており、その巻頭に「門人陸雲龍訂」とある。「家傳」によれば、杭州に兵禍が及んだ鼎革期、陸雲龍親子は李清の勧めに應じて彼の郷里興化に身を寄せ、李清は物心両面で彼らの生活を支えたという。なお右から、陸雲龍は李清からも藏書の提供を受けたことがわかる。¹⁵⁾

それでは、馮元仲とはいかなる人物であったのか。

馮元仲の傳記は、慈谿の進士姜宸英による「前徵君次牧馮先生合葬墓誌銘」(『天益山堂遺集續刻』、以下「墓誌銘」)があり、『慈谿縣志』等の地方志がこれを引いて傳を立てるほか、馮元仲の家塾の師で姻戚でもある秦舜昌の著述を、馮元仲が編集刊行した『林衣集』に關連資料が見える。¹⁶⁾今、それらを総合すると、馮元仲(一五八九—一六七〇)、字は次牧また爾禮、四歳のときに諸生だった父を亡くし、母陳氏に養育された。十六歳で諸生となるも郷試には合格せず、四十前に科擧を放棄、以後は經史の研究と詩歌の制作に没頭したという。その一方で、「天益山」と名付けた別邸で刻書活動をおこない、精巧な書籍を刊行して大いに人氣を集め、また昔ながらの製法で名墨を復刻した。天益山の書墨は國中に流布しただけでなく海外にも舶載され、一時、東南の名士たちはみな彼を慕って交際した、とある。撰刻した書には『天益山志』『弈旦評』『食憲』『酒克』『茗笈』『天益山房詩集』『白雪草堂師生合稿』『復古堂詩文集』『巢松閣選義』『欣拓廬質言』等があったが、ほとんど傳わらない。

馮元仲が趣味的な生活を送っていた様子が窺えるが、實は慈谿馮氏は浙江有数の望族で、とくに『皇明十六名家小品』の序にも觸れている馮元仲の祖父叔吉は、湖廣左布政使にのぼった名士として知られ、その門は慈谿最多の「九舉人七進士」を生んだ、名門中の名門であった。¹⁷⁾馮叔吉、字は汝迪、嘉靖三十二年の進士。『兩浙名賢錄』に傳が見える(卷二十「經濟」)。馮元仲は、巨富でもあったこの祖父の莫大な遺産で天益山を買い、藏書數萬卷を受け繼いで出版を行ったのである。¹⁸⁾なお「皇明十六名家小品」序で彼は、自分は科擧を捨て去って久しく功名心は盡きた、暫くは知己の成功のために一肌脱ごう、とも述べていて、『琵琶行』の一節「老大嫁して商人の婦と作る」を引き、「其れ余を馮婦と笑うか」とやや自嘲して商人の婦と作るを引き、情溢れる言葉で陸雲龍への全面的な支援を申し出ている。陸雲龍にとってパトロン的存在だったとも言えるだろう。

そしてこの馮元仲が、復社と深い關係で結ばれていた。

三 復社と馮元仲、そして陸雲龍

まず注目すべきは、馮氏と復社の關係である。復社成員で、慈谿に隣接する紹興余姚のひと黃宗羲(一六一〇—一九五)は、明末、慈谿の文社に参加していた。「劉瑞當先生墓誌銘」(『黃梨洲文集』)に次のように回想する。(＊印は復社成員、以下同)

崇禎間、吳中、倡爲復社以網羅天下士、高才宿學多出其間。主之者張受先、張天如。東浙馮留仙、鄴仙、與之枹鼓相應。皆喜容接後進、標榜聲價、人士奔走、輻輳其門。(中略)當是時、慈水才彥霧會。姜崑愚、劉瑞當、馮玄度、馮正則、馮篁溪諸子、莫不爲物望所歸。而又引旁近縣以自助。甬上則陸文虎、萬履安。姚江

則余兄弟晦木、澤望。蓋無月無四方之客、亦無會不諸子相徵逐也。嗚呼、盛矣。

崇禎の間、吳中、倡えて復社を爲り、以て天下の士を網羅し、高才宿學多く其の間に出ず。之を主る者は*張受先(采)、*張天如(溥)なり。東浙は馮留仙(元颺)、鄴仙(元颺)、之と枹鼓して相應ず。皆、後進を容接し聲價を標榜するを喜び、人士、奔走して其の門に輻輳せり。(中略)是の時に當たりて慈水に才彥霧會し、姜崑愚(思睿)、*劉瑞當(應期)、*馮玄度(文偉)、馮正則(謙不明)、*馮簞溪(京第)の諸子、物望の歸する所と爲らざるは莫し。而して又た旁近の縣を引きて以て自ら助く。甬上は則ち*陸文虎(符)、*萬履安(泰)、姚江は則ち余(*黃宗羲)の兄弟晦木(宗炎)、澤望(宗會)なり。蓋し月として四方の客無きは無く、亦た會として諸子の相い徴逐せざるは無し。嗚呼、盛んなり。

文社の盟主は馮元颺(二五八六一一六四四)と馮元颺(二五九八一—一六四四)、崇禎末年に天津巡撫と兵部尙書の大官にのぼり「二馮」と稱された、慈谿馮氏の兄弟である。弟元颺は東林黨人士でもあるが(『東林列傳』卷二四)、彼らは復社と「枹鼓して相應じ」、周邊地域の才子たちが雲集したというから、この文社は浙東における復社の支社であったのだろう。また右には馮氏の子弟が複數みえており、全祖望『續甬上耆舊詩』は、同社同人は馮氏がもつとも多かつたと述べる。この文社について方祖猷氏は、二馮のいとこ馮元颺がいう次の「文昌社」がこれであろうとされた。

自吾黨文昌社興、而同鄉人士不然一變、而知所爲東林之學。(中略)文昌社者、中丞、太保兩先兄、暨文烈公、姜詔朋先生、實主是盟。當是時、鄞有陸、萬二子、次公、碩客、天鑑弟季。吾邑則

瑞當、家正則、玄度、兄弟群從。益以姚江黃子三人。

吾が黨、文昌社興りて自り、同郷人士は不然一變して所爲(所謂)東林の學を知る。(中略)文昌社は中丞(元颺)・太保(元颺)兩先兄、暨び文烈公(汪偉)、姜詔朋先生(思睿、字は一に謂明)、實に是の盟を主る。是の時に當たり、鄞は陸・萬二子、次公(*董守諭、碩客(*徐家麟)、天鑑(董德稱)弟季有り。吾が邑は則ち瑞當、家の正則、玄度、兄弟群從。益すに姚江の黃子三人を以てす。

先の二文にみえる一五名中、一四名の名があり、内容の明らかな類似から、氏の指摘は妥當と思われる。

ところで、馮元仲は次の五種類の學業書、つまり受験參考書を出版している。

- (イ) 『孫月峰先生批評漢書』 一百卷 崇禎七年刊
- (ロ) 『孫月峰先生批評史記』 一百三十卷 崇禎九年序刊
- (ハ) 『孫月峰先生批評詩經』 四卷 明末刊
- (ニ) 『孫月峰先生批評禮記』 六卷 明末刊
- (ホ) 『孫月峰先生批評書經』 六卷 明末刊

ともに當時人氣の高かつた孫鑛(號は月峰。萬曆二年の會元)の批評本で、參訂は馮元仲がおこない、校閲には彼の長子と女婿ら合計一七九名、のべ三百名餘りが見えている。

これを一覽にしたものが【別表】である。太字表記は浙東に關わる内容、○は復社・東林黨關係者、●は文昌社同人である。一見して明らかかな如く、ほぼ全員が浙東に關わる文人か、復社・東林黨關係者で

あり、また慈谿馮氏が拔けて多いことに氣づく。内譯は、浙東文人が一〇六名（在勤官吏ら二三名を含む）、復社・東林黨關係者が八六名（復社七六名、東林黨一四名、重複四名）で、二二名が雙方に屬する。

そしてこの表が明らかにするように、實は文昌社盟主の二馮は馮元仲の「はとこ」にあたり、五種の學業書すべてに名を連ねる（1、2。アラビア數字は【別表】ID、以下同）。のみならず、先の資料に見える文昌社同人一九名中、一三名の名があるのである。しかも、文昌社盟主の一人、と馮元龍がいう、東林黨の汪偉（33）は馮元仲の師、さらに方祖猷氏が「文昌社同人たちの師」と指摘された、同じく東林黨の黃道周、劉宗周の名もみえる（4、119）。そこで馮元仲と復社の關係を調べたところ、これを裏付ける資料が複数確認できた。また先に觸れた黃道周との關係はもちろん、學業書の主たる校閲者である長子と女婿（3、8）が、ともに草創期からの復社成員だった事實が判明した。⁽²⁷⁾

そこで調査を進めると、全祖望「寓公雙瀑院長黃宗羲」（『續甬上耆舊詩』卷三八）に、文昌社と思われる記述と馮元仲の名が、次のように見えていた（圍みは筆者）。

已にして慈水は二馮、浙東の才彦を合わせ復社と應ず。二馮の子弟は芾皇（愷章）、道濟（愷愈）、元箸（崑）、次牧、躋仲（京第）。劉瑞當、姜顯愚。鄭は則ち董次公、陸文虎、萬履安、天鑑兄弟三。姚江は則ち先生（黃宗羲）兄弟なり。

馮元仲は、文昌社の同人だったのである。

さて、ここで陸雲龍に戻りたい。友人馮元仲と復社の關係が確かとなった今、陸雲龍と復社の關係も大いに近づいた、と言えるであろう。しかしそれだけではない。馮元仲刊行の學業書には陸雲龍の名

も、實は見えていた。

（イ）『孫月峰先生批評漢書』は、各卷二名の校閲者を掲げ、このうち一名はほぼすべて先述した馮元仲の長子馮崑か、女婿錢玄錫、馮元仲が陸雲龍に小品文を提供しようと述べた、錢文薦の孫⁽²⁸⁾で、ここに全卷異なる他一名が加わる。その卷六三に、「武林陸雲龍雨侯」とある（105）。陸雲龍が（二）『禮記』に序を寄せたことは述べたが、彼自身が校閲作業に参加していたのである。なお五種の學業書は、刊年を明記するものは二種のみであるが、序や凡例の記述から、その成立はほぼ崇禎七年の一年間と知れる。⁽²⁹⁾

崇禎七年といえば、陸雲龍の刊行書に復社・幾社に關する記述が見えるのはすべて崇禎七年以降であった。そして、そこに名があつた張溥、陳子龍、許彥、加えて李清、王思任、陳繼儒も、みな校閲に名を連ねている（5、7、22、40、53、121⁽³⁰⁾）。當時、寧波の役人だった李清、許彥が序を贈り、そこに馮元仲の名が見えたことも腑に落ちる。陸雲龍が馮元仲と出會つたのは、馮序を附す『皇明十六名家小品』が刊行された、崇禎六年以前であるのは確かであり、また馮元仲の長子と女婿が復社成立時（崇禎二年）からの成員だったことも既に述べたとおりである。よつて陸雲龍は、崇禎七年より早く馮元仲を介して復社の人びとを知り得る立場にあつたと言えるが、以上に見てきた状況から考えて、少なくとも具體的な交際に關しては、學業書校閲への参加を機に發展したとみてよいだろう。

陸雲龍はこの交流をとおして、深く復社・幾社の思想に傾倒していったのであろう。また、この交流が陸雲龍の出版活動に與えたものは、思想的な影響にとどまらず、藏書や序の提供、さらには李清の場合のように彼の生涯を通じた人間關係など、有形無形の恩恵であつ

た。陸雲龍の活動全體を考えるうえで注目すべきであろう。

なおこれに関連して、『翠娛閣近言』に「送劉心蓼師歸楚」（詩卷一）、「候謝劉心蓼老師啓」（文卷三）とみえる、陸雲龍のもう一人の師、劉心蓼について述べておきたい。

この劉心蓼は、『嘉慶』太倉州志』卷六「職官上」に「劉彦、心蓼、鍾祥人、進士、（天啓）六年任」とある太倉知州、劉彦に相違あるまい。劉彦、湖廣鍾祥の人、天啓五年の進士。太倉は、周知のごとく復社リーダー張溥、張采の出身地であるが、その張溥が復社重鎮の周鍾、陳組綬らとともに序を附す沈承撰『毛孺初先生評選卽山集』（天啓七年序刊）に、劉彦も序を寄せている。また、劉彦が太倉知州として崇禎二年に重刊した『太倉州志』では、張溥はその序を代筆しており（『嘉慶』太倉州志』卷六三「舊序」。題下に「代知州劉彦作」とある）、さらに張采も、劉彦のために離任の賀序（「賀太倉劉州尊滿秩序代」『七錄齋集』卷六三）と兄の墓誌銘（「學博芝田劉公墓誌銘」『知畏堂文存』卷七）を書いていて、復社と密接な関係をもつ人物だったことがわかる。従来の復社研究では、劉彦の後任の歴代太倉知州たち、劉士斗、周仲璉、錢肅樂（周、錢は復社メンバー）と張溥・張采の関係が指摘されてきたが、劉彦も加えるべきであろう。なお周鍾と張采は、張溥同様、陸雲龍が参加した（イ）『漢書』の校閲に名を連ねている（38、41）。陸雲龍が劉彦を知ったのも、この交流を通じてであった可能性は高いと思える。

また劉彦の郷里鍾祥は、鍾惺・譚元春の故郷景陵（古名竟陵）とおなじ承天府に属すが、陸雲龍が刊行した書籍には鍾惺に關わるものが際立って多い。先掲の『翠娛閣評選鍾伯敬先生合集』、『皇明十六名家小品』所收「鍾伯敬先生小品」以外にも、『皇明十六名家小品』と同

『型世言』評者・陸雲龍の出版活動と復社

版で巻頭を「鍾惺伯敬選」に作る『皇明八大家』、同じく十六名家から鍾惺ら四人を選んだ『四先生文選』（佚）『翠娛閣近言』文卷一に「四先生文選序」を収める）、さらには崇禎六年陸雲龍序を附し「鍾伯敬先生選註」と封面に題する文萃堂刊本『新鐫選註名公四六雲濤』がある。陸雲龍が鍾惺に對して、特別な關心と出版意欲をもっていたことは明らかである。そういえば、『翠娛閣評選鍾伯敬先生合集』の編纂にあたり許彥から入手した鍾惺の遺稿は、そもそも譚元春が預けたものであった。復社成員の譚元春は、『漢書』の校閲にやはり見えており（59）、しかも馮元仲とは、彼が「社兄」と呼ばれる親しい間柄であった（香山寺次韻譚友夏社兄韻脚寄）『天益山堂遺集』卷四）。これらの書籍の中には、あるいは劉彦が何かしら出版の手助けをしたものがあるのかもしれない。いずれにせよ、陸雲龍と復社・幾社の関係は、これまで考えられていたよりも遙かに廣く、深いものだったことは疑いあるまい。

ちなみに、文昌社を介して浙東に及んだ復社の影響は、崇禎十一年（二六三八）の「南都防亂公揭」に代表される闈黨との闘争を経て、寧波を中心とする抗清レジスタンスへと發展することになる。この意味で文昌社は重要な意義をもつといえるが、資料の不足により詳細は不明である。馮元仲の擧業書はこれを補う貴重な手がかりともなり得よう。従来の研究では、文昌社はもっぱら思想・政治の面から言及されてきたが、復社が八股文の評選機關として出版と深い結びつきがあった以上、同様の性格をもつことは當然想定されるはずであった。その實態解明に向けては、陸雲龍の場合に見るごとく、さらなる周邊の出版や文學をめぐる視點も不可欠となろう。

四 『清夜鐘』の作者問題

以上で、陸雲龍と復社・幾社の關係についての本稿の目的はほぼ終えたのであるが、これに關連して最後にもう一つ考えてみたいのが、『清夜鐘』の作者に關する問題である。

この書は、卷頭を「新鐫繡像小説清夜鐘／薇園主人述」に作り、前に薇園主人の序、目次、ならびに插圖十六幅（表は圖、裏は韻文）を附す全十六回からなる白話短編小説集である。現存はわずかに二部、すなわち路工氏藏本（存第一、二、六、七、八、十三、十四回）と安徽省博物館藏本（存第一、八回）のみで、これを合わせた影印が『古本小説集成』（上海古籍出版社）に収録される。作者は陸雲龍と目される一方で、異論が存するのは、現在もなお決定的な證據を缺くがゆえである。そこで、まずはその議論の流れと兩者の言い分を整理することにしよう。

『清夜鐘』を最も早く「陸雲龍作」とされたのは、路工氏である。但し氏は、その理由を明言しておらず、『訪書見聞録』（上海古籍出版社、一九八五年）は「號は于鱗、別號は江南不易客」とする。この二つの號が、薇園主人序の後に押す印章に據ったことが明らかとなるのは、氏が所藏する『清夜鐘』の影印本が出版されてからであった。【圖一】がそれで、上が「江南不易客」、下が「于鱗氏」である。ちなみに、孫楷第氏『中國通俗小説書目』（國立北平圖書館、一九三三年）が『清夜鐘』を「楊某撰」とされたのは、「不易客」の「客」と「易」の二字を、「楊」と誤ったものと考えられている。

さてこの路工氏の説に、確かな理由を示して賛同されたのが、大塚秀高氏である（『二刻』から『三刻』へ——幻影をめぐって、『漢學研究』

第六卷第一期、一九八八年六月）。氏は「翠娛閣評選行笈必携」の陸雲龍序に押す「亦字于鱗」の印章に氣づき、「于鱗氏」を陸雲龍とされたのである。

井玉貴氏（『警世陰陽夢』、『清夜鐘』作者新考）、『中國典籍與文化』二〇〇二年第四期）はさらに、『清夜鐘』插圖第十三幅ウラの韻文末にみえる署名「蛻庵」が、先述した「家傳」によって知れる陸雲龍の號であること、また『清夜鐘』第一回到描く汪偉は、陸雲龍の師李清の友人である、等を指摘された。

これに異を唱えたのが、顧克勇氏と蔚然氏である（『清夜鐘』作者非陸雲龍考、『上海大學學報』第十三卷第四期、二〇〇六年七月）。陸雲龍は『型世言』に見るように多くの假名を使っており、二つの印章も偶然の一致の可能性がある、しかも「江南不易客」の號は彼の書のどこにもみえない。また插圖（第二幅）に掲げた「朱子強」なる人物の凡庸な詩を、本文で重ねて「可云妙絶」（第二回）と稱賛しているのも、『翠娛閣近言』から詩歌の力量が知れる陸雲龍のものとは思われず、なお且つ、作者の友人と思しきこの人物の名も彼の著述にみえない、とされた。

これに對して井玉貴氏（『關於『清夜鐘』作者的再探討——兼與顧克勇、蔚然先生商榷』、『中文自學指導』二〇〇八年第一期）は、二つの號の符合は十分に強力だと反論し、加えて、「朱子強」は陳子龍が、その著『古今治平略』に序を寄せて文才を高く評價した、復社成員の朱健（字は子強）であることを明らかにされた。さらに、陸雲龍の友人馮元仲も李清、汪偉と親しかつたことから、陸雲龍は汪偉の生平をよく知り、『清夜鐘』第一回到据えたのであろう、とされたのである。

しかし顧克勇氏は、「新たな資料が発見されるまでは、陸雲龍を作

者とする結論には承服しがたい」（『書坊主作家陸雲龍兄弟研究』二六九頁注、中國社會科學出版社、二〇一〇年）と述べ、現在に至っている。

さて、この論争でまず問題とされた二人の人物のうち、汪偉は、馮元仲の師で、陸雲龍とともに舉業書の校閲に参加したことが既に明らかとなった。そしてもう一人の「朱子強」朱健は、（口）孫月峰先生批評史記の校閲に、やはり見えているのである（152）。なお朱健撰『蒼崖子』には、張溥、張采のほか、同じく舉業書の校閲者、章世純、張玄（以上復社）、黃端伯が序を書いている（54、76、157）。名のある書籍は異なるが、陸雲龍はこの文社の活動を通じても朱健を知り得たであろう。

それではもう一つの問題、「江南不易客」の印章である。しかしそもそも、これは本當に「江南不易客」なのであろうか。

先述したようにこの印章は、孫楷第氏が末の二文字を「楊」と讀まれたものを、路工氏が訂正を加える形で「江南不易客」とされ、以來、皆この讀みに従ってきた。井玉貴氏と顧克勇氏もこの點に關しては何ら疑義を呈されていない。だが、筆者が参照した印章に關する書籍に見える「客」は、【圖一】のそれとは大きく異なっている。

例えば【圖2】に示したAは、漢魏時代の印章の文字を集めた清・桂馥『繆篆分韻』のものである。同種の他の字書や、『草書大字典』など各種字形を網羅した書、また「藏書印データベース」（國文學研究資料館）も参照したが、いずれも大同小異であった。

一方、同じデータベースで見つけたのがBとCである。Bは本邦『摺印補正』（享和二年刊）に収録された北宋の書畫家任誼、字才仲の印章（卷二）、Cは早稻田大學圖書館中村俊定文庫所藏『誹諧天狗話』に押す藏書印、のそれぞれ一部であり、文字はともに「才」であつ

た。印章が、「江南不易才」である可能性は高いと思える。

ところで「不易才」の名は、じつは陸雲龍の刊行書に見えていた。『型世言』第十四回の評者、「秣陵不易才」がそれである。「秣陵」は南京の雅稱であるから、「江南」部分の意味も重なる。「不易才」は、『太平御覽』卷四四三人事部八四に

又曰、王珣字元琳、弱冠與謝玄俱辟大司馬桓温掾。温語人曰、謝掾年三十必擁旄仗節。王掾當作黑頭公。皆不易才也。

又（『晉中興書』に）曰く、王珣、字は元琳、弱冠にして謝玄と俱に大司馬桓温の掾に辟さる。温、人に語りて曰く、謝掾は年三十にして必ず旄を擁し節を仗さん。王掾は當に黑頭公（若年の高位者）と作るべし。皆、不易の才なり、と。

と東晉の大將軍桓温が、招聘した王珣と謝玄を評した語として見える。『型世言』の評者名は、しばしばその回の内容と關係があり、右も、第十四回が描くのが朱元璋を補佐した明朝建國の功臣劉基であるのに符合している。これが出典に間違いない。

「不易才」の號がなぜ『清夜鐘』に使われたのかについては、この小説が南明隆武年間（一六四五―一四六）以降の作であることに、まずはその理由があろう。『清夜鐘』の作者名「薇園主人」が、伯夷叔齊の故事に據ることは容易に想像されるのであり、亡命政權である東晉の話柄に出典をもつ「不易才」は、そこに押す號としていかにも相應しい。また『清夜鐘』序は、題名のいわれをこう説明する。

余偶有撰著。蓋借諧譚說法、將以鳴忠孝之鐸、喚省奸回、振賢哲之鈴、驚頑頑薄。名之曰清夜鐘。

余に偶たま撰著有り。蓋し諧譚說法を借り、將に忠孝の鐸を鳴らすを以て奸回を喚省し（悪人を取り除き）、賢哲の鈴を振って頑

薄を驚回せんとす（愚者の目を覺まそう）。之を名づけて曰く、『清夜鐘』。

小説を借りて故國への「忠孝」と「賢哲」の才を振るい、世の汚濁を晴らそうという作者の強い自負が、そこにはある。これもやはり「不易才」でなければならぬはずである。「不易客」では意味が通らない。

印章は「不易客」ではなく「不易才」であり、『清夜鐘』の作者は、三つ揃ったその號のぬし、陸雲龍であろう。

筆者が氣づいた點は取りあえず以上である。專家の意見を仰ぐことにしたい。

注

- (1) 陸敏樹「陸蛻庵先生家傳」(『新鐫啓牘大乘備體』)による。
- (2) 胡蓮玉「陸雲龍生平考述」(『明清小説研究』二〇〇一年第三期)二二二頁、および井玉貴「陸人龍、陸雲龍小説創作研究」(中國社會科學出版社、二〇〇八年)三七頁等参照。
- (3) 北京大學圖書館藏本(中國哲學書電子化計畫 <https://ctext.org/library.pl?if=gb&res=3940>)による。
- (4) 注(2)前掲論文。
- (5) 注(2)井玉貴前掲書、三七頁―三八頁所引。
- (6) 北京大學圖書館藏本(中國哲學書電子化計畫 <https://ctext.org/library.pl?if=gb&res=3970>)による。
- (7) 『中國善本書提要』(上海古籍出版社、一九八三年)六六六頁。
- (8) 注(2)井玉貴前掲書、三頁所引。
- (9) 美國國會圖書館藏本(Library of congress <https://www.loc.gov/>)

item/2014514214/)による。

- (10) 聞雨侯尙有大家太史諸刻、黃公石齋(黃道周)故尙祕帳中。夫弇州(王世貞)不據木天、石齋乃棄玉畧。兩人俱不以太史重大、小品厥集紛若。……然則此二公者、胡可不亟收之也。進求之。余鄉、如余僧某(寅)之農丈人(『農丈人詩集』)、徐見可(時進)之鳩茲(『鳩茲集』)、錢仲舉(文薦)之麗囑(『麗囑樓集』)、顏茂齋(栖筠)之雪屐(『雪屐酬』)、余師秦虞卿(舜昌)先生之林衣(『林衣集』)……出此七品、爲貧士設甌瓶、供養雨侯。

- (11) 「余將收之行笈、茲不復錄」ということから、「行笈」はこの時すでに刊行されていた『行笈必携』(崇禎四年刊)ではなく、『皇明十六名家小品』に附す徵文啓事が刊行豫定を謳う「行笈二集」であろう。なお雷慶鏡氏によれば、崇禎七年刊『翠娛閣評選明文歸初集』卷一七に馮元仲「上陳眉公書」を収めるといふ(『晚明文入思想探析…「型世言」評點與陸雲龍思想研究』、中國社會科學出版社、二〇〇六年、一二頁)。「明文歸」は右の徵文啓事にやはり書名が見えており、『皇明十六名家小品』刊行後に書簡の掲載書籍を變更した、あるいは出版を豫定していた「行笈二集」と「明文歸」の二種を、『明文歸初集』として出版した可能性もあろう(「行笈二集」は現存せず、刊行されたか否かも不明)。

- (12) 「馮甄甫傳」は「眉公先生晚香堂小品」卷一七、「答馮次牧書」は「陳眉公先生全集」卷五五に収録され、黃道周の「又曰」以下の言は、黃道周が馮元仲の母のために書いた「馮母貞孝序」(『黃漳浦集』卷二一)に見える。

- (13) 夏咸淳『明六十年小品文精品』(上海社會科學院出版社、一九九五年)四五八頁所引。
- (14) 中國國家圖書館藏崇禎十年刊本。
- (15) 以上のほか、「馮次牧懶(ママ)榜跋」が『明文奇艷』卷一二に収録

されるという。注(11)雷慶銳前掲書、一二頁参照。後述する秦舜昌『林衣集』に見える「馮次牧嬾榜跋」(卷六)がこれであろう。

(16) 東洋文庫藏乾隆八年馮廷楷刊『天益山堂遺集』(附『續刻』)、および臺灣國家圖書館藏天啓三年刊『林衣集』(古籍與特藏文獻資源 <http://book2.ncl.edu.tw/Search/Index/0>) 参照。

(17) 『光緒』慈谿縣志』卷四七、および武新立『明清稀見史籍斠錄』(金陵書畫社、一九八三年) 参照。

(18) 馮氏については、王靜『千年望族慈城馮家…一個寧波氏族的田野調查』(寧波出版社、二〇一五年) が広く家譜も参照して詳しい。

(19) 清初慈谿の戲曲家裘璉『過湯山歌』(『橫山初集』卷一、「湯山」は天益山の舊名) に「方伯之孫大馮君、肯將百萬買山水」、また「墓誌銘」に「先生先世所留藏、無慮萬萬數。」という。清・徐兆昺『四明談助』卷一三「張保宮第」によれば、叔吉の廣大な舊宅は清代には浙江提督や豪商の屋敷として使われたといい、現在はその遺構の一部が全國重點文物保護單位となっている。なお『皇明十六名家小品』馮元仲序に親交があったと述べる李維禎は、叔吉のために墓誌銘を書いている(『光緒』慈谿縣志』卷二八「馮叔吉傳」)。

(20) 『明史』卷二五七。

(21) 卷五九「董隱君德偕」に「慈水二馮主盟復社、鄞、慈、姚三縣後起應之。其一門兄弟群從齊名者、首推馮氏、次推黃氏、而董氏則先生兄弟三人(德偕、德偕、德仕)」とある。なお「二馮主盟復社」はこの文社が復社傘下にあつたことを明確に述べるものであろう。

(22) 方祖猷『黃宗義與文昌社』(『黃宗義論——國際黃宗義學術討論會論文集』、浙江古籍出版社、一九八七年)。馮元龍「句章同學祭銘存先生文」(『四明儒林董氏宗譜』卷一三) は陳訓慈・方祖猷『萬斯同年譜』(中文大學出版社、一九九一年) 三二頁所引による。文昌社と復社の關係は方

氏所掲論文参照。

(23) 参照した版本は以下である。(イ) 中國國家圖書館所藏本、(ロ) 日本内閣文庫所藏本、(ハ) (ホ) 四庫存目叢書影印本。なお(イ) の刊年は、馮貞群舊藏書(現・天一閣藏) の目録『伏附室藏書目録』による。『史記』等の史書と八股文の關係は高津孝『明代評點考』(『東方學會創立50周年記念東方學論集』、一九九七年) 参照。

(24) 復社成員は井上進『復社姓氏校録』(『東方學報』第六五冊、一九九三年三月)、東林黨關係者は小野和子『明季黨社考——東林黨と復社——』(同朋舎出版、一九九六年) 卷末「東林黨關係者一覽」に據る。ただし張采は、井上氏も言われるように復社成員であることが確かであり、これに加えた。

(25) 馮元仲が書いた汪偉の祭文「望祭汪長源先生暨耿夫人文」(『天益山堂遺集』卷九) は汪偉を「師長源先生」、自らを「門生」と呼ぶ。馮元仲は崇禎十二年、汪偉の推舉で吏部を受験したが、政治の腐敗を批判して試験官の怒りを買ひ、辱めようと授けられた縣丞の微官を蹴つて歸郷したことが「墓誌銘」にみえる。

(26) 黃宗義前掲文に見える復社成員の馮氏以外に、【別表】に關係を明示した8、24、40、59、109、153、また馮元仲に「和姜如須見貽韻」詩(『晚晴簃詩匯』卷一七) がある姜垓、馮元仲の母の壽序「榮節詩馮次牧母孺人作」(『藏山閣集』卷二) を書いた錢澄之は、みな復社成員。他にも、馮元仲が二馮とともに參加した崇禎十四年林銓鈞『鄒忠介公奏疏』(陳子龍序、續修四庫全書影印本) の校閱には、復社成員三〇名以上がみえる。

(27) 『復社紀略』卷一所收の「國表」名簿にみえる馮崑と錢玄錫(寧波府)。「國表」名簿は、崇禎二年の第一回復社大會・尹山大會の參加名簿とされる。寧波府に名があるのはわずか五名で、そこに50陸符と1

- 44 董守諭（ともに文昌社同人）も見えている。なお、同じく復社名簿にみえる馮巍と109劉興郊は、馮元仲のいとこ（12）の子と女婿。
- (28) 馮元仲とともに新たに名が擧がる他の三名のうち、馮愷愈（馮元颺の長子）以外はやはり校閲にみえる（72、75）。
- (29) なお錢文薦とともに名を擧げられた秦舜昌は先述のごとく馮元仲の師、また顏栖筠は友人で、ともに校閲にみえる（6、34）。
- (30) (ハ) (ニ) は「詩禮二經、先已授梓」と序に述べる（イ）以前の刊行が確かであり、(ホ)校閲者の錢玄錫は（ロ）成書前に世を去ったことがその凡例に記される。また（ニ）の陸雲龍序は、これを収録する『翠閣近言』巻頭題下に「甲戌春夏業」とあり、崇禎七年の撰と知れる。實は（ロ）も、天益山が火事に見舞われ富家に借金して刊行まで二年かかったと凡例にいう。以上から、五種はほぼすべて崇禎七年に成立し、(ハ) (ニ) ↓ (イ) ↓ (ホ) ↓ (ロ) の順で刊行したことがわかる。
- (31) 陳繼儒と陳子龍は、馮元仲の生壙に題した「友人」（「墓誌銘」）。また注(16)所掲『天益山堂遺集』巻四に贈李清詩を、同巻九および『續刻』に贈王思任詩を収める。【別表】「特記事項」参照。
- (32) 井玉貴氏が、錢塘知縣の宣城人劉惟仁をこれとされる（注(2)前掲書、一三頁）のは、詩題の「楚に歸る」に矛盾する。
- (33) 『國立中央圖書館善本序跋集錄・集部(五)』（國立中央圖書館編、一九九四年）七三頁。
- (34) 注(24)小野和子前掲書、四六〇頁—四六六頁参照。
- (35) 劉彦は太倉知州を崇禎四年に離任後、安徽廬州府知府と福建泉州府知府を歴任した。前掲「賀太倉劉州尊滿秩序代」および『嘉慶』廬州府志』卷九、『道光』晉江縣志』卷二八参照。
- (36) 注(7)前掲書、四七八頁参照。
- (37) 注(2)井玉貴前掲書、一八頁—一九頁参照。
- (38) 前掲「候謝劉心蓼老師啓」に「細縑下錫（書物を下賜され）」とあり、劉彦から書籍を得ていたことは確かである。
- (39) 南都防亂公掲については注(24)小野和子前掲書第七章第六節、また復社と抗清レジスタンスについては同書第九章参照。
- (40) 復社の社集「國表」の刊行は金閩（蘇州）の書賈に莫大な富をもたらしたという。注(27)前掲書。
- (41) 『清夜鐘』に關する記述のある同書一五二頁「古本小説新見」には、一九六二年五月の年記がある。
- (42) 「朱子強古今治平略序」、『安雅堂稿』卷五。
- (43) 黃端伯は、李清の前任の寧波推官であった。
- (44) 國文學研究資料館「藏書印データベース」(http://base1.nijl.ac.jp/~collectors_seal/)参照。
- (45) 陳慶浩『「型世言」校注本序』（『型世言評注』、新華出版社、一九九九年）五頁参照。
- (46) 「不易才」の明人の用例はほかに、胡直「通政武東楊公行狀」（『衡廬精舍藏稿』卷二三）の「邑中士有羅生夢傳、歐陽生昌、皆不易才也」がある。羅、歐陽は胡直の早世した友人で、ともに「文采彬彬」であったと同書卷一一「三才子傳」にいう。
- (47) 大塚秀高『「型世言」とその系譜に連なる白話短編小説集』（『東アジア研究』第十六號、二〇一九年三月）参照。

ID	姓名	校閱書籍	籍貫	東林黨	復社	文昌社	科擧登第年	特記事項(馮元仲との關係等)
36	楊廷樞	漢史	南直吳縣	○	○		崇三擧	崇三〇一鄞縣知縣
37	王章	漢史	南直武進				崇一進	
38	張采	漢史	南直太倉				崇一進	
39	徐汧	漢史	南直長洲				崇一進	友人。題馮元仲生壙(佚)
40	陳子龍	漢史	南直華亭				崇一〇進	友人。題馮元仲生壙(佚)
41	周鍾	漢史	南直金壇				崇一六進	友人。題馮元仲生壙(佚)
42	李雯	漢史	南直青浦				崇一五擧	友人。題馮元仲生壙(佚)
43	徐孚遠	漢史	南直華亭				崇一五擧	友人。題馮元仲生壙(佚)
44	孫淳	漢史	浙江嘉興					
45	陳驥	漢史	浙江歸安					
46	周立勳	漢史	南直華亭					
47	劉尹聘	漢史	浙江慈谿					67 劉振之の族兄
48	尹衡	漢史	浙江歸安					
49	彭賓	漢史	南直華亭				崇三擧	
50	陸符	漢史	浙江鄞縣				崇一五擧	
51	劉應期	漢史	浙江慈谿				崇一七擧	169 劉尹辰(姻戚)の族兄弟
52	朱灝	漢史	南直松江				(崇禎間保擧)	崇五〇九寧波推官。馮元仲有「贈李心水節推」他
53	李清	漢史	南直興化				崇一進	崇二〇五寧波推官
54	黃端伯	漢史	江西新城				崇一進	萬四七任慈谿知縣。42 李雯(復社)の父
55	李逢申	漢史	南直青浦				崇一進	萬四七任慈谿知縣。42 李雯(復社)の父
56	馮任	漢史	浙江慈谿				崇一進	萬四七任慈谿知縣。42 李雯(復社)の父
57	馮允紳	漢史	浙江慈谿				崇一進	萬四七任慈谿知縣。42 李雯(復社)の父
58	陳函輝	漢史	浙江臨海				崇一進	萬四七任慈谿知縣。42 李雯(復社)の父
59	譚元春	漢史	湖廣景陵		○		崇一進	萬四七任慈谿知縣。42 李雯(復社)の父
60	陳瓚	漢史	福建漳浦				崇一進	萬四七任慈谿知縣。42 李雯(復社)の父
61	李沾	漢史	南直華亭				崇一進	萬四七任慈谿知縣。42 李雯(復社)の父
62	姜思睿	漢史	浙江慈谿			●	崇一進	萬四七任慈谿知縣。42 李雯(復社)の父
63	馮起綸	漢史	浙江慈谿				崇一進	萬四七任慈谿知縣。42 李雯(復社)の父
64	馮起綸	漢史	浙江慈谿				崇一進	萬四七任慈谿知縣。42 李雯(復社)の父
65	馮敬舒	漢史	浙江慈谿				崇一進	萬四七任慈谿知縣。42 李雯(復社)の父
66	馮敬舒	漢史	浙江慈谿				崇一進	萬四七任慈谿知縣。42 李雯(復社)の父
67	劉振之	漢史	浙江慈谿				崇三擧	堂姪(15 馮元獻の子)
68	馮贈	漢史	浙江慈谿				崇三擧	堂姪(15 馮元獻の子)
69	孫國縉	漢史	浙江慈谿				崇三擧	堂姪(15 馮元獻の子)

ID	姓名	校閱書籍	籍貫	東林黨	復社	文昌社	科擧登第年	特記事項(馮元仲との關係等)
70	馮家楨	漢史	浙江慈谿				崇四進	69 孫國縉(姻戚)の族兄弟
71	孫國紳	漢史	浙江慈谿				崇一六進	堂姪(15 馮元獻の子)
72	馮崑	漢史	浙江慈谿				崇一六進	堂姪(15 馮元獻の子)
73	馮崑	漢史	浙江慈谿				崇一六進	堂姪(15 馮元獻の子)
74	馮崑	漢史	浙江慈谿				崇一六進	堂姪(15 馮元獻の子)
75	馮崑	漢史	浙江慈谿				崇一六進	堂姪(15 馮元獻の子)
76	張文	漢史	浙江慈谿				崇一〇進	再從姪(1 馮元亮の子)
77	夏允彝	漢史	浙江杭州				崇一〇進	再從姪(1 馮元亮の子)
78	潘應箕	漢史	南直貴州				崇一〇進	再從姪(1 馮元亮の子)
79	潘應箕	漢史	南直上海				崇一〇進	再從姪(1 馮元亮の子)
80	馮文昌	漢史	南直嘉興				崇一〇進	再從姪(1 馮元亮の子)
81	宋琮	漢史	山東萊陽				崇一進	159 宋繼澄の甥。90 宋玫の兄
82	張九德	漢史	浙江慈谿				崇一進	159 宋繼澄の甥。90 宋玫の兄
83	祁彪佳	漢史	浙江山陰				崇一進	159 宋繼澄の甥。90 宋玫の兄
84	孫如洵	漢史	浙江餘姚				崇一進	159 宋繼澄の甥。90 宋玫の兄
85	錢希忠	漢史	浙江慈谿				崇一進	159 宋繼澄の甥。90 宋玫の兄
86	錢希忠	漢史	浙江慈谿				崇一進	159 宋繼澄の甥。90 宋玫の兄
87	陳士奇	漢史	福建漳浦				崇一進	159 宋繼澄の甥。90 宋玫の兄
88	龔彝	漢史	湖廣黃岡				崇一進	159 宋繼澄の甥。90 宋玫の兄
89	何閔中	漢史	山東萊陽				崇一進	159 宋繼澄の甥。90 宋玫の兄
90	宋玫	漢史	山東萊陽				崇一進	159 宋繼澄の甥。90 宋玫の兄
91	胡振芳	漢史	浙江秀水				崇一進	159 宋繼澄の甥。90 宋玫の兄
92	劉嗣功	漢史	浙江慈谿				崇一進	159 宋繼澄の甥。90 宋玫の兄
93	葉長春	漢史	浙江慈谿				崇一進	159 宋繼澄の甥。90 宋玫の兄
94	劉志式	漢史	浙江慈谿				崇一進	159 宋繼澄の甥。90 宋玫の兄
95	秦會中	漢史	浙江慈谿				崇一進	159 宋繼澄の甥。90 宋玫の兄
96	秦會中	漢史	浙江慈谿				崇一進	159 宋繼澄の甥。90 宋玫の兄
97	姚應宿	漢史	浙江慈谿				崇一進	159 宋繼澄の甥。90 宋玫の兄
98	姚岳來	漢史	浙江慈谿				崇一進	159 宋繼澄の甥。90 宋玫の兄
99	劉應昌	漢史	浙江慈谿				崇一進	159 宋繼澄の甥。90 宋玫の兄
100	劉應昌	漢史	浙江慈谿				崇一〇保擧	169 劉尹辰(姻戚)の族兄弟
101	馮象堅	漢史	浙江武林				崇一〇保擧	169 劉尹辰(姻戚)の族兄弟
102	劉繩之	漢史	浙江慈谿				崇一〇保擧	169 劉尹辰(姻戚)の族兄弟
103	秦羽經	漢史	浙江慈谿				崇一〇保擧	169 劉尹辰(姻戚)の族兄弟
104	秦嘉兆	漢史	浙江慈谿				崇一〇保擧	169 劉尹辰(姻戚)の族兄弟
105	陸雲龍	漢史	浙江錢塘				崇一〇保擧	169 劉尹辰(姻戚)の族兄弟
106	顏志同	漢史	浙江慈谿				崇一〇保擧	169 劉尹辰(姻戚)の族兄弟

明治時代における『三國志演義』の翻譯と出版

上田 望

はじめに

日本では『三國志』と言えば、歴史書の陳壽撰『三國志』のみならず、そこから作られた明代の小説『三國志演義』及びその二次創作を廣く含む呼称であるが、『三國志』は一體いつから多くのファンの熱狂的支持を得るに至ったのであろうか。二〇〇六年に日本で三國志學會が設立されて以来、昭和後半から平成にかけての二次創作を含む多様な三國志文化の種々相が次第に明らかにされてきた。また江戸時代の受容については、長尾直茂氏の『本邦における三國志演義受容の諸相』としてまとめられた精力的な研究や、梁蘊嫻氏の挿圖を中心とした研究などによつて、過去を覆い隠す雲が取り拂われ視界良好になってきている。¹⁾ しかしながら、近世江戸と現代を繋ぐ明治大正期における『三國志演義』の受容については、長尾氏や大橋義武氏の研究を除けば、まだまだ研究未着手で五里霧中の領域が多い。²⁾

本稿では、明治時代四十五年間の『三國志演義』の受容の一斑を翻譯出版の面から明らかにし、近代日本における『三國志演義』の文化的意義について考えてみたい。

一 明治時代の出版統計と舊譯本の翻刻

最初に「表1 明治期『三國志演義』翻譯年表(稿)」から明治時代に出版された『三國志演義』の全體像を掴んでおきたい。各本の詳細は二節以下で觸れるが、明治四十五年間で出版された『三國志演義』の翻譯、刪節本、繪本、講談本、注釋書は總計六四點にのぼる。なおこの數は再版されたものも含み、筆者が確認できた活字本に限定している。

梁蘊嫻氏の研究に據れば、明治期になつてからも『通俗三國志』、『繪本通俗三國志』など江戸時代の木版本が少なくとも二回は出版されているが、これらは木版の和裝本であつたと考えられるので、この統計には含めないことにする。

この表からわかるのは、明治一五年から二三年にかけて『三國志演義』翻譯出版の明治期最大の高潮期が來ていること、明治二四年から三八年までは出版點數が減少し停滞期を迎えていること、一轉して明治三九年から明治末年までは、第一次には遠く及ばないものの第二次高潮期が來ていることである。

明治の出版史研究については、鈴木敏夫氏や牧野正久氏が各種統計をもとに精密な分析を行っているが、それらの先行研究に據れば、『洋紙に洋式印刷をし、洋式製本をほどこした洋装本が回りはじまるのは、ほぼいまの大日本印刷の前身秀英舎が創業した明治九（一八七六）年以降⁵」とされ、後述する永井徳郷和解『通俗演義三國志』は明治一〇年の刊行であり、他の出版社に先駆けて洋式印刷を導入したのであろう。明治一〇年以降に翻譯書出版ブームが起こり、明治二〇年に博文館が創業して出版業の近代化が進んだことも指摘されており、明治二〇年前後に『三國志演義』の舊譯の出版が盛んになったことはある程度それによって説明できる。このほか、前田愛氏は明治一四年に明治政府が文教政策を一變させ、儒教道德の復活をはかったために漢籍復刻ブームが起こったことを指摘するが、『三國志演義』などの古典小説もその餘澤に與つたであろうことは想像に難くない。

しかし、明治時代の出版は明治二〇年以降も景氣の動向にほぼ左右されることなく右肩上がりで成長を續けていたことが各種統計から明らかで、單純に出版點數だけ比べても、明治四五年は總數四五二九六點と明治二〇年の一〇四五五點の四倍強になっており、第二次高潮期⁶とはいえ、『三國志演義』の出版點數の伸び率には些か物足りないものがあるのも事實である。

また、高島俊男氏は『水滸傳と日本人』の中で、明治において『水滸傳』が盛んに出版された時期が三度あり、第一次（二〇年代後半）、第二次（二〇年代後半）、第三次（四〇年代）の三つに分け活況を呈した理由を説明している。『水滸傳』の出版社の多くは平行して『三國志演義』の翻譯出版も手がけているが、『三國志演義』の場合には二〇年代にそれほど出版點數が伸びていないため、萌芽期、第一次

高潮期、停滯期、第二次高潮期として、以下、それぞれの時期にどのような『三國志演義』の出版文化が花開いたのかを見ていく。

二 『三國志演義』活字印刷の萌芽期

明治になって最初の十年間は、幕末と變わらず木版本の『繪本通俗三國志』や『通俗三國志』、そして諸々の繪本が流通していた筈であるが、明治一〇年に『三國志演義』の邦譯として初めて活字印刷された『通俗演義三國志』が世に出る。

●『通俗演義三國志』四〇卷首一卷、永井徳郷和解、挹風館、和裝本現存するものに、國會圖書館藏本、上田望架藏本などがある。

封面に「永井徳郷和解 初帙／通俗演義三國志／明治十年乙丑十月出版 挹風館藏」とあり、巻頭に「明治丁丑晚秋峰南迂夫撰」署名の「通俗演義三國志序」（二葉）を載せる。また、卷之四十の奥付には「明治十一年八月二十一日御届 定價壹圓廿五錢／和解並出版人東京府士族 永井徳郷」とあり、以下須原屋茂兵衛をはじめとする取り扱いの東京の書肆名が列記されている。

序文では、人々から「附會之演說」と貶されていた『三國志演義』を辯護し、金聖嘆の才子書に關する見解を持ち出して、『三國志演義』は文意明快で歴史の理解にも裨益するところが大きいと述べている。それゆえ毛綸、毛宗崗批評『三國志演義』（以下、毛評本と略す）から金聖嘆偽序を取り出し、敢えて「峰南迂夫」序の次に載せたのであろう。またこの中に「知友永井簡齋、國文を以て之（著者注二）羅貫中之三國志」を講釋し」とあり、この序を誌した「峰南迂夫」は、『維新奏議集』（明治一〇年常青堂刊、永井徳郷評・編、中村峰南閱）で永井徳郷とともに仕事をしたこともある中村峰南（謙）であると考えら

れる。永井氏については不明な点が多いが、明治七年刊行の『訓蒙日本外史』に校訂者として「長田徳鄰」の名前があり、「挹風館藏版」の文字もあるので、明治初期の出版人と見てまず間違いないだろう。

序文に續き、清順治元年の金聖嘆序、凡例五則（明治一〇年九月識）、そして眞像三國志圖贊（河鍋曉齋縮寫、伊藤桂洲書、清風閣・萬書堂・挹風館合社）と題する二〇葉（四〇幅）の繡像、通俗演義三國志初編目次（巻一〜巻八）、通俗演義三國志姓氏を載せる。この書の編集方針については凡例に詳しいので煩瑣を厭わず引用する。

凡例五則

- 一 本編ハ演義三國志ヲ和解シ専ラ童蒙ノ讀ミ易カラント欲スルニ因テ或ハ文字ヲ改更シ或ハ事實ヲ錯置スル所アルモ大意ノ如キハ更ニ之ヲ改メス
 - 一 和文ノ漢文ト體裁異ナルヲ以テ行文中或ハ汰損増加スルナキ能ハス因テ取捨スル所アルモ事實ニ於テハ更ニ原書ノ意ヲ改メス
 - 一 陳壽ノ志ト羅貫中ノ説トヲ以テ校訂スルニ因リ或ハ原書ト異ナル所アルハ斟酌取捨スルモノニシテ敢テ私意ヲ以テ添削スルニ非ス
 - 一 専ラ童蒙ノ解シ易カラント欲スルニ因リ毎回ノ目次ヲ二章二分チ且ツ姓氏録ヲ掲クルモノハ羅氏ノ説ヲ斟酌スルナリ
 - 一 帝紀及ヒ宗室ノ系譜ヲ掲クルハ讀者ノ便益ヲ謀ルナリ
- この凡例では「童蒙」のためにわかりやすい改編を心掛けたことが繰り返し強調されており、元祿四年（二六九一）に開板された湖南の文山（經歷不明）らの『通俗三國志』の舊譯に基づきながらも毛評本の一節を取り入れ、全體に舊譯の和語を書き換えつつ平易な漢文訓讀調に改める傾向が伺われる。挿圖については、『繪本通俗三國志』の

葛飾戴斗畫を取り除き、明治を代表する浮世繪畫家河鍋曉齋に依頼し毛評本に據つて三國の英雄の繡像に差し替えを行つており、舊態の和装本ではあつたものの、明治という新しい時代の幕開けに相應しい出版物になつていた。

三 『三國志演義』の明治第一次高潮期

(一) 清水市次郎和解『繪本通俗三國志』の登場

永井譯『通俗演義三國志』は明治の『三國志演義』の先驅けであつたが、その後、『水滸傳』高潮期とも重なる『三國志演義』第一次高潮期では、明治一五年から二三年までの九年間に再版されたものも数えらると三七點の書が出版されており、明治における『三國志演義』出版の最盛期と言つても過言ではない。これらの翻譯の多くは文山の舊譯を活字本にしたものであるが、中には文山譯を改寫した作品もありバラエティに富んでいる。永井譯に次いで二番目に出版されたのは清水市次郎和解と稱する『繪本通俗三國志』である。

●『繪本通俗三國志』五十卷一七冊、清水市次郎和解、大蘇芳年、水野年方圖畫、明治一五〜一八年、和裝本

現在所藏が確認できるのは、國會圖書館藏本、鶴見大學圖書館藏本 A・B、上田望架藏本 A・B である。

本書は、譯者については全冊一貫して清水市次郎和解となつてゐるが、出版人・書店は次から次へと變つてゐるため後で整理することにした。清水市次郎和解の『水滸傳』については高島俊男氏の考察がある⁹⁾。また、本書については梁蘊嫻氏の專論が最近公表されており、清水市次郎が明治一五年四月から定期刊行してゐた『咸唐題庫』

という小説冊子の奥付や廣告などの情報を丹念に分析し、清水が經營問題に直面し出版協力者を法木徳兵衛、武田菱花堂などに變更しながら、最終的に明治一七年六月に該書を完成させるまでの奮闘を浮き彫りにしている。また、附された月岡芳年、小林年參、水野年方の挿圖を同時代の競争相手であった著作館、潛心堂及び東京同益出版社の挿圖と比較し、繪の題材選擇に獨自性を出そうとしていたことを明らかにしており、明治前期の『三國志演義』の翻譯狀況に初めて眞正面から切り込んだ貴重な研究と言える。ただ調査對象が『咸唐題庫』と國會圖書館所蔵本に限られているため、その他の所蔵本も合わせ書誌情報を簡単に整理したのが「表2 清水市次郎和解『繪本通俗三國志』の諸本」になる。なお、この表の中で「全五〇冊」「全一五冊」「全一七冊」とあるのは、各巻の奥付で『繪本通俗三國志』が何冊で完結するかを豫告している數字であり、実際には一七冊で完結している。

『咸唐題庫』發行から一七冊完結までの流れを見てみると、清水市次郎は明治一五年四月六日に出版御届を出して法木徳兵衛と一緒に『咸唐題庫』を月三回毎冊四錢で販賣し始める。明治一五年一〇月六日前後に一六號を出版し、出版開始から五ヶ月で『三國志演義』全二四〇則のうち第一七則まで進んだということであり、この出版ペースでは完結まであと一年半を要する計算になる。清水市次郎による『三國志演義』や『西遊記』、『水滸傳』の活字印刷による翻譯本は、當時、永井徳郷本などを除けば最も早いものであったが、色々な小説が一冊で楽しめるという設計が災いして進行が牛歩の如く遅く、後發組の出版社が活字印刷を導入すればいくらでも追いつくことが可能であった。事實、潛心堂・小笠原書房は明治一五年一月一日に出版届を出し、翌一六年二月には洋裝四冊本の出版を完了してあつという間

に抜き去っている。清水側でも配本の頻度を上げないと讀者を他社に奪われるという強い危機感があつたものと見え、翌一六年一月五日から最後の六五號を出版し『咸唐題庫』を廢刊するまで月四回または六回のハイペースで出版していた。そして『咸唐題庫』廢刊を契機に清水市次郎は法木徳兵衛とは袂を分かち、明治一六年八月から卷五（第五冊）以降は合本として看可樂堂から新本の『繪本通俗三國志』を出版していく。この舊本から新本へと變わる時期は少し事情が込み入っているので整理すると、

卷三（第三冊）卷七〜卷九 明治一六年七月七日 全五〇冊

卷四（第四冊）卷十〜卷十二 明治一六年八月二七日 全一五冊

となり、五〇冊で完結する豫定だった卷一から卷三までを舊本とし、卷四第四冊からは一五冊で完結する新本に出版形態を變えている。その後も關係者の交替は續き、卷二一（明治一六年二月一七日出版版）では看可樂堂から菱花堂にまたしても發行元が變わり、卷二二（明治一七年六月一日出版版）では、武田平治が出版人として初めて關係者に名を連ねる。この時に全一五冊では無理だった出版計畫を修正し、全一七冊に改めてなんとか完結にこぎ着けている。

さて、國會圖本、鶴見大圖本A・B、上田架藏本A・Bの五本の關係についても少し言及しておく。

卷一第一冊については、この中で最も古いのが上田架藏本Aであり、明治一五年九月二六日別製本届と奥付に記されているので、『咸唐題庫』を製本して作つたものであるかもしれない。そしてそれより少し後に明治一五年一〇月二五日の出版届で奥付だけ改め、最初から合本として出版されたのが國會圖本である。そして更に明治一六年三月二五日の出版届で出版されたのが上田架藏本Bであり、これは國會

圖本第二冊が出るのと同じ頃に合本として再度出版されたのである。鶴見大圖本Bは後で述べるように明治一八年の序文があり、巻一を缺く鶴見大圖本Aを除く四本の中で一番遅くに出版されたと考えられる。

やや特異な鶴見大圖本Bを除けば、巻四以降はどれも同じ時期に出版されたものであるが、巻三については鶴見大圖本Aは明治一六年三月二五日に出版届が出されており、合本としてはなぜかこれが最も古い。鶴見大圖本Bは國會圖本、上田架藏本A・Bと字體や紙質が異なり、分回も所々ずれている。更に、鶴見大圖本Bのみに第一冊巻頭に他本にはない湖南文山識の「通俗三國志序」(二葉)が掲げられており、序の末行に「明治乙酉第一月 應需 前了古了之書」との署名がある。明治乙酉は明治一八年に當たり、現存する鶴見大圖本Bは一一冊とも全て清水・武田・菱花堂の連名で出版されており、また出版届の時期がいずれも「明治十〇年届」となっているが、恐らく明治一八年頃から順次刊行されたと推測される。なお、この文山の識語を筆寫した人物は幕末から明治初期にかけて活動した、歌川派の浮世繪師にして通俗作家の隅田了古ではないかと思われる。

挿圖については、各冊冒頭に掲げられている大蘇(月岡)芳年の彩色の口繪が「賣り」であるが、本文中にも毎巻四から五幅の挿圖があり、これらは『繪本通俗三國志』の葛飾戴斗畫とは場面・構圖が異なるものが少なくない。第一〇冊までは本文中の挿圖に年參の署名があることから大蘇芳年の門人であった小林年參が繪筆を執り、第一一冊以降は年方の署名が出てくることから芳年の高足であった水野年方が擔當したと考えられる¹⁾。ところが不思議なことに、鶴見大圖本Bでは前半も水野年方に改めて作畫を依頼したらしく、國會圖本や上田架藏

本の挿圖を悉く水野の繪に差し替えてしまっており、また所々見開き二頁あるいは一頁を使った他本にはない躍動感溢れる挿圖が追加されている。現存する鶴見大圖本Bは六冊缺けているが、恐らくその缺を埋めるために何者かが別途入手してきた六冊が國會圖本と同版の鶴見大圖本A六冊であり、そのため挿圖だけは木に竹を接いだようなおかしな事になってしまっている。

清水市次郎の和解本は、本文に關しては幕末の池田東籬亭の『繪本通俗三國志』で加えられた句點を全て削るなど讀みづらくなっている面もあるが、挿圖に力を入れる方針を含め、これ以後、多くの追隨者を生んだ。

四 『三國志演義』の明治第一次高潮期

(一) 洋裝活字本の臺頭

清水市次郎和解本について見てきたが、第一次高潮期に出版された清水本と關わりの深い書籍や特徴のある出版物について見ておく。

●『繪本通俗三國志』七冊(初編上下、二編上下、三編上下、四編上)、岩城勝藏翻刻、著作館、明治一五〜一七年、和裝本

國會圖書館藏本(存五冊)、東京大總合圖書館藏本(存七冊)、東京大東洋文化研究所藏本(存五冊)、上田望架藏本(存六冊)がある。

初編上は明治一五年十一月一六日に翻刻届を出し、同年十二月一日に出版發賣されている。初編下は明治一六年二月二五日、二編上は三月二三日、二編下は五月二日、三編上は三月二八日、三編下は一月二七日、となっている。

初編上の巻頭には湖南文山の原敍(明治壬午「一五」初冬六石居士英

之書、池田東籬亭の繪本通俗三國志序、插圖六頁、繪本通俗三國志初編總目錄、姓氏、或問が置かれ、續いて二編上の巻頭には快雪堂東軒の識語（明治癸未「二六」第一月 鼎湖散人原田垣書）、插圖四頁、繪本通俗三國志二編目錄、三編上には巻頭に頼山陽の三國史三篇序、插圖四頁、繪本通俗三國志三編目錄がある。

この著作館本の特色は、江戸天保年間に上梓された池田東籬亭編、葛飾戴斗畫の『繪本通俗三國志』を日本で初めて活字印刷したものであるという点にある。變體假名は一部改められているものの、句點やルビ、平假名表記などは東籬亭本『繪本通俗三國志』を基本的に踏襲している。ただし、分巻本の形式を取らない（初編上のみ「卷之一」という言葉が見えるが、それ以降は「卷」という言葉を用いない）點や、葛飾戴斗の見開き二頁の插圖を縮寫している點など細かな異同はある。結局、舊譯を活字にしただけで特色が無いとも言え、残念ながら最後まで出版できなかったようである。

●『繪本通俗三國志』初・二編各一〇冊、中村頼治増補、東京同益出版社、明治一六年、和裝本

現在、國會圖書館藏本（初・二編）、上田望架藏本（初編存卷五・六、二編）が確認されている。

初編・二編の封面に「湖南文山譯述 中村頼治増補 頭書増補 繪本通俗三國志 東京同益出版社」の文字がある。初編では卷一〇にのみ奥付があり、それに據れば「明治一五年一月一二日出版御届 同一六年七月出版」とある。二編の奥付でもほぼ同じ記載が見られることから明治一六年七月までに初編と二編が出版されたのであろう。初編の巻頭には、頼山陽の三國史三篇序、插圖六幅、姓氏、或問があ

り、各巻の目錄、二編の巻頭には湖南文山の繪本通俗三國志序、插圖六幅、各巻の目錄がある。體裁は一見、池田東籬亭本を忠實に模倣しているように見えるが、初編と二編二〇冊に一一〇則分の本文を詰め込んだために、東籬亭本とは編數巻數がずれてしまっている。

初編の巻頭圖には署名は見あたらないが、二篇の巻頭圖には「櫻湖」の印があり、二編卷三の奥付から矢野西洲、小林櫻湖の兩名の手になると考えられる。插圖は葛飾戴斗畫と構圖がまま異なり、また二篇卷二の奥付に「每冊四圖或は五圖」とあるように東籬亭本から半分近く減らされている。奥付や封面で「片假名」と銘打っているように、東籬亭の『繪本通俗三國志』で本文が漢字片假名から漢字平假名になったものを、再度漢字片假名に意圖的に戻したのであろう。東籬亭の識語は省略するなど、東籬亭本に對抗し元祿期の『通俗三國志』を復元しようという狙いがあったのかもしれない。

東京同益出版社のもう一つの大きな違いは、「頭書増補」と封面にあるように、眉欄に中村氏による注釋が加えられたことである。注釋は正史の『三國志』を材料にしたものがほとんどである。また、「祭天地桃園結義」の三葉の「清本に中平元年疫氣流行す」、「黃夫恐くは誤りならん。清本黃天に作る」という二條の注のように他の『三國志演義』の版本と比較した校注も時折見られる。ただ眉欄の注釋は後ろにいくほど少なくなり、初編の卷八、九、一〇では各々僅か一條、二編では皆無となる。奥付から全五編五十冊で完結させる計畫であったようだが、三編以降はその存在が確認されていない。

なお、國會圖書館藏本と上田架藏本は同版と思われるが、二篇一の奥付は日付こそ同じ明治十六年七月出版であるが、國會圖書館藏本では全五十冊で「新書定價六圓」、上田本では、「壹冊を壹輯となし壹輯

正價金廿五錢宛」となっている。これは中村頼治がさらに値上げしようとする二篇の奥付を差し替えた可能性が高い。

●『通俗繪本三國志』五〇巻四冊（上巻壹貳、下巻壹貳）、前田長善、潜心堂、小笠原書房、明治一五〜一六年、洋装本

現存するものに國會圖書館藏本、弘前大圖書館藏本、上田望架藏本がある。

上巻貳の奥付に「明治一五年二月一日出版御届／同年二月出版」とあり、下巻貳の奥付には、「明治一五年二月一日出版御届／同一六年二月出版」とあり、それぞれ「金貳圓」の印があるので各二冊二圓で發賣されたのであろう。上巻壹の巻頭には、人物像十幅、上巻目録、姓氏、或問が置かれているが、絞の類は一切省かれている。また、本文中の挿圖は全て見開き二頁のかたちを取り、葛飾戴斗畫と酷似しているが、東籬亭本に比べると三分の一以下に減っている。下巻壹には人物像八幅、下巻目録が正文の前に置かれている。

挿圖の繪師については、人物像に「生田芳春寫畫」（司馬炎）、「朝香樓芳春寫」（陸遜）などの署名が見える。生田芳春は、名は幾三郎、後に歌川國芳の門人となり、畫姓は歌川、畫號には一梅齋、朝香樓などがある。文政一一年の生まれで、明治二一年に亡くなっている。

この本の特筆すべき點は、先にも述べたようにこれが『三國志演義』の翻譯で初めて洋装本として出版されたということであろう。和装本はこの後も斷續的に出版されるが、潜心堂本のように縦一九センチの比較的小型で廉價な洋装本は、その白黒のはっきりした挿圖とともに『三國志演義』の翻譯の主流となっていく。

明治一五年出版の潜心堂本以降、明治二一年までの間に出版された

洋装活字本としては、成文社本、文事堂本、鶴聲社本、金泉堂書房本、銀花堂本が繰り返して出版されるが、これらは先行の出版物から色々と影響を受けていたことが見えてくる。

一點一點詳しく述べることはしないが、興味深いのは成文社と文事堂の活動である（表3 成文社と鶴聲社の『通俗繪本三國志』参照）。

上原東一郎と成文社は、明治一七年二月（二六日）に届けを出し、三〇冊三〇巻を每冊一〇錢で定期的に出版し『繪本通俗三國志』を完結させようとする。國文學研究資料館藏本がこれであろう。成文社は潜心堂・小笠原書房の『通俗繪本三國志』四冊五〇巻を利用する一方で、清水市次郎のように小冊子を定期的に出版・販賣する方法を探り、分冊本にする豫定で三〇冊三〇巻に改めたようである。國會圖書館に所藏される六冊本はこの三〇冊三〇巻の冊子を五巻ごとに製本したものと考えられる。この初版本を成文社本Aとする。成文社印の小冊子は明治一八年一月から順次出版され、五月に卷三〇を印刷し五月という短期間で全巻を出版し終えている。しかしながらこれには裏があり、成文社本Aは明治一五年の潜心堂本と比べると「絞」と稱する文山識語を缺くほかは酷似している。特に人物像は潜心堂本のものでそのまま借用したようで、「生田芳春」の署名が残っている。初印の賣れ行きが良かったせいであろうか、成文社は翌六月に間を置かずすぐに二冊の合訂本として三圓で發賣したのが成文社本Bである。これもよく賣れたためか、目録と人物像十八幅の順番を入れ替えて出版したのが成文社本Dと思われる。成文社本Dは上冊しか残っておらず、出版年は不明である。ところがこの三種類の本以外に不思議なものがある。一つは成文社本Eであり、この本は扉には「國民の本筐／通俗繪本三國志／東京 成文社」とある。活字の字體を含めBと全く

あり、三版Cで削られた「姓氏」が四版にはあることから三版Cは四版に據って出版されたのではないかと推測される。文事堂の諸本は初版から四版まで一つとして同じものがないが、価格だけは初版から据え置きのまま一頁に印刷する字数を増やし、経費削減と書籍の小型化を進めており興味深い。明治二十一年九月の野村銀次郎と銀花堂が最初に出版した『通俗繪本三國志』全一冊は、長崎齋臨笑の紋や月岡芳年、水野年方の畫を適宜描き直し載せているが、本文自體は文事堂本に近いという一風変わった書である。

上記の諸本は潛心堂・小笠原書房の系列に屬すが、明治二〇年に靑柳國松や金泉堂が出版した『繪本通俗三國志』はいずれも長崎齋臨笑の紋や月岡芳年と水野年方の署名がある挿圖を載せ、また二段組の版面になつており、恐らく清水市次郎和解本を利用している。価格はいずれも四圓五十錢と成文社や文事堂本より若干高い。

これら『繪本通俗三國志』と別路線で、無圖の『通俗三國志』の活字本を作り出そうとする動きもあつた。数は多くないが、明治一六年一〇月一〇日に翻刻御届が出された鈴木義宗・武田政吉翻刻の『通俗三國志』五〇卷一〇冊本や、明治一七年に長野の信濃出版會社と内山昇から出版された『通俗三國志』五〇卷一五冊の和裝本などがそうである。

また、この時期、小冊子の繪本や刪節本も登場した。この手の書物は江戸時代から色々と作られてきたが、明治においても近代出版技術で新しい繪本が作られている。

●『三國志銘々義傳』二冊、鳥越安久里之助編、葛飾正久筆、小宮山昇平、東洲堂、明治一六年、國會圖書館藏本

●『三國志』一冊、小宮山五郎編、金榮堂書屋、明治一七年、上田望架藏本

●『繪本三國志 通俗略傳』一冊、大川新吉編、明治一七年、國會圖書館藏本

●『繪本三國志小傳』一冊、武田平治編、大蘇芳年畫、菱花堂、明治一八年、國會圖書館藏本

●『三國志』一冊、小宮山五郎編、明治一八年、國會圖書館藏本

●『繪本三國志』一冊、尾關トヨ編、明治一九年、上田望架藏本

●『繪本三國志』一冊、牧金之助、明治二十一年、國會圖書館藏本
これらは「繪本」と呼ぶに相應しく、翻譯本とは異なり極めて文字情報が乏しい。その多くは和裝の袖珍本である。挿圖は木版畫と銅板畫の二タイプがあり、人物像中心のものや物語の場面描寫から成るものがある。残念ながらこうしたお手軽な繪本は明治二十一年の牧金之助の『繪本三國志』を最後に市場から姿を消したようである。

繪本ほどではないが、全譯を簡略化した刪節本についても少し觸れておく。この時期、というより明治時代の代表的な『三國志演義』の刪節本は明治一八年に出版された月の舎秋里編述の『繪本通俗三國志』一種類しかなく、全譯なら千數百頁になるところを物語の骨格部分だけ抜き出して改作し、わずかに二六二頁の讀物に仕上げたため、その後何度も版を重ねた。明治一九年の再版までは和裝本三冊であつたが、明治二十二年東京漫遊會發兌本、明治二十三年大坂偉業館・岡本支店發行本、明治二十三年銀花堂發行本などは洋裝本になつている。他に讀みやすい刪節本が作られなかつたこともあり、その後も袖珍本などに體裁を變えつつ、東京や大阪などで繰り返し出版されることになる。

五 『三國志演義』出版の停滞期と第二次高潮期

第一次高潮期が過ぎ去った後の明治二四年から三八年までの十五年間、『三國志演義』の出版景気は踊り場の局面を迎えていた。ただ、すでに述べたように博文館は明治二六年に帝國文庫シリーズとして『校訂通俗三國志』の活字本を出し、明治四五年には第十五版が出版されていることから、実際にはかなりの翻譯が印刷されていたと考えられる。この帝國文庫シリーズの『三國志演義』はその後小型化し、昭和一五年まで出版され続けたまことに息の長いロングセラーであった。

この時期特筆すべきは、数こそ少ないものの注釋書や講談本、刪節本、繪本など様々な『三國志演義』が出回るようになったことである。明治三三年三月五日に刊行された『支那小説譯解』第二冊は國會圖書館に所藏されるが、本書には『三國志演義卷一』が収録される。内題次行に「東海馬場讓得卿先生閱、碩田井上新士德譯」とある。この譯者は明治三二年發行の第一冊の中で『水滸傳譯解』も擔當しており、高島俊男氏が指摘するように發行者でもあった井上新一郎という人物であろう。巻頭に明治三一年四月の「三國志演義譯解序言」があり、『三國志演義』の成立の過程について粗述し、『三國志演義』と『水滸傳』は羅貫中の作とこれまで言われてきたが、その文章と構造は明らかに異なっており、同一の人物の手になるものとは思えないと指摘している。兩書の譯解に携わった井上氏の慧眼と言えよう。譯注は、毛評本の原文に返り點送り假名を附し、その後で難しい語彙について解説し、當該段落の大意をまとめており、毛評本第二回で終わっ

てしまったことは残念である。こうした地道な讀解の取り組みは、間接的に第二次高潮期において、學術研究に重きを置いた久保天隨や幸田露伴の翻譯が登場して來るための道を切り開いたとも言える。

明治の藝能において三國志物語がどのように取り上げられてきたのか詳しく論ずる紙幅はないが、語り物の世界では桃川燕林（一八三二—一八九八）などの名人が『三國志演義』の講談を高座で披露し、その速記録が活字になったのが、明治三二年に文事堂から出版された『三國志』七冊である。第一冊（卷）巻頭には彩色の見開きの桃園結義圖（落款には「擧雲」とある）や第四冊（卷）には生田芳春の畫を載せるなど、讀み物化した講談本であろう。文事堂は明治二〇年に『通俗繪本三國志』の第四版の出版を最後に『三國志演義』の翻譯出版からは手を引いているが、講談本は別であったようであり、です・ます調でところどころ太閤秀吉だの幡隨院長兵衛だの脱線する親しみやすい語り口は、普段はあまりお堅い小説を讀まない層の耳目を集めたことであろう。明治、特に前半の三十年間は現代とは違ったかたちで、日本における『三國志』熱が最も盛り上がりを見せた時期であったかもしれない。

第二次高潮期は明治四〇年前後に始まる。日露戰爭勝利後、自國への自負心から日本文學が見直され、それに牽引されるように中國古典の出版業界も活気づき、明治三九年から明治が終わるまでの六年間に一五點の『三國志演義』が出版されている。この時期の特徴としては翻譯の多様化と學術研究の出版への影響が挙げられよう。兩者は密接に關連しているが、その典型的な例としては久保天隨や幸田露伴の仕事がある。

久保天隨(得二)は明治三十九年に『三國志演義』(支那文學評釋叢書第一卷、隆文館)を出版し、この中で抄譯ではあるが初めて本格的に毛評本に基づいて『三國志演義』を翻譯し紹介している。またこの書の冒頭に置いた「小引」及び「發凡」の中で久保天隨は多岐にわたつて『三國志演義』に關する考察を展開している。その一部をここに紹介すると、まず天隨は冒頭から「三國志演義は、決して、支那小説の巨擘として推稱すべきものに非ず、唯だ演義體として稍や可なるのみ」と『三國志演義』を低く評價し『水滸傳』には及ばないとする。一方で彼は毛評本の「文法」、「評語」は「東洋に特有なる美の觀念に本づきし」ものとして一定の評価を與え、さらに『三國志演義』の版本や作者、毛評本や金聖嘆序についても考究している。その中で天隨は清代において最も廣く讀まれていた毛評本について毛綸の『琵琶記』の評と比較し、また毛評本に見える金聖嘆序や「讀三國志法」を分析した上で金聖嘆の文學理論との矛盾點をつき、金序が偽物ではないかと述べている點は瞠目に値する。このほかにも日本と中國における『三國志演義』の評價について明快に論じており、瀧澤馬琴や頼山陽の見解も一刀兩斷にされている。

明治四四年には幸田露伴が『通俗三國志』(日本文藝叢書、東亞堂書房)を出版するが、この書は「新訂」を謳うものの本文自體は舊來の『繪本通俗三國志』の焼き直しで、しかも挿圖は全く無くあまり新味がない。ただし巻頭に「新訂通俗三國志解題評說」という解説を置き、その中で露伴は每章の標語を李卓吾本、金聖嘆本(つまり毛評本)と比較し、「今の繪本三國志は李本に依るに似たり。」と『通俗三國志』の底本が李卓吾本ではないかと推測している。

その翌年の明治四五年から久保天隨は本邦初の毛評本の完譯『新譯

演義三國志』を公刊する。文語調の書き下しに近い譯ではあるが、毛評本の本文が初めてほぼ完全な形で譯出されたという點で高く評價されてしかるべきであろう。

巻頭に置かれる「敍說」は明治三十九年に出した『三國志演義』の「發凡」を發展させたものであり、(一)の「演義三國志の作者」から(八)の「予が新譯の趣旨」まで隨所に天隨の『三國志演義』についての深い造詣が伺える。中でも(七)「日本文學に及ぼせる影響」では幸田露伴の「評說」を参考に、『通俗三國志』の譯者を「發凡」では高井蘭山としていたのを文山に改めている。また、『通俗三國志』の底本についても、露伴の説をうけて李卓吾本であると、李卓吾本と金聖嘆本との版本の優劣を論じて、李卓吾本のほうが原本に近いかもしれないが文章としては整理された金聖嘆本が良いとしている。前年に出た露伴の説をすぐに吸收する好學ぶりには驚かされるが、露伴の名前を一切擧げずに彼の「評說」の一部を引き寫していることについては、巻末の附録も含め見るべきものが多い著述だけに惜しまれてならない。

彼らの『三國志演義』研究の水準は、間違ひなく當時、世界の最先端であつたと言えるであろう。中國でもまだ文學革命が起きておらず、魯迅、胡適などの本格的な小説史研究の始動はさらにそれよりも後である。せつかく明治末年に久保天隨や幸田露伴の努力で緒についた『三國志演義』研究と毛評本の譯業であるが、「庶幾はくは、以て三國演義和譯の成本となすを得むか。嗟乎、これ即ち予が初志に外ならざるなり。」(敍說)(八)という天隨の願ひも空しく、當時の讀書界及び出版界では受け入れられなかつたようである。毛評本の翻譯を『三國志演義』の譯本の決定版にしたいという天隨の初志は戦後にな

つて一九五〇年代に小川環樹・金田純一郎譯や立間祥介譯などの毛評本の口語譯が完成し、ようやく眞に達成されたと言えるであろう。

また、久保天隨、幸田露伴の著作以外にも、博文館、共同出版、早稻田大學出版部、有朋堂、大川屋書店が『繪本通俗三國志』を刊行しているが、附録などを除けば特に目新しさはない。

おわりに

もはや紙幅も盡きたので、大正から現代に至るまでの『三國志演義』の翻譯情況についてはまた機會があれば論じることにし、もう一度明治の翻譯出版狀況について整理しておきたい。明治一〇年以降に出版された『三國志演義』の翻譯は、再版されたものを含めると六四點あるが、出版された時期には偏りがあり、第一次高潮期と停滞期、第二次高潮期の三つに分けることができる。清水市次郎や小笠原書房、成文社、文事堂など各期に出された書籍と著者・編輯者・出版社の連れ合った關係を解きほぐすことで、彼らが意外なほど相互に影響を及ぼしながら、明治期の『三國志演義』の出版文化に様々な形で關與していたことが明らかになった。なぜここまで錯綜しているかという点、そこには著者・編輯者・出版社間の熾烈な競争があったからであり、それはつまり『三國志演義』がよく賣れる商品であったということ、そしてそれだけ讀者に歓迎されていたということの證左となる。

『三國志演義』が明治期の讀者に好まれ、流行したことについては三つの理由・條件が考えられる。一つは江戸の遺産があったことである。元祿年間に『三國志演義』の翻譯は一應完成し、各種の繪本や節略本も作られており、明治に入つて加速的に普及するための基礎は前

時代にすでに構築されていたのである。

二つ目は出版側の條件である。明治の四十五年間、活字印刷の出版點數が増加の一途を辿り、結果的に廉價な『三國志演義』を出版できていた。第一次高潮期では四圓から六圓が相場であったのに對し、第二次高潮期では帝國文庫のようにその四分の一以下の價格で購入できようになったことは讀者にとつても利點が大きい。政治狀況によつて古典覆刻ブームが何度か起きたことも出版界への後押しとなったであろう。

三つ目は書物を受容する讀者層の形成である。恐らく日本史上類がない明治期の急速な識字率の向上が、『三國志演義』の翻譯を含む日本近世文學の啓蒙普及に一役買ったのではないだろうか。明治三二年（二八九）以降、明治政府は壯丁教育程度調査と呼ばれる読み書き能力の検査を實施しているが、明治三二年には識字能力に疑問がつく青年は四九・四％と約半數いたのに對し、大正四年（二九一五）には一・七％にまで減少している。青年男子という限られた對象ではあるが、筆者の知る限り『三國志演義』の翻譯本を家藏していたのは全て男性であったことから、『三國志演義』の場合、識字率の向上は一定程度讀者層の擴大に繋がつたであろう。結局、本稿で見えてきたものは、近代國家建設に邁進した明治という時代特有の文化現象であつたのかもしれない。

中國では宋元以降多様な三國志物語が生まれ、それらの物語と歴史書の記述を正統思想や分久必合の歴史觀によつて束ねあわせたものが現在の毛評本の『三國志演義』であり、これが言わば三國志物語の最終形態として高く評價され、中國教育部の選定した名著の一つに數えられるなど國家のお墨付きで「經典化」している。

しかし日本でも『三國志演義』は四百年の長きにわたって翻譯文化や二次創作を生み出し續けており、舶來の外國小説でありながらいつの間にか國民文學としての地位をすっかり築いていた事實を再認識させられる。『三國志演義』が中國において名著であり古典であることは否定しないが、日本においても江戸から明治の先人たちが作り上げた『三國志演義』の翻譯を自國の「古典」と見なし、再評價すべき時に来ているのではないだろうか。

注

- (1) 長尾直茂『本邦における三國志演義受容の諸相』(勉誠出版、二〇一九年)、梁蘊嫻『繪本三國志』の挿繪における合戦場面の「動」と「靜」——『三國志演義』寶翰樓本の受容を中心に——(『鹿島美術財團年報』二六號、二〇〇八年)など参照。
- (2) 前掲注(1)長尾書一五八〜一六一頁、「大橋義武「日本における『三國演義』の文學史的評價——その内容及び中國の文學史家への影響について」(『三國志研究』第一三號、二〇一八年)、上田望「日本における『三國演義』の受容(前篇)——翻譯と挿繪を中心に」(『金澤大學中國語學中國文學教室紀要』第九輯、二〇〇六年)、同「古典の「再興」から「再考」へ——日中兩國における『三國志演義』の受容を手がかりに——」(『古典』は誰のものか——比較文學の視点から——)所收、金澤大學人文學類、二〇一三年)など。
- (3) 梁蘊嫻「清水市次郎出版『繪本通俗三國志』の挿繪についての考察」(『第四二回國際日本文學研究集會會議錄』二〇一九年三月)八二頁。
- (4) 鈴木敏夫『出版』(出版ニュース社、一九七〇年)「第一部明治前期」、牧野正久「年報『大日本帝國内務省統計報告』中の出版統計の解析
- (上)(下)」(『日本出版史料』第一號・二號、日本エディタースクール出版部、一九九五・一九九六年)を参照。また、明治期における書物の裝幀については、遠藤律子、宮崎紀郎「明治時代の書物の裝幀——印刷および諸技術の發展との關わりから見た裝幀の變遷(一)」、『デザイン學研究』五三(五)、二〇〇七年)が裝幀の變遷を三つの時期に分けて分析しており、示唆に富む。
- (5) 前掲注(4)鈴木書二〇頁。
- (6) 前田愛『近代讀者の成立』(前田愛著作集第二卷、筑摩書房、一九八九)六〇〜六二頁参照。
- (7) 例えば、前掲注(4)鈴木書二二〇頁。
- (8) 高島俊男『水滸傳と日本人』(大修館書店、一九九一年)第一章「明治の水滸傳概況」参照。
- (9) 前掲注(8)高島書二三七〜二四一頁。
- (10) 前掲注(3)梁論文参照。
- (11) 前掲注(3)梁論文九一頁では、菱花堂は恐らく代金の高い格上の年方の挿繪を依頼したことから、清水から依頼された『繪本通俗三國志』の出版を重視していたのではないかとする。
- (12) 小林忠・大久保純一編『浮世繪の鑑賞知識』(至文堂、二〇〇〇年)「芳春(よしはる)」の項参照。
- (13) 前掲注(8)高島書二五五〜二五七頁。
- (14) 齋藤泰雄「識字能力・識字率の歴史的推移——日本の經驗」(廣島大學教育開發國際協力研究センター『國際教育協力論集』第一五卷第一一號、二〇一二年)の三章「壯丁教育程度調査による読み書き能力の推計」を参照。

【表1 明治期『三國志演義』翻譯年表(稿)】

出版時期	書名	編者	出版社	所蔵
明治10年1877	通俗演義三國志	永井德鄰和解	東京：	國圖、東大圖、上田ほか
明治15年1882	繪本通俗三國志	清水市次郎和解	東京：清水市次郎、菱花堂	國圖、鶴見大圖
	繪本通俗三國志	岩城勝藏翻刻	東京：著作館	國圖、東大圖、東大東文研、上田
明治16年1883	繪本通俗三國志	中村頼治増補	東京：東京同益出版社	國圖、鹿兒島大圖、上田
	通俗繪本三國志		東京：潛心堂、小笠原書房、前田長善	國圖、弘前大圖、上田
	通俗三國志		東京：鈴木義宗、武田政吉	國圖
	繪本通俗三國志	清水市次郎和解	東京：清水市次郎、看可樂堂、漸進堂 法木徳兵衛、武田平治、菱花堂	上田、鶴見大圖
	通俗繪本三國志	清水市次郎和解	東京：武田平治	上田
	三國志銘々義傳	鳥越安久里之助編	東京：東洲堂	國圖
明治17年1884	通俗繪本三國志	市川路周翻刻	東京：文事堂、小笠原書房(初版)	上田
	通俗繪本三國志	市川路周翻刻	東京：文事堂、小笠原書房(初版)	國圖、同志社大圖、立正大圖
	通俗三國志	内山昇翻刻	長野：信濃出版會社	國圖、上田
	繪本三國志	大川新吉編	東京：大川新吉	國圖
明治18年1885	通俗繪本三國志	月の舎秋里編述	東京：覺張榮三郎	國圖
	通俗繪本三國志	月の舎秋里編述	東京：覺張榮三郎	國圖
	通俗繪本三國志		東京：成文社(A)	國圖、國文研
	通俗繪本三國志		東京：鶴聲社	國圖、高知大圖、立正大圖、上田
	通俗繪本三國志		東京：成文社(B)	國圖
	通俗繪本三國志		東京：成文社(C)	上田
	三國志	小宮山五郎編	大阪：鹿田源藏	國圖
	繪本三國志小傳	武田平治編	東京：菱花堂	國圖
明治19年1886	通俗繪本三國志	月の舎秋里編述	東京：覺張榮三郎、上田屋(第2版)	金澤大學、上田
	通俗繪本三國志	市川路周翻刻	東京：文事堂(第2版)	國圖、國文研
	通俗繪本三國志	市川路周翻刻	東京：文事堂(第3版A)	國圖
	通俗繪本三國志	市川路周翻刻	東京：文事堂(第3版B)	上田
	通俗三國志		東京：金盛堂、菊屋幸三郎	上田
	繪本三國志	尾關トヨ編輯		上田
明治20年1887	通俗繪本三國志		東京：文事堂(第4版)	國圖
	繪本通俗三國志		青柳國松	國圖
	通俗三國志		東京：金泉堂書房	國圖、國文研、上田
明治21年1888	通俗繪本三國志		東京：銀花堂、野村銀次郎	國圖、同志社大圖、上田
	繪本三國志		牧金之助	國圖
明治22年1889	通俗繪本三國志	市川路周翻刻	東京：文事堂(第3版C)	上田
	通俗繪本三國志	市川路周翻刻	東京：文事堂(第3版C)	上田
	通俗繪本三國志	月の舎秋里編述	東京：覺張榮三郎、中川米作、漫遊會	上田
明治23年1890	通俗繪本三國志	月の舎秋里編述	大阪：柳澤武運三、偉業館、岡本支店	同志社大圖、立命館大圖、上田
	通俗繪本三國志		東京：銀花堂	國圖
	通俗繪本三國志	月の舎秋里編述	東京：銀花堂	上田
明治24年1891				
明治25年1892				
明治26年1893	繪本三國志		東京：聚榮堂、大川屋書店、大川錠吉	所蔵機關未確認
	校訂通俗三國志		東京：博文館(第1版)	所蔵機關多數
	繪本三國志		河井源藏	上田、花園大圖
明治27年1894				
明治28年1895	通俗繪本三國志	月の舎秋里編述	大阪：偉業館、岡本仙助	上田
明治29年1896	校訂通俗三國志		東京：博文館(第2版)	第15版奥付
明治30年1897				
明治31年1898	三國志(講談)	桃川燕林講演	文事堂	國圖、上田
明治32年1899				
明治33年1900	支那小説譯解 三國志演義	馬場讓得閣、井上碩田 (新一郎) 譯解	東京：東海義塾	國圖
明治34年1901	繪本三國志		東京：聚榮堂、大川屋書店、大川錠吉 (第2版)	上田
明治35年1902	校訂通俗三國志		東京：博文館(第5版)	第15版奥付
明治36年1903				
明治37年1904				
明治38年1905				
明治39年1906	三國志演義	久保天隨	東京：隆文館	國圖
明治40年1907				
明治41年1908	校訂通俗三國志		東京：博文館(第11版)	國圖
明治42年1909	校刻通俗三國志	巖溪學人校	東京：共同出版(初版)	國圖、東大圖
	校訂通俗三國志		東京：博文館(第11版)	國圖
	校訂通俗三國志		東京：博文館(第12版)	第14版奥付
	繪本三國志		東京：聚榮堂、大川屋書店、大川錠吉 (第5版)	上田
明治43年1910	校刻通俗三國志	巖溪學人校	東京：共同出版(第2版)	上田
	校訂通俗三國志		東京：博文館(第13版)	第14版奥付
明治44年1911	三國志物語	伊藤銀月	東京：日高有倫堂	國圖
	通俗三國志	幸田露伴校訂	東京：東亞堂書房	東大圖、九大圖、明治學院大圖、 國圖、上田
	通俗三國志		東京：早稲田大學出版部	所蔵機關多數
	校訂通俗三國志		東京：博文館(第14版)	上田
明治45年1912	新譯演義三國志		久保天隨譯補	東京：奎誠堂
	通俗三國志	石川核校訂	東京：有朋堂書店(初版)	所蔵機關多數
	通俗三國志	月の舎秋里編述	東京：大川屋書店、大川錠吉	上田
出版年不明	通俗繪本三國志		東京：成文社(D)	上田
出版年不明	通俗繪本三國志		東京：成文社(E)	上田

【表2 清水市次郎和解『繪本通俗三國志』の諸本】

	上田望架藏本A	國會圖書館藏本	上田望架藏本B	鶴見大學圖書館藏本A	鶴見大學圖書館藏本B
卷1 1-3	清水・法木 明治15.4.26届 9.26別製本届 全50册	清水・法木 明治15.10.25届 全50册	清水・法木 明治16.3.25届 全50册		清水・武田・菱花堂 明治十〇年届 大蘇芳年口畫 全17册
卷2 4-6	清水・法木 明治16.3.25届 全50册 1册4錢	清水・法木 明治16.3.25届 全50册			清水・武田・菱花堂 明治十〇年届 大蘇芳年口畫 全17册
卷3 7-9	奥付無し	清水・法木 明治16.7.7届 全50册		清水・法木 明治16.3.25届 全50册	
卷4 10-12	清水・看可樂堂 明治16.8.27届 全15册	清水・看可樂堂 明治16.8.27届 全15册	清水・看可樂堂 明治16.8.27届 全15册		清水・武田・菱花堂 明治十〇年届 大蘇芳年口畫 全17册
卷5 13-15	清水・看可樂堂 明治16.8.27届 全15册	清水・看可樂堂 明治16.8.27届 全15册		清水・看可樂堂 明治16.8.27届 全15册	
卷6 16-18	清水・看可樂堂 明治16.8.27届 全15册	清水・看可樂堂 明治16.8.27届 全15册		清水・看可樂堂 明治16.8.27届 全15册	
卷7 19-21	清水・看可樂堂 明治16.12.17届 全15册	清水・看可樂堂 明治16.8.27届 全15册		清水・看可樂堂 明治16.8.27届 全15册	
卷8 22-24	清水・看可樂堂 明治16.8.27届 全15册	清水・看可樂堂 明治16.8.27届 全15册		清水・看可樂堂 明治16.8.27届 全15册	
卷9 25-27	清水・看可樂堂 明治16.12.17届 全15册	清水・看可樂堂 明治16.12.17届 全15册	清水・看可樂堂 明治16.12.17届 全15册		清水・武田・菱花堂 明治十〇年届 大蘇芳年口畫 全17册
卷10 28-30	清水・看可樂堂 明治16.12.17届 全15册	清水・看可樂堂 明治16.12.17届 全15册	清水・看可樂堂 明治16.12.17届 全15册	清水・看可樂堂 明治16.12届 全15册	
卷11 31-32	清水・菱花堂 明治16.12.17届 全15册	清水・菱花堂 明治16.12.17届 全15册	清水・菱花堂 明治16.12.17届 全15册		清水・武田・菱花堂 明治十〇年届 大蘇芳年口畫 全17册
卷12 33-35	清水・武田・菱花堂 明治17.6.11届 全15册	清水・武田・菱花堂 明治17.6.11届 全15册	清水・武田・菱花堂 明治17.6.11届 全15册		清水・武田・菱花堂 明治十〇年届 大蘇芳年口畫 全17册
卷13 36-38	清水・武田・菱花堂 明治17.6.11届 全15册	清水・武田・菱花堂 明治17.6.11届 全15册			清水・武田・菱花堂 明治十〇年届 大蘇芳年口畫 全17册
卷14 39-41	奥付無し	清水・武田・菱花堂 明治17.6.11届 大蘇芳年口畫 全17册			清水・武田・菱花堂 明治十〇年届 大蘇芳年口畫 全17册
卷15 42-44	奥付無し 封面「大蘇 芳年口繪 繪本通俗三 國志 東京 菱花堂發兌」	清水・武田・菱花堂 明治17.6.11届 大蘇芳年口畫 全17册	清水・武田・菱花堂 明治17.6.11届 大蘇芳年口畫 全17册		清水・武田・菱花堂 明治十〇年届 大蘇芳年口畫 全17册
卷16 45-47	清水・武田・菱花堂 明治17.6.11届 大蘇芳年口畫 全17册	清水・武田・菱花堂 明治17.6.11届 大蘇芳年口畫 全17册	清水・武田・菱花堂 明治17.6.11届 大蘇芳年口畫 全17册		清水・武田・菱花堂 明治十〇年届 大蘇芳年口畫 全17册
卷17 48-50	清水・武田・菱花堂 明治17.6.11届 大蘇芳年口畫 全17册	清水・武田・菱花堂 明治17.6.11届 大蘇芳年口畫 全17册			清水・武田・菱花堂 明治十〇年届 大蘇芳年口畫 全17册

【表3 成文社と鶴聲社の『通俗繪本三國志』】

版	卷册	出版年 明治18	行数・文字數	全卷(頁)	價格	所藏	シリーズ	生田署名
成文社A	30册(6册)	1・5出版	15行45字	1551	3圓	國圖、國文研	國民の本篋	有
成文社B	2册	6・20届	15行45字	1551	3圓	國圖	國民の本篋	有
成文社C	2册	6・20届	15行45字	1551	印無	上田	無	無
成文社D	2册、存1册	不明	15行45字	上808	不明	上田	國民の本篋	有
成文社E	2册、存1册	不明	15行45字	下743	不明	上田	國民の本篋 帝國文庫	有
鶴聲社	2册	4・8届	15行45字	1551	4圓	國圖、高知大圖、 立正大圖、上田	無	無

【表4 文事堂の『通俗繪本三國志』】

	裝丁 册數	卷册	出版年 明治	行数・文字數	全卷 (頁)	上卷 (頁)	下卷 (頁)	價格	所藏
初版	洋裝2	上下	17・12	13行37字	2104	1060	1044	2圓	國圖、同志社大圖、立正大圖
再版	洋裝2	上下	19・5	14行42字	1808	956	852	4圓	國圖、國文研
3版A	洋裝2	上下	19・11	16行42字	1649	886	763	4圓	國會圖
3版B	洋裝2	上下	19・11	16行42字	1620	854	766	4圓	上田
3版C	洋裝2	上元亨	22・1	19行42字		687		4圓	上田
3版C	洋裝4	上元亨利貞	22・1	19行42字	1306	687	619	4圓	上田
4版	洋裝2	上下	20・7	18行42字	1391	720	671	4圓	

廢名『談新詩』における作者の個性の重視

——自己表現としての「夢」の發展的繼承

田中雄大

はじめに

廢名（一九〇一—一九六七）が唯一まとまった形で著した新詩論『談新詩』は、彼が一九三〇年代から四〇年代にかけて北京大學で教鞭を執つた際の講義録を収めた著作である。全一六章のうち第一二章までは日中戦争勃發前に執筆され、一九四四年に北平の新民印書館から『談新詩』として出版された。第一三章から第一六章は廢名が日中戦争後に北京大學で再び教鞭を執つた際の講義録で、これと一九三四年に發表された「新詩問答」一篇を加える形で、増補版の『談新詩』が一九八四年に人民文學出版社から出版された¹。前後で執筆時期に開きがあるものの、その新詩観は基本的に一貫しており、また廢名自身も第一三章の冒頭でそのように述べている²。

『談新詩』は胡適以來の様々な新詩を論じているが、その核心となるテーゼはただ一つ、「新詩の内容は詩の内容でなければならぬ」というものである³。そして「詩の内容」とは、實際の體驗に基づく作者の詩の情緒の完成のことであるとし、また簡明な元稹・白居易の詩を肯定する胡適の新詩観に對抗する形で、新詩の手法として溫庭筠・

李商隱らの晩唐詩詞を擧げている⁵。但し廢名の主眼はこのテーゼの提出自體にあるというよりは、寧ろこの簡潔な字面と曖昧な定義を併せ持つテーゼを一つの参照軸として數々の實作品を逍遙し、新詩のあるべき姿を模索するその過程にこそある⁶。そのため一見すると簡潔なテーゼの徒な反復とも捉えられかねない『談新詩』だが、その試みの意味する所は同時に極めて曖昧でもある。

このような事情から、從來の研究は全貌を捉え難いこの新詩論を、實驗的で難解だとされる廢名の作家像に沿う形で理解しようと試みてきた。その中でもとりわけ孫玉石の一連の論考は、現在に至るまで大きな影響力を有している。孫玉石はまず「新詩の内容は詩の内容でなければならぬ」という『談新詩』のテーゼが、現代的な意識に基づいた舊詩の再解釋であることを強調する。そしてそうした現代的な關心の下で、廢名は現代派詩人の審美要求に合致する觀念として、「想像と空想という詩の品格」や「隱匿朦朧の美學の追求」を晩唐詩詞の中に見出したのだと主張する⁷。廢名の新詩論が舊詩の讀み直しに基づいているという指摘は極めて重要で、『談新詩』の根本に觸れる見解である⁸。

しかし孫玉石を嚆矢とする従來の研究は、いずれも新文學初期の新詩論との比較を通して廢名の新詩論に先進性を付すことに重點を置くあまり、作者の個性の重視という『談新詩』のもう一つの大きな特徴に對しては十分な注意を拂つてこなかつた。だがこの特徴は先述した「詩の内容」の定義と深く結びついているのみならず、先行研究が認める廢名詩論の先進性を考えるうえでも非常に重要な要素である。

またこの個性の問題は、更にもう一つの重要な概念である「夢」の問題とも密接に關つてゐる。廢名は『談新詩』の各所で夢といふ比喩を用いて新詩のあるべき姿や「詩の内容」について説明を試みてゐるが、『談新詩』においてそうした夢の比喩が用いられる際には、誰がその夢を見るのかという主體の所在が常に問題となつてゐる。つまり夢に擬えられる詩作の作者が問題化されてゐるのであり、この點において夢の問題は作者の個性に關する議論と軌を一にする。そしてこの夢の問題について、廢名は一九二〇年代に自らの断片的エッセイ「説夢」の中でも、作者と讀者の間でやり取りされる作品＝夢という觀點から論じており、この問題は『談新詩』執筆の時點で既に一定の文脈を有してゐた。

以上の點を踏まえ、本稿は「説夢」における夢を補助線としつつ、『談新詩』における作者の個性の重視について分析を行うことで、『談新詩』の再解釋を試みる。

一 『談新詩』における作者の個性の重視

従來の研究が『談新詩』における作者の個性の重視という事實に十分な注意を拂つてこなかつたことは、先に述べた通りである。但し廢名の新詩論において作者の感情が重視されているという點について

は、個性とは異なる角度から注目が向けられてきた。例えば孫玉石は、廢名による感情の重視を初期の新詩に缺如していた想像と空想に對する探究であると捉え、それは詩人の感情と外界の事物が融合する興の方法であり、現代派詩人が追求する美學の特質であつたと理解している^⑩。

しかし『談新詩』における感情の重視は、決してそうした理解にのみ留まるものではなく、あくまでもその根底には作者の個性に對する肯定的な眼差しが存在する。例えば第二章において、廢名は胡適の「一顆星兒」と「鴿子」という二つの新詩を比較し、前者には「詩の内容」があるが後者にはそれがないと指摘しているが、それは「一顆星兒」が作者の實際の感興に裏打ちされた作品であるのに對し、「鴿子」は胡適以外の人間であつても書くことのできる散文的な作品であるためだと説明される。また「一顆遭劫的星」という別の新詩に關しても、「作者に本當に作詩の情緒があるのでなければ、こうした詩を書き出すことはできない」と述べ、その第二連第四行に對しては「これは韻を踏むために適當に寄せ集めた句ではなく、この部分は最も個性を表現してゐる」と評價している^⑪。

廢名は『談新詩』の至る個所で「情緒」・「情感」・「性情」などの言葉を使いながら、新詩が有するべき「詩の内容」とは實際の體驗が呼び起こす感情のことであると述べているが、胡適の新詩に對する評價からも明らかのように、廢名の議論において「詩の内容」を「詩の内容」^⑫ 足らしめるのは、他の誰でもない作者のみが持つ個性であり、その個性が支える独自の表現である。それは使い古された舊詩の韻律や表現、或いは誰にでも書きうる散文とは對立するものであるからこそ、眞の新詩の誕生に不可欠な要素であるとされる。

しかしこのような個性の強調自體は、『談新詩』執筆の段階で既に珍しいものではなかった。言い換えれば、このように型に嵌った古い形式に對抗すべく他の誰でもない私を強調するという言説は、寧ろ廢名が批判する初期の新詩の時代における主要な主張に他ならなかった。そして、廢名自身も一九二〇年代に、作者の個性に重點を置きつつ複数の文學作品について語った斷片的エッセイ「説夢」を發表している。次節では、「説夢」において作者の個性がどのように捉えられていたのかを分析し、それが如何なる文脈の下で廢名の文學論に登場したのかを明らかにする。

二 「私」の夢・廢名の文學論と

周作人・郭沫若の自己表現

二一 「説夢」における作者・作品・讀者

「説夢」は一九二七年に『語絲』第一三三期に掲載されたエッセイで、廢名が夢という比喻を用いつつ様々な作品について斷片的に語ったものである。夢は廢名の先行研究におけるキーワードの一つだが、これまでは基本的にその難解さや先進性、もしくは反寫實主義などと結びつける形で論じられてきた¹⁵⁾。そして「説夢」においても現實との對比で夢が語られる場面が一箇所存在する。

創作するときは「反芻」すべきである。そうであつて初めて一つの夢となることが出来る。夢であるから、當初の實生活とは曖昧な境により隔てられる。藝術の成功もまたここにある¹⁶⁾。

ここでは作品が夢に例えられているが、その作品⇨夢は作者の「反芻」を経ることで初めて作品⇨夢となり、實際の生活とは「曖昧な境」により隔てられる¹⁷⁾。この點において、廢名は確かに作品を單なる現

實の反映と見なす判断とは異なる姿勢を示している。但し「説夢」全體の論述を考慮に入れるのであれば、こうした現實との對比という意味はあくまでも夢の表れ方の一つに過ぎないと言える。「説夢」における夢とは、現實との隔たりのみならず、過去と現在との隔たりなど、他の異なる文脈における曖昧な隔たりをも表す概念である。

「竹林的故事」、「河上柳」、「去郷」は私の過去の生命の結晶で、今でもよく振り返つてみるのだが、それは全く一つの夢である。

だがその夢が如何にして生じたのかを私は知らず、不思議に感じる！それは私の傑作だが、そのような傑作を再び書くことは私にはできない¹⁸⁾。

これら廢名の諸作品は、現在の時點から思い出すこととできない隔てられた存在であるために夢であるとされ、またその作品⇨夢は「私の過去の生命の結晶」であるとされる。この場合、作品を夢見る主體は、「私」即ち作者である廢名自身だということになる。

實は廢名は「説夢」において、夢について語る以上に、「私」ないし作者について語っている。廢名は自身の作品である「無題」や「張先生與張太太」について「いずれも私のその時の生命、私のその時の生命の産兒であり、時折私はその短命だった産兒をより愛おしく思う¹⁹⁾」とし、「河上柳」に關しては、自身の過去の具體的な體驗に基づいて書かれたことを強調している。また別の箇所では、バルザック作品の登場人物は全てバルザック自身だとするアーサー・シモンズの評論は他のあらゆる作家にも當てはまると述べており、作品が作者の實體驗に基づく點を重視する廢名の價值判断が、同時に作者の固有性、即ち個性の確認でもあることがここから伺える。

そしてこのような固有の作者が創作する作品という了解を前提とし

たうえで、「説夢」では更に作者と讀者の關係性が繰り返し議論の對象となつてゐる。その最も代表的な箇所として、廢名の作品は晦澁だといふ同時代評に對する應答を以下に引用する。

多くの人が私の文章はobscureで、私の意圖を読み取ることができないと言ふ。だが私自身はどれほど懸命に、徐々に心のうちを曝け出そうとしてゐることか！私はあまりにもover 過ぎるのではないかと疑つてゐるほどである。こうした苦境については、どうやら數多くの詩人が述べたことがあるようだ。

ここでは文章とは書き手が心のうちを展開したものであるとされ、その上で「obscure」といふ評價が作者の意圖を読み取れない讀者の問題、即ち作者・讀者間のコミュニケーションの不全として理解されている。そして後述するように、この兩者の關係性は廢名の文學論に一貫して存在する着眼點の一つであつた。

二二 周作人・郭沫若における作者・作品・讀者

だがこうした考え方は決して廢名獨自のものでは無かつた。それでは廢名が個性を備えた作者、その作者が作り出す作品、その作品を鑑賞する讀者という枠組みに拘り續けた背景にはどのような文脈が存在したのか。手がかりとして、まず廢名が一九二五年に出版した第一短編小説集『竹林的故事』に注目する。この短編集には廢名が師とも仰いだ周作人が序文を執筆してゐるのだが、そこで周作人は夢の比喩を用いてゐる。廢名の小説は「平凡な人の平凡な生活」を描いたもので現實逃避的だとは思わないとしたうえで、續けて次のように述べる。

文學は實録ではなく、一つの夢である。夢は醒めた生活の複寫で決してないが、覺めた生活を離れてしまえば、それがただの反

應であれ願ひ通りの夢であれ、夢はその材料を失つてしまふ。「……」將來、著者の人生經驗が次第に進展すれば、彼の藝術にも自ずと變化が生ずるだろうが、そのとき我々は當然ながら著者が我々に見せたいと思ふもので満足しなければならず、我々の考へに従つて改作するよう著者に求めてはならない。讀むか讀まないかは我々の自由であるか。

ここで周作人は明確に「文學は實録ではなく、一つの夢である」と述べており、「醒めた生活」に根差しながらもそれと完全に一致することはない隔てられた存在として、作品Ⅱ夢を定義している。また作品の受容に關しては、作者の意圖が優先されるべきだとする一方で、讀者にはそれを受け取るかどうか選擇する自由があるとしている。そしてこれらの議論の大前提として、作品Ⅱ夢を作り出す主體としての作者が想定されており、作品は作者の人生經驗に必然的に基づかざるを得ないことが主張されている。

このように整理すると、廢名「説夢」における主要な論點はいずれもその二年前に書かれた周作人の文章において既に登場してゐたことが分かる。そして周作人は更に遡ること二年前、自身の散文集『自己的園地』の序文においても、同様の議論を展開してゐる。

我々は不朽たることを過度に求め、社會に有益たらんとするばかりに、あまりにも自己を抹殺してゐる。だが實際のところ不朽たることは決して著作の目的ではなく、社會に有益たることも全く著作の義務には非ず、ただ思つたことを思つた通りに言ふ、それこそがあらゆる文藝の存在の根據である。我々の思想が如何に淺陋であり、文章が如何に平凡であるにせよ、自分が言おうと思つたときにはそのまま大膽に口にしてよい。文藝とは自己の表現

に過ぎないのだから、凡庸な文章とはまさしく凡庸な人の眞の表現であり、高尚な虚偽の話をするよりもずっと誠實である。⁽²³⁾

ここでは後に『竹林的故事』序文や「説夢」において繰り返される、作品の統括者としての作者、および文藝作品と現実との関係性という論點が、「自己の表現」と「社會に有益たること」の對立という形で明確に示されている。周作人は夢の比喻こそ用いていないもの⁽²⁴⁾、他の箇所では作者と讀者の關係性にも言及している。⁽²⁵⁾

そして自己表現と社會貢獻の對置から明らかのように、周作人の議論は當時の文學研究會と創造社の論争を踏まえている。些か圖式的な整理をすれば、文藝作品は社會にとつて有益たるべきとする文藝研究會側の主張に對し、創造社側は文藝はあくまで自己表現だとの主張を展開していた。⁽²⁶⁾

だがここで廢名「説夢」の文脈を考えるうえで注目し値するのは、創造社の郭沫若が、作品Ⅱ夢という比喻を用いながら自己表現としての文藝作品という見解を展開していることである。郭沫若は一九二三年に「批評與夢」を發表しているが、同文は次のように始まる。

批評には一定の尺度がない。批評家はいづれも自身の得た感應で以て、對象の中に意義を求めぬ。ゆえに我々が探して得る意義は、二つの種類の誤りに陥りがちである。第一に、深すぎるのでなければ、第二に、淺すぎるのである。「……」私はただお腹が空けば泣き、寒ければ喚く赤子でありたい。赤子の單純な泣き聲や喚き聲は全て彼自身の心の聲であり、蓄音機のように他人に代わって綺麗事を伝えるわけではないからだ。⁽²⁷⁾

郭沫若はまず批評という行爲に關する檢討から自らの議論を展開しているが、周作人もまた『自己的園地』序文を、同じように批評行爲

に對する自身の見解を述べることから始めている。⁽²⁸⁾ また赤子の比喻を用いて、創作において「自身の心の聲」を述べることを肯定し、それが「蓄音機のような文章と對置されている」。

次に郭沫若は創作と批評のずれという問題を論じたうえで、自身の小説「殘夢」へと話題を展開し、同作に對する評論が郭沫若の創作意圖を捉えられていないとして批判する。郭沫若は「殘夢」の重點は心理描寫にあるため、批評家は精神分析や夢の心理などの觀點を参照しなければ作者の創作意圖を見出すことはできないと主張したうえで、續けて次のように述べる。

文藝の創作とは恰も夢を見るようなものである。「……」眞の文藝とは極めて豊かな生活が純粹な精神作用を通じて昇華した一つの象徴世界である。文藝の批評は恰も夢の分析をするようなものであり、「……」一人の作家の生活は、それが生理的であれ精神的であれ、そして一人の作家の環境は、それが時間的であれ空間的であれ、全て彼の夢(作品)の材料である。十分な研究なしには、夢を占う易者にはなれない。⁽²⁹⁾

ここでは文藝の創作が「夢を見る」ことに、文藝の批評が「夢の分析」に喩えられているが、その作品Ⅱ夢という比喻の根底にあるのは精神分析の考え方であり、夢分析という概念であった。「批評與夢」では、夢とは晝間に抑壓された欲望や觀念が睡眠時に現れたものであるとするというフロイト派學者の見解が引用されているが、このような現實と夢との關係性が作者の生活環境と作品との關係性へと敷衍されることによつて、郭沫若の文學觀は成立している。

郭沫若の用いる夢の比喻はあくまでも精神分析の考え方に基づくものであり、この點は周作人や廢名の用いる比喻とは異なっている。し

かしそうした相違にも拘らず、三者の各文は作者・作品・讀者、およびそれらの關係性について確かに共通の見解を有しており、それらは細部の表現に至るまで相互に關連していた。

「説夢」は斷片的な文章の集合體であり、同文における夢は一つの明確な定義を有しているわけではない。しかしその夢という比喩の背景には、一九二〇年代前半に盛んに議論されていた自己表現の問題、そして批評のあるべき姿を模索する討論が存在したのである。

三 「自分」の夢と「他人」の夢… テクストの自律性への指向性

前節では「説夢」が周作人・郭沫若らによる自己表現に關する議論を繼承していたことを確認したが、本節ではその中の一つ、作者と讀者の關係性に焦點を絞り、引き続き検討する。周作人が「文藝の中で他人の心情を理解し、文藝の中に自分の心情を見出すことで、理解される喜びを得たい」と述べ、郭沫若が創作と批評のずれに言及し、それを「夢を見る」ことと「夢の分析をする」ことの應酬として捉えたように、既存の議論はまず作者と讀者という二つの役割を豫め想定したうえで、作者と讀者の間のコミュニケーションとして文藝作品の評論・解釋という行爲を理解していた。ここでは一人の人間が作者と讀者という二つの役割を兼ねる可能性に關しては言及があるものの、作者の役割である創作と讀者の役割である批評はあくまでも異なる行爲として捉えられており、また作品は兩者の間に介する存在として、やはり作者や讀者とは異なる次元で捉えられていた。そして廢名もまた「説夢」の中で、同様の枠組みの下で作者・作品・讀者の關係を把握していた。

但しここで注目に値するのは、「説夢」における夢の多義性である。前節で確認した「obscure」という評價に關する議論は、確かに周作人や郭沫若が論じた作者・作品・讀者という枠組の内部に收まるものであった。しかし「説夢」における夢とは根本的には曖昧な隔たりを表す概念であり、郭沫若が想定していた作品Ⅱ夢とは異なる意味をも包攝していたように思われる。以下の夢に關する言説は、その可能性を示す用例である。

私はかつて『呐喊』のために小文を書いたのだが、今となつてはその小文のことを考えると殆ど恐ろしい氣持ちになる。なぜならば同文はそれほど不確實だったからだ。私はかつてそれがどれほど確實だと思つていただろうか、自分の夢を以て他人の夢を語るということが。

最後の「自分の夢を以て他人の夢を語る」という表現は極めて示唆に富む。廢名はかつて物した魯迅『呐喊』への評論「呐喊」について語つているが、ここでは魯迅の創作と廢名の評論、そのいずれもが夢という同じ語によつて表されている。言い換えれば、廢名は作品Ⅱ夢という比喩を狹義の文藝作品、狹義の創作に限定するのではなく、他人によつて書かれた作品Ⅱ夢を解釋して文章にする評論にも適用しているのである。これが單なる言葉のあやの問題ではないことは、例えば廢名が「就算是搭題」において魯迅の「言語や文字で以て自らの心と夢を書き出す」という表現を詩人のみならず批評家や小説家へと擴大して解釋していることや、「説夢」において全ての偉大な詩人は須らく批評家でもあるというボードレールの發言に言及していることから明らかである。

また廢名の夢の用例はこれだけに留まらない。以下の引用では、こ

れまでの作者が作り出す作品Ⅱ夢という發想を前提としながらも、作品そのものが自律した「夢」でもあるとされることで、夢の範圍がより廣いものとなつてゐる。陶淵明「雜詩・憶我少壯時」について、そこに直接表現されていない作者の意圖を讀者である廢名が作品の中に見出したという自身の體驗に言及し、續けて次のように述べる。

古人にとつては單なる無心の一筆であつても私は搖り動かされるということがあつたが、それは本當にいわゆる風聲鶴唳というものなのかもしれない。これには大きな道理がその間に存在する。著者は筆を動かすとき、これから自分が何を成し遂げるのかを豫測することはできない。字と字、句と句は互いに生長するが、それは夢が捉えられないことに似ている。しかし一人の人間は自分の夢しか見ることができないので、無心であるにも拘らずそこには原因が存在する。その結果、我々が向かい合うとき、それはどうしても夢を夢見ることになる。だがそれは依然として眞實である。

先述の通り、郭沫若の見る夢は意識的であれ無意識的であれ、作者に全面的に歸納されうる夢であつた。それに對してこの箇所では、作品Ⅱ夢は作者の「自分の夢」であると同時に、「字と字、句と句」の間に成立する捉えられない「夢」のような存在でもあり、言い換えればここにおいて夢はテキストの自律性への指向性を帯びてゐる。そしてそれゆゑに、讀者が作品に向かいあうという行爲も、郭沫若式の夢分析ではなく、作者の夢に對する讀者の夢に喩えられる。

この地點において、廢名の夢は作者と讀者とを滑らかな連續性の下に結び付ける存在となる。その夢は作者の見る夢という大前提の上に成立しており、この點において郭沫若の夢に確かに連なるものである。

廢名『談新詩』における作者の個性の重視

が、「説夢」においてはその夢が更にずれ、別の性質を帯びる可能性が幽かにではあるが示されている。

四 『談新詩』における個性と普遍性

ここまで「説夢」の分析を通じて、『談新詩』の背後に潜む文脈について考察を行った。本節ではその結果を踏まえつつ、『談新詩』における作者の個性という論點について改めて具體的な検討を加える。

四— 郭沫若の新詩における個性と普遍性

『談新詩』では新詩が作者の個性に基づいてゐることの重要性が繰返して強調されているが、このことは新詩が個性のみを具えればよいということの意味しない。實際、廢名は個性に基づいた想像や幻想の重要性を説く第四章の末尾において「讀者に讀んで良いと感じさせることができ、そのうえで普遍と個性という二つが具わつて初めて、白話新詩の成功である」と述べており、「個性」と對置される形で「普遍」もまた重要であることが指摘されている。

この問題は郭沫若の新詩を論じた第二章において、具體的に展開されている。まず廢名は同章の冒頭で、郭沫若「夕暮」は詩人の個人的經驗に基づく必然的な表現だとして、同詩を高く評價する。續けて、「詩は作り出すものではなく、ただ書き出すものである」という郭沫若の發言を引用しながら、「作り出す」舊詩の束縛から逃れた自由な詩として、郭沫若の新詩を取り上げる。これらの評價基準は、いづれも第一章以前において既に提示済みのものである。

それに對し、續く箇所では普遍性が重要な用語として登場する。最初に同語が登場するのは、「燈臺」への評價においてである。

この詩も人間の業を離れたもので、詩人の感情とそれが觸れたものとは丁度一つの詩になるべくしてなっているようで、故にこの詩には普遍性と個性が具わっている。もし詩感とそれが觸れたものに更に手を加えるべきであり、人工的に増減させる必要があるならば、それは詩人郭沫若の能力を超えており、故にこの詩は多少不完全なものとなり、詩人の個性はもとより存在するのだが、詩の普遍性の方が問題となる。

最初の「詩人の感情とそれが觸れたもの」との関係については、引用の直前にもほぼ同様の言い回しによる言及がある。そこでは「詩人の感情と外界の景物が共に在る」康白情の詩と並置する形で、郭沫若の場合は「詩人の感情はそれが觸れたものと一緒になっている」のだとされる。そしてこれら諸々の並置を比較してみれば、ここで述べられる普遍性とは、詩人の感情が「觸れたもの」としての「外界の景物」に何らかの形で關連する概念であることが分かる。

但し普遍性が「問題になる」と廢名が敢えて述べているように、普遍性は「外界の景物」に依據することで直ちに成立するわけではない。廢名の主張する普遍性は、更に必然性、そして「作り出す」の「書き出す」のかという問題とも密接に關わっている。「偶成」についての廢名の評論を以下に引用する。

この詩（「偶成」）の情景は良いかもしれないが、詩の方は上手く書けていない。なぜならば第四行にある偶然の出來事では、詩の普遍性を構成するのに不足だからだ。そのため詩はただ書き出すだけでなく、ときに「作り」出すことも必要である。

ここでは普遍性が成立しない場合について述べられているが、そこが問題となるのが「偶然」である。單に實際に起こったことを詩にす

るだけでは「偶然の出來事」に過ぎず必然性がないとされ、普遍性實現のためには、更に作り出すことが必要だと廢名は主張する。但し既に確認したように、單に作り出すだけでは詩的要素を形式にのみ頼る舊詩と同様の問題に行き當つてしまう。そこで「作り出す」と「書き出す」という二つの方法の間で均衡を取ることが、廢名の求める普遍性にとつて重要になる。

この詩（劉半農「母親」）の書く情景について、それが當時の實在の情景を描寫したものでかどうかを讀者が問わないのは自然なことであるが、それはこの詩が詩の普遍性を有しているためである。この詩もまた「作り」出したものだとやわねばならない。一方で郭沫若の「偶成」は確かに書き出したものである。（……）この詩（郭沫若「天上的市街」）は思うに、作り出したものだと言わねばならない。第四連の四行は良く作られているが、第三連の牽牛織女が牛に乗り河を渡るというのは「今の詩人は未だにお乳を吸っている」のだと説明せざるを得ず、古典派の「此日六軍同駐馬、當時七夕笑牽牛」が面白く作られているのに遠く及ばない。古典派はそこで詩を「作つて」いるものの、詩の普遍性という道理を却つてよく心得ている。

廢名は普遍性が何を指すのかについて明言していないが、ここでは「讀者」の存在が言及されていることに注目する。「偶成」に對する二つの評價を見比べると明らかかなように、廢名の主張する普遍性とは常に讀者によつて判斷される價值基準となつている。そして「天上的市街」に關して問題となつているのも、讀者にとつて「面白く作られている」か否かという點であり、廢名は舊詩における「作る」行爲、即ち舊詩の束縛が讀者の面白く感じる詩を「作る」行爲へと繋がつてゆ

く可能性を、ここで肯定的に評價しているのである。⁽¹⁷⁾

以上の分析を踏まえれば、個性と普遍性が對置されることの意味がより明確になる。つまり廢名は自身の新詩論の主眼が單なる個性の重視とならぬように、讀者の存在を考慮に入れた普遍性の問題を自らの議論のうちに導入したのである。但しその作業がまさに「詩は作り出すものではなく、書き出すものである」という主張の部分的否定から出發していることに象徴されるように、それはあくまで郭沫若らによる自己表現に關する議論の批判的繼承として實現した。

四―二 下之琳の新詩における個性と普遍性

それでは普遍性を視野に入れることで、自己表現や個性の重視という段階から自らの新詩論を更に一步進めた廢名は、その普遍性と個性の問題をどのように發展させたのだろうか。最後に、下之琳の新詩を論じた第一章の内容を検討する。

第一章では特に優れたものとして下之琳の新詩一首が引用されているが、廢名はその具體的な評價に入る前に、自らの選詩の基準について、選から漏れた「寂寞」を引用しつつ説明を試みている。

「寂寞」について、廢名は「いま彼は死んで三時間経つ」という句が新鮮で自然であると絶賛しつつも、冒頭の「田舎の子どもは寂しがりだ」という句が「一般に文章を作ろうとする際」に「無理矢理に冒頭の一句を決めることに似ている」とし、この點を選ばなかつた理由としているのだが、このことは選詩の基準が獨自性と一般性という馴染みの圖式に基づくことを意味する。また續けて、郭沫若の新詩について個性と普遍性の兩立を説いたのと同じように、獨自性と一般性もまたそのバランスが重要性であると述べる。

廢名『談新詩』における作者の個性の重視

一篇の新詩は一つの新しいゴム靴と同じように、各箇所が靴の中心から半径分離、各箇所が等しく弾むようではなければならぬ。各句があなたの見慣れぬものであるべきなのは、詩とは意外なものだからであり、各句があなたの見慣れたものであるべきなのは、詩とはもとより意中にあるからだ。「田舎の子どもは寂しがりだ」などという句は誰にでも書くことができるのであり、下之琳である必要はない。ゆえに「寂寞」という詩は入選しえない。觀念の飛躍が著しく言葉遣いが自然でないものは選ばず、普遍的でないものは選ばない。「圓寶盒」、「距離的組織」、「魚化石」などがそれである。下之琳のうち、跳動する詩であり且つ言葉遣いが自然なもの、跳動する思想であり且つ詩に普遍性のあるものが、眞に最も良い詩である。⁽¹⁸⁾

ここではまず意外性と意中性という對立が持ち出され、兩者の均衡を保つことが重要であるとされる。そのうえで改めて詩人の獨自性・個性の重要性が強調されるが、この點と對になるのが「普遍的でないものは選ばなかつた」という箇所である。續けて意外性と意中性、個性と普遍性に加え、更に觀念の飛躍と言葉遣いの自然さという對立が提起されるが、これら三つの對立における前項同士および後項同士は相互に對應している。そして最終的にこれらの諸對立における兩項を兼ね備えた詩が、「最も良い詩」とされる。⁽¹⁹⁾

このように選詩の基準を設定してから、議論は下之琳の各詩の感想へと移るのだが、その中でも「航海」への評論は下之琳の新詩が諸對立の間で均衡を保つさまについて詳細に論述しており注目に値する。「航海」について、同詩が寫實的である故に好ましいとしたりうえで、續けて次のように述べているが、ここで重要な用語として「夢」が再

び登場する。

しかし私の解釋（「航海」中の一句に對する解釋）にも私なりの理由がある。私は具體的な思想を好み、「神祕」を好まないが、神祕的かつ寫實的ならば、まさに夢を見るが如しであり、我々が夢を見るのもみな寫實で、あなたは私の夢を見ないし、私はあなたの夢を見ない。凡そ寫實的思想でないものは、全て私は好まない。ただあなたが寫實的であれば、いかに神祕的であろうとも、私は全て理解する。ただ寫實であつて初めて、神祕がある。そうでなければ曖昧になり、空虚になる。⁽³⁰⁾

ここでは先述した諸對立に重なる形で、神祕性と寫實性という對立が提示されているが、この對立が特異なのは、その重要性に比重が付けられている點である。つまり「凡そ寫實的思想でないものは、全て私は好まない」のであり、「寫實であつて初めて、神祕がある」というわけである。そして寫實性と神祕性がその關係性を保持しつつ並置されることを、廢名は「まさに夢を見るが如し」と形容している。そして神祕性と寫實性という對立は同様に夢の比喩をも貫いており、寫實に對應する形で、廢名は「あなたは私の夢を見ないし、私はあなたの夢を見ない」と述べている。このような夢見る主體という議論は、「反芻」という表現や、バルザックの登場人物に對する廢名の見解などの「説夢」における「私」の夢に關する議論と見事に一致する。⁽³¹⁾ このように、「説夢」と『談新詩』は單に「夢」という語を共有しているのみならず、その内容を共有している。⁽³²⁾

それでは、寫實性がそうした夢見る主體に對應しているならば、「神祕的にかつ寫實的」な夢のもう一つの側面、即ち神祕性に對應する夢のあり方とは一體どのようなものなのか。この問いに對して、廢

名は續く「倦」の感想において間接的に答えている。廢名は「倦」について、「この詩はユニークで、情趣がありつつ、平易に書かれており、寫實的である」としたうえで、次のように述べる。

ただ寫實であつて初めて神祕があると先に述べたのは、あなたが見るものは私に見えるとは限らず、私が見るものはあなたに見えるとは限らず、書き出すとしばしば意の中に留まらないゆえ、とても神祕的だからである。⁽³³⁾

ここで廢名は夢の語こそ用いていないものの、神祕的であることの原因として「書き出すとしばしば意の中に留まらない」ことを擧げている。そして、この神祕性の前提たる寫實性に對應する夢見る主體と、ここで述べられる「あなたが見るものが私に見えるとは限らず、私が見るものがあなたに見えるとは限らない」という見方を比較してみると、この議論が本稿第二節・第三節で検討した「私」の夢から「他人」の夢、そしてテクストという夢へという移行と完全に對應していることが分かる。つまり「説夢」において作者によつて統括される作品Ⅱ夢が、作者と讀者との間で夢のように自律するテクストへの指向性を帯びていたのと同じように、『談新詩』における個性と普遍性の問題もまた、單に兩者の折衷をを目指すのではなく、「書き出すとしばしば意の中に留まらない」、即ち作者と讀者という回路が確保されたうえで意味が宙吊りにされた状態を一つのモデルとしていたのである。⁽³⁴⁾ そして實際に「倦」に續く「歸」の感想の中で、廢名は明確に「私は作者の意圖を理解したとは言えないが、彼は面白く書けていると思う」と述べており、⁽³⁵⁾ 個性と普遍性の兩方を兼ね備えた詩について、自らと下之琳の間に成立するコミュニケーションという觀點から一つの見解を提示している。

おわりに

従来、廢名の詩論は新文學初期の新詩論と比べて現代的で複雑な詩論であるとされ、それ故に先進的な詩論であると見なされてきた。しかし本稿の分析によつて明らかになつたように、優れた新詩の條件である「詩の内容」が成立するためには作者の個性に基づく情緒が不可欠であるという考え方は自體は、一九二〇年代前半に周作人や郭沫若により展開された自己表現に關する議論を踏まえたものであつた。そこでは個性を備えた作者、その作者が作り出す作品、その作品を鑑賞し批評する讀者という枠組みが共通の前提とされたうえで、作品と夢という比喩が一貫して用いられていた。但し周作人・郭沫若の議論においては、創作する作者、批評する讀者、兩者を仲介する作品と夢がそれぞれ異なる次元の存在として捉えられていたのに対し、廢名「説夢」における「夢」の語には、作者によつて統括される作品と夢から「字と字、句と句」の間に成立する捉えられぬ夢までという意味上の揺らぎが與えられていた。

そしてこの觀點は更に『談新詩』へと引き繼がれた。『談新詩』においては、作者の個性の重視という姿勢に加えて、讀者の存在を考慮に入れた普遍性の問題が登場するが、そこで再び夢の比喩が使用される。個性と普遍性という二つの方向の間でバランスを取ることが新詩にとつて重要であることが示される際に、兩者の單なる折衷ではなく、作品と夢が作者と讀者の間で宙吊りにされた状態があるべき新詩のモデルの一つとして提示されるのである。このことは廢名の詩論が周作人・郭沫若以來の自己表現に關する議論の延長線上にありながらも、更にそれをテクストの自律性を指向する形へとずらすことによつ

廢名『談新詩』における作者の個性の重視

て成立したことを示している。

このような廢名の詩論、とりわけテクストの自律性への着目は、同時代の他の詩論と比較しても確かに特異なものであつた。詩テクストそのものの分析が議論の對象となることの少なかつた中國現代詩論において、この視點は極めて重要な意義を有していたと言える。しかし、その特異性は從來の研究が主張してきたような一九三〇年代という時代の現代性や廢名という作家全體の難解さなどに求められるべきものではなく、あくまで一九二〇年代前半に展開された議論の發展的な繼承の結果として理解されるべきである。

注

- (1) 馮文炳『談新詩』（人民文學出版社、一九八四年）、標題紙。なお本稿では煩雜さを避けるため、書名は全て原題をそのまま用いる。
- (2) 注(1)前掲書、一六五―一六六頁。
- (3) 注(1)前掲書、五頁。以下、中國語文獻からの引用は全て拙譯を以て代え、必要に應じて注にて原文を示す。なお同テーゼは一九三四年に發表された「新詩問答」の段階で既に固まつていた。廢名「新詩問答」(『人間世』第一五期、一九三四年一月)。
- (4) 注(1)前掲書、五頁。
- (5) 注(1)前掲書、二五―二七頁。但し廢名は胡適の新詩觀を全面的に否定したわけではなく、格律や平仄の否定、詩題の擴大などの主張は正しかつたが、舊詩に對する認識が不十分だつたとしている。
- (6) 注(1)前掲書、五頁には「什麼叫做詩的內容、什麼叫做散文的內容、我想以後隨處發揮」との記述がある。
- (7) 孫玉石「中國傳統詩に探る現代詩の鑛脈―廢名の「新詩觀」」(佐藤普

美子譯、『野草』第五八號、一九九六年)。なお同論文は中國文藝研究會例會(一九九五年)における講演原稿の全譯であり、その原文に相當する論文は一九九七年になつて、孫玉石「對中國傳統詩現代性的呼喚——廢名關於新詩本質及其與傳統關係的思考」(『烟臺大學學報』一九九七年第二期)として發表されている。本稿では發表日時の早い前者を引用するが、重要な用語に關しては後者を参照し原語の確認を行った。

(8) 注(7)前掲書以外の重要な論考としては、孫玉石「新詩・現代與傳統的對話——兼釋二〇世紀三〇年代的「晚唐詩熱」」(『現代中國』第一輯、湖北教育出版社、二〇〇一年)がある。

(9) 以下、煩雜さを避けるため括弧を外して記す。他の語に關しても、初出時および引用であることを強調する場合のみ括弧を付す。

(10) 注(7)前掲書、一一六頁。また木山英雄は廢名のこうした態度を「徹底的な「情」第一」の姿勢であるとし、廢名は「生え抜きの「言志」派であった」としている。木山英雄「周作人——思想と文章」(東京大學文學部中國文學研究室編『近代中國の思想と文學』大安出版、一九六七年)。

(11) 注(1)前掲書、九一一頁。

(12) 注(1)前掲書、一三三頁。

(13) 松浦恆雄はこの點について、「即興的感興」および「不圖生まれた詩興」という語を用いて説明している。松浦恆雄「廢名の詩について」

(14) 例えば陳建軍「廢名小説晦澁之因探析」(『黃岡師專學報』第一七卷第二期、一九九七年)、杜秀華・許金龍「夢中的田園——論廢名、沈從文小說的人性美母題」(『瀋陽師範學院學報(社會科學版)』第二三卷第六期、一九九九年)など。

(15) 原文「創作的時候應該是“反芻”。這樣纔能成爲一個夢。是夢，所以

與當初的實生活隔了模糊的界。藝術的成功也就在這裏。」廢名「說夢」(『語絲』第一三三期、一九二七年五月)、二四三頁。

(16) 原文「竹林的故事，河上柳，去鄉，是我過去的生命性的結晶，現在我還時常回顧他一下，簡直是一個夢，我不知這夢是如何做起，我感到不可思議！這是我的傑作呵，我再不能寫這樣的傑作。」注(15)前掲書、二四一頁。

(17) 注(15)前掲書、二四一—二四二頁。

(18) 注(15)前掲書、二四五頁。

(19) 格非もこの點を「說夢」の重要な特徴の一つに數えている。格非「塞壬的歌聲」(上海文藝出版社、二〇〇一年)、三一五頁。

(20) 原文「有許多人說我的文章 *obscure*，看不出我的意思。但我自己是怎么樣的用心，要把我的心幕逐漸展出來！我甚至於疑心太 *clear* 得利害。這樣的窘況，好像有許多詩人都說過。」注(15)前掲書、二四二頁。

(21) 原文「文學不是實錄，乃是一個夢……夢並不是醒生活的複寫，然而離開了醒生活也就沒有了材料，無論所做的是反應的或是滿願的夢。〔……〕將來著者人生的經驗逐漸進展，他的藝術也自然會有變化，我們此刻當然應以著者所願意給我們看的爲滿足，不好要求他怎樣地照我們的意思改作，雖然愛看不愛看是我們的自由。」周作人「竹林的故事」序(鍾叔河編『周作人散文全集』第四卷、廣西師範大學出版社、二〇〇九年)、三〇七—三〇八頁。

(22) 廢名に對する周作人の影響については膨大な研究の蓄積がある。「說夢」と「竹林的故事」序文の關係に對する言及はないが、一九二〇年代後半における廢名の文學觀の變化に與えた周作人の影響については、冷霜「廢名新詩觀念的形成與一九三〇年代中期北平學院詩壇氛圍」(『中國現代文學研究叢刊』二〇一一年第六期)が丹念に論じている。

(23) 廢名も周作人の同文を強く意識していた。廢名「竹林的故事」序」

- (24) (王風編『廢名全集』第一卷、北京大學出版社、二〇〇九年)、一二頁。
原文「我們太要求不朽，想於社會有益，就太抹殺了自己…其實不朽決不是著作的目的，有益社會也並非著者的義務，只因他是這樣想，要這樣說，這纔是一切文藝存在的根據。我們的思想無論如何淺陋，文章如何平凡，但自己覺得要說時便可以大膽的說出來，因為文藝只是自己的表現，所以凡庸的文章正是凡庸的人的真表現，比講高雅而虛偽的話要誠實的多了。」周作人「自己的園地」舊序（鍾叔河編『周作人散文全集』第三卷、廣西師範大學出版社、二〇〇九年、一八八頁。
- (25) 周作人は同文の中で一度だけ「夢」の語を用いている。「我過去の蓄薇色の夢」という表現がそれであるが、ここでも夢が隔たりを表す語として使用されている。注(24)前掲書、一八九頁。
- (26) 「我是愛好文藝者，我想在文藝裏理解別人的心情，在文藝裏找出自己的心情，得到被理解的愉快。在這一點上，如能得到滿足，我總是感謝的。所以我享樂——我想——天才的創造，也享樂庸人的談話。」注(24)前掲書、一八八頁。
- (27) 但し周作人の議論は一方で、周作人自身の文學觀の轉換という固有の文脈に屬するものでもある。周作人の人道主義から個人主義への轉換については、小川利康『叛徒と隱士 周作人の一九二〇年代』（平凡社、二〇一九年）の第二章および第三章を参照のこと。
- (28) 文學史上では文學研究會同人として扱われる周作人であるが、當時の文學觀は創造社同人のそれかなり接近していた。注(27)前掲書、第三章を参照のこと。
- (29) 「批評沒有一定的尺度。批評家都是以自己所得的感印在一種對象中求意義。因此我們所探得的意義便容易陷入兩種錯誤…第一，不是失之過深…其次，便是失之過淺。〔……〕我只想當個飢則啼寒則號的赤子…因爲赤子的簡單的一啼一號都是他自己的心聲，不是如像留聲機一樣在替別人傳
- 高調。」郭沫若「批評與夢」（『創造季刊』第二卷第一期、一九二三年五月）、一一二頁。
- (30) 注(24)前掲書、一八七頁。
- (31) 「文藝的創作譬如在做夢。〔……〕真正的文藝是極豐富的生活由純粹的精神作用所昇華過的一個象徵世界。文藝的批評譬如在做夢的分析，〔……〕一個作家的生活，無論是生理的或精神的，以及一個作家的環境，無論是時間的或空間的，都是他的夢（作品）的材料…非有十分的研究不能做占夢的兆人。」注(29)前掲書、九頁。
- (32) 注(26)を参照のこと。
- (33) 兩者とも、文藝作品の創作と他人の作品への解釋、兩方の經驗について語っている。注(24)前掲書および注(29)前掲書を参照のこと。
- (34) 「我曾經爲了「吶喊」寫了一篇小文，現在我幾乎害怕想到這篇小文，因爲他是那樣的不確實。我曾經以爲他是怎樣的確實呵，以自己的夢去說人家的夢。」注(15)前掲書、二四二頁。
- (35) 廢名「就算是搭題」（王風編『廢名全集』第三卷、北京大學出版社、二〇〇九年、一一九五頁。
- (36) 注(15)前掲書、二四五—二四六頁。
- (37) 原文「有時古人只是無心的一筆罷，但我觸動了，或許真是所謂風聲鶴唳。這個有很大的道理存在其間。著作者當他動筆的時候，是不能料想到他將成功一個什麼。字與字，句與句，互相生長，有如夢之不可捉摸。然而一個人只能做他自己的夢，所以雖是無心，而是有因。結果，我們面着他，不免是夢夢。但依然是真實。」注(15)前掲書、二四四頁。
- (38) 史書美は「字と字、句と句は互いに生長するが、それは夢が捉えられないことに似ている」という一文に言及し、廢名の小説が難解さと曖昧さゆえに讀者の期待を裏切ることの補足としているが、前後の文脈を考慮に入れるならば、同文の「夢」が作者の「夢」と並置されていること

にも注意を向ける必要がある。史書美「廢名…傳統中的現代」(岳耀欽譯、『殷都學刊』一九九四年第四期)、七一頁。

(39) 注(1)前掲書、四〇頁。第四章は晚唐詩詞を集中的に論じているが、そこで新詩の根據として参照される溫庭筠および李商隱の「想像」、「幻想」、「夢」、「生命」もまた、いずれも作者の個性に基づくものである。

孫玉石(注(7)前掲書)は溫季における想像の問題について興の方法という觀點から分析しているが、廢名による溫季の参照はあくまで近代文學の觀點に基づくものであり、そこには中國古典には不在であつた近代的な個性の稱揚が潜んでいる。

(40) 注(1)前掲書、一四七—一四八頁。また別の箇所でも「詩人の個性」という語を用いて同詩を稱賛している。同書、一五九—一六〇頁。

(41) 注(1)前掲書、一五七頁。

(42) 原文「這首詩也是天成，詩人的感情與所接觸的東西好像恰好應該碰作一首詩，於是這一首詩的普遍性與個性具有了。若詩感與所碰的東西還應加一番製造，要有人工的增減，此事便出乎詩人郭沫若的能力之外，那麼這一首詩便多少要不完全，詩人的個性自然還是有的，詩的普遍性乃成問題了。」注(1)前掲書、一六〇頁。

(43) 注(1)前掲書、一五九頁。

(44) 原文「這首詩的情景恐怕很好，但詩却寫得不成功，因為第四句一件偶然的事情，不足以構成詩的普遍性。所以詩有時還是要“做”出來的，不只是寫出來的。」注(1)前掲書、一六一頁。なお引用文中の丸括弧は引用者による補足を示す。以下同様。

(45) 直前の箇所では「必然性」の語を用いつつ、普遍性が成立しない場合について言及している。注(1)前掲書、一六一頁。

(46) 原文「這首詩所寫的情景，讀者自然不問是描寫當時實在的情景或者不是的，即因為這首詩有詩的普遍性。這首詩也不能不說是“做”出來的。

郭沫若的《偶成》確是寫出來的了。(……)這首詩想總不能不說是做出來的，而且第四段四句做得很好，第三段牽牛織女騎牛過河却不能不說是，如今的詩人可惜還在吃奶“，遠不如古典派”此日六軍同駐馬，當時七夕笑牽牛“做得好玩了。古典派雖然在那裏“做”詩，却是很能了解詩的普遍性這個道理。」注(1)前掲書、一六二—一六三頁。引用された詩は李商隱「馬嵬二首」其二。

(47) 但し廢名の議論における讀者には常に曖昧さが付き纏っていることに注意する必要がある。『談新詩』では引用される詩の讀者として第一に廢名自身が想定されているが、一方で「讀者」の語を多用していることから明らかなように、多くの場合では廢名に限定されない讀者一般もまた同時に議論の對象として想定されている。

(48) 原文「一首新詩要同一個新皮球一樣，要處處離球心是半徑，處處都可以碰得起來。句句要同你很生，因為來自你的意外…句句要同你很熟，本來在你的意中了。若“鄉下小孩子怕寂寞”這一句我們都可以寫，無須乎下之琳。故《寂寞》這首詩不能入選。有觀念跳得利害而詩不能文從字順者不選，不普遍者不選，如《圓寶盒》、《距離的組織》、《魚化石》等篇是。下之琳跳動的詩而能文從字順，跳動的思想而詩有普遍性，真是最好的詩了。」注(1)前掲書、一六八—一六九頁。

(49) 先行研究において廢名の詩論が現代派の理論的支柱と見なされる際には、多くの場合この觀念の飛躍という點が強調されるが、本稿のこれまでの分析を踏まえれば、觀念の飛躍についても、あくまで個性の重視の延長として考えることが妥當だと言える。

(50) 原文「我所以引申者，也有我的原故，我喜歡具體的思想，不喜歡“神祕”，神祕而要是寫實，正如做夢一樣，我們做夢都是寫實，你不會做我的夢，我不會做你的夢。凡不是寫實的思想我都不喜歡了。只要你是寫實，無論怎樣神祕，我都懂得。惟其寫實，乃有神祕。否則糊塗了，是

空虛了。」注(1)前掲書、一七二頁。

(51) 廢名は温庭筠の詞についても、夢見る主體を問題としている。注(1)前掲書、三三―三四頁。

(52) 冷霜は廢名の藝術觀が大きく轉換する一九二〇年代後半において、創作は夢であるとする「説夢」の考え方が相對化され、それに代わる理想的な藝術を表す語として「畫夢」(「隨筆」一九三〇年)が登場し、その考え方が『談新詩』に引き継がれるとしている。しかしその「畫夢」もまた作者によつて統括される作品⇨夢を前提としつつ、讀者による意外性の獲得を肯定していることを考慮に入れるのであれば、「畫夢」は「説夢」の「超越」であるというよりは、寧ろ後者の延長線上にあると考えるべきである。注(22)前掲書、九一―一〇頁および廢名「隨筆」(伊藤虎丸編『駱駝草 附駱駝』、アジア出版、一九八二年)、一九三―一九六頁を参照のこと。

(53) 原文「我前說惟其寫實乃有神祕者、因爲你看見的東西我不一定看見、我看見的東西你不一定看見、寫出來每每不在意中也、故神祕得很。」注(1)前掲書、一七三頁。

(54) 廢名は第三章では「作り出す」と「書き出す」の均衡について語っていないが、「無頓着に書く」李商隱と「心を込めて書く」温庭筠という對立を提示したうえで、卞之琳はその兩方の特徴を具えていると評價している。注(1)前掲書、一六七頁。

(55) 注(1)前掲書、一七四頁。

馮至の「異郷」——散文集『山水』を中心に

一三四

はじめに

詩人馮至（一九〇五—一九九三）の創作は大きく三つの時期に分けられる。第一期は五四退潮期から一九二〇年代末までで、青年の憂鬱や閉塞感を平易な言葉で濃やかに表現した作が多い。奇抜な比喩を用いた「私の寂しさは一匹の蛇（我的寂寞是一條蛇）」（「蛇」）のような抒情詩や悲劇的題材の物語詩に特色がある。魯迅の「中國で最も傑出した抒情詩人」という評価はこの時期の馮至に與えられたものである。約十年の空白を経たのちの第二期は抗戦期から内戦へと続く一九四〇年代である。戦時の昆明で、ソネット二十七篇を収める詩集『十四行集』（一九四二初版、一九四九再版）をはじめ、散文集『山水』（一九四三初版、一九四七再版）、中篇小説『伍子胥』（一九四六）など馮至文學の精華とされる作品が次々と生まれた。創作の根底に流れるのは、生と死、人と自然、運命と決断をめぐる思索と詩想である。先行研究の多くがこの二つの時期に集中する。第三期は共和国成立後の五十年代で、以前の創作に見られた自省や沈思の傾向は影を潜め、社會主義時代の新事物を稱える單純明快な詩風に轉じた。この時期を代表する詩

集は『十年詩抄』（二九五九）である。

近年の馮至研究では、一九四〇年代の創作を中心に、考察の対象を前後の時期に廣げ、「轉折の時代」に置かれた文學者の個性にアプローチするものに特色がある。馮至に一貫する文學的精神を「絶え間ない自己否定」に見るもの（張輝二〇〇五）^③や、自省的傾向と蛻變（脱皮）する蛇のイメージに抒情の特質を探る論考（王德威二〇一七）^④は馮至研究の新しい視角を提供している。

本稿は四十年代の散文集『山水』を中心に、馮至が異郷の山水（人間を含む）に發見した境界について考察するものである。『山水』で描かれた西歐や中國の小さな町や村の自然と人間を、のちに馮至は「私の魂の中の山川（我靈魂裏的山川）」（『山水』後記）と呼ぶ。従来、『山水』は抗戦期の抒情的な紀行文とみなされ、『十四行集』や『伍子胥』と比べて必ずしも十分に検討されてこなかった^⑤。しかし、『山水』は異郷を「見る」態度において、リルケの影響がもつとも顯著で、また精確な觀察により「無名で平凡、單純で誠實な存在」の美を平淡な文字に表現した稀有な散文である。しかも馮至自身が自分の生命のように愛惜すると述べている。

佐藤普美子

刊行物『大公報・星期文藝』や『文學雜誌』を據點に、新しい文藝の方向をめぐる議論を展開している。姜濤によれば、一九四六年十月、楊振聲の論文「我々は活路を開かなければならない（我們要打開一條生路）」の呼びかけに對し、朱自清、李廣田、沈從文、廢名らが應じ、文學の「活路」について互いに意見を交わしている。それぞれのめざす詩や文學の方向には微妙な差異があり、例えば朱自清は鑑賞者の視點から、より積極的に朗誦詩や解放區の文藝に關心を示していたといふ^①。いわゆる「京派」といわれる文學者でも、それぞれの文藝觀はひとくくりにできないことがわかる。

このように四十年代後半は、『文藝講話』の解放區延安から離れた京津地區のリベラルな立場をとる文學者たちにとつても、「活路」を開くことは單に文藝上の問題にとどまらなかった。國共内戰の混沌が續く中、彼らはまだ見えぬ社會の新しい文化や文學の方向をそれぞれで、空虛な樂觀派は別として、樂觀派であれ悲觀派であれ、いずれも過渡期の不安を意識する點では同じだと述べている。さらに、岐路に立つ葛藤を文字通り「岐路」という詩（『十四行集』一九四九再版）の最終二行に「生命のあらゆる處に感じる／永遠に引き裂かれる苦痛（全生命無處不感到／永久的割裂的痛苦）」と表現している。

二 散文集『山水』の異郷

馮至の『山水』^②は一九三〇年から一九四四年の間に書かれた十三篇（初版は十篇）の回想性の散文を収めたもので、そのうちの九篇は抗戰

期、戰火を逃れて通過した中國南方の地や昆明で書かれた。主としてドイツ留學時代（一九三〇～三五）に訪れたヨーロッパの小さな町や村での出來事、抗戰後轉々とした中國南西部の地で會つた人々や目にした自然に思いを馳せている。『山水』後記（一九四六）には次のように述べる。

抗戰期の最も苦しい歲月の中で、多く頼つたのはあの質朴な原野が私に與えた無限の精神の糧であつた。社會の一般的現象が日に日に腐敗に向かつて行く時、どんな田んぼの小さな草でも、どんな山の斜面に立つ樹でも、私にたくさんの啓示を與えた。寂しさの中、語る人もいない狀況で、それらは終始、私の向上する氣持を繋ぎとめ、私の生命の中にかなる人の名言や立派な行いよりも重大な役割を果たした。……………
どんなに暗澹とした時にあつても、『山水』の中の風景と人物はいつも私の目の前で微かな光を放ち、私を成長させ、私に忍耐を教えた。……昆明の山水はついに私の理想の中の山水になつたように思う。^③

馮至が戰火を逃れ、南方の各地を轉々とする中で回想した場所は、生まれ故郷や北方の住み慣れた町ではない。ドイツ留學中訪れた西歐の小さな町や村、そして必要に迫られ通過した中國南方の地とそこで會つた名もない市井の人々である。その異郷には黙々と自分の仕事を全うする人々がいて、何百年も變わらず損なわれない自然があつた。馮至は抗戰期の艱難の中、その數年前に訪れた見知らぬ土地の人や自然、特に異質な「山水」に觸れた時の驚きを反芻している。これ

らの異郷は細部を想起することで、現在の意識の中に深く滲透し、「魂の山川」と化して、深く愛惜するものになったのである。

作品を具體的に見ていきたい。抗戦開始後、吳淞で書かれた二篇では西歐のこぢんまりとした閑静な町や村を回想する。ベルリン西郊にあるアイヒキャンプは松林を切り拓いて作られた新興の住宅地で、そこにはナチズムが臺頭する不穏な空気を逃れ、静けさと縁を求めてやって来た人々が集う。その地には境遇の異なる者が語り合い、支え合い、精神の自由を尊ぶ氣風がはぐくまれていた（「アイヒキャンプを憶う」一九三七）。またスイス南部の都市ロカルノの村は住民が暢氣で、仕事はのろいが、愛すべき率直さがあり、よそ者にも大らかである。人、動植物のすべてが調和し、人は分を守り、怠惰なところはあつても欺瞞はない（「ロカルノの村」一九三七）。

一方、戦火の中國各地にも、ふだん通り自分の仕事をし、困った人を助ける誠實な人々が暮らしている。贛江の船頭は急流の難所、暗礁の位置を知り盡くしていて、敏捷な動きで上手に舵をとり、安全に船の乗客を運んでいく（贛江にて）一九三九。平樂の仕立屋は、工賃を倍にはずむから翌朝までに袷がほしいと頼む「私」に、間に合わないかもしれないと言いながら、夜中までかかって仕立てた袷一枚を宿まで届け、規定の工賃だけを受け取り歸っていく。馮至は六年続く戦争の中で社會が變わり、人も變わる中で、變わらない事物もあることを確信したとして次のようにつづる。

今まさに敵は廣西の各地で猛威をふるい、デマは後方都市の士大夫社會の中に病原菌のように振りまかれていく。私は部屋の中にすわり、ただ胸を締めつけられるように漓江の静寂と平樂の

あの誠實で約束を守った仕立屋のことを懐かしく思う。前者は人に深く考えさせ、後者は人の目を醒まさせる。（「平樂を憶う」一九四四）。

さらに彼が思いを馳せるのは、地方の邊鄙な場所でもくもくと石窟を掘る人、人知れず燈臺を建てることに命をかけ、ひとり自然と向きあい大事業を成し遂げた者たちである（「人の大いなる歌」一九四二）。馮至は彼らの仕事に對する忠實さ、熟練、粘り強さ、正直さを自分の偏見、疑念、小賢しさと對照させることでいつそうその存在を際立たせている。特に熟練と忍耐を要する「手を使う」仕事に注がれるまなざしは、創作を含む「手仕事」の意義に思い到らせ、藝術と技術の區別が大して意味をもたないことに氣づかせる。

『山水』に特徴的なのは、こうした目立たぬ場所ですら自分の仕事を全うする人間を浮き彫りにした作品だが、一方に、人の一生をあたかも自然の一部のように冷靜な筆致でスケッチしたものもある。「一本の老木」(一九四二)は、故郷を離れ昆明の林場で數十年間働いた牛飼いの老人の話である。老牛の死には動じなかつた牛飼いの、子牛が激しい驟雨に打たれて死んでからは生老病死の順序に狂いが出たため抜け殻のようになる。故郷に連れ戻された後はまるで移植された老木のように死んでいく。「消えた山村」(一九四二)は、『十四行集』と部分的にテクストを共有する詩的な散文である。昆明の山林には漢族と回族の抗争が續いた末、七十年前に人が消えた村がある。一本の細い石の道のかすかな跡は「私」を過去へと誘い、荒々しい自然は百年前その地に生きた村人の不安に共鳴させる。

さらに毎晩荒れ狂う風はまるで一切を吹きはらうかのようだ。そんな時は荒野の直中にいるかのように、あらゆる精神上の體驗、物質的に得たものは全て意味を失う。それは海上の臺風、寒帯の雪をよぶ寒波を思わせ、自分の力ではどうしようもない。風の音がやむと野犬の遠吠えが聞こえ、その聲が遠ざかると松林が波立つ。この風の夜の遠吠えはあの時代の村落にはきつと脅威だったに違いない——とりわけ眠れない老人、眞夜中に起きてしまう子供や病氣の子を世話している寡婦にとっては。

このように、馮至の『山水』には、異郷で出會つた人々の暮らしぶりへの新鮮な驚きや發見、また徹底して人間の無力を悟らせる大自然への畏怖の念、そして自らの運命を受け入れ、たつたひとりで仕事を全うする人間への敬愛と感謝が溢れている。これらの「山水」はただ憧憬し融合する對象ではなく、むしろ自分とは異質で、自分の無力と矮小さに氣づかせてくれる存在である。すなわち馮至の「山水」とは決して詩趣や奇觀のある景物ではなく、ありのままの大自然や異郷の小さな町や村の普通の人々であり、それぞれ固有だが普遍的な存在である。

馮至が『山水』に描いた異郷は、人や自然をただ美化した境界のようにも見える。だが注意したいのは、彼が現實の異郷體驗によつて、造化の妙と調和した平凡で謙虚な存在にこそ宿る永遠の美を發見した點である。ここに見える自然や人物のほとんどが無名なのは「山水は無名であればあるほど、私たちに與える影響も大きい」(「後記」)からである。人でも自然でも目立たない無名なものこそを凝視するその姿勢は、馮至を評した「平淡な日常生活の中で詩を發見する」(朱自清

「詩と感覺」⁽²⁴⁾あるいは「平凡な事物の中に最も平凡でないものを發見する」(李廣田「沈思の詩——馮至の『十四行集』を論ず」)という言葉にも通じている。

最も平凡にして最も平凡でないものを形象化した一篇として、『山水』の中では異色な物語性の散文「セーナ河の名もなき少女」(一九三二)をあげたい。同作は十九世紀後半、パリのセーナ河で溺死した身元不明の少女のデスマスクという、西洋では普遍的な題材を用いた虚構の一篇である。青年彫刻家は少女の顔に浮かぶ天使の「永遠の微笑み」を彫ろうと試みるがごとく失敗、その狂氣にも似た執着はついに平凡で無垢な少女を追いつめ、セーナに入水させてしまう。結局永遠の微笑みは藝術家の作品の中にはなく、ひとりの生きている少女の顔に、あるいはその死(デスマスク)にしか現われない。同作がもつぱら描くのは微笑みを湛えた少女ではなく、それに執着する藝術家の苦惱と心理であり、結末に彼の後悔と自責の念がほのめかされる。同作は馮至の二十年代の悲劇的な物語詩の系譜に連なるものだが、同時に小説『伍子胥』へ繋がる芽を胚胎した作品でもある。他の散文とは一見異質だが、平凡なものにこそ潜む永遠の美があり、藝術家はそれを簡單には創出できないという氣づきと自省は『山水』に通底する認識である。なお執筆から六十年を経た一九九二年、死の前年、馮至は文革期の體驗と合わせて同作に言及している。⁽²⁵⁾

馮至は『山水』に純化された「異郷」を描く一方、四三年から四五一年にかけて『生活導報』(一九四二年一月創刊)など昆明の小型週刊誌に眼前の社會を鋭く觀察し批評する一連の雜文を書いている。その多くは日常生活の身近な事例から説き起こし、當時の社會に蔓延する無責任な風潮とその根底にある粗野な考え方を批判したもので、文中

には「眞剣でない」「不注意」「なりゆき任せ」「いい加減」という言葉を繰り返して用いている。

例えば、机や急須等の日用品が「悲しくなるほど」いかに粗雑に作られているかといった小さな事から（「不眞面目」一九四三）、出版物の内容と装丁がちぐはぐなこと、時に罪悪やペテンをも容認する政治的組織に至るまで、眞面目さをことごとく無用とする世の風潮を鋭く批判する。さらにそれらの現象が全て、關わる對象への愛の缺如、物事を曖昧にする反「科學的精神」、リルケがいうところの詩人が最も憎む「差不多」の態度から生じていると分析する。馮至はこうした現象が個々の人間の内面の在り方に起因するとし、同文の最後に「物事を放任したり、取るに足りない些細なことだと考えるのは、世界の内面的破壊への道である」というヤスパース（一八八三〜一九六九）の言を引き警鐘としている。

『山水』の異郷―魂の山川―は、このような不誠實が常態化する現實とは對照的な、平凡で素朴な美が「微かな光を放つ」今ここにはない境界である。馮至は單なる懷古からではなく、かつての發見と自省を現在の時空に、そして未來に存在させるためにこれらの「山水」を想起するのである。

三 リルケ『マルテの手記』の啓發―「見ること」

散文集『山水』と詩集『十四行集』はいわば姉妹編で、隨處に共通のモチーフが現われ、いずれにもリルケの影響がみとめられる。特に馮至の愛讀書『マルテの手記』（一九一〇）の啓發は大きい。手記の主人公が二十世紀初頭の都會パリで孤獨と不安にさいなまれながらその地に存在するあらゆる物を鋭敏な感覺で、忍耐強く觀察する態度は馮

至が最も影響を受けたリルケの「ものを見る」態度である。馮至は三十年代ほとんど創作をしていないが、ただ一篇、リルケ没後十周年を記念して書かれた文章があり、『マルテの手記』の有名な一節を彼自身の言葉で語り直している。馮至の創作精神を端的に現わす部分なので引用したい。

一般に人は詩が必要とするのは情感だという。しかしリルケによれば、情感ならば私たちはすでに持っている。私たちが必要とするのは經驗なのだ。このような經驗は、佛の弟子が萬物に化身し、衆生の苦しみを嘗めつくすのと似ている。『手記』にいう。

「私たちは多くの都市を見て、人や物を見なければならぬ。私たちは動物をよく知らなければならぬし、鳥がどのように飛翔するのかを感じなければならぬし、小さな花が朝開く時の姿態を知らなければならぬ。私たちは思い出すことができなければならぬ。異郷の道、思いがけない出會い、しだいに近づく別離。

―あのまだ明瞭でない少年時代の日々を思い出さなければならぬ。（引用省略）―しかし、もしこれらすべてを思い出せるとしても、まだ十分ではない。（引用省略）……それらが私たちの體内の血となり、私たちのまなざしや態度となり、私たち自身ともはや區別できなくなるまで待たなければならぬ。そうして初めてふとした時に一行の詩の最初の一文字がそれらの思い出の中心に形成され、たちまち外に現れる。」（リルケ―没後十周年のため）

ここで繰り返し強調される「見ること」は、外界を忍耐強く受けと

め、深く感じるという点で、受苦ともいえる受動的な姿勢である。同時に、それらを凝視しようとする点では意志的、能動的態度ともいえる。さらに重要なのは、観察し想起するだけでなく、それら受けとめたものが自分自身の一部になった時に初めて詩が生まれるとする認識である。馮至はこれこそがリルケの詩に對する見方であり、また彼の生き方だと説明する。リルケの「詩は經驗」と述べたくだけはすでに三十年代初めに梁宗岱の詩論の中でリルケの最も重要な認識として引かれている。なお、三十年代から四十年代にかけて、この認識は新詩が感傷的な抒情主義に陥ることを牽制するテーゼの役割を果たしたことが指摘されている。また、「經驗」の美學概念については五四時期から三十年代にかけて、宗白華や朱光潛によって美學的検討がなされておられ、特に文學藝術との關わりからこの語には豊かな内容が與えられていることは拙稿で指摘した³⁵。

ここで留意したいのは、「見ること」は外界だけではなく自身の内部にも向けられることである。『マルテの手記』から馮至が引用したくだりには「あはまだ明瞭でない少年時代の日々を思い出さなければならぬ」という一節がある。さらに『手記』の別の部分には「僕は少年時代を求めた。再び少年時代は歸つて來た。僕はそれが昔のままに重たく陰鬱であり、年をとることが何の變化も與えるものでないのを感じた。」³⁶とある。

四十年代半ば、馮至は自身の幼年時代を回想した短い物語「幼年の物語」³⁷を三篇書き、それらはふたたび一九四八年三月から四月にかけて『大公報・大公園地』³⁸に掲載された。編集者に宛てた短い書信形式の序文には、昆明時代に夕食後しばしば自分の娘や近所の子どもに昔話をせがまれ話して聞かせたと書かれている。また大して面白味がない

話でも子どもたちはそれを私以外の人間からは聞くことはできない、「なぜならそれらの物語は私自身のものだから」と述べ、個人の體驗の固有性を強調する。

『マルテの手記』でも主人公が断片的に想起する少年時代は「自己の内部に屬する自分自身にも異質で理解できない部分」として、自身を生き直すための重要な記憶となつてゐる。馮至の「幼年の物語」も同様に、幼い當時はその出來事の持つ意味が理解できずに、ただ強い悲しみや失望そして喜びの感覺とともに深く心に刻まれた記憶である。この體驗を彼は四十年近い時間を経て想起する。いずれもごく短い話だが「生と死」「運命」「暫時と永久」「變と不變」に關わる實存的體驗といふべきものが示唆されている。馮至の作品としてこの三篇はほとんど知られておらず、兒童向けの作とみなされるためか、管見の限り、取りあげられたこともないので簡単にあらすじを紹介する。

第一話「彩色の鳥」は、少年「私」が自分の住む北方の鳥が美しい色でないのが嫌で、捉まえた雀たち一羽一羽を染料で色とりどりに染めあげるが、翌朝、翼の一部分だけ赤く染められた雀一羽を残して全て死んでしまう話。少年は父親の言葉「色のきれいな鳥が生きるのに私たちの場所はふさわしくない」という言葉を初めて理解する。第二話「時計の中の生き物」は少年「私」が、音を出し自分で動くものは全て生き物だと思ひ込んでいたため、父の懐中時計の中には黒い小さなサソリが住んでいると信じていたという話。美しい幻想が子ども心に與える無上の喜びは、同じ時期に執筆された「公孫大娘——『杜甫傳』副産品の二」(一九四六)³⁹にも描かれている。第三話「猫目石」では指輪の猫目石と生きている猫の目の對比がモチーフになり、猫が死んだ後の臉の下はただ灰色に塗られた泥のようなものだったという

少年の發見が語られ、生物の變化する美と鑛物の不變の美、暫時と永遠の美に關わる謎が暗示されている。

以上の三篇には、一九一〇年代の中國に生きたひとりの少年が經驗した日常のある出來事を通して、初めて知らない世界の謎に觸れた驚きと喜びが語られている。實存的問いともいえるこうした體驗は心の奥深くに長くしまわれていたものである。少年馮至の物語が『マルテの手記』で語られる少年時代と大きく異なるのは、不安だけでなく「快」が語られていること、さらに幼い「私」の傍らには、彼の世界を見守る父と母がいて、その不安や失望をただ靜かに受けとめている點である。馮至はあえて父と母を物語に配することで少年の日々の追憶に調和と安定をもたらしたのかもしれない。馮至の「幼年の物語」では『マルテの手記』に見えるような徹底した孤獨や不安の表現はない。代わりに、幼年時代にはぐくまれた美しい幻想や生死に關わる原初的體驗と、天真な問いから發見の驚きに至る短いプロセスがひとときわ鮮烈なイメージ——明るい色に染められた鳥の死、時計の中で律儀に動く小さなサツリ、寶石の猫目石と生きた猫の目の對比——によって語られている。幼年時代のこれらの物語も『山水』同様に、リルケの「見ること」に啓發されて生まれた、馮至固有の時間的な「異郷」であつたと考えられる。

四 「單純な心は一切を整える」

馮至はどの時期にもまとまつた詩論は残していないが、詩のことばに對する考え方は四十年代の散文の隨處に現れている。「新たな萌芽——繆弘の遺詩を読む」(一九四五)^④は西南聯大外文系の學生だつた繆弘(一九二七〜四五)の詩をとりあげ、そこに胚胎する新しい詩の可能

性を語っている。繆弘は落下傘兵として從軍、終戦直前の七月に桂林で戦死した。死後、遺された詩のノートから師友が二十二首を選び印刷した小冊子『繆弘遺詩』が届き、馮至はその存在を知る。繆弘の詩が子どものような口ぶりで子どもだけが抱く望みを表現していることに、馮至は胸をつかれる。例えば「ぼくは昔この鴨たちが戦艦だつたらしいのにと思つた、／でも戦艦が全部鴨だつたらもつといいな」^④を引用し、どんな人の心にも響く素朴な聲だと紹介している。さらに馮至はどの詩にも豊かな枝葉の一本の樹に生長する萌芽をみとめ、その表現の特色を次のように述べている。

彫琢はなく、粉飾はなく、荒唐無稽はなく、空虚なわめきはなく、眞實味を缺いた誇張はなく、そして歪曲された古典やわざとらしい不自然な象徴もない。單純な字句の中に調和のとれた韻律が含まれている。^⑤

馮至はこう評價した上で、「單純な心は一切を最も滞りなく整える」^⑥とし、「簡單なやり方で眼前の複雑な萬象を整える」^⑦點に新しい詩の趨勢と可能性を見ている。なお『繆弘遺詩』については「従前と現在——新詩社四周年のために作る」^⑧でも言及しており、わずか十八歳で戦死した無名の學生詩人を彼は「つと忘れていなかつたことがわかる。馮至がジッドやボルテール、キルケゴールの寸言を引きながら、「象徴派」、「形容詞」、「感傷」を否定的に捉えていることも同様の觀點からうなづける(「詩について」^⑨一九四四)。また、散漫や混亂への嫌悪は、翻譯の對象について、なじみのないものが私たちの視野を廣げ、民族の情性をただすのであり、嗜好に合うロマン派文學の紹介

だけでは、散漫ゆえに造型する能力に缺ける民族的習性を助長することになると厳しく批評していることからもうかがえる（現在の文學翻譯界を論ず⁵⁴）一九四五）。

馮至が文學表現における「素朴」「單純」を愛し、「平淡」「簡素」を尊ぶのは生來の嗜好である。もともと馮至は修辭への關心が薄く、修辭よりむしろ比喩を洗練しようとする詩人である。意識的な反修辭の方法により、自分を背景に遠のかせ、感情を抑制する「觀照」という點では、周作人にも連なる美意識を持つ。深い感情と嚴肅な思想を平淡で自然な言葉で效果的に表現するためには、正確で忍耐強い觀察を必要とすることを馮至はリルケから學んでいた。

興味深いのは、馮至が詩や翻譯など文學の問題だけではなく、社會についても同様に、混亂した社會は整理されていなければならない（似た不潔さ、不正直に満ちていると不快をあらわにする點である（「似て非なる言葉」一九四三）。さらに「個人の地位を論ず」（一九四五）の中で、「混沌とした社會だけが個人の地位を許さない」、「もし混沌とした状態を少しでもはつきりさせるようとするなら、やはり個人の嚴肅な仕事と明晰な批評を尊重するほかない⁵⁵」と述べていることである。個人と集體の關係は對立ではなく共存にあるが、全てが混沌とした社會の中では個人の輪郭さえも不明瞭になるという感性的な把握は文學者獨特のものである。散漫や混沌をそのままにせず、曖昧なものに明瞭な形を探しあてようとするのはひろく藝術家に普遍的な志向である。しかしその藝術形式の探求を社會の仕組みのアナロジ⁵⁶とするのは、個人と集體、藝術と公共性の問題をあまりにもナイーブに複雑さを捨象することになる。

一方、自然から受ける啓示と人との関わりを書いた散文「二つの

句⁵⁷」（一九三五、『山水』所收）の中に、人が樹に寄りそう時、樹の精神がどのように彼の精神に傳わるかを書いたリルケの言葉が引かれ、それに對して馮至は「これは自然との融合ではなく、自然の聲息と相通じる場所に自身を配することだ⁵⁸」と解釋している。個と全體の關係についても馮至は、大きな存在の中に自分をその一部として配置することで、個を消失し「融ける」のではなく、そこに自分を位置させることだと考えたのだろうか。それは個と個が相互に關係しあう宇宙の秩序を捉える感覚に近い⁵⁹。

以下は『十四行集』（一九四九再版）のソネット第二十七首の最終三行で、ここにも散漫と混沌を整えようとする意識が見える。

どこに向かい私たちの思、想を整えよう？ 向何處安排我們的

思、想？

ただこれらの詩が風の旗のように

但願這些詩像一面風旗

捉ええぬものを少し捉えてほしい

把住一些把不住的實體。

先にも見えた「整える」（「安排」という語は四十年代馮至の意志を集約したキーワードといえる。『十四行集』の序文⁶⁰にも、ソネット體を用いたことについて「それは私が表現しようとするものを表現するのにちょうどよかつた。私の揺れる思想を制限することはなく、私の思想を受けとりびつたりと整えてくれた⁶¹」と述べている。ソネット二十七首の中では「安排」の語はこのほかに第二首でも二回現れ、「安排」と類似の意味をもつ動詞は隨處に現れる。

同ソネット前半の、形のない水を捉える瓶のイメージには藝術造型

への志向を見ることができ、後半の「風の旗」には時代の過渡期に立つことを自覚する詩人の切實な歴史「感覺」が見える。秩序だった「思想」になる前のばらばらな「思、想」を「どこに向かい」「整えるのか」という問いには、四十年代後半の過渡期におかれた文學者たちに通ずる逡巡と不安の情緒が含まれている。次の詩にもその焦燥がうかがえる。

一九四七年に書かれた詩「あのころ……」ひとりの中年が五四以降の數年を述懐する（那時……——一個中年人述說五四以降的那幾年）は單行本詩集には收められなかつた「集外雜詩」の一首である。馮至自身の言を借りれば、第二期と第三期の間にあつて、「きわめて微弱なつながらあるいは過渡的な役割を果たす」數首の一つで、平明なことばの中に複雑な心情の陰影を感じさせる。五四時期というめざす明確な目標があつた時代の青年だつた頃の意識と、今の漠然とした形にならない不安の中に置かれる自分の意識を對照させ、「あのころ追い求めたものはどこにあるのか」と問いかけている。

同詩は七十六行から成るが、前六十二行までに「あのころ（那時）」という語が十六回繰り返される。以下の最終十四行には、漠然とした不安と恐れ、そしてかすかな期待がほめかされる。

いま歩むこと二十餘年、
だが經たのは
却經過

無數の岐路と別れ。
いま歩むこと二十餘年、
目にしたのは
看見了
無數の死亡與殺戮。

馮至の「異郷」

あのころ追求めたものは
どこにあるのか？
那時追求的
在什麼地方？

いまの平原と天空は、
變わらず
依然
如今の平原和天空，
依然

五月の陽光に照らされる。
いまの平原と天空は、
變わらず
依然
新たな眺望を待つ。
等待着新的眺望。

抗日戦には勝利したが、内戦のうち續く混亂した社會の中で、文學者たちは生活の「活路」も文學の「活路」も簡單には見出せなかつた。それは五四時期の青年の理想がくつきりと明確な形を持つていたのと對照的である。「あのころ」が十六回も力強く繰り返されることで、逡巡する「いま（如今）」が對比されて浮かびあがる。形にならない理想、漠然とした不安、まとまりのない思いや考え。ただそれらをどこに向かつて「整える」のかと自問した時、馮至が望んだ方向は、『山水』の「異郷」、彼に驚きと促す、平凡な人と自然が織りなす素朴で簡素な「微かな光を放つ」境界ではなかつたか。それはつねに未來に向かつて回歸する方向として意識されたと考えられる苦痛（詩「岐路」）を抱えたまま前へ踏み出すことはできなかつただろう。

注

- (1) 魯迅「中國最爲傑出的抒情詩人」、《中國新文學大系・小説二集》、「導言」(上海良友圖書公司、一九三五年)。
- (2) 賀桂梅「馮至：個體生存和社會承擔」、《轉折的時代——40、50年代作家研究》(山東教育出版社、二〇〇三年十二月)は代表的論考である。なお、同著者の「我們準備着深深地領受：馮至《里爾克》爲十周年祭日作」(《名作欣賞》二〇一九年第四期)は短いエッセイながら、馮至四十年代作品の閱讀體驗の核心に觸れている。
- (3) 張輝「馮至 未完成的自我」(北京文津出版社、二〇〇五年一月)。
- (4) 王德威「夢與蛇：何其芳、馮至與「重生的抒情」」、《中國現代文學研究叢刊》(二〇一七年第十二期)は何其芳と馮至の各時期のテクストに繰り返し現れるモチーフを通してそれぞれの全體像に迫ろうとする。
- (5) その中で、解志熙「靈魂裏的山川——馮至對中國散文的貢獻」(《文藝研究》二〇一六年第一期)は最もまとまった論考である。
- 『山水』の諸篇を「山水詩文の傳統に反する」新しい型の現代散文だとする指摘に本稿は啓發を受けた。
- (6) 「如果有人問我，你一生中最懷念的是什麼地方？我會毫不遲疑地回答，是昆明。如果他繼續問下去，在什麼地方你的生活最苦，回想起來又最甜？在什麼地方你常常生病，病後反而覺得更健康？什麼地方書很缺乏，反而促使你讀書更認真？在什麼地方你又教書，又寫作，又忙於油鹽柴米，而不感到矛盾？我可以一連串地回答：都是在抗日戰爭時期的昆明。」「昆明往事」の初出は『新文學史料』一九八六年第一期、『馮至全集』(河北教育出版社、一九九九年十二月)第四卷、第三四一頁。
- (7) 姚丹『西南聯大 歷史情境中的文學活動』(廣西師範大學出版社、二〇〇〇年五月)は西南聯大の沿革や教學制度、中文系・外文系の課程内容、文學サークルの活動から日常生活にわたり幅広く紹介した一書。馮
- 至については「第六章 教師個體的寫作 一・馮至：學院寫作」の中で主に『十四行集』と『伍子胥』について(斷念)をキーワードとして詳細に論じている。
- (8) 陳平原「六位師長和一所大學——我所知道的西南聯大」、《中華活頁文選(教師版)》(二〇一六年第十三期)は馮友蘭の言葉「教授學生，真是打成一片。……那一段生活，是又嚴肅，又快活」(一九四八)を引き、同大についての回想に共通するのは「精神の愉悅」が「生活の艱難」に勝った點だとする。
- (9) 杜運燮・張同道編選『西南聯大現代詩鈔』、「書前」(中國文學出版社、一九九七年十月)、第一第三頁。
- (10) 江丕棟・陳瑩・聞立欣等編著『老北大宿舍紀事(一九四六—一九五二)：中老胡同三十二號』(北京大學出版社、二〇一一年七月)に收める馮姚平(馮至の長女)「中老胡同記事」には楊振聲や沈從文との家族ぐるみの交流が詳しく記されている。また馮姚平「五 動蕩年代中零散却深刻的記憶(一) 父親藏書的祕密」(第一六六頁)には、ある日馮至の書架の後ろに隠されていた香港の雜誌を見つけ、その中の趙樹理「李有才板話」を興奮して讀んだことなど興味深いエピソードがつけられている。卜之琳は「復員」後、天津に戻るが、一九四七年九月—四九年三月まで英國オックスフォード大學に留學している。
- (11) 姜濤「打開一條生路——以朱自清對一九四〇年代新文藝的接受爲線索」、《中國現代文學研究叢刊》(二〇一九年第十期)参照。同論文は朱自清の「朗誦詩」體驗など抗戰以來出現した新文藝をいかにして享受したかを跡づけている。
- (12) 「論時代意識」、初出は『中蘇日報』(一九四七年九月二十二日)『馮至全集』第五卷、第三三七頁。
- (13) 『山水』初版(重慶國民出版社、一九四三年五月)は散文十篇を收め

る。再版本（上海文化生活出版社、一九四七年五月）は新たに「山村の墓碕」、「動物園」、「憶平樂」の三篇を加えた。

- (14) 「在抗戰期中最苦悶的歲月裏，多賴那朴實的原野供給我無限的精神食糧，當社會裏一般的現象一天一天地趨向腐爛時，任何一棵田埂上的小草，任何一棵山坡上的樹木，都會給予我許多啓示，在寂寞中，在無人可與告語的境況裏，它們始終維繫住了我向上的心情，它們在我的生命裏發生了比任何人類的名言懿行都重大的作用。……《山水》中的風景和人物都在我的面前閃着微光，使我生長，使我忍耐。……昆明的山水竟好像成爲我理想中的山水了。」『山水』「後記」（上海文化生活出版社、一九四七年五月）、『馮至全集』第三卷、第七三頁—第七四頁。

- (15) 「懷愛西卡卜」『馮至全集』第三卷。

- (16) 「羅迦諾的鄉村」『馮至全集』第三卷。

- (17) 「在贛江上」『馮至全集』第三卷。

- (18) 「現在敵人正在廣西到處猖獗，謠言在後方都市的衣冠社會裏正病菌似地傳布着，我坐在屋裏，只苦苦地思念着瀟江上的寂靜和平樂的那個認真而守時刻的裁縫：前者使人深思，後者使人警省。」『憶平樂』『馮至全集』第三卷、第七〇頁。

- (19) 「人的高歌」『馮至全集』第三卷。

- (20) 「一棵老樹」『馮至全集』第三卷。

- (21) 「一個消逝了的山村」『馮至全集』第三卷。

- (22) 「更加上夜夜常起的狂風，好像要把一切都給颶走，這時有如身在荒原，所有精神方面所體驗的，物質方面所得獲的，失却了功用，使人想到海上的颶風，寒帶的雪潮，自己一點也不能作主。風聲稍息，是野狗的嗥聲，野狗聲音剛過去，松林裏又起了濤浪。這風夜中的嗥聲對於當時的那個村落，一定也是一種威脅——尤其是對於無眠的老人，夜半驚醒的兒童和撫慰病兒的寡婦。」同前、第四九頁。

- (23) 「山水越是無名，給我們的影響也越大」、『馮至全集』第三卷「後記」、第七三頁。

- (24) 朱自清「在平淡的日常生活裏發現了詩」、「詩與感覺」（一九四三）、『新詩雜誌』（作家書屋、一九四七年十二月）影印本（香港、新文學研究社、一九七五年九月）第一〇頁。

- (25) 李廣田「在那平凡的事物裏發現那最不平凡的」、「沈思的詩：論馮至的『十四行集』」、「詩的藝術」上海開明書店、一九四三年十二月影印本（香港・滙文閣書店、一九七二年六月）第七七頁。

- (26) 「賽納河畔的無名少女」、初出は『沈鐘』半月刊第十三期（一九三二年十月十五日）、『馮至全集』第三卷。

- (27) 拙稿「馮至『セーヌ河の名もなき少女』のためのノート」、『九葉讀詩會』第五號（九葉讀詩會、二〇二〇年三月）。

- (28) 拙著『彼此往來の詩學』（汲古書院、二〇一一年二月）第十三章「危機の（養分）」を求めて——四〇年代抗戰期馮至の批評と學術」第三二頁參照。雜文的分析については本稿の記述と一部重複する。

- (29) 「不認真」『馮至全集』第四卷。

- (30) ヤスパース『マックス・ウェーバー——政治的思考と研究と哲學的思想におけるドイツの本質』（一九三三）第三章「哲學者としてのマックス・ウェーバー」。馮至の引用部分の原文は邦譯（樺俊雄譯）『ヤスパース選集』第十三卷、一九六六年三月、理想社）では「……此細なことだと考えるのは」と「世界の内面的破壊……」の間に「非存在の道であり」という一文が入る。なお、ヤスパースは馮至がハイデルベルク大學に提出した博士論文（一九三五）の審査員のひとりである。

- (31) 李廣田「沈思的詩：論馮至的『十四行集』」は『十四行集』初版（桂林明日社、一九四二年五月）の刊行當時から同詩集におけるリルケの影響を本格的に取り上げた論文。近年では陳思和『中國現當代文學名篇十

五講」（北京大學出版社、二〇〇三年二月）所收の「探索世界性因素的典範之作：『十四行集』（上）（下）」（同書第八講・第九講）が精細かつ全面的に全二十七首を解讀し、リルケの影響を指摘する。馮至がリルケと出會うきっかけの留學當時の傾倒ぶりは、陸耀東「馮至與里爾克」（『外國文學研究』二〇〇三年第三期）に詳しい。

- (32) 「一般人說、詩需要的是情感，但里爾克說，情感是我們早已有了的，我們需要的是經驗……這樣的經驗，像是佛家弟子，化身萬物，嘗遍眾生的苦惱一般。……我們必須觀看許多城市，觀看人和物，我們必須認識動物，我們必須去感覺鳥是怎樣飛翔，知道小小的花朵在早晨開放時的姿態。我們必須能夠回想：異鄉的路途，不期的相遇，逐漸臨近的別離；——回想那還不清楚的童年的歲月；……可是這還不夠，如果這一切都能想得到。……等到它們成爲我們身內的血，我們的目光和姿態，無名地和我们自己再也不能區分，那才能以實現，在一個很稀有的時刻有一行詩的第一個字在它們的中心形成，脫穎而出。」（里爾克——爲十周年祭日作」一九三六年二月一〇日『新詩』第一卷第三期）『馮至全集』第四卷、第八六頁。
- (33) 梁宗岱「論詩」（一九三二）（『梁宗岱文集』第二卷、第二九頁）の中で『マルテの手記』の同じ箇所を引用するが、兩者の中國語譯には異同がある。馮至が「我們需要的是經驗」と意譯したところを梁譯は「詩……而是經驗」とする。錢綺綺譯では「它是經驗」で、現在は「詩是經驗」が譯語として定着している。
- (34) 姜濤「導言早期新詩理論批評的若干問題面向」、謝冕總主編・姜濤編『中國新詩總論』第一卷、「二八九—一九三七」寧夏人民教育出版社、二〇一九年五月、第一二頁。
- (35) 拙稿「民國時期新詩理論中的倫理性價值觀念——以「同感」與「經驗」爲主」、『駒澤大學總合教育研究部紀要』第十四號、二〇二〇年三月。
- (36) リルケ・大山正一譯『マルテの手記』（新潮文庫、一九五三年初版、二〇〇一年改版）第七八頁。
- (37) 「向兒童說我童年的故事」（一）「彩色的鳥」（二）「表裏的生物」（三）「貓兒眼」で『中國兒童』（一九四四）に掲載された。
- (38) 「彩色的鳥」は『大公報・大公園地』一九四八年三月二十八日、「表裏的生物」は『大公報・大公園地』一九四八年四月四日、「貓兒眼」は『大公報・大公園地』一九四八年四月二十七日、『馮至全集』第三卷。
- (39) 「因爲這些故事是我自己的」、『馮至全集』第三卷、第四六七頁。
- (40) 山崎泰孝「幼年時代の反復——リルケ『マルテの手記』における想起の詩學」（『オーストリア文學』三十卷、二〇一四年）第一六頁。
- (41) 「彩色的鳥兒在我們這裏不適宜生存」、「彩色的鳥」『馮至全集』第三卷、第四六九頁。
- (42) 「公孫大娘——《杜甫傳》副產品之二」初出は『大公報・星期文藝』一九四六年十一月三日、『馮至全集』第三卷。
- (43) 「新的萌芽——讀繆弘遺詩」、昆明『中央日報』一九四五年十月十日、『馮至全集』第五卷、第三二二—第三二三頁。
- (44) 「我曾經希望這些鴨子是戰艦，／但我更希望所有的戰艦都是鴨子。」同前、第三二二頁。
- (45) 「沒有彫琢，沒有粉飾，沒有怪誕，沒有空虛的喊叫，沒有稍缺真實的誇張，也沒有歪曲的古典與矯柔造作的象徵，在單純的字句裏含着協調的韻律。」同前、第三二二頁。
- (46) 「單純的心能够把一切安排得最爲停當」同前、第三二三頁。
- (47) 「以簡單的方式安排眼前複雜的萬象」同前。
- (48) 「從前和現在——爲新詩社四周年作」、初出は『北大』半月刊第四期（一九四八）『馮至全集』第四卷、第一三〇頁。
- (49) 「關於詩」、初出は昆明『生活導報』第三七期、「生活文藝」第五號、

- 『馮至全集』第五卷、第二九五頁―第二九六頁。
- (50) 初出は昆明『中央日報』星期論文（一九四四・四・三〇）『馮至全集』第五卷、第三二七頁。
- (51) 「似是而非的話」、初出は『春秋導報』一九四三年九月四日、『馮至全集』第五卷、第二七二頁。
- (52) 「只有一個混沌的社會才不允許個人的地位」「論個人的地位」、『馮至全集』第五卷、第二八八頁。
- (53) 「若想把這混沌的狀態澄清一些，也只有尊重個人的嚴肅的工作與明確的批評。」「論個人的地位」、同前、第二八九頁。
- (54) 「兩句詩」「山水」所收。
- (55) 「這不是與自然的化合，而是把自己安排在一個和自然聲息相通的處所」「兩句詩」、『馮至全集』第三卷、第二四頁。
- (56) 段美喬「工作而等待」：論四十年代馮至的思想轉折（『文學評論』二〇〇六年第一期）は、馮至が個人と集體、個人と時代の關係を考察する際、單純に二項對立させず平衡點を見出したことが、比較的スムーズに新たな集體時代を迎え入れることを可能にしたと分析する。
- (57) 「序」（一九四八年二月五日）、初出は『中國新詩』第三期一九四八年八月では『十四行集』再版序、『十四行集』再版一九四九年一月所收、『馮至全集』第一卷。
- (58) 「它們宜於表現我要表現的事物；它不會限制了我活動的思想，而是把我的思想接過來，給一個適當的安排。」同前、第二四頁。
- (59) 『大公報・星期文藝』一九四七年五月一日原載。『馮至詩文選集』人民文學出版社、一九五五年九月。『馮至全集』第二卷、第五頁―第九頁。
- (60) 「起着極其微弱的連繫或過渡的作用」、『馮至詩選』四川人民出版社、一九八〇年八月「序」第二頁。

反響する「中國青年」という聲

——張愛玲「茉莉香片」における理想の破綻——

一四八

小川主税

一、「中國青年」と「茉莉香片」

本論は、民國期の中國において、「中國青年」という概念がいかに大きな重壓であったかということ、日本占領下の上海で活躍した作家、張愛玲（一九二〇～一九九五）の「茉莉香片」〔一九四三〕を中心にして検討するものである。

物語の概要は以下の通りである。舞臺は香港。主人公の聶傳慶は日中戦争勃發後に戦火の上海を逃れて家族と共に香港へと移り住んでいた。物語は傳慶がバスに揺られている場面から始まる。傳慶は父親の聶介臣と繼母から精神的にも肉體的にも虐待を受け、彼らから男らしさを否定されていたため、いつも自己肯定に焦がれる人物だった。傳慶は彼のクラスメイトである女學生言丹朱と車中で出會う。彼女は傳慶にとつての唯一の話し相手であった。二人の通う大學で中國文學を講じている教授であり、丹朱の父親でもある言子夜の名を耳にした傳慶は、ある事實を知つてゆくこととなる。それは、傳慶の死んだ實母馮碧落は言子夜と戀人の關係にあつたものの、彼らの仲は最終的に引き裂かれてしまつたということであつた。馮碧落との結婚はかなわな

かつたものの、舊式の家庭を飛び出して幸せな家庭を築いた言子夜こそ理想とすべき男性であると考えた傳慶は、その娘の丹朱を嫉妬し憎むようになる。ある授業中、言子夜が出した問題に答えられず、口ごもつてしまつた傳慶は困惑して涙を流す羽目になつた。その様子を目にした言子夜は傳慶に對して「中國青年」たりえないと激怒し、傳慶を教室から追い出してしまふ。山道を一人寂しくさまよう傳慶は、言子夜の口から放たれた言葉が頭から離れず、何度も苦しむこととなる。その時に出會つたのが丹朱だった。丹朱は苦しむ傳慶を一心に慰めようとする。傳慶は憎しみの對象であつた丹朱の獻身的な態度に觸れるにつれ、ふと彼女に對する「愛」を意識し、彼女に「愛」を打ち明ける。しかし、彼女は彼の突然の感情を理解しがたいとして拒絶してしまふ。彼女への「愛」が受け入れられず、自己喪失に陥つた傳慶がその時にすがりついたものは、彼女への「暴力」であつた。自分の犯した罪の大きさに氣づいた傳慶は家へと逃げ歸つたが、父母からも血縁からも運命からも逃れられないと悟るのだった。

「茉莉香片」について、張愛玲の「再發見者」でもある夏志清は次のように評している。「茉莉香片」は魅力的な物語だ。作品中の人物

は作者自身のひ弱な弟を投影しているのかもしれない。テーマは若者が自分の本當の父親を探し出すというものであり、現代における多くの小説家がこうした物語に挑戦してきた。^②夏志清が「茉莉香片」を本當の父親探しの物語であると評して以来、研究の焦点は傳慶の家庭環境や親子関係、または張愛玲自身の家庭環境との比較などに當てられてきた。^③そのため、傳慶と「中國青年」の関係や、傳慶が理想とした言子夜に焦点を當てた考察はほとんど見られない。

私見を先に述べるならば、「茉莉香片」は「男性」であると認識されなかつた傳慶が「中國青年」たらんとして苦惱し、その結果として最終的に自滅していく物語である。本論ではこのような観点から「中國青年」の追求とその破綻について考察してみたい。

二、理想像としての言子夜

傳慶が男性とみなされていないことは物語の序盤から示されている。語り手は傳慶を「幾分か女性的な美しさを感じさせる」人物であると描寫し、彼のことを日頃から氣にかけている丹朱も「一人の女の子とみなしている」と言う。そしてさらに、傳慶が最も忌み嫌う自身の父親は、常に人目を氣にして行動する息子に對して、「少しも男らしさがないから人様に笑われるんだ。お前が恥ずかしく思わないから、俺はもつと恥ずかしく思うんだぞ！」^④とさらなる追い打ちをかけしていく。

さて、「男らしさ」とは社會が男性に對して要請し期待する特性を指す。その要請や期待に應えてこそ、初めて社會から「男性」とみなされるのである。ここで強調しておくべきことは、こうした「男らしさ」が社會や文化によつて異なるものであり、本質的なものではない

ということだ。中國という社會が要求した「男らしさ」について、Kan Louie は「文（知性）」と「武（勇敢さ、强健な身體）」で構築されていること、そして「文」が重視されているなかに「武」の要素が組み入れられており、この兩者を兼ね備えてこそ理想的な男性とみなされたことを指摘している。^⑤傳慶の父親は常に人目を窺う傳慶に對して「男らしさ」がないと叱責していることから、父親の要求する「男らしさ」とは、堂々とした威嚴を感じさせる性質（＝「武」と考えられるだろう）。

こうして「男らしさ」の缺如を突き付けられた傳慶は自己喪失に陥つてゆく。その時に彼がすがりついたものは、言子夜という理想的な男性像であつた。傳慶が教壇に上る言子夜を眺める場面を見てみよう。傳慶は言子夜の容姿を次のように描寫している。

言子夜が入つてきて教壇に上がつていきました。傳慶には彼がこれまで會つたことのない人物であるかのように感じられました。中國の長袍が持つ一種特殊で物寂しげな美しさを感じたのはこれが初めてでした。（中略）傳慶は思わず想像しました。もし自分が言子夜の息子だったなら、言子夜みたいになるんだろうか？ だつたら十中八九似るだろうな。だつて僕は男の子で、丹朱とは違うから。^⑥

この場面では長袍を着た言子夜に「美」を見出す傳慶の姿を確認することが出来る。中國の傳統的な知識人男性の衣裝である長袍を身にまとつた言子夜に、文人の持つ「美」を感じた傳慶は憧憬の念を抱いたと言えるだろう。また、もし自分が言子夜の息子であつたら言子夜

に似るはずだと考える理由について、傳慶はその理由を自身の性別に求めている点にも注意したい。「僕は男の子で、丹朱とは違うから」と、傳慶が「女性であること」よりも「男性であること」に大きな価値を置いていることは明らかだろう。

以上、傳慶の眼に映じた言子夜の外見の表象について見た。長袍を着こなし、文人然とした言子夜の姿から、傳慶は「文」の要素が持つ「美」を見出していたのである。しかし、言子夜に對するまなざしは外見だけに止まっているわけではない。彼は教壇に立つ言子夜を眺めながら、言子夜の内面にまで踏み込んで次のような空想にふける。

もし自分が子夜と碧落の子供であれば、現在の丹朱よりも、きつと感情を表に出さず、思慮深い人間となつただらうと傳慶は信じていました。同時に、愛情のある家庭の子供だったならば、生活がどれほど不安定であつても、やはり自信と同情心に満ち、積極性があり、向上心もあり、勇敢さも持ち合わせていたはずですよ。

丹朱の長所を彼はきつとすべて備えていたでしょうし、丹朱が持つていないものも彼は持つていたでしょう。

「愛情」、「自信」、「同情心」、「積極性」、「向上心」、「勇敢さ」——これらはいずれも傳慶が持ち得ていないものだ。一方の言子夜は、そのいずれも持ち合わせている人物である。傳慶の目には、言子夜のような人物は特別な存在として映つたことだろう。舊式家庭のしがらみによって愛する馮碧落との關係を引き裂かれたものの、その家庭からの脱出（出奔）を勝ち取り、現在は愛する妻子と幸せに暮らしている人物として。今なお舊式家庭の抑壓に苦しみ、そこからの脱出を強く

望んでいる傳慶にとつて、このような言子夜は理想的な男性と捉えられたに違いない。だからこそ傳慶は文人的な「美」を有し、「武」の性質を表す勇敢さや向上心に満ち溢れた言子夜を繰り返し観察し、理想視したのである。つまり傳慶は、言子夜のような人物になりさえすれば、「男性」としての自己が肯定され、抑壓的な家庭環境からも脱出できるのではないかと考えていたのである。

三、偽物の理想像

前節では、傳慶が理想視した言子夜像について考察した。傳慶は自身の父親、聶介臣を憎めば憎むほど、言子夜の外見そして内面に強い憧れの感情を抱いていったのだ。しかし、作品を読み進めていくと、言子夜が傳慶の理想とすべき男性ではないことが明らかになる。以下、中國文學史の授業中に的外れな回答をしてしまった傳慶が、尊敬する言子夜から冷徹な言葉を浴びせられた場面を見てみよう。

傳慶は彼（言子夜引用者注）の口ぶりと自分の父親の口ぶりがまるで同じだったので、こらえきれずに涙を流しました。彼は手で隠すように泣きましたが、言子夜はそれを見ていました。子は生まれてこの方、人が涙するのを最も嫌い、女性が泣くのでさえも弱者の脅迫的な行爲だと思っていました。涙をこぼして目をこするような弱々しい男性はどうかという、恥知らずも甚だしいと思っていました。ひどく憤りを感じて、激しい口調で怒鳴り散らしました。「君は恥ずかしくないのか！中國青年がみな君のようだったら、中國はもはや亡國となつてしまふだろう。」

傳慶が涙を流したのは、言子夜が叱責するときの口ぶりど父親の叱責するときのそれとが一致していたからだ。さらに、涙を流す傳慶に對して、言子夜が「恥ずかしくないのか!」と激怒したことは、「男らしくあれ」、男らしくないことを「恥ずかしく思」えと傳慶を強く戒めた父親からの叱責を想起させる。ここから浮かび上がってくるのは、傳慶が理想視した言子夜という男性は、結局のところ父権制の權化である傳慶の父親と重なる存在であったという事實である。李焯雄は、「好父親 (Good father)」であるとみなした言子夜が「壞父親 (Bad father)」である聶介臣と同等の存在であるということが明らかになったことで、傳慶の理想は崩壊したのだと指摘している。確かに、傳慶の父親や言子夜とともに「抑壓者」として傳慶の眼前に存在していると解釋できるだろう。しかし、見落としてはならないのは、果たして傳慶自身は言子夜と父親を同等の存在とみなしていたのかという問題である。

言子夜から教室を追い出されてしまった傳慶は、家にも歸らず山道を一人さまよい歩くこととなる。言子夜の叱責は傳慶の腦裏で繰返されている。

父には豚、犬、あるいはもつとひどく罵られても構いません。彼は心の底から父を輕蔑しているからです。しかし言子夜の軽い一言は彼の心を刺し、死ぬまで忘れられないのです。

傳慶が父親には輕蔑の目を向けているのに對し、言子夜には以前と變わらない憧憬のまなざしを送っていることは一目瞭然だろう。傳慶の腦裏に忌み嫌う父親の叱責は響かないものの、理想とする言子夜の

發言は「死ぬまで忘れられない」というほどに深く刻み込まれている。先述したように、傳慶の憧憬する男性、言子夜は傳慶の父親と重なる存在であった。ところがこの場面では、その事實に氣付かずなおも言子夜を理想視する傳慶の姿が描かれているのだ。言子夜が理想の慈父(「好父親」)たりえなかつたという點において、夏志清の言う傳慶の「本當の父親探し」は始めから失敗を餘儀なくされていたことがこの時點で明かされるのである。そして、言子夜という偽物の理想像が傳慶に突き付けたものは、「中國青年」という概念であった。

では、その「中國青年」とはいったいどのような概念だったのだろうか。まずは民國期において、「青年」とはいかなる存在だったのかというところから考えてみたい。

四、中國における「青年」像の構築

中國において「若さ」に價値が見出されたのは清末の梁啓超(一八七三〜一九二九)の改革以降である。梁啓超は散文「少年中國說」(一九〇〇)において、「若さ」を「國家の復興」と結び付け、「少年」に「老大帝國」復活の夢を託した。さらに民國期において、「少年」像は「青年」という名で新社會の主役として現れる。その契機となったのは魯迅(一八八一〜一九三六)や陳獨秀(一八七九〜一九四二)らを中心とする新文化運動である。なかでも陳獨秀が一九一五年に刊行した『新青年』(『青年雜誌』から改名)は「文」の根幹である儒教道德に對して激しい批判を展開し、「青年」に新たな人間關係に基づく社會構築を促す一方、「青年」の身體鍛鍊(「武」)を通じて國家そのものの復興を提唱し、鍛えられた逞しい身體を男性性に不可欠な要素として掲げたのである。その結果、文武の關係は「文」よりも「武」が

優越するようになったと高嶋航は指摘している¹⁴⁾。こうした文武の再構築を唱えた『新青年』は、社會の抑壓の下にあった「青年」に大きな影響を与え、一九一九年に始まる五四運動へと彼らを導いていく。五四運動はヴェルサイユ條約批准に反対する抗日愛國運動であったが、その主導者は北京大學の學生を中心とする「青年」たちだったので。こうして儒教道德の舊弊を打破し、強健な身體をもつて國家再興に携わる役割が改めて「青年」に付與され、主體的で向上心に満ち溢れた「中國青年」という概念が新たな男性の理想像として形成されていったのである。

また、「文」の轉換による新たな人間關係として、男女の自由意思に基づく戀愛（自由戀愛）が生まれてきたことも指摘しておきたい。五四以降、自由戀愛は青年たちの一番の關心事であり、多くの青年が自らその實踐を試みている¹⁵⁾。近代的な愛の實踐は近代以前の中國を生きる者たちには決して經驗しえないものだった。民國期以前の婚姻は親（家）が決定するものであり、結婚する當人たちには婚姻の決定權はなかつたからだ。こうして、自由戀愛を追い求めた「青年」は父權制の支配から離れ、新思想のもとでの自由を願ったのである。

五四以降の創作においても、「青年」が「自由戀愛」を経験する作品を数多く見出すことができる。その中でも巴金（一九〇四〜二〇〇五）の長編小説である『家』（一九三三）¹⁶⁾はその代表と言えるだろう。王瑤は『中國新文學史稿』上巻において、「二〇歳前後の青年學生たちのほとんどが（主人公の引用者注）高覺慧を見習いたいと考えていた」と指摘している¹⁸⁾。では、「高覺慧のような青年」とはいつたどのような青年だったのだろうか。以下、王瑤の指摘をもとに、巴金の『家』が理想とされた「青年」の實像をどのように描いたのかについて

を確認してみたい。

巴金の『家』という作品は、大家族のもとで生まれ育ち、祖父や兩親世代が良しとしていた封建的制度から脱しようとする主人公高覺慧を中心とした物語である。物語の各所において、「青年」という言説が覺慧の自己決定に大きな役割を果たしている。『新青年』から新思想を學び、自分が「青年」であると刷り込まれた覺慧は、様々な困難に巻き込まれながらも上海へと一人旅立つていくのだ。覺慧は高家の召使である鳴鳳と密かに愛をはぐくんできたのだが、高家の家長から望まない結婚を強いられた鳴鳳は自殺をしようとする。愛する彼女の自死により絶望の淵に追いやられた覺慧を救い上げたのは、次兄の覺民から語り聞かされたツルゲーネフ『その前夜』（一八六〇）の一節だった。

僕は青年だ、畸人でもないし、愚人でもない。自分で幸福をつかみ取るべきだ。¹⁹⁾

濱田麻矢はこの一節について「儒教倫理に基づき、長幼の序に従い、長きにわたつて人生の選擇を家長に委ねてきた青年たちが、生き方を自分で決める權利を宣言する革命的な言葉だった」と述べている。「生き方を自分で決める」こと、すなわち「自己決定」は五四新思想の洗禮を受けた青年たちに因習へと立ち向う原動力を與えたのである。そして、覺慧はこの言葉を噛みしめることで愛する女性の死から立ち直り、封建的社會と戦い續けることを決意していくのである。

以上から、中國において理想とされた「青年」像とは、出奔や自由戀愛などを通して封建的制度に反發しながら國家や社會を變革しよう

とする、主體的で向上心に満ち溢れた男性たちと考えられる。言子夜
の言う「中國青年」とは、まさに覺慧のような男性像であつたに違
ない。

さて、このような「中國青年」像が廣く社會に受け入れられていた
ことを前提としながら、次に張愛玲が「中國青年」をどのように受け
止めていたのかを検討していきたい。五四運動を経験した青年たちの
娘世代と言える張愛玲にとって、果たして「中國青年」とは理想的な
存在たりえたのだろうか。

五・出奔する「中國青年」

張愛玲の創作期はいわゆる五四退潮期からさらに約十年の時を経た
時代に當たる。ただ彼女は革命文學や抗日文學などといった、その當
時の文學の主流に對して一貫して距離を取り續けていた。例えば、張
愛玲は創作の題材について、「一般に言うところの『時代の記念碑』
のような作品は、私には書けないし、書いてみようとも思わない。
〔中略〕極論を言えば、私はただちよつとした男女間の些細な出來事
を書くだけなので、私の作品には戦争もなければ、革命もない。」と
自身の散文の中で述べている。彼女の關心は「戦争」や「國家」など
ではなく、むしろ五四期に繰り返し描かれた「戀愛」や「結婚」とい
うテーマにあつたのだ。

では、張愛玲は五四新思想の象徴であつた「中國青年」をどのよう
に捉えていたのだろうか。彼女は散文「走！走到樓上去」(一九四四)
の中で次のように示している。

私は劇の脚本を一本書いた。その脚本には、子連れで親戚のも

とに身を寄せに行くものの、親戚と激しい言い争いをしてしまう
人物がいる。彼は憤然としてとび上がり、次のように言った。「も
う懲り懲りだ！行こう、もう行こう！」妻は頼み込むように言っ
た。「行くつてどこへ？」彼は妻と子を一所に呼び寄せてこう言
つた。「行こう、二階に行こう！」——ただご飯の時間になつて、
一聲呼びかければ、彼らはきつとすぐに戻つてくるはずなのだが。
中國人は『ノラ』の劇から「家を出る(出奔する)〔引用者注〕」
ことを學んだ。この垢ぬけているが荒涼とした身振りは一般の中
國青年に極めて深い印象を與えたことに疑いはない。(傍線は引用
者による)

自身の脚本について語つたこの散文は「中國青年」に對する張愛玲
の認識を示してくれるものであると言えるだろう。まず、『ノラ』と
はもちろんイブセンの『人形の家』(一八七九)の女性主人公ノラを描
いた戯曲であるが、自らの意思で家庭から出奔したノラは、民國期中
國における女性解放の象徴であつたことを確認しておきたい。『新青
年』に掲載されたこの戯曲は、「イブセンの言う『人形の家』を中國
の封建的家庭と見立てることによつて、ノラの家出を封建家庭に對す
る革命とし、新しい家庭——戀愛の基礎の上に出來た家庭——の建設
の正當性を主張」し、封建的家庭と對峙することとなる「中國青年」
に大きな影響を與えたのである。しかし、張愛玲の出奔に關する態度
は決して肯定的なものではなかつた。邵迎建は先に擧げた引用部分に
ついて、「垢ぬけているが荒涼とした」出奔に對する皮肉であるにち
がいない²⁰と斷じている。「中國青年」が理想とした「出奔」が「垢
ぬけている」にもかかわらず、「荒涼」とした「身振り」であるとい

う彼女の出奔に對する懷疑的な態度は、魯迅が北京女子高等師範學校の女學生に向けた「ノラは家を出てからどうなったか」(一九二四)²⁵という講演を思い起こさせる。

ノラは目覺めてしまったのですから、夢の世界に戻ることはとてもむずかしい、だから出て行くほかないでしょう。しかし出てしまえば、やはり、歸するところ、身を墮すか、戻つて来るかです。そんなことはないというなら、お訊きしましょう。彼女は目覺めた心のほかに何をもつて行きましたか？もし諸君と同じような臍脂色の毛の襟巻一枚だけであつたとしたら、たとえそれが二尺や三尺の幅があつても、まったく役にはたちません。彼女はもつと豊かでなければいけない、手提げの中に蓄えがなければならぬ、ずばり言つて金が要るのです。(中略)

だからノラの身になれば、金、——上品に申せば、經濟ですね、これがいちばん大切なのであります。(中略)今の社會では經濟權がもつとも大切なものに使われます。第一に、家で、まず男女均等の配分を手に入れねばならない、第二に、社會で、男女平等の力を手に入れねばならない。²⁷

經濟力を持たない女性が封建的な家庭を出奔したとしても、彼女を待ち受けるものは墮落か出戻りしかなく、眞の意味での女性解放は實現されない。だからこそ、眞の女性解放を實現するためには、何よりもまず經濟權が必要であると魯迅は述べるのである。この講演において魯迅の發するメッセージはきわめて現實的な内容だつたと言える。

張愛玲も「出奔」に對して現實的な態度を示した點では魯迅の主張

と一致している。²⁸張愛玲はたとえ「中國青年」が出奔したとしても、その出奔はただ單に二階へ上がるようなものであり、「ご飯の時間になつて、一聲呼びかければ、彼らはきつとすぐに戻つてくる」というように、挫折が容易に想像されるものにすぎなかつたと主張しているのである。これは「出奔」が現實と乖離した「身振り」という繪空事にすぎないことを示していただけでなく、理想に燃える「中國青年」に對する張愛玲の「皮肉」であつたとも言えるだろう。

さらに先ほど引用した邵迎建論文は、張愛玲の「出奔」に對する「皮肉」が示された文章として散文「銀宮就學記」(一九四四)²⁹を擧げている。この散文は二つの映畫、すなわち『新生』と『漁家女』についての彼女の所感を述べたものだ。張愛玲は映畫『新生』の目的が「教育精神を發揚し、間違つた道にいる青年を指導すること」³¹にあつたことを指摘し、映畫『新生』の男性主人公である杜大心の境遇を紹介している。杜大心は農村を出て都市へと勉強をするためにやつてきた青年で、兩親から借りた大金を湯水のように使うような放蕩息子であつたが、ある女性との失戀をきっかけに改心する。その女性は教鞭をとるために内地へと向かう一方で、杜大心は邊境の開墾を決心するというのがこの映畫のストーリーだ。張愛玲は杜大心のこの決心に對して次のように評している。

彼女の影響を受けて、男性主人公は邊境開發の旅行團に加わり、開墾へと旅立つた。彼は行動するにも先回りをして考えたりはせず、一時の衝動や詩趣的憧憬に驅られて行動するだけだつたので、それはほとんど逃避主義だつたと言える。しかし、もし彼がこの地で罪を犯した場合、どうしてこの地で自身の罪を償えないこと

があるだろうか。我々の身の回りの環境で、屈強な肉體を持ち、相當の知識をも兼ね備えた若者にまさかできることはないのだろうか。何が何でも彼を「はるか遠くへ、はるか遠くへ」行かせるべきだなどというのは、どうも非現實的な忠告である。

杜大心は女性との失戀の經驗を経て「眞面目」になろうと改心し、邊境へと旅立つていくのだが、張愛玲は杜大心のこの行動を一時の衝動に突き動かされた「逃避」にすぎないと喝破する。さらに張愛玲はこの衝動的な「逃避」そのものにも疑いのまなざしを向けていく。杜大心のような「屈強な肉體を持ち、相當の知識をも兼ね備えた」若者がなぜ邊境へと出奔する必要があるのか。ここで言う「若者」とは、前節で見た「中國青年」を指しているに違いない。「中國青年」の追い求める「出奔」が非現實的であったという主張は先の散文「走！走到樓上去」と一致していると言えるだろう。張愛玲は遠方へと旅立つ杜大心のこの行動を非現實的であり、無目的な出奔であると揶揄しているのである。

あるいはこのように張愛玲が「出奔」に嘲笑的な態度を取っているのは、自身が「出奔」を經驗していることと無縁ではないのかもしれない。張愛玲は散文「私語」において、自身の「出奔」とその後を描いているのだが、彼女は覺慧のように自由や幸福を勝ち取ることができなかつたようだ。張愛玲が五四新文學の描く「戀愛」や「結婚」という題材に愛着を示していたことは先述した通りだが、五四新文學の主役であった「中國青年」には嘲笑的なまなざしを向けていたのである。

六、「中國青年」たれという重壓

前節では張愛玲が「中國青年」をいかなる存在として認識していたのかを検討してきた。張愛玲にとって、「中國青年」とは非現實的な理想に燃えている存在だったのである。このような認識をおさえた上で、「中國青年」が描かれた作品として「茉莉香片」を讀んでみたい。「茉莉香片」の物語において「中國青年」という語が用いられるのはわずか数回であるが、理想とした言子夜の發した「君は恥ずかしくないのか！中國青年がみな君のようだったら、中國はもはや亡國となつてしまふだろう。」というこの言葉は「錐のように傳慶の心の中に突き刺さり」、傳慶を自暴自棄に陥らせるほどの衝撃を持つていたのである。では、理想像としての「中國青年」を傳慶はどのようなのだと解釋したのだろうか。

誰だ？聶傳慶か？「中國青年がみなあいつのようだったら、中國はもはや亡國となつてしまふだろう」というやつか？それはつまりあいつのことか？自分さえもそうなのか分かりませんでした。

まず言子夜は「涙を流す」傳慶を「弱々しい」男性であるとして叱責していることを再確認しておきたい。その上で言子夜は「中國青年」が弱々しい男性であるならば、「中國は亡國となつてしまふ」というメッセージを傳慶に突き付けているのである。傳慶が「男性」という性別を否定され續けた結果、「男性であること」を渴望していたのは先に見た通りだ。

また、このメッセージが「茉莉香片」の舞臺、日中戰爭勃發後の植

民地都市香港で發せられていることも見逃してはならないだろう。一九三七年に始まる日本の全面侵略は中國という國家、そして民族に存亡の危機をもたらすこととなった。「中國は亡國となつてしまふ」という言子夜の發言は、「亡國中國」へと向かいつつある時局に對する香港民衆の不安や危機感を代辯したものとと言えるだろう。もちろんこうした不安や危機感は、戦火に見舞われた上海を逃れて香港へとやってきた傳慶にも共有されたに違いない。「男性であること」を渴望していたこと、そして今述べたような社會情勢から、傳慶は國家や民族の危機に立ち向かうような、涙を流さず、力強く堂々とした「男らしさ」を「中國青年」という概念に見出したと言えるのではないか。だからこそ、理想的だと信じた言子夜が提示する「中國青年」という言葉は、傳慶の耳元に取り憑いて「中國青年」にならなければならぬと彼を苦しめ続けているのである。

このように「中國青年」であらねばならないという重壓がなおものしかかる中で、傳慶は何に據り所を求めたのだろうか。ここで、傳慶が衝動的な「愛」という感情を求めたことに着目してみたい。ただ、その「愛」とは、本論四節で述べた「中國青年」が理想としたものとは異なる感情だった。突如現れた「愛」はどのような意味を持つのだろうか。

七、急浮上する「愛」

傳慶は教室から追い出された後、山道をさまよい歩くうちに丹朱と出會つた。自分を一心に慰めてくれる丹朱に對し、傳慶はこれまでの彼女への憎しみの感情を一轉させて、「もしかして丹朱は僕を愛しているんじゃないか？」という情熱的な感情を抱く。この唐突な「愛」

の感情はどのような意味をもつのだろうか。

傳慶はゆつくりと彼女の傍へと歩み寄りました。丹朱が僕を愛してるなんてあるものか。でも僕を愛することはできないのだろうか？ 彼女は確かに何度も僕に近づこうとした。(中略) 彼は先ほどの彼女の行動(傳慶を一心に慰める行動)を思い起こしました。一人の女の子にとって、それ(傳慶を一心に慰める行動)引用者注)は明らかかなふるまいでしょう。(中略)

彼には復讐はいりません。ただ愛がほしいのです。わずかな愛——特に言家の人間の愛が。言家と彼には血縁關係がない以上、婚姻關係でもいい。とにかく彼は言家とちよつとした結びつきがほしいのです。¹⁰⁾

「中國青年」にならなければならないという重壓に苦しみ続けた傳慶が場当たり的にすがりついたものは「愛」という感情だった。それほどまでに「愛」の發見は突發的なものとして描かれているのだ。しかし「愛」の發見と同時に、傳慶の「愛」に對する認識は、「中國青年」の理想とした近代的な愛ではなかったことが明らかになる。「中國青年」の求めた愛とは、男女の自由意志に基づいて成立するものであつた一方、傳慶の求めた「愛」とは、因習的な家庭を「出奔」して理想とした言子夜との家族關係を結ぶためだけに見出された、きわめて獨善的なものであつたのだ。さらに言えば、この獨善的な「愛」は自身の目的の達成のためだけに女性を愛してみせるといふ暴力性をも有していたのである。以上を踏まえると、傳慶は「中國青年」と愛の關係性をやはり理解できていなかったということになる。傳慶の

「中國青年」に對する理解はこの時点で破綻しており、「本當の父親探し」の物語はおろか、「中國青年」を追い求める物語までも失敗を餘儀なくされてきたと言えるのではないだろうか。つまり、言家と關係を結びたいがために丹朱への「愛」にすぎりついた傳慶は、幻想としての「中國青年」像を追い求めているにすぎなかつたのである。張愛玲は晩年の作品の中で、「愛とはその値打ちのいかんを問うものではない」、「目的のある愛はみな本當の愛ではない」と愛は純粹で無目的であるべきだと繰り返し強調している。こう語る張愛玲が描いた「茉莉香片」において、傳慶が丹朱に抱いた利己的な「愛」は決して愛とは呼べない偽物に過ぎないのだ。そしてその偽物の「愛」が傳慶にもたらしたものは支配的な「暴力」であつた。

八、支配的な暴力

果たして、傳慶の求めた「愛」は「破綻」を迎える。丹朱は傳慶の突然の情熱を理解できなかつたため、彼からの愛を拒絶したので。この「愛」の破綻は、言家と關係を結ぶ可能性が傳慶から奪われたことを意味するだけではない。傳慶が幻想としての「中國青年」像を追い求めることさえも不可能にするという決定的な意味も有していたのである。「愛」の破綻を目の當たりにした時の傳慶と丹朱のやり取りを見てみよう。

「じゃあ、君は僕を愛していないんだ。ちつとも。」丹朱は言いました。「これまで考えたこともなかつたわ。」「それは君が僕を女の子だと思つているからだよ。」「いや！いや！本當に……でも……」（中略）傳慶は背を向けて、齒ぎしりして言いました。「君

反響する「中國青年」という聲

は僕を女の子だと思つてる。君は、君は、君は僕をまるで人じゃないかのように見てるんだ！」彼は自分の聲を抑えることができず、最後まで口にした時には、まるで叫び聲をあげているかのようでした。

傳慶は「愛」の追求に失敗した理由を「男性」としてみなされていないことだけに求めている。傳慶の求めた「愛」がきわめて獨善的で暴力的な感情であつたことは先に述べた。傳慶の發言からは、「男性」でありさえすれば「女性」からの愛を享受できるはずだ、というやはり獨善的で暴力的な思考が透けて見えてくるかのようだ。さらに林幸謙はこの描寫を引用した後、「愛」の破綻が傳慶の心理にもたらしたものを分析して、「女性的な性質が聶傳慶の身體には先天的に備わっているものの、彼を女装癖の危機に陥らせてはいない。それゆえ、彼は人として認識されていないという侮辱をより強く感じたのだ」と述べている。つまり、傳慶にとつて「男性」とみなされないことは何よりの「侮辱」であり、自身の主體性を蔑ろにされているに等しいのである。彼のアイデンティティは崩壊寸前にまで達していると見えるだろう。

のみならず、續く丹朱の言葉は幻想としての「中國青年」像をも見失つてしまつた傳慶に容赦なく追い打ちをかけていく。

「私に男の子として扱つてほしいなら、わかつたわ。別の視點から君を見てみるわね。でも、君も男子の心意氣を見せなくちゃだめよ。こんな風にもすれば泣いたりするのはもつてのほか、氣が沈んで病氣に——」

私たちはここでまた、「涙を流す」ことで咎められる傳慶の姿を見ることがとなった。傳慶の父親も言子夜も丹朱もみな、涙を流さない「男性」であることを傳慶に要求することで、力強く堂々とした「男らしさ」の必要性を過剰に強調していくのである。

こうして、「男性であること」を幾度も否定され続けた傳慶が最後にすがりついたものは、丹朱への「暴力」であった。彼が丹朱に「暴力」をふるう場面を見てみよう。

傳慶は身を起こして足を振り上げ、地べたの丹朱をひとしきり蹴りつけました。蹴りつける一方で、彼の口からは罵倒する言葉が流水のように溢れ出てきました。(中略)「君は僕がお人よしだと思ってるんだろ！眞夜中にひとり僕と山にいて、人がもし入れ替わったりしたら、君はそんな風に安心したりはしないだろ？君は僕がキスするはずはないし、殴るはずはないし、殺すはずはないと思ってるんだ！そうだろ？そうだろ？聶傳慶は——大丈夫！『大丈夫、傳慶は私を家に送ってくれるわ！』って僕のことを思ってるんだろ！」⁽⁴⁾

理想とする「中國青年」像を見定めそこない、「男性であること」を否定され続けた傳慶にもはや冷静な感情は残っていなかったと言えらるだろう。その時に生じたものが理性と對極の位置にある「暴力」であった。傳慶の暴力的な「愛」が破綻を迎えたとしても、その後には丹朱の前に立ち現れてくるものは、支配的な「暴力」でしかなかったのだ。邵迎建はこの支配的な「暴力」について、「愛を得られないため

の裏返しであり、實父の暴力と同一の性格を持っている⁽⁴⁾」と述べている。つまり、傳慶の父親が傳慶を父權制の支配のもとに置いたように、傳慶も丹朱を暴力でもって支配しようとしているのだ。幻想としての「中國青年」像を求めることにも失敗し、父權制の下での支配的な男性の影からも逃れることのできない傳慶の姿が「茉莉香片」では示されるのである。

九、おわりに

本論では、張愛玲の「茉莉香片」を中心に、「男性であること」を否定されてきた傳慶が「中國青年」たらんと願ったものの、その追求に失敗してゆくことの示す意味について考察してきた。民國期に理想とされた「中國青年」でありさえすれば、自己を肯定することができ、抑壓的な家庭環境から出奔することができると傳慶は考えた。しかし同時に、「中國青年」という概念は、「男性」でありたいと願う傳慶にとつて理想であるだけでなく、重壓にもなつていった。「中國青年」たらねばならないという重壓に苦しむ傳慶をも生み出していったのである。その時に傳慶の目の前に浮上したのが、唐突な「愛」という感情である。ただ、その「愛」は言家と家族關係を持つために生じた獨善的な感情であった。「中國青年」が追い求めた近代的な愛を獲得しそこねた傳慶の物語はここから綻びを見せていく。つまり、唐突な「愛」の感情とは、傳慶が幻想としての「中國青年」を追い求めていることを露わにするだけでなく、傳慶の追求が「破綻」を迎えるというところを豫示しているのである。そして、その「破綻」は丹朱が傳慶の「愛」を拒絶したことにより決定的なものとなる。幻想としての「中國青年」像を追い求める道すらも断たれてしま

った傳慶が最後に見出したものは、非理性的な「暴力」であった。さらにこの「暴力」は、傳慶が父親の支配からも封建的家庭からも「出奔」することができないということを彼に突きつけていくのである。

「中國青年」像がその新しさから民國期の多くの男性にとつて目指すべき理想像となつていたことは確かに事實である。しかし理想とされた「中國青年」という概念が「男性」でありたいと願つた者に對して強迫觀念として重くのしかかり、一人の男性の人生を大きく左右していたこともまた事實なのだ。「中國青年」たらんとした主人公が最終的には自滅してゆく姿をアイロニカルに戲畫化してみせたのが「茉莉香片」なのである。

注

(1) 『雜誌』第二一巻、第四期、一九四三年七月。本論での使用テキストは『傾城之戀』（北京出版集團公司、北京十月文藝出版社、二〇一二年六月）九一〜一一三頁。以下、本論の翻譯に關しては、特に注を附さない限り本論執筆による。

(2) 夏志清著『中國現代小説史』（夏濟安譯、浙江人民出版社、二〇一六年）四三〇頁。『茉莉香片』是一篇動人的故事，裡面的人物可能影射作者柔弱的弟弟。題材是年輕人找尋自己真正的父親，當代世界許多大小說家都會寫過這樣的故事。」

(3) 例えば宋家宏「茉莉香片」解讀」（『中國現代文學研究叢刊』第一期、一九九六年）八一〜八九頁。夏志清の論を受け、傳慶と彼の實父との關係が「逃亡——探求——失望」のプロセスを經ていると指摘したうえで、そのプロセスは張愛玲と彼女の實父との關係に基づくものであると述べている。

反響する「中國青年」という聲

(4) 同注(1)、九二頁。「很有幾分女性美」

(5) 同注(1)、九三頁。「我把你當作一個女孩子看待」

(6) 同注(1)、九七頁。「一點丈夫氣也沒有，讓人家笑你，你不難爲情，我還難爲情呢！」

(7) Kam Louie, *Theorising Chinese Masculinity: Society and Gender in China* (Cambridge: Cambridge University Press, 2002) 1-22.

(8) 同注(1)、一〇二頁。「言子夜進來了，走上了講臺。傳慶彷彿覺得以前從來沒有見過他一般。傳慶這是第一次感覺到中國長袍的一種特殊的蕭條的美。(……)傳慶不由地幻想著……如果他是言子夜的孩子，他長得像言子夜麼？十有八九是像的，因爲他是男孩子，和丹朱不同。」

(9) 同注(1)、一〇三頁。「傳慶相信，如果他是子夜和碧落的孩子，他比起現在的丹朱，一定較爲深沉，有思想。同時，一個有愛情的家庭里面的孩子，不論生活如何的不安定，仍舊是富於自信心與同情——積極，進取，勇敢。丹朱的優點他想必都有，丹朱沒有的他也有。」

(10) 同注(1)、一〇六頁。「傳慶听他這口氣與自己的父親如出一轍，忍不住哭了。他用手護著臉，然而言子夜還是看見了。子夜生平最恨人哭，連女人的哭泣他都覺得是一種弱者的要挾行爲，至於淌眼抹淚的男子，那更是無恥之尤，因此分外的怒上心來，厲聲喝道……你也不怕難爲情！中國的青年都像了你，中國早該亡了！」

(11) 李焯雄「臨水自照的水仙——從《心經》和《茉莉香片》看張愛玲小說中人物的自我疏離特質」（金宏達編『鏡像繽紛』，文化藝術出版社、二〇〇三年）二二一〜二二八頁。

(12) 同注(1)、一〇七頁。「他父親罵他爲『豬，狗』，再罵得厲害些也不打緊，因爲他根本看不起他父親。可是言子夜輕輕的一句話就使他痛心疾首，死也不能忘記。」

(13) 青年（少年）の成長と國家の復興との密接な關係性については、梅

- 家玲『從少年中國到少年臺灣：二十世紀中文小說中的青春想像與國族論述』（臺北、麥田出版、二〇一三年）五〇三頁における議論を参考にした。
- (14) 高嶋航「近代中國の男性性」（小浜正子他編『中國ジェンダー史研究入門』、京都大學學術出版會、二〇一八年）二五九～二七九頁。
- (15) 張競『近代中國と「戀愛」の發見』（岩波書店、一九九五年）二九八頁。
- (16) 一九三三年五月、上海、開明書店。本論での使用テキストは『巴金全集』（人民文學出版社、一九八九年）第一卷。
- (17) Mingwei Song, *Young China: National Rejuvenation and the Bildungsroman, 1900-1959* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2015) は、一九三〇年代から四〇年代を通じて、巴金の小説が若者の間で多大な影響力を有していたことを指摘したうえで、封建的家庭と新青年の對立を描いた作品として巴金『家』を挙げている。
- (18) 王瑤『中國新文學史稿』上卷（上海、新文藝出版社、一九五三年）二三四頁。「二十歳左右的青年學生幾乎都想學覺慧」
- (19) 同注(16)、「我是青年，我不是畸人，我不是愚人，我要給自己把幸福爭過來。」
- (20) 濱田麻矢「少女中國——20世紀中國語圈小説の少女表象」（京都大學博士學位論文、二〇一八年）六頁。
- (21) 「自己的文章」『新東方』第四期、第五期合卷、一九四四年五月。本論での使用テキストは『流言』（北京出版集團公司、北京十月文藝出版社、二〇一二年六月）九一～九七頁。引用は九三～九四頁。「一般所說『時代的紀念碑』那樣的作品，我是寫不出來的，也不打算嘗試，（……）我甚至只是寫些男女間的小事情，我的作品里没有戰爭，也沒有革命。」
- (22) 『雜誌』第一三卷、第一期、一九四四年四月。使用テキストは同注
- (21) 『流言』八八～九〇頁。
- (23) 同注(22)、八八頁。「我編了一出戲，里面有個人拖兒帶女去投親，和親戚鬧翻了，他憤然跳起來道……我受不了這個。走！我們走！」他的妻哀懇道……走到哪兒去呢？他把妻兒聚在一起，道……走！走到樓上去！——開飯的時候，一聲呼喚，他們就會下來的。中國人從《娜拉》一劇中學會了『出走』。無疑地，這瀟灑蒼涼的手勢給豫一般中國青年極深的印象。」
- (24) 同注(15)、一七五頁。
- (25) 邵迎建「出走與上樓——女性・時代・政治」（『安徽師範學院學報』、卷一、二〇一二年）二～六頁。引用は三頁。「無疑，這場面是對『瀟灑蒼涼、的出走的調侃。』
- (26) 魯迅「娜拉走後怎樣」、北京女子高等師範學校『文藝會刊』第六期、一九二四年。引用は北岡正子譯「ノラは家を出てからどうなったか——一九二三年十二月二十六日、北京女子高等師範學校文藝會における講演」（『魯迅全集』第一卷、東京、學習研究社、一九八四年）二一九～二二八頁。引用は二二二～二二三頁。
- (27) 同注(26)、二二二～二二三頁。
- (28) 藤井省三「俯く女たちの家出——張愛玲「傾城の戀」と魯迅「愛と死」およびバーナード・ショー「傷心の家」」（『東方』第四五五～四五六號、二〇一九年一～二月、二～七頁、二～九頁）は、張愛玲が魯迅文學における女性の出奔や自立に關する言説を發展的に繼承していたと指摘する。
- (29) 『太平洋周報』第九六期、一九四四年二月。本論での使用テキストは同注(21)『流言』四四～四七頁。
- (30) 同注(25)、三～四頁。
- (31) 同注(29)、四四頁。「發揚教育精神，指導青年迷津」

(32) 同注(29)、四五頁。「受了她的影響，男主角加入了一個開發邊疆的旅行團，墾荒去了。他做這件事，並沒有預先考慮過，光是由於一時的沖動，詩意的憧憬，近于逃避主義。如果他在此地犯了罪，爲什麼他不能在此地贖罪呢？在我們近周的環境里，一個身強力壯，具有相當知識的年輕人竟會無事可做麼？一定要叫他走到「遠遠的，遠遠的地方」，是很不合實際的建議。」

(33) 『天地』第十期、一九四四年七月。本論での使用テキストは同注(21)『流言』一三〇～一二五頁。

(34) 同注(1)、一〇六頁。「像錐子似的刺進傳慶心裡去」

(35) 同注(1)、一〇七頁。「是誰？是聶傳慶麼？『中國的青年都像了他，中國就要亡了』的那個人？就是他？連自己也不知道是不是。」

(36) 同注(1)、一一〇頁。「傳慶徐徐走到她身旁。丹朱在那里戀愛著他麼？不能夠罷？然而，她的確是再三地謀與他接近。(……)他再將她適才的言行回味了一番。在一個女孩子，那已經是很明顯的表示了罷？(……)他不要報復，只要一點愛——尤其是言家的人的愛。既然言家和他沒有血統關係，那麼，就是婚姻關係也行。無論如何，他要和言家有一點聯繫。」

(37) 『惘然記』序、一九八三年、皇冠出版社。本論での使用テキストは、『惘然記』(一九九七年、花城出版社)一～四頁。引用は三頁。「愛就是不問值得不值得」

(38) 『同學少年都不賤』、皇冠出版社、二〇〇四年。本論での使用テキストは、『怨女』(北京出版集團公司、北京十月文藝出版社、二〇一二年六月)三二五～三四五頁。引用は三三二頁。「有目的的愛都不是真愛」

(39) 濱田麻矢「崩れる塔、萎れる花——張愛玲後期作品における愛のかたち——」、『野草』九九號、二〇一七年、三〇～五四頁)は、張愛玲の作品が「愛の無目的性」を強調していたことを指摘している。

(40) 同注(1)、一一一頁。「那麼，你不愛我。一點也不。」丹朱道：「我

從來沒有考慮過。」傳慶道：「因爲你把我當一個女孩子。」丹朱道：「不！真的……但是……」(……)傳慶背過身去，咬牙道：「你拿我當一個女孩子。你——你——你簡直不拿我當人！」他對於他的喉嚨失去了控制力，說到末了，簡直叫喊起來。」

(41) 林幸謙「反父權體制的祭典——張愛玲小說論」(金宏達編『鏡像繽紛』、文化藝術出版社、二〇〇三年)一七〇～一八六頁。引用は一八一頁。「由於女性氣質先天地存在於聶傳慶的身上，使他沒有陷入換裝癖的危機中，因而更感到被非人化的侮辱。」

(42) 同注(1)、一一二頁。「你要我把你當做一個男子看待，也行。我答應你，我一定試著用另一副眼光來看你。可是你也得放出點男子氣概來，不作興這麼動不動就哭了，工愁善病的——」

(43) 同注(1)、一一一頁。「傳慶爬起身來，抬腿就向地下的人一陣子踢。一面踢，一面嘴里流水似地咒罵著。(……)你就看准了我是個爛好人！半夜里，單身和我在山上……換了一個人，你就不那麼放心罷？你就看准了我不会吻你，打你，殺你，是不是？是不是？聶傳慶——不要緊的！不要緊，傳慶可以送我回家去！……你就看准了我！」

(44) 邵迎建『傳奇文學と流行人生——一九四〇年代上海・張愛玲の文學』(御茶の水書房、二〇〇二年)、九〇頁。

(45) 本論でも述べたように、邵迎建は傳慶の「暴力性」が彼の父親に通じるものであったと分析しているが、この「暴力性」は傳慶の追い求めた「男らしさ」が奇形的に發現したものであったとも言えるかもしれない。

中國語「流水文」とその修辭的特徴について

橋本陽介

一、はじめに

次の文は高行健の『靈山』の冒頭部分である。

(一) 你坐的是长途公共汽车, 那破旧的车子, 城市里淘汰下来的, 在保养的极差的山区公路上, 路面到处坑坑洼洼, 从早起颠簸了十二个小时, 来到这座南方山区的小县城。(おまえが乗ったのは長距離バスだった。都會でお拂い箱になったボンコツ車が、補修の行き届いていない山道を走る。路面はデコボコだらけ。朝から十二時間揺られ續けて、ようやくこの南方の山間の縣城に着いた。)⁽¹⁾

この文について橋本陽介は「最初の文で長距離バスというイメージを提示すると、次に焦點は古い車體に移動し、そして次のまとまりではその車體の説明になる。それから焦點は道に移動し、その道の説明を次の言葉のまとまりに擔當させる。さらにつぎのまとまりでは道がでこぼこなことから連想される「揺れる」ことが述べられ、次のフレーズで到着が示される。このように「焦點あわせ」その説明／描寫／イメージ↓別のものに焦點あわせ」と續く。」と説明したほか、『靈山』の文體を高行健自身の言う「言葉の流れ」として分析している。⁽²⁾

高行健の言う「言葉の流れ」という用語は、直接的には「意識の流れ」や、バフチンの理論などの影響を受けたものと思われるが、高は同時にその文體について、中國語がもともと持っている特徴を用いたものだとも述べている。⁽³⁾ いったいそれはどのような特徴であろうか。

言語學における研究では、(一) のような文の特徴について、呂叔湘が「流水文」と呼んだ。呂の言う「流水文」とは、中國語では「一つの節に次の節が續くが、多くのところではそこで終わりにしてもいいし、續けてもいい」という特徴を持つことを言ったものである。⁽⁴⁾ ただし、形式的に嚴密な定義がなされているわけではない。多分に印象でそう呼んだものであるが、確かに中國語では「流れる水のように」に文が展開することがしばしばある。なぜ、中國語のある種の文は「流れる水のように」に感じられるのだろうか。本稿では、以來「流水文」と呼ばれたような文に現れる中國語表現が、小説文においてどのような修辭的な特徴を擔っているのか、その一端を明らかにすることを目的とする。

二、「流水文」の言語學的特徴

呂淑湘がその名稱を生んで以來、その後の言語學における先行研究では、「流水文」とは、多くの節からなる複雑な文で、その節間の結びつきが相對的に弱く、なおかつ接續詞等も使用しないような文であり、たいていは多くの主語を持つものであるとされる。⁽⁵⁾

橋本陽介は「流水文」とされたような文を考えるにあたって、Givónの言う「連續」の概念を導入すべきだとした。⁽⁶⁾ Givónは、文法的複雑さを得る手段として、「埋め込み」と「連續 serialization」の二種類があるとす。⁽⁷⁾ 中國語は連體修飾や連用修飾構造、關係節など「埋め込み」の手段を相對的に取りにくい言語であり、複文における從屬節の從屬度も相對的に低い。その代わりにいくつもの動詞句が連なる構造が多いほか、以下に示すように意味的には修飾語として埋め込まれてもよさそうな成分が比較的獨立した資格で節を作る。つまり、複雑な概念を表すのに、「連續」を好む言語であるといえる。「埋め込み」と「連續」の手段の違いを、『百年の孤獨』の同一個所の異なる翻譯で示す。

(二) 一个胖呼呼的、留着拉碴胡子、长着一双雀爪般的吉卜赛人、自称叫墨尔基阿德斯，他把那玩意儿说成是马其顿的炼金术士们创造的第八奇迹，并当众做了一次惊人的表演。

一个身形肥大的吉卜赛人，胡须蓬乱，手如雀爪，自称梅尔基亚德斯，当众进行了一场可惊可怖的展示，号称是出自马其顿诸位炼金大师之手的第八大奇迹。

(手が雀の足のようにほっそりした髭つつらの大男で、メルキアデスを名のジプシーが、その言葉信じらば、マケドニアの發明な鍊金術師の手

中國語「流水文」とその修辭的特徴について

になる世にも不思議なものを、實に荒っぽいやりくちで披露した。⁽⁸⁾

前者は「吉卜赛人」を「一个胖呼呼的、留着拉碴胡子、长着一双雀爪般的」が連體修飾している。これは「埋め込み」である。一方、後者では「一个身形肥大的吉卜赛人」とまず提示してから、「胡须蓬乱，手如雀爪」と、一部の形容を獨立させて後に連續させる形式を用いている。このように、中國語にも連體修飾や連用修飾はあるものの、そうした手段ではない方法、すなわち次々に附加していく形式で敘述することが比較的多い。⁽⁹⁾ 別の小説からももう二例挙げる。

(三) 秋风起，天气凉，一群群大雁往南飞，一会儿排成个『一』字，一会儿排成个『人』字，等等。(秋風がたち、涼しくなると、雁の群れが「一」の字になったり、「人」の字になったりして、つぎつぎに南へ飛ぶ。)

(四) 有一天她从山上下来，和我讨论她不是破鞋的问题。(ある日山から下りてきたあいつは自分ふしだらではないと議論をふっかけてきた。)

(三) では「一群群大雁往南飞」(一群の雁が南に向かって飛ぶ)と動詞句で示してから、その描寫を「一会儿排成个『一』字，一会儿排成个『人』字，等等」(「一」の字を作ったり、「人」の字を作ったり)と連續させ、一つの文にまとめられている。一方、井口晃による日本語譯ではこの部分を連用修飾語に變換して翻譯しているため、「雁の群れが「一」の字になったり、「人」の字になったりして、つぎつぎに南へ飛ぶ。」となつてゐるのがわかる。つまり「埋め込み」にしているわけである。(四) は、直譯すれば「ある日、彼女は山から下りてきて、私と自分がふしだらではないという問題について討論した」となるように、動詞句の連續として表出されている。一方、日本語譯は連體修飾語(埋め込み)に變換している。日本語は中國語に比べて埋め込み構造を取りやすい言語であるため、翻譯に際してこのような操作が行

われることは珍しくない。¹³⁾

中國語では、比較的獨立した節が連續することによって複合的に文を形成していることが多い。完全に獨立した節が連續しているわけでも、節が完全に埋め込まれてしまうのでもなく、比較的獨立しつつ、連續しているという曖昧な點が中國語のテキスト形成に重要な役割を果たしていると考えられる。句點で終わりにしても、讀點でつなげてよい場合が少なくないのも、このためである。

「流水文」と呼ばれてきたような複雑な複文の形式的な記述は、王文斌・趙朝永が示したように「SP₁+SP₂+SP₃…SP_n」とすることができ、Sは主語、Pは述語を表す。この主語(S)はない場合が多く、その場合には述語(P)のみになる。厳密に言えばこれに修飾語句などが加わるが、概略的な記述としてはこれでよいと思われる。「流水文」とは、このようなSPが比較的多く連なったものであるが、先行研究ではSPがどの程度続けばよいのか、SP間の関係がどの程度複雑であればそう呼んでよいか曖昧である。実際には、SPが二つからなる比較的單純なものから多數連なるものまであり、SP間の関係も多様である。このため文法的には「流水文」というよりは、「連續serialization」と呼んだ方が適切だろう。「流水文」とは「流れる水のように感じられる」という修辭的な印象からきた命名と考えられる。ため、修辭的な側面を捉える用語としたほうがよいと思われる。「連續」の言語學的な研究もまだ途上であり、口語でも多い(日本語等でも口語では流水文的になると思われる)が、中國語では口語だけでなく、小説文のような書き言葉でも「連續」を發展させてきた。小説文における修辭的な側面の文學的研究はほぼないと言つていい。本稿では「連續」を用いた文が長く続き、「流れる水のように」に感じられるよう

になったようなものの修辭的側面を明らかにしようとするもののである。

一般に、埋め込みを含む從屬節を取る方が修辭的に複雑だと考えられている¹⁴⁾。とすれば中國語は單純な構造なのかというと、必ずしもそうは言えない。むしろ、歐米言語等に見られるような「從屬節」(從と主の上下關係が明確)ではない形、すなわち「連續」を用いる形で修辭的な習慣も發達させてきたと考えられる。

三、流動する敘述と連結機能を持つ中間節

「埋め込み」ではなく「連續」によって複雑な觀念を表すとき、なぜ「流れる水のように」に感じられることがしばしばあるのだろうか。

(五) 因入山采药、遇一老人、碧眼童顔、手執藜杖、喚角至一洞中、以天书三卷授之曰、(それで山に入って薬を取りに行くと、一人の老人にあった、碧眼童顔で、手には藜の杖を持っている、張角を洞窟の中へと呼ぶと、天書三巻を授けて言った。)¹⁵⁾

(五)は「張角が」山に薬を取りに行つた↓(張角が)老人に會つた↓(その老人は)碧眼童顔だつた↓(その老人は)手に藜の杖を持っていた↓(その老人は)張角を洞窟の中へと呼んだ」となつていて、途中で主語が交替しているが、その主語は明示されていない。それでも中國語話者には誤解が生じる可能性はないと言つていい。第一、第二標點節は張角の行動であるが、第二標點節の目的語の位置に「老人」が来ると、次の第三標點節、第四標點節にはその「老人」の形容、状態の敘述が続いている(なお、本稿では讀點から讀點までを一つの單位として分析する。このため、便宜上その單位を「標點節」と呼ぶことにする)。さらに第五標點節ではその老人を主語とする動詞句へと展開してい

る。論理的に考えるならば、第三標点節の前に「那老人」のような主語が省略されていることになる。だが、少なくとも表層上はその主語は出てきていない。むしろ、第二標点節の末尾で「老人」が提起され、それに直接その形容が続いているように讀める。そしてそのまま「老人」を非明示的主語とする動詞句へと展開している。「連續」ではこのように、前の節の目的語に現れた名詞句の形容を續けることも可能なのである。

(五)の敘述が流れていくように感じられるのは、主語が切り替わっているためだけではない。動詞句が二つ續いたと思つたら、その形容に切り替わり、さらにまた動詞句に切り替わっているためでもある。まとめれば「(張角の)行動↓(老人の)描寫↓(老人の)行動」と敘述が轉々としていくことがわかる。とはいえ、急に切り替わるわけではなく、流れる水のようにスムーズに、氣が付くとタイプの違う敘述へ變化してしまうのである。なお、(五)は傳統的な白話小説から取つた例であり、流水文の特徴も歴史的に發展してきたものであるが、本稿では現代文學、特に八〇年以降のテクストを用例として用いることとする。

次に、「是」が使われる節を含む文の例を擧げる。

(六) 故乡八月，是多雾的季节，也许是地势低洼土壤潮湿所致吧。
(故郷の八月は霧の季節だ。たぶん地勢が低く、土壤が濕氣をおびているからだろう。)

(六)の第二標点節「是多雾的季节(霧の季節だ)」は第一標点節を主語としているが、第三標点節はそうではない。「AはBで、(Bは)C」の構造となっている。つまりCに當たる第三標点節はAに當たる第一標点節とは直接關係を結んでいない。中間に置かれているBは、

Aに對して述語になつてゐるのに對して、Cに對しては意味からすれば主語に近い役割を果たしている(形式上はCの主語は現れていない)。とすればBにあたる第二標点節は、このように統合されることによつて述語兼主語のような働きを擔つてゐるように感じられる。B自體は不變でありながら、Aとの關係におけるB、さらにBとの關係におけるCで、その役割が變化してしまふ。つまり、敘述が流れていくように感じられる要因は、Bにあるのである。このような標点節を「連結機能を持つ中間節」と呼ぶこととする。Cは、Bに付加されているのであつて、Aに付加されているのではない。

後半の節が前半の節と直接關係を持つていない例を他にもみる。

(七) 小岛上并不寂寞，有时可见树上一些铁甲子鸟，黑如焦炭，小如拇指，叫得特别干脆宏亮，有金属的共鸣。(小さな島でもさして寂しくはない。樹上の鎧鳥を目にすることもある。コークスのように眞つ黒で、親指のように小さくて、とりわけ高く澄んだ聲で鳴き、金屬的な共鳴がおこる。)

(七)では、第二標点節の目的語の位置に「鉄甲子鳥(鎧鳥)」が登場すると、續く第三標点節から五標点節まで「黑如焦炭，小如拇指，叫得特别干脆宏亮(コークスのように眞つ黒で、親指のように小さく、とりわけ高い聲で鳴き)」とその鳥に關する形容が連續している。だが最後の第六標点節「有金属的共鸣(金屬的な共鳴がおこる)」はその直前に出てくる「叫得特别干脆宏亮(とりわけ高い聲で鳴き)」についての補足である。つまりここでは、「鳥は寂しくない(A)↓鎧鳥も見られる(B)↓その色の形容(C)↓その形の形容(D)↓その鳴き聲の形容(E)↓鳴き聲の形容の説明(F)」と流れるように展開されているのである。ここでは、A↓Bと展開した上で、そのBに對してC-Eが並列的に連續している。とすると、C-EはAとは關係せず、Bに付

加されたものである。さらに、FはEに付加されたものである。まとめれば、「連続」においては、直前の節との關係だけで新たな節を追加できる。このために後半の節が前半と直接關係を持つていないことも多い。敘述が「流れる水のように」に感じられるというのは、このような特徴のためであると考えられる。

では、このような構造を取っていると、どのような修辭的な効果を持つだろうか。

四、「流水文」の修辭分析

「埋め込み」と異なり、「連続」では、連続する節が比較的獨立している。埋め込まれた節は主節に從屬するため、背景化されやすい。一方、「連続」では從屬しないので、背景化されず、觀念が並列されているように感じられる。このため、讀者としては並列された觀念から觀念へと、まさに流れる水のように、順番に認知していくことになる。

(八) 姑娘们就怔望着胡乡长, 又彼此看了看, 便重又散到那市里, 花花绿绿, 像一片开在市街上的花。(娘たちははばかんとしたまま胡郷長を見つめ、お互い顔を見合わせると、再び市内に散って行つた。色とりどりに、市の通りに咲いた花のように。)

(九) 就看见孔明耀再次从家里出来, 身后跟了无数的孔姓人, 男的女的, 少少老老, 个个脸上都没了先前和润的光。(孔明耀が次に家から出て来たとき、無数の孔姓の、男も女も、子どもも老人も、その後ろからついてきているが、それぞれの顔に、先ほどまでのつややかな光はなくなっている。)

(八)の第一標點節から第三標點節までは、「姑娘们(娘たち)」を主

語とする動詞句の連續である。そして最後の第三標點節で敘述された行爲「便重又散到那市里(再び市内に散って行つた)」に對して、その様子を第四標點節で「花花绿绿(色とりどり)」であるとし、さらにその「花花绿绿」を第五標點節で「像一片开在市街上的花。(市の通りに咲いた花のように)」とさらに廣げている。つまり「行動A↓行動B↓行動C↓行動D」の形容D↓Dに對する判斷E」と流れている。第三標點節がその流動を擔う「連結機能を持つ中間節」となっていると見えるだろう。(九)の第二標點節では、孔姓の人たちが孔明耀の後ろについてきていることが敘述されている。するとその「後ろについてきている孔姓の人たち」の詳細情報として第三標點節、第四標點節が追加される。第五標點節は第三標點節、第四標點節を意味上の大きな主語とし、その「それぞれの顔」に關する敘述が連續している。第三標點節と第四標點節が「連結機能を持つ中間節」である。

このように書くとき、單に讀點と句點の使い方の問題ではないかと思われるかもしれない。實際、「身后跟了无数的孔姓人」の後を句點にすれば、日本語でもそのまま譯せそうである。しかし、中國語の「連續」では意味的には修飾する要素を後續させられるのだから、「男的女的, 少少老老」はその前の、「身后跟了无数的孔姓人」を具體的に表したものととして讀む。「男的女的, 少少老老」は次に「个个脸上都没了先前和润的光。」が連續して初めて、その後續する節に對する意味上の主題に變化するのだ。

このような構造では、「孔姓の人たちがついてきている↓男も女も、老いも若きも↓その顔」というように、付加されている順番に從つて並列的に認知していく。その前に出てくる要素に付加されるため、敘述が少しずつ流れ、動いているように感じられるのである。

次の例の第二標點節はどうだろうか。

(十) **我用手抓住，方方的一块，被来娣的热手托着。**（手でつかんでみると、四角い物が來娣の手の中にあつた。）

この「**方方的一块（四角い物）**」は、順番に読んでいくとすると「**抓住（つかむ）**」の目的語に當たるように思われる。とするならば、「**我用手抓住了方方的一块（私は手で四角い物をつかんだ）**」のように言つてもよさそうである。しかしそうなつてはいない。(十) のようにすることによつて、「**四角い物をつかんだ**」のではなく、つかむという動作行爲を行つた結果として、**四角い物である**と人物が氣づき、そしてそれが「**來娣の手の中にある**」のだ、と讀者は順番に認知する。日本語版の「**手でつかんでみると、四角い物が來娣の手の中にあつた。**」のように、「**手でつかんでみると**」を從屬節にして、「**四角い物が**」を主語にする形にすると、原文とは受ける印象が異なつてくる。「**流れる水のように**」な印象は、翻譯が難しい。

連續構造に前置詞句が入り込んでくる場合にも、流動して感じられることがある。

(十一) 一九四三年二月，**美国《时代》周刊记者白修德、英国《泰晤士》报记者哈里逊·福尔曼去河南考察灾情，在母亲煮食自己婴儿的地方，我故乡的省政府官员，宴请两位外国友人，的菜单是：**（一九四三年二月、アメリカの週刊『タイム』の記者、セオドア・ホワイトと、イギリスの『ロンドン・タイムズ』の記者、ハリソン・フォアマンは、飢饉の状況の調査をするために河南に行つた。母親が自分の赤ん坊を煮て食べたというその場所、わが故郷の省政府の役人が二人の外國の友人をもてなしたメニューは）
(十二) **我喂十头，破老汉喂十头，在同一个饲养场上。**（同じ牛飼いで、わたしが十頭を、破じいさんが十頭を飼つた。）

中國語「流水文」とその修辭的特徴について

(十三) **鬼子和伪军刚一出院，奶奶就揭开一只瓮的木盖子，在平静如镜面的高粱烧酒里，看到一张骇人的血脸。**（鬼子が引きあげると、祖母は一つの甕の木蓋をとつた。鏡のように靜かな高粱酒に、血まみれのすさまじい顔がうつる。）

(十一) では、第三節で二人の外國人記者が河南に被災状況を調査に行つたことが語られる。すると次の節では「**在母亲煮食自己婴儿的地方（母親が自分の赤ん坊を煮て食べたというその場所）**」と、その河南から連想される前置詞句が續いている。これももちろん、「一九四三年二月，**美国《时代》周刊记者白修德、英国《泰晤士》报记者哈里逊·福尔曼去河南考察灾情。**（一九四三年二月、アメリカの週刊『タイム』の記者、セオドア・ホワイトと、イギリスの『ロンドン・タイムズ』の記者、ハリソン・フォアマンは、飢饉の状況の調査をするために河南に行つた。）」と「**在母亲煮食自己婴儿的地方，我故乡的省政府官员，宴请两位外国友人，的菜单是（母親が自分の赤ん坊を煮て食べたというその場所、わが故郷の省政府の役人が二人の外國の友人をもてなしたメニューは、）**」の二つの文に分けることが可能で、そのように分けるとするならばそれぞれはごく普通の構造となるし、そのまま日本語に翻譯することもできる。しかし「**在母亲煮食自己婴儿的地方**」というのは、明らかにその前の節で出てくる「**災害に見舞われている河南**」を言い換えたものである。前置詞句ではあるが、「**災害に見舞われている河南**」母親が自分の赤ん坊を煮て食べたというその場所」へと並列的に、流れる水のように觀念が移行する。

また、「**在母亲煮食自己婴儿的地方**」を單純にその後ろ側にかかると前置詞句であるのにもためらいがある。中國語の連續構造では(十二) のような例も出てくるからである。(十二) では、「**在同一个**

飼養場上。(同じ牛飼い場で、)が最後に来て、しかもここで文が終わりつつある。意味的に言えばこれは第一標點節と第二標點節の行われる場所を表している。場所を表している前置詞句であるならば、基本的には動詞句よりも前に来るはずだが、そうはなっていない。第一標點節で私が牛十頭の餌やりをしていること、第二標點節で破じいさんが牛十頭の餌やりをしていることを述べたうえで、付加的に「同じ牛飼い場だった」と連続させていると考えられる。こうしてみれば、前置詞句を後ろに連続させることもありうるわけで、(十一)の「在母亲煮食自己婴儿的地方」も、單純にその後ろ側に来る「我故乡的省政府官员、宴请两位外国友人的菜单是」とだけ關係を持つているだけとはいいたくない。讀者としても「去河南考察灾情」に續き、「河南」の説明が來ていると認知する。次が來ることによつてはじめてこの部分が前置詞句であるとわかるのであり、やはり「連結機能を持つ中間節」である。

(十三)もほぼ同様に「在」を使つた前置詞句が出てくる。第二標點節では、甕の木蓋を取ることが敘述されており、當然、關連のある事柄として「甕の中に何ががあるか」が期待される。そこで第三標點節で甕の中を敘述する「在平静如鏡面的高粱烧酒里(鏡のように静かな高粱酒に)」へとつながっている。構造上は、第二標點節で一回切れるようにも思えるが、最後の標點節「看到」の主語は第二標點節と同じく「奶奶」であるから、第二標點節で分割できるとは單純には言えない。中國語の意識としてはやはり、「木の蓋を取る↓その中に入っている高粱酒↓高粱酒に移る顔」へと、流れるように敘述が移行していると考えられるのである。

同じような構造を日本語からの翻譯で見してみる。日本語原文と中國

語譯の順に示す。

(十四) さつきまで乗っていた眞新しい黒のトヨタ・クラウン・ロイヤルサルーンが、ずっと向こうに見えた。午後の太陽の光を受けて、フロントガラスがミラーグラスのようにまぶしく光っていた。

刚才乘坐的那辆崭新的丰田车停在远处，在午后阳光的照耀下，挡风玻璃像镜子般反射出耀眼的光芒。

(十四)の中國語譯では、第二標點節が「連結機能を持つ中間節」になっている。第一標點節からの流れで言えば第二標點節は「丰田车(トヨタの車)」を主語とする動詞句ととれる。そのように取るならば、「トヨタの車が遠くに停まっており、午後の太陽の光のもとにあった」と解釋できる。ところが、第三標點節まで讀むと、第二標點節は前置詞句になっていると讀むことができる。しかしそれは分析的に考えた場合で、この文を線形順序に従つて讀むならば、「トヨタの車が遠くに停まっている↓午後の光の下にある↓フロントガラスが光を反射している」と流れるように、順番に認知していくはずである。

以上のように、「流水文」の修辭的な最大の特徴は、背景化されず、並列された觀念間が、スムーズに、順を追つて展開していく點であると言える。並列になるからと言って、單調になるわけではない。中國語ではこの構造を發展させてきたのである。

五、動きのある描寫

中國語の「連續」では、一つの標點節で一つの時間的展開を示したり、空間的敘述對象を一つずらしたりすることができる。この特徴によつて、流動する文が、流動する描寫を生み出すことが時としてある。まず短いものから見ると。

(十五) 舞厅酒吧已经像枯叶一样消失了, 入夜的城市冷冷清清, 店铺稀疏残缺的霓虹灯下, 有一些身份不明者蜷缩在被窝里露宿街头。(ダンスホールやバーはすでに枯れ葉のように消えていた。夜になった都會はひっそりとして、店舗はまばらで、不揃いのネオンのもと、数名の浮浪者が身を縮めて街頭で野宿していた。)

(十五) の第三標點節「店舗稀疏残缺的霓虹灯下(店舗のまばらで不揃いなネオンの下)」は、意味からいえば第四標點節「有一些身份不明者蜷缩在被窝里露宿街头。(数名の浮浪者が身を縮めて街頭で野宿していた。)」の場所を表しているから、第四標點節に從屬している。だが、第一標點節、第二標點節がこの物語現在の描寫となつてゐるため、その續きとして讀み進めてくると、この第三標點節もこの物語現在における描寫の續きのように感じられる。並列的に並んでゐるために、第三標點節は第二標點節から續くこの場面の描寫でありつつ、第四標點節の場所になるといふ、二重の役割を果たしてゐるように讀める。並列的なので、敘述に從つて一つずつ存在物を讀んでゐるようになる。より長い例を見る。

(十六) 坐在叔叔的屋顶上, 许三观举目四望, 天空是从很远处的泥土里升起来的, 天空红彤彤的越来越高, 把远处的田野也映亮了, 使庄稼变得像西红柿那样通红一片, 还有横在那里的河流和爬过去的小路, 那些树木, 那些茅屋和池塘, 那些从屋顶歪曲曲升上去的炊烟, 它们都红了。(叔父の家の屋根に上がつて、許三觀は四方を見渡した。空ははるか遠くの畑のあたりから廣がつて、どこまでも高く、眞つ赤に染まつてゐる。遠くの田畑にもその色が映り、作物はみなトマトのように赤く見えた。その近くを流れる河も、くねくねと續く細い道も、樹木、草ぶきの家、貯水池、そして屋根から立ち上る炊煙も、すべて赤く色づいてゐた。)

中國語「流水文」とその修辭的特徴について

中國語の修辭的な特徴は、日本語譯されたものと比較するとわかりやすいだろう。第三標點節から第四標點節を「空ははるか遠くの畑のあたりから廣がつて、どこまでも高く、眞つ赤に染まつてゐる。」と譯している。標準的な翻譯であるが、この日本語では「空は」を主語とし、述語として「畑のあたりから廣がつてゐる」「どこまでも高い」「眞つ赤に染まつてゐる」が付與される形であり、靜的な描寫である。ところが中國語原文はそうではない。風景描寫と時間經過がうまく絡まりあい、動きのある描寫となつてゐる。まず「泥土里升起来的」とあるので、「泥(畑)から空が登つてくる」という動態的な比喩表現である。次の「天空红彤彤的越来越高」でもその「空」が眞つ赤な状態をしながら「どんどん高くなつていく」という動態的描寫になつてゐる。もちろん、空が高くなつていくことは客觀的にはあり得ないが、地平線から立ち上つていく様を動態として描いてゐるのである。また第五標點節と第六標點節は「遠くの田畑にもその色が映り、作物はみなトマトのように赤く見えた。」と譯されているが、この日本語も靜的描寫になる。對して原文は「天空」を動作主とする動詞句文で、第五標點節では遠くの原野を赤く染めたこと、第六標點節では作物をトマトのようにしたことが語られる。つまり第三標點節から第六標點節まではひと續きの動態的な描寫であり、讀者からすると、空が高く上がつていき、赤くなり、田野を染め上げ、さらにその作物へと一つずつ標點節を追うごとにイメージを展開することになる。動詞句の連續を使うことによつて、時間的展開が感じられ、空間も動いているような印象になる。

次の第七標點節から第十標點節名詞句の連續では、赤く染め上げられる對象を表している。客觀的に言えば、第七標點節から第十標點節

までの存在物は同一平面上に存在している。だが、前半が動きのある描寫で、その流れの後にくる名詞句の連続であるため、語られる順番ごとに描寫が移っていくように感じられる。日本語譯のように、「主語+述語」の構造で文を細かく切っていくと、論理的に説明している印象になり、中國語原文のような印象は生まれない。中國語の印象をそのまま日本語で再現することは難しい。

(十七) 飯店看上去没有门，门和窗连成一片，中间只是隔了两根木条，许三观他们就是从旁边应该是窗户的地方走了进去，他们坐在了靠窗的桌子前，窗外是那条穿过城镇的小河，河面上漂过去了几片青菜叶子。(一見したところ、店には出入り口がない。實際は窓とつながっていて、

二本の棒で仕切つてあるだけなのだ。許三觀たちはわきのほうの、本來は窓である場所から入り、窓際の席にすわつた。窓の外に、町なかを流れる河が見える。水面には青菜の葉が漂っていた。)

(十七) の第三標點節までは靜的な描寫である。第一標點節の最後に「門(出入り口)」が提示され、第二標點節はそれと關連する「門和窗(出入口と窓)」の敘述、第三標點節は第二標點節で提示されたものの一部分に焦點が當てられている。この狀況設定の中に第四標點節では登場人物・許三觀が登場し、行動を行う。第五標點節も許三觀の行動である。この第四、五標點節で時間が進められると、店の中にある窓際の席に視點が移される。するとその先の敘述はその窓から見える河に移り、さらにその河の上を流れる青菜に焦點が移される。許三觀の行動以外は靜的な描寫であるが、一つの流れに組み込まれることによって、動きのある描寫のように感じられるのである。

六、日本語譯、英語譯との對照

中國語の特徴をより明らかにするために、日本語譯・英語譯との對照も簡單に行つておく。莫言の『赤い高粱』から例を見る。

(十八) 他的坟头上已经枯草瑟瑟，曾经有一个光屁股的男孩牵着一只雪白的山羊来到这里，山羊不紧不忙地啃着坟头上的草，男孩子站在墓碑上，怒气冲冲地撒上一泡尿，然后放声高唱；(枯れ草が風に震えるころ、その墓に、尻を丸出しにした一人の男の子が一頭のまっ白な山羊を引いてやつてきた。山羊はゆつくりと墓の上の草をはむ。男の子は墓碑の上に立ち、怒りにまかせて地べたに放尿してから、聲はりあげてうたった。)

(十八) では、最初の標點節で墓とその形容がされている。この第一標點節が場所として提示され、第二標點節で男の子が山羊を連れて來たことがあることが語られる。第三標點節では第二標點節で出てきた山羊が主語になつている。續く第四標點節から第六標點節までは男の子を主語とする動詞句の連続である。このようにされることで、「墓(場所の提示) ↓ その墓にやつてくる男の子と山羊(主體の提示) ↓ 山羊の動作 ↓ 墓の上にたつ男の子 ↓ その男の子の動作」という流れが一つの出來事としてまとめ上げられていることになる。山羊の動作と男の子の動作は同時的なので、嚴密に言えば先ほどの例とはやや異なつている。中國語としてはこのように、まず空間を提示し、そこに出現する二つのものを提示したら、その二つの行爲を一つずつ描き、なおかつそれを一つの「文」としてまとめることは極めて自然である。流れるような敘述に感じられるのは、各標點節が論理的關係性を結んだり、從屬的な關係になつたりするのではなく、並列的に連續しているからだと考えられる。

日本語譯では、第一標點節を「枯れ草が風に震えるころ」と時を表す從屬節にして第二標點節につなげている。また、第二標點節を譯し終えたところで一度文を切っている。第二標點節で表される「山羊を引いてやってきた」ことと、その山羊が「墓の上の草をはむこと」の間には從屬的な關係がないし、並列的な關係もないため、日本語としてはこのほうが自然であろう。

考えてみれば、中國語のようにある一定の枠内で起る動作を一つのみとまりと考えるのは必ずしも不思議なことではない。英語や日本語ではそうしたまとめ方を取るのが規範的ではないだけである。英語譯ではどのような構造になっているだろうか。

A bare-assed little boy once led a white billy goat up to the weed-covered grave, and as it grazed in unhurried contentment, the boy pissed furiously on the grave and sang out:⁽¹⁸⁾

この英語譯では、「尻を丸出しにした男の子」が一貫して動作の主體であり、その動作がいくつつか and で連結されている。このように、英語でも一つの主體の連續する動作は比較的表出しやすい。しかし、羊の動作は從屬節に變形させられ、男の子の動作に從屬する形になっている。原文とこの英語譯では、表されている内容はほぼ同じではあるが、修辭的構造が異なるため、讀んだときの感觸も異なる。中國語は「空閒提示↓そこに現れる羊と少年↓羊とその動作↓少年の動作」と、並列的に連續していくので、提示されている場所も、羊の動作も背景化されていない。敘述の順番に従って、並列的に一つずつそれを讀んでいくことになる。同じく莫言の『赤い高粱』からもう一例見

(十九) 父亲紧紧扯住余司令的衣角，双腿快速挪动。奶奶像岸愈离愈

中國語「流水文」とその修辭的特徴について

远，雾像海水愈近愈汹涌，父亲抓住余司令，就像抓住一条船舷。

余司令の服のはしをつかんで、父は驅けるように兩足を動かした。祖母の姿は岸のように遠ざかり、霧は近づきつれて海水のようになってきた。父は船べりをつかむように、余司令につかまっていた。

Gripping tightly to Commander Yu's coat, he nearly flew down the path on churning legs. Grandma receded like a distant shore as the approaching sea of mist grew more tempestuous; holding on to Commander Yu was like clinging to the railing of a boat.⁽¹⁹⁾

(十九)の最初の文「父亲紧紧扯住余司令的衣角，双腿快速挪动。」では、中國語では「父亲」を主語とする構造になっている。日本語譯では、「余司令の服のはしをつかんで」を從屬節にし、主語の「父」は「驅けるように兩足を動かした」のほうに移動させている。英語譯を見ると、從屬節―主節の構造關係がより明確な翻譯になっているのがわかる。

そして、さらなる問題は原文で言えば二文目「奶奶像岸愈离愈远，雾像海水愈近愈汹涌，父亲抓住余司令，就像抓住一条船舷」である。日本語譯は、まず「祖母の姿」を主語にする節と、「霧」を主語とする節からなる文を作って一回閉じ、次に「父」を主語とする文に翻譯している。この構造では、「AはB、CはD」というのが一文目、二文目は「AはB」という分析的な形になっている。英語はas the approaching sea of mist grew ore tempestuousと、日本語が「霧」を主語にして翻譯したところを完全な從屬節に變えている。このため、主語と述語が一つずつからなる文が二つに翻譯されており、それ以外の要素はすべて從屬する要素である。しかし、原文の中國語は「祖母が岸のようにどんどん遠ざかって離れること」「霧が海水のよう

にどんどんわきたつこと」「父が余司令をつかんでいること」「その様子が船をつかんでいるよう」であることの四つは、それぞれ比較的獨立しており、それほど從屬していない。從屬節化されている日本語譯や英語譯では、從屬節部分は背景情報となるが、原文はそうはなっていない。ほぼ同じことを述べているのにもかかわらず、中國語原文を讀んだ時の感觸と、日本語・英語譯を讀んだ時の感觸は異なる。

さて、ここまで出版されている日本語譯や英語譯を参照に中國語の修辭的特徴を考察してきている。これは、「この譯ではまずい」とか、「別の譯し方ができる」と述べているわけではない。日本語や英語では同じような印象を再現することが難しいことを例示しているのである。日本語や英語でも無理やり並列構造に變えられないことはないが、その場合には稚拙な印象になってしまう。個別言語の規範は表現方法を規定するし、その表現によって讀者の讀み方も變わってしまうのである。

七、高行健の「言葉の流れ」

冒頭で取り上げたとおり、高行健の特徴的な文體も、中國語の「流水文」的な特徴を應用したものであると考えられる。冒頭に擧げた(一)は「おまえが乗った長距離バス↓おんぼろの車體↓おんぼろの車體の説明↓でこぼこの道」と描寫してきたところで、そのバスに揺られ、山間の縣城に至ることが表される。バスの描寫も道の描寫も埋め込まれず、一つの流れの中で語られるし、後半の移動を表す動詞句と一體となることよつて、靜的な描寫と動きが一つの言葉の流れの中で表される。橋本は(一)を次のように書き換えて比較している。

(二〇) 城市里淘汰下来的车子在保养得极差的山区公路上走过去。

(都市では使わなくなった車が、補修の行き届いていない山の道を走っている)。

この書き換えた方は、埋め込み構造を使つており、連續構造をとっていないので、「流水文」にはなっていない。「AがBであるような背景の中で人物CがDした」という場合、人物の行動が主人であつて、それを取り巻くものは從屬する「背景」でしかなくなる。しかし連續構造では「Aで、Bで、Cで、D」という形をとり、すべての要素は同格になつてしまう。車が提示され、道が提示され、その流れの中で人物が登場する。人物が提示されたならば、その連想として次のフレーズではその行動が示される。このようにすることによつて、人物の行動も空間の動きの中に溶け込むことになるのである。橋本が擧げる別の例も、本稿の觀點から分析してみよう。

(二一) 你于是来到了这乌伊鎮、(人物↓行動↓烏伊鎮) 一条鋪着青石板的长长的小街、(烏伊鎮の青石の敷かれた道) 你就走在印着一道深深的独轮车辙的石板路上、(その道の上を歩く人物) 一下子便走进了你的童年、(歩く↓過去へ) 你童年似乎待过的同样古旧的山乡小镇。(そして、おまえはこの烏伊の町へやつて來た。黒い石を敷いた通りが長々と續いている。おまえは手押し車の轍が深く刻まれた石畳の道を歩いているうちに、すぐ子供時代の記憶の中に入つていった。おまえはどうやら、ことと同じような山間の古い町で子供時代を過ごしたらしい。)(原文十六頁、日本語譯版二六頁)

第一標點節では、人物「你」が烏伊鎮にやつてきたことが語られる。第二標點節はその烏伊鎮の黒い石が敷かれた道が名詞句で提示される。前に出て來た要素の詳細説明(もしくは一部分)を名詞句で連續させるのは、よくある構造である。さらに第三標點節では、その道を

歩く人物の行動が描かれ、さらに第四標點節では過去へと歩き入ることが示されている。一つの流れの中で、時間的な展開も行っているのである。そして最後の第五標點節では烏伊鎮を説明する名詞句に戻っている。このようにすることで、読者としても第一標點節で「你」が烏伊鎮に歩き入ることが示され、次にその道を認知したと思うと、その道歩く「你」がフレームインしてくる。さらに、モニタージェファ果のようにその畫面が過去の色彩を帯び、最後にその烏伊鎮の説明・判断が續くという流れが、一つの言葉の流れで示されるのである。

八、まとめ

以上、「流水文」と言われたような文の修辭的な特徴を分析してきた。中國語では、複雑な文を作るのに關係節や連體修飾のような埋め込みや、「背景となる」從屬節―(焦點となる)主節―のような構造を使うのではなく、次々に要素を連續させることよって形成する「連續」をとることが多い。「連續」では、要素が並列的に並んでいくので、その出てくる順番に従って読者も認知する。その前に出てきた要素に對して新しい要素が付け加えられていくため、途中で意味上の主語が変わったり、靜態的な描寫から動態的な描寫に移ったりもする。このように展開していくことが「流れる水のように」に感じる要因であり、「流水文」なる名稱が生まれた要因でもある。

作家は、新たな表現を模索するものの、個別言語における文法や表現の習慣から自由ではない。「連續」の在り方は、中國語の複雑な「文」を考える上で、文法的にも表現論的にも重要である。さらなる追求が必要となるであろう。

注

- (1) 高行健『靈山』(天地圖書、二〇〇〇年)、『靈山』(飯塚容譯、集英社、二〇〇三年)、『Soul Mountain, translated by Mabel Lee, Flamingo, 2001.
- (2) 橋本陽介「高行健の『靈山』における語る聲の流動と「言葉の流れ」『日本中國學會報』(六十集、二〇〇八年)。
- (3) 前掲注(2)参照。
- (4) 呂叔湘『漢語語法分析問題』(商務印書館、一九七九年、二七頁)。
- (5) 流水文の主な先行研究としては、胡明揚・勁鬆「流水句初探」、『語言教學與研究』(一九八九年第四期)、吳竟存・梁伯樞「現代漢語句法結構與分析」(語文出版社、一九九二年、三二六頁―三五二頁)、沈家煊『零句』和『流水句』―爲趙元任先生誕辰120周年而作』、『中國語文』(二〇一二年第五期)、王洪君・李榕「論漢語語篇的基本單位和流水句的成因」、『語言學論叢』(商務印書館、二〇一四年)、王文斌・趙朝永「漢語流水句的分類研究」、『當代修辭學』(二〇一七年第一期)、許立群「從『單複句』到『流水句』」(學林出版社、二〇一八年)などがある。
- (6) 橋本陽介「中國語書き言葉における「文」論序説」、『お茶の水女子大學人文科學研究』一五卷(二〇一九年、一六一―一七二頁)、橋本陽介「現代中國語における時間軸に沿って繼起的に起こる出來事と連續構造」、『お茶の水女子大學中國文學會報』三八號(二〇一九年、一一―一八頁)。
- (7) Givón, Talmy. *Grammatical Relations: a functionalist perspective*, John Benjamins Publishing company, 1997, p.55.
- (8) 注(5)。(6)前掲論文他、橋本陽介「中國語における性質・狀態性敘述を含む連續構造」、『お茶の水女子大學人文科學研究』一六卷(二〇二〇年、一四三―一五五頁)。
- (9) 前者は黃錦炎譯『百年孤獨』(瀉江出版社、二〇〇三年、一頁)。後者

は范曄譯『百年孤獨』（南海出版社、二〇一一年、一頁）。日本語譯はガブリエル・ガルシア・マルケス『百年の孤獨』（鼓直譯、新潮社、一九九九年、五頁）による。なお、原文では「太った」に當たる部分だけが前置修飾の形容詞、髭がぼうぼうであることと手が雀のようであることは前置詞²⁰⁾で導かれた節、それ以外は關係節になつていて、語順としては後者の方が近いが、埋め込まれているという點では前者のほうが近い。

- (10) 中國語はSVO言語の中では類型論的に唯一、連體修飾・關係節が前置されるとされた（劉丹青編『名詞性斷語的類型學研究』商務印書館、二〇一二年、邦譯は『中國語名詞性フレーズの類型學的研究』山田留里子他譯、日中言語文化出版社、二〇一六年）他。しかし沈家煊前掲注(5)論文では、中國語では實際には長い連體修飾語が使われるよりも、「流水文」の形で修飾される要素が後ろに続くことが多く、そうすると類型論的な矛盾も解消されると考えている。本稿の言い方で言えば、埋め込みは前置されるが、「連續」では後置される。長い連體修飾語が使われるようになったのはいわゆる歐化語法である（謝耀基『現代漢語歐化語法概論』光明圖書公司、一九九〇年）。

- (11) 莫言『紅高粱家族』（南海出版社、一九九九年、五頁）、日本語譯は井口晃譯『赤い高粱』（岩波現代文庫、二〇〇三年、九頁）。
- (12) 王小波『黃金時代』（北京十月文藝出版社、二〇一七年、三頁）、日本語譯は櫻庭ゆみ子譯『黃金時代』（勉誠出版、二〇一二年、三頁）。
- (13) 日本語と中國語の修飾語を巡る對照研究としては堀江薫・ブラシャント・バルデシ『言語のタイポロジー』（研究社、二〇〇九年）、小野秀樹「中國語における連體修飾句の意味機能」『木村英樹教授還曆記念中國語文法論叢』（白帝社、二〇一三年）、陳風『連體修飾の日中對照研究—限定的修飾を中心に—』（牧歌舎、二〇〇九年）など。また、楊凱榮

『中國語學・日中對照論考』（白帝社、二〇一八年、二四九—二七八頁）では、日本語のほうが連體修飾を用いやすい理由について考察されている。中國語では「連續」であらわされているものが日本語では連體修飾・連用修飾に譯されることが多い。その方が日本語として自然という意識が働いていると思われる。

- (14) 例えば、ドイツチャーは、複雑な社會ほど從屬節に依存しがちであるとし、ヒッタイト語、アッカド語、聖書のヘブライ語など、古代の敘述體では從屬節が未發達なために出來事を時間順に並べるしかなく、單純で眠氣をさそうものであると論じている（ガイ・ドイツチャー『言語が違えば、世界も違って見えるわけ』椋田直子譯インターシフト、二〇一二年、一四九—一五九頁）。

(15) 『三國演義』（人民文學出版社、一九七三年第三版、二頁）。譯は引用者。

- (16) もちろん、通時的な研究も必要となる。ただし、言語學的方法を用いる以上、通時的研究と共時的研究を一本の論文で同時に行うことは不可能であるため、本稿では通時的な記述は行わない。現在の句讀點の規範は五四時期以降に成立したものであり、それ以前には使われていなかったとはいえ、句讀點が使われ始めてからは、その存在を輕視するべきではない。なぜなら、記號は「このように讀むように」との指定であり、讀者もその指定の通りに讀むからである。本稿では、現在の句讀點の規範が成立してからのテキストを特に問題とする。

- (17) 『紅高粱家族』九頁、日本語譯版十七頁。
- (18) 前掲注(2)論文では「曖昧な中間節」と呼ばれている。
- (19) 韓少功『爸爸爸爸』（山東文藝出版社、二〇〇一年、一〇〇頁）、加藤三由紀譯『爸爸爸爸』『現代中國短編集』（藤井省三編、平凡社、一九九八年、二五七頁）。

- (20) 閻連科『炸裂志』(河南文藝出版社、二〇一六年、四二二頁)、泉京鹿譯『炸裂志』(河出書房新社、二〇一六年、五六頁)。なお、日本語譯では吳鄉長となっているが、参照にした原文に合わせて變更した。
- (21) 『炸裂志』五六頁、日本語譯版七五頁。
- (22) 阿城『孩子王』、『棋王』(作家出版社、二〇〇〇年、九九頁)、立間祥介譯「中學教師」『チャンピオン』(徳間書店、一九八九年、一九六頁)。
- (23) 劉震雲『溫故一九四二年』、『劉震雲』(人民文學出版社、二〇〇〇年、三二三頁)、劉燕子譯・竹内實監修『溫故一九四二年』(中國書店、二〇〇六年、一二頁)。
- (24) 史鐵生『我的遙遠的清平灣』、『插隊的故事』(山東文藝出版社、二〇〇一年、六十頁)、松井博光他譯「わが遙かなる清平灣」『史鐵生』(現代中國文學選集三、徳間書店、一九八七年、一三頁)。
- (25) 『紅高粱家族』十四頁、日本語譯版二六頁。
- (26) 村上春樹『1Q84』(book1前編、新潮文庫、二〇一二年、三二二頁)、施小焯譯『1Q84』(南海出版社、二〇一〇年、一二頁)。
- (27) 「紅粉」八十頁、日本語譯版三二九頁。
- (28) 余華『許三觀賣血記』(南海出版社、一九九八年、二頁)、飯塚容譯『血を賣る男』(河出書房新社、二〇一三年、四一五頁)。
- (29) 『許三觀賣血記』十三頁、日本語譯版十六頁。
- (30) 『紅高粱家族』一頁、日本語譯版三頁。
- (31) Red Sorghum, translated by Howard Goldblatt, arrow books, 2003, pp.3-4.
- (32) 『紅高粱家族』一頁、日本語譯版三頁、英語版三頁。
- (33) 翻譯事例を並べるのは、個別的な事象であり、常に成立することではない。言語學的な「對照」だけを意味があると考えらるなら、このような論は適切ではないと思うかもしれない。しかし文學的翻譯論は、個別

中國語「流水文」とその修辭的特徴について

的な事例やその解釋を重視する。本稿が則る方法については橋本陽介『物語における時間と話法の比較詩學』(水聲社、二〇一四年)、橋本陽介「中國語書き言葉における「文」論序説」『お茶の水女子大學人文科學研究』一五卷(二〇一九年、一六一―一七二頁)を参照のこと。言語學的な對照は本稿とは別に行うものである。

※なお、本稿は科學研究費補助金(課題番號 19K20785)の助成を受けたものである。

西尾市岩瀬文庫藏五山版『山谷詩集注』書入れについて

—— 黄山谷詩漢文抄との關わりから

大島繪莉香

一七六

はじめに

宋・黃庭堅（一〇四五～一一〇五、號は山谷。以下、山谷と稱す）の詩集『山谷黃先生大全詩註』二十卷と、書名・版式は異なるが、ほぼ同内容の『山谷詩集注』二十卷目錄一卷は、本邦の南北朝時代に五山版が開版された。その後、應仁の亂（一四六七～一四七七）前後には山谷詩が流行し、前掲の詩集を底本とした抄物が誕生した。抄物は、解説文である抄文を主に假名文で構成する假名抄、主に漢文で構成する漢文抄に大別される。山谷詩抄物は、中世の山谷詩解釋史の實態を知るための材料である。山谷詩漢文抄は、抄者の生年が早い順に以下の三點が現存する。

①『帳中香』：抄者は、相國寺の萬里集九（一四二八～？）である。成立は、延徳元年（二四八九）頃と推定される。自筆本は現存せず、寫本及び慶長・元和年間の古活字本が多數現存する。底本には、公益財團法人東洋文庫所藏本の寫本を用いた。

②『山谷幻雲抄』：抄者は、建仁寺の月舟壽桂（？～一五三三、別號は幻雲）である。自筆本は現存しないが、林宗二（一四九八～一五八二）

による書寫本が建仁寺兩足院にあり、さらにそれを嘯岳鼎虎（一五二八～一五九九）が書寫したものが山口市の洞春寺にある。底本には兩足院所藏本を用いた。以下、『幻雲抄』と稱す。

③『山谷詩集注』：抄者は、東福寺の彭叔守仙（一四九〇～一五五五）である。彭叔の自筆本は、市立米澤圖書館の藏書である。所藏先の名稱から、以下、『米澤抄』と稱す。

彭叔の別集『猶如昨夢集』（東福寺善慧院所藏、東京大學史料編纂所に寫眞・謄寫本あり）卷中には「癸未」すなわち大永三年（一五二三）の年記をもつ「跋所鈔黄山谷詩集」がある。それによると、彭叔は、永正十一年（一五一四）から大永三年にかけての十年間の自身の山谷詩研究の成果に加え、萬里『帳中香』から十中八九、月舟祕藏本から餘す所なく筆寫して、自身の山谷詩抄を成したという。

このように幸運にも、山谷詩漢文抄は抄出關係が明確なものが揃って現存する一方、前掲の五山版にも禪僧の説の書入れがある。

阿部隆一氏は、大東急記念文庫藏本『黃山谷詩集注』（以下、大東急本と稱す）書入れには、『帳中香』抄者、萬里とその先人、惟肖得巖・瑞溪周鳳（ともに後述）の説があり、さらに一部の補紙に『米澤

抄』抄者、彭叔の自筆と思われる書入れがあることを述べている。^③

川瀬一馬氏は、五山版の研究で、山谷詩五山版の各所藏先及び現存する冊數、印記、書入れ等について紹介している。^④ その中で、書入れが多いものとして、『山谷黃先生大全詩註』の穂久邇文庫藏本、『山谷詩集注』の大東急本、東洋文庫藏本十一冊本^⑤を挙げている。

柳田征司氏は、漢籍における假名交じりの書入れに着目し、書入れ假名抄と命名した。さらにその性格は、オリジナルの書入れ（後に獨立した假名抄に成長するものを含む）、また、既に成立した假名抄から抜き書したものの二種類に大別すべきであるとし、大東急本書入れを後者に分類している。阿部氏のご指摘と併せて鑑みると、大東急本書入れは、彭叔に關するものを除くと、『帳中香』成立とほぼ同時期であったか、それ以降である。

しかし、山谷詩五山版の書入れについて、前掲以外の研究は、今の所なされていないようである。

目下の所、筆者が確認した山谷詩五山版は、市立米澤圖書館藏本、東洋文庫藏本、西尾市岩瀬文庫藏本（以下、岩瀬本と稱す）、大東急本である。書入れ年代が異なるこれらの内、書入れにおける（一）禪僧の號や字を冠する説が一定數あり、なおかつ（二）説者が『帳中香』抄者、萬里よりも上の世代に限られる唯一のものとして、本稿では、岩瀬本をとりあげる。市立米澤圖書館藏本と東洋文庫藏本は、條件（一）を満たさず、大東急本は、條件（二）を満たさない。

筆者は、岩瀬本書入れと現存する山谷詩漢文抄との間に、直接の抄出關係があつたと想定するわけではない。しかし、土井洋一氏が、書入れ假名抄を、假名抄成立解明のための考察の対象として見逃せないと述べていたのを、岩瀬本と山谷詩漢文抄とで應用したらどうか。^⑥ 岩

瀬本書入れを参照することで、山谷詩漢文抄成立以前の禪僧の説を適切に把握でき、さらに漢文抄と照合することで、それらがいかに漢文抄に取り入れられたかを検証することが可能となろう。

一、岩瀬本の概要

岩瀬本は、本編二十卷目録一卷の計十一冊が現存し、各冊冒頭に「攝州松雲峰天滿寒山寺」、各冊末尾に「英岳」・「禪雄」（ともに未詳）の印記を有す。印記の「攝州松雲峰天滿寒山寺」は、大阪府箕面市にある、臨濟宗妙心寺派、松雲峰寒山寺を指している。^⑦

また、岩瀬本二冊目に相當する卷一・二、十一冊目に相當する卷十九・二十に限つては、五山版の形態を模した寫本であり、川瀬氏がこれら補寫部分を全て「室町時代補寫」とする一方、西尾市岩瀬文庫ホームページの古典籍書誌データベース（試運轉）^⑧は、二冊目を室町頃、十一冊目を近世初期頃の補寫であるとしている。

さらに、岩瀬本卷一〜六の行間・上欄・下欄には書入れがあり、同データベースは、室町期のものとして推測している。また、筆者の見立てでは、岩瀬本の補寫部分の卷一・二と五山版そのものである卷三〜六における書入れは同筆であるため、第二冊の補寫の後に、卷一〜六に書入れが行われたと推測する。

他に、數にばらつきはあるが、本編二十卷の詩全篇に訓點が附されており、書入れよりも細字のものと、書入れと同筆であろうものが混在している。山谷の詩句にある一字に對し、細字は右訓、書入れと同筆であろう訓點は左訓となつている箇所があるが、その逆は確認できない。すなわち、細字を避けて、書入れと同筆であろう訓點が加えられたようである（後掲の岩瀬本書影参照）。しかし、書入れには岩瀬

本の訓點（左右ともに）に對する見解がなく、また、岩瀨本の訓點が全篇にありながら、書入れがある巻数は卷一〜六に限られるため、訓點の具體的な書入れ時期の特定は控えたい。

岩瀨本卷一〜六の書入れのうち、卷四を除き、禪僧の號や字を冠する説が、計七十一條ある。以下、生年の早い禪僧から列挙する。

「樵雪」・「樵」・「雙桂」は計四條あり、惟肖得巖（二三六〇〜四三七）である。「樵雪」「樵」はその別號（あるいは蕉雪）であり、「雙桂」は、晩年に隱棲した南禪寺少林院雙桂軒にちなむ。

「心田」は三條あり、心田清播（一三七五〜一四四七）である。心田は前掲の瑞溪とも交流があり、瑞溪の日記『臥雲日件録』の抜粹である『臥雲日件録拔尤』にもその名前が數々確認できる。

岩瀨本書入れにおいて最も多い、計六十一條の「刻」は、瑞溪周鳳（二三九一〜一四七三）の別號、刻楮子のことである。瑞溪は等持寺・相國寺を歴住し、相國寺崇壽院・鹿苑院の塔主等を経た。

「希」は一條あり、希世靈彦（一四〇三〜一四八八）を指す。

「雪蕉」は二條あり、蘭坡景蒞（一四一九〜一五〇一）の別號である。

右の五禪僧は、いずれも現存する最古の山谷詩漢文抄『帳中香』抄者、萬里よりも年代の早い禪僧であり、惟肖を頂點とした師承關係があった。すなわち、岩瀨本書入れにある禪僧の説は、山谷詩漢文抄が成立する以前の惟肖を中心とする集團の説の蒐集、あるいはそれ（ら）の拔書であろう。換言すれば、岩瀨本書入れは、現存する山谷詩漢文抄が成立する以前の、準抄物（柳田氏がいうところの、書入れ假名抄）として位置づけられはしないだろうか。

さらに、筆者が岩瀨本を準抄物と看做す根據には、他に三つある。

第一に、岩瀨本卷二の山谷詩「謝送礮壑源揀牙」（礮せし壑源の揀

牙を送らるるを謝す）にある、「愚按」と冠する説の存在である。岩瀨本（七葉表）は、同詩の第五聯「中人傳賜夜未央、雨露恩光照宮燭」（中人 賜を傳へ 夜未央 央きず、雨露の恩光 宮燭を照らす）に對し、「愚按、蓋夜未央間賜茶、則必可點宮燭。」（愚 按ずるに、蓋し夜の未央央きざる間に茶を賜はれば、則ち必ず宮燭を點すべし。）としている。一人稱「愚」を用いて「愚按」と冠する同説は、岩瀨本の書入れ手、あるいは岩瀨本が抄出した祖本の抄者の特定に繋がる可能性がある。そして同説は、『帳中香』では「先輩」と冠して言及されているため、岩瀨本の「愚」は、『帳中香』抄者、萬里の「先輩」、すなわち萬里よりも年代の早い禪僧であろう。

第二に、岩瀨本卷一「平陰張澄居士隱處三詩」（平陰 張澄居士の隱處 三詩）にある、「口義」からとする説一條の存在である。『幻雲抄』抄者である月舟は、山谷詩半漢文半假名抄である『黃氏口義』も編んでいる。岩瀨本（二三葉裏）にある「口義」が『黃氏口義』であれば、岩瀨本書入れを漢文抄成立以前の準抄物とする筆者の假説が成り立たないことになるが、同説は『黃氏口義』にはみえない。

山谷の該詩は三首の連作であり、副題「仁亭」「復庵」「亨泉」は、該詩を送られた張澄の隱處の名であろう。岩瀨本の第一首目の副題「仁亭」以下には、副題の順序について『易』の卦をもとに議論する、「口義」からとする説があり、「口義、或者曰、依復卦語、復菴亭泉仁亭、如此可編。今先仁亭誤矣。」（口義、或者曰はく、復卦の語に依りて、復菴・亨泉・仁亭は、此の如く編ずべし。今 仁亭を先んずるは誤れり。）としている。傍線部は、『帳中香』（七十葉表）及び『幻雲抄』（四七葉表）との一致箇所である。岩瀨本が「口義、或者」と冠するのに對し、『帳中香』は「或曰」と冠し、『幻雲抄』は「雙桂曰」と冠する

點を除けば、この三書の文字は一致している。三書を總合すれば、同説は雙桂こと惟肖の講義におけるものであると推測できるため、岩瀨本の「口義」は『黃氏口義』ではなく、講義を意味する一般名詞、あるいは惟肖に關わる抄物の書名であろう。

第三に、岩瀨本卷一「次韻吳宣義三徑懷友」（吳宣義の三徑に友を懷ふに次韻す）にある、「抄云」と冠する説の存在である。岩瀨本（三三葉表）は、同詩の第七十句「起看冥飛鴻、乃見天宇空。甚念故人寒、誰省機與綜」（起ちて看る 冥飛の鴻、乃ち見る 天宇の空なることを。甚しく念ふ 故人の寒からんことを、誰か省せん 機と綜とを）の解釋を、上欄に「抄云、秋風起而天宇空豁、見冥飛之鴻、因念故人也。」（抄に云はく、秋風起ちて天宇 空豁、冥飛の鴻を見て、因りて故人を念ふなり。）としている。この「抄」が、抄物、あるいは禪僧の説であるかは判然としないが、同記述が『帳中香』にはないため、岩瀨本のいう「抄」は、『帳中香』ではない。¹⁸⁾
やはり、岩瀨本書入れは、『帳中香』以前の古い説のみを残す、準抄物である。

二、岩瀨本書入れにおける禪僧説

さて、岩瀨本の禪僧の名を冠した書入れは、漢文抄にどれだけ取り入れられているのだろうか。岩瀨本書入れが『帳中香』及び『幻雲抄』とどれだけ重複しているのかを調査した。ちなみに『米澤抄』は、前二者からの抄出を多く含むため、調査対象外とした。

岩瀨本書入れとの一致率が最も高いのは、二番目に古い月舟『幻雲抄』であり、その一致具合を大別すると、①一致するものがないものが十條、②説が似通うか、部分的に一致し、さらに説者も一致するも

のが七條、③説が似通う、あるいは部分的に一致するが、『幻雲抄』では説者が明記されない、あるいは説者が「或云」とされているものが四條、④説も説者も一致するものが五十條ある。

一方、岩瀨本書入れと『帳中香』の一致率は低い。分類が困難であるため、各條数は示さないが、①②が大半を占めており、③では、特に岩瀨本において瑞溪の號を冠する説と類似した説が、『帳中香』では瑞溪の號を冠しない傾向があり、その説は卷一と卷六に集中している。一方、説も説者も一致する④は、三條と少ない。

岩瀨本書入れを漢文抄と比較した結果、説と説者の兩方が一致するのは、『帳中香』は三條、『幻雲抄』は五十條であった。

なぜ、岩瀨本書入れにある説の多くが、より成立の早い萬里『帳中香』よりも、月舟『幻雲抄』と一致するのであろうか。次節で、具體的な書入れと漢文抄との比較を行いながら考えたい。

三、岩瀨本書入れにおける禪僧説の検討

— 漢文抄との比較

本節では、岩瀨本書入れの説の内容を分類し、特に着目すべき、句法に關する説、任淵注に對する疑義の計二條をとりあげて、漢文抄にある説と比較し、いかに展開したかを論じる。『山谷詩集注』の詩・注は岩瀨本を用い、抄物翻刻の句讀點は私に附した。

岩瀨本にある、禪僧の號や字を冠する七十一條の説の内容を大別すると、①山谷詩の類似用例と私見を述べるものが一條、②山谷の詩題を誤りと指摘するものが一條、③山谷の句法について述べるものが一條、④説そのものを挙げずに直前の説に對して「雙桂同此義」「樵雪云此解似穿鑿」と述べるに留まるものが計二條、⑤山谷詩及び任淵注

にある語の説明が計十二條、⑥詩句の解釋が計五十四條ある。ただし、⑤と⑥の境界は、やや曖昧である。ほとんどの説は、中國での注釋と同じく、語の説明や詩句の解釋であるが、それ以外にも①④に擧げられたような獨自の説もある。

三十一、句法に關する説

本項では、岩瀨本卷二「和答外舅孫莘老」（外舅孫莘老に和して答ふ）詩第一聯「西風挽不來、殘暑推不去」（西風 挽けども來たらず、殘暑 推せども去らず。）に對する書入れをとりあげる。

山谷詩第一聯の「挽不來・推不去」の類似用例として、任淵は、『晉書』良吏傳から鄧攸傳をとりあげ、「晉書鄧攸傳、吳人歌曰、統如打五鼓、鷄鳴天欲曙。鄧侯挽不留、謝令推不去。」（『晉書』鄧攸傳にいふ、「吳人歌ひて曰はく、『統如として五鼓を打ち、鷄 鳴き 天 曙あげんと欲す。鄧侯 挽きても留まらず、謝令 推せども去らず。』」）としている。

一方、岩瀨本は、題の右行間に書入れがあり（例A）、その内容は、任淵注とは關係なく、山谷詩の句法を論じたものである。以下、誤寫とおぼしき字は、正しい字を（ ）内に傍記した。

岩瀨本例A

西風一刻云、凡五言詩上二字下三字、七言詩上四字下三字。引他事而着語、謂之江西句法也。五言如此句、七言者第一卷云、從師學道魚千里、蓋代成功黍一炊之類是也。（十葉表）

西風一刻云はく、凡そ五言詩は上二字下三字なり。七言詩は上四字下三字なり。他事を引きて着語す、之を江西の句法と謂ふなり。五言 此の句の如し、七言は第一卷に云ふ、「師に従ひて道を學び 魚 千里、世を蓋い功を成す 黍 一炊」の類、是れなり。

瑞溪は、全て五言詩は上二字と下三字で、七言詩は上四字と下三字で構成し、別の故事を引用して「着語」する句法を「江西句法」——山谷を始祖とする江西詩派の句法であるとしている。「着語」（著語）。「着」と「著」は同用）とは、禪宗の公案・古則・喝頌等に對して自分の見解を加えて下す短評の語である。續いて「江西句法」に適った例として、『山谷詩集注』卷一にある二首の連作詩、「王稚川既得都下、有所眇未歸、豫戲作林夫人欸乃歌二章與之、竹枝歌本出三巴、其流在湖湘耳、欸乃湖南歌也」其二の第一聯「從師學道魚千里、蓋代成功黍一炊」を擧げている。

五言詩や七言詩の構成を上下の字數で區分するのは、一般的な方法論ではあるが、強いて説の根據を擧げるとすれば、山谷と同時代の范溫による詩話、『潛溪詩眼』（以下、『詩眼』と稱す）がある。『詩眼』は當時の本邦の書目に記載が無いため、禪僧が閱覽できたか否かは未詳であるが、彼らの讀書圈にあつた詩話、宋・胡仔『苕溪漁隱叢話』前集卷四一や宋・魏慶之『詩人玉屑』卷三等を介せば、『詩眼』の書名を伴つた同記述があるため、『詩眼』の内容として知ることが可能であつた。また、當時通行した、元・馬端臨『文獻通考』卷二四九は、『詩眼』の著者、范溫について、「晁氏曰、范溫元實撰。溫祖禹之子。學詩於黃庭堅。」と説明している。禪僧が、この記述を踏まえて『詩眼』の内容を「江西句法」と看做した可能性がある。次の『詩眼』は『苕溪漁隱叢話』から引用した。

詩眼云、句法之學、自是一家工夫。昔嘗問山谷、耕田欲雨刈欲晴、去得順風來者怨。山谷云、不如千巖無人萬壑靜、十步回頭五步坐。此專論句法、不論義理。蓋七言詩四字三字作兩節也。此句法出黃庭經、自上有黃庭下關元已下多此體。張平子四愁詩句句如此、雄

健穩愜。至五言詩亦有三字二字作兩節者。老杜云、不知西閣意、肯別定留人。肯別邪、定留人邪。山谷尤愛其深遠閑雅、蓋與上七言同。

『詩眼』に云ふ、「句法の學、自らはれ一家の工夫なり。昔嘗て山谷に『田を耕すに雨ふらんと欲し、刈るに晴れんと欲す。去るに順風を得れば來たる者は怨む。』を問ふ。山谷云ふ、『千巖人無く萬壑靜かなり、十歩にして頭を回らし五歩にして坐す。』に如かず。」と。此れ専ら句法を論じ、義理を論ぜず。蓋し七言詩は四字三字もて兩節と作すなり。此の句法「黃庭經」に出で、『上に黃庭有り 下に關元あり』より已下、此の體を多くす。張平子「四愁詩」は句句此の如くにして、雄健穩愜なり。五言詩に至るも亦た三字二字もて兩節と作す者有り。老杜云ふ、『西閣の意を知らず、肯へて別るるか定めて人を留むるか』と。肯へて別るるか、定めて人を留むるか。山谷尤も其の深遠閑雅なるを愛す。蓋し上の七言と同じ。」と。

山谷は、蘇軾「泗州僧伽塔」詩の第七・八句が、杜甫「憶昔行」詩の第五・六句には敵わないと評價している。これについて范溫は、この評價基準は句法であつて内容ではないと前置し、七言詩は四字と三字で二つの節として區分すべきであると述べ、その條件に適用する七言句の例として、「黃庭經」(黃庭内景經)、張衡「四愁詩」(四愁詞)、また五言句の例として、杜甫「不離西閣二首」を擧げている。なお、『詩眼』が評價したこれらの句は、いずれも句中對である。例えば、『黃庭經』は、「上有黃庭」と「下關元」が該當する。なおかつ、『詩眼』末尾では、杜甫の句「不知西閣意、肯別定留人」をとりあげ、さらに「肯別定留人」を上二字、下三字に區分して、「肯別邪、定留人

邪」と強調して述べていることから、『詩眼』の同記述が、句中對に着目していたことが推測できる。

このように、『詩眼』が、概して七言詩と五言詩における節の切れ目が畫然とした句中對を評價したのは、同詩話が冒頭に擧げた、蘇軾詩と杜甫詩の評價とも通じていよう。また、「和答外舅孫莘老」第一聯に對し、禪僧が句内の切れ目に關する説を附した理由も、『詩眼』の延長線上にあると考えられる。しかし、岩瀨本では、注者は説明しなくても傳わると判断したのか、簡略な説明に留めている。

一方、『帳中香』は、岩瀨本と同じく、山谷の該詩の句の區切れを江西の句法だとしつつも、説明の詳細が異なっている。『帳中香』は、山谷の詩句「西風挽不來、殘暑推不去」が、「江西詩祖之句法」に適用のは、「西風」「殘暑」という「警策」の語に、史傳由來の語である「挽不來」「推不去」を續けるためであると詳説している。

凡五言上二字三字下二字三字、七言亦上四字三字下四字三字。取史傳之熟語以續警策之語。是謂江西詩祖之句法。西風殘暑、皆警策、而挽不來推不去、皆是史中之熟語。(二七葉表)

凡そ五言は上は二字三字、下は二字三字、七言も亦上は四字三字、下は四字三字なり。史傳の熟語を取りて以て警策の語に續く。是れ江西詩祖の句法と謂ふなり。「西風」「殘暑」、皆警策にして、「挽不來」「推不去」、皆是れ史中の熟語なり。

右の「警策」という語は、二つの意に大別される。一つは、文中の効果的な言葉という意の文學評論の語であり、早くも晉・陸機「文賦」に用例がある。もう一つは、警告・訓告の意の禪語である。田島柏堂氏によると、同語は一般的な語彙を禪語に轉用したものであり、禪語としては早くも唐・圭峰宗密(七八〇〜八四二)「禪源諸詮集都

序』に「一時警策群迷」の用例があるという。

『帳中香』は、「警策」と史傳由來の語の組み合わせを「江西詩祖之句法」としているため、江西詩派の詩論における「警策」の位置づけを調査したが、その関連は明らかにならなかつた（前掲の「着語」についても同様である）。また、本邦の禪林においても、「警策」は、いずれの意味でも用いられる語である。

さらに、『帳中香』が山谷の該詩の句を「史傳之熟語」「警策之語」と区分するのも、「江西詩祖之句法」、すなわち山谷詩を學んだ范温による『詩眼』の内容から派生した解釋の一つであろう。

そして、岩瀬本例Aと『帳中香』が同じ山谷詩の句に對して、同様に「江西句法」に關する説明を附しているのは偶然ではなからう。すなわち、『帳中香』の説は、岩瀬本書入れにある説をもとに發展させたものである可能性がある。

なお、岩瀬本例Aに近い説が、『幻雲抄』（二五葉表）にある。兩書の異同は、岩瀬本例A傍線部では、「七言者第一卷云」とあるのを、『幻雲抄』では「云」字を省いていること、また、岩瀬本が「蓋代」とあるのを、『幻雲抄』が「蓋世」としていることのみである。

そして、『米澤抄』（三三裏三四表）では、抄者の彭叔は、『幻雲抄』と『帳中香』にある江西詩派の句法の内容を見比べたうえで、その句法をより詳述した『帳中香』のみを抄出している。

他にも、岩瀬本と照合すると、『幻雲抄』とは數字程度の輕微な違いしかない簡略な説が、『帳中香』では、より詳しく述べられている例が散見される。どうやら『帳中香』では、岩瀬本にも確認できる説を踏まえて、積極的に説を展開していた可能性がある。

三二二、任淵注訓の否定

本項では、岩瀬本卷二「寄裴仲謨」（裴仲謨に寄す）詩第十三・十四句「念公篤行李、野飯中道宿」に對する書入れをとりあげる。

詩題にある裴綸（字は仲謨）は、山谷と共に治平四年（一〇六七）に科擧に及第している。任淵「目錄」は、同詩の制作年の山谷の居所や政治状況、人事について、「春夏、山谷在德平。按實錄、是歲三月、哲廟即位。四月丁丑、以祕書省校書郎召、到京師時當在六七月間。」としている。哲宗の父・神宗は、王安石ら新法黨派を取り立て、蘇軾ら舊法黨派を冷遇した。舊法黨派の山谷も、神宗時代には難職である知吉州太和縣、監德州德平鎮を経た。山谷らには不遇の時代ではあつたが、神宗が薨ずるや一變、その跡目を繼いだ哲宗が舊法黨派の面々を取り立てたのが、同詩の制作年とされる元豐八年（一〇八五）である。同詩第十二句に「春事勤草木」とあるように、季節が春であるとすれば、山谷は同詩の制作時に德平鎮にいた。また、同詩の最終二聯「作書寄後乘、爲我遣臣僕。起居太夫人、併問相與睦」（書を作りて後乘に寄せ、我が爲に臣僕を遣はし、太夫人に起居し、併せて相と睦とに問はん）は、山谷が、都にいる母へのご機嫌伺いや息子の相と娘の睦へのあいさつを裴綸に頼んでいるため、裴綸が都に向かうことになつていたのである。

本稿で注目したいのは、山谷の該詩全二十二句のうち、第十三句「念公篤行李」にある、「篤行李」の解釋である。「篤」と「行李」のそれぞれについて、任淵注と禪僧の解釋が異なつていたことが、岩瀬本書入れや、山谷詩漢文抄からうかがえる。

紙幅の都合上、該詩の切れ目の良い第十六句までを挙げ、（一）内の書き下し文と譯は、禪僧の説を基にした。また、山谷の詩句と譯の

うち、岩瀬本書入れと關わる箇所には、傍線を附している。

交游二十年 交游二十年

義等親骨肉 義 親骨肉に等し

風雨漂我巢 風雨 我が巢を漂はせ

公亦未有屋 公も亦 未だ屋有らず

寄聲來問安 寄聲 來たりて安んずるかを問ひ

足音 空谷に到る

我家輦轂下 我が家 輦轂の下

薪桂炊白玉 桂を薪して 白玉を炊ぐ

在官與影俱 官に在りて 影と俱にし

衣綻髮曲局 衣 綻び 髮 曲局す

天機行日月 天機 日月を行らし

春事勤草木 春事 草木に勤む

念公篤行李 念ふ 公の行李を篤くして

野飯中道宿 野飯して 中道に宿するを

(野飯して 中道に宿せんことを)

驚沙卷旂旗 驚沙 旂旗を卷ぎ

烏尾城角讓 烏尾 城角に讓つ

(譯) 君との交游は二十年、その誼は家族同然。風雨が僕の住處を漂わせたころ、君も未だに住居がなかった。君の使いがやってきて元氣かと問うてくれて、人氣のない谷で足音を聞くようにうれしい。僕の家族は天子さまのお膝もと、高價な薪を焚いて 高價な米を炊く。家族と隔たったこの地の役所に在れば 自分の影と二人ぐらし、僕の衣はほつれ 髪は縮れまがる。天の機關は 日月をめぐらし、春の現象

西尾市岩瀬文庫藏五山版『山谷詩集注』書入れについて

は 草木にはたらきかける。懸念するのは、君が旅程に遅れて(心に
とどめておくれ君よ 旅路では氣をつけて)、野外で飲食し、道半ばで野
宿することだ(野外で晝飯を濟ませたら 道半ばでも泊まつておくれ)。河
北からの旅路では、風で吹きあがる砂が旗を巻き、烏の尾が城の上に
動くような不安な状況もあるだろうから。

(岩瀬本書影)



念^フ公^ノ篤^ク行李^ヲ野飯^ニ中道^ニ宿^ス
上京也 アツクスルコトヲ 言賑與食也 スルコトヲ
タツウシテ

驚沙^ク卷^ク旂旗^ヲ烏尾^ノ城角^ニ讓^ツ
北地之風景 烏崎則尾動

書影にある「篤」の訓に着目されたい。「篤」字の右には細字で「アツクスルコトヲ」、また左にはやや太字で「アツウシテ」「タシナンテ」とあるが、大別すると、「アツクスル」と「タシナム」(「困」字と同意として訓じたか。書き下し文のルビもこれに従った。「篤」||「困」の根據については、後述)の二種の訓が附されている。さらに、右の第十三句に對する任淵注「説文云、篤、馬行頓遲」の「篤」字右に「此註非也」として、任淵注に否定的な書入れがある。

岩瀬本上欄にもまた、「アツクスル」の訓を採った書入れがある。
岩瀬本例 B

或云、念公篤^一公ノ教訓也。相搆テ往來ヲ篤セヨ。日暮レハ、有賊難、

只晝飯過ハ、雖中道可宿ソ。遠國汴京マテノ、行李ナレハ、能養生セヨソ。雙桂同此義。(二葉裏)

ある人の説では、山谷詩第十三句「念公篤」以下は、公の戒めである。よく備えて旅路では氣を付けるよう。日が暮れば賊に出くわす災難がある、晝飯を終えたら、道半ばでも宿泊するのがよからう。遠國の都、汴京までの長い旅行であるから、よく養生せよ。惟肖の説もこの解釋と同じである、としている。なお、山谷が該詩の制作時に徳平鎮にいたのであれば、岩瀨本が示すように、「教訓」の對象である「公」は、「遠國汴京マテノ行李」をする裴綸である。

では、任淵が、山谷詩第十三句「念公篤行李」の「篤」字注として、『説文解字』を引用したことに對し、岩瀨本は、何故否定的なのであろうか。さらに漢文抄は、第十三句にある「篤」に續く、「行李」に關する任淵注にも、否定的である(後述)。

行論の都合上、岩瀨本書入れのうち、先に該詩第十五・十六句「驚沙卷旂、烏尾城角護」に對して言及した説が、いかに漢文抄にある説に展開していったかについてを確認してゆきたい。

任淵注は、山谷詩第十五句に對して、『文選』にある王褒(字は子淵)「四子講德論」と左思「魏都賦」を、第十六句に對して、『後漢書』卷八の靈帝本紀李賢注、『儀禮』卷十四「土虞禮」、また、杜甫「日暮」詩を類似用例としてとりあげるのみであり、任淵注は原則として、類似用例を示すことに終始する傾向がある。

一方、前掲の岩瀨本例Bは、「有賊難」と具體的に解釋していた(後述するように、これは第十三・十四句の解釋に見えるが、実際には第十五・十六句の解釋である)。さらに、漢文抄には岩瀨本書入れにない説があり、具體的な解釋を示している。まずは、『帳中香』からとりあげる。

上句謂、河北多風沙。留王郎詩云、河外吹沙塵。下句、出河北、漸赴汴京之途中也。宜篤行李加盤飡之時也。(四葉裏)

上の句 謂へらく、河北は風沙多し。「留王郎」詩に云ふ、「河外沙塵 吹く」と。下の句、河北を出で、漸く汴京に赴くの途中なり。宜しく行李を篤して盤飡を加ふるべきの時なり。

右は、山谷詩第十五句「驚沙卷旂」が、山谷の住む河北路德州(安德縣)徳平鎮を指す根據として、『山谷詩集注』卷二「留王郎」詩から、河北が沙塵の吹き荒れる地であるという旨の句を引用している。第十六句は、山谷と再會した徳平鎮を出て汴京に赴く、旅路の途中であり、それが第十三・十四句のいうところの、氣をつけてしっかりと食事をとるのがよい状況であることを述べて、第十三句「念公」以下四句を、岩瀨本例Bのいう「教訓」として捉えている。

次の『幻雲抄』では、岩瀨本書入れに名のある禪僧よりも時代の下の、桂林徳昌(一四二八?)、別號は薜菴)が、岩瀨本例Bと類似した惟肖の説を提示している。岩瀨本例Bと『幻雲抄』を照合すると、桂林が、岩瀨本の惟肖注が「教訓」の對象としていた第十三・十四句のみならず、第十五・十六句までも包含すると解していたこと、さらに、第十三・十四句の解釋のように見受けられる岩瀨本の傍線部「有賊難」が、第十五・十六句「驚沙卷旂、烏尾城角護」の解釋に相當することが見てとれる。

薜云、雙桂義、念公以下四句教訓也。驚沙烏尾句謂盜賊、言有盜賊、則未暮時、可宿途中。(四葉表)

薜云ふ、雙桂の義、「念公」以下四句は教訓なり。「驚沙」「烏尾」の句は盜賊を謂ひ、言ふところは盜賊有れば、則ち未だ暮れざる時、途中に宿すべし。

『幻雲抄』は、説者の禪僧の数が多くことも手傳つて、『帳中香』よりも多彩な視點からの説がある。『帳中香』と重複しない『幻雲抄』の主たる説は以下であり、山谷詩第十六・十五句のそれぞれの示す、一日の中での時間帶について解釋するものである。

蕭云、或云、烏啼朝暮用之。驚沙句言朝、烏尾句言暮。此義不可也。烏啼多取于曉也。驚沙句言暮、烏尾句言朝也。(三葉表)

蕭云ふ、或ひと云ふ、烏啼くは、朝暮に之を用ふ。「驚沙」の句は朝を言ひ、「烏尾」の句は暮を言ふ。此の義可ならざるなり。烏啼くは多く曉に取るなり。「驚沙」の句暮を言ひ、「烏尾」の句朝を言ふなり。

蕭こと正宗龍統(一四二八〜一四九八、別號は蕭菴)は、ある人の説を提示し、山谷は烏が啼くのを朝・暮の各句に用いており、「驚沙」句は朝をいい、「烏尾」句は暮をいつている、とする。續いて正宗はこの説を否定し、烏が啼く表現は、多く曉の意として取るものだ。「驚沙」の句は、暮のことを言っており、「烏尾」の句は、朝のことを言っているのだ、と私見を述べている。このように正宗は、自身の反對する説もとりあげ、後世に檢討の餘地も残している。

さらに、彭叔は、正宗の説を踏まえて『米澤抄』(四葉裏)で私見を述べており、「瓢謂、驚沙云々、旅亭ニ、晚景ニトマル時分ヲ云ソ。烏尾云々、明日早々ニ、烏ノ羽ヅクロイニテ、欲啼時分ニ、旅行ソ。」としている。

前掲の『幻雲抄』から『米澤抄』の例を通覽すると、抄物は、先人の説の層の間に、抄者が、自身の代になって自説を差し込むようにして成立してきたものであることが確認できる。

本題に戻って山谷詩第十三・十四句「念公篤行李、野飯中道宿」に

西尾市岩瀬文庫藏五山版『山谷詩集注』書入れについて

對する任淵注を確認した後、漢文抄の説とその根據を述べたい。

説文云、篤、馬行頓遲。

左傳曰、亦不使一个行李告于寡君。注曰、行李、行人也。○又云、行李之往來、供其匱乏。

『説文』に云ふ、「篤は、馬行の頓遲なり」と。

『左傳』に曰はく、「亦 一个の行李をして寡君に告げしめずして」と。注に曰はく、「行李は、行人なり」と。○又云ふ、「行李の往來、其の匱乏に供せしめば」と。

任淵は、山谷詩第十三句「念公篤行李」の「篤」の字注として『説文解字』卷十上を引用し、馬がなかなか進まない様子であると解している。また、山谷詩同句「行李」の類似用例として『春秋左氏傳』と杜預注を引用し、「行李」の意を「行人」(旅行者)としている。『左傳』前半「亦不」より「行人也」までは、同書襄公八年、「又云」以下は、同書僖公三十年にある。任淵は、山谷詩第十三句「念公」と第十四句に注を附していないが、任淵注を總合した兩句の解釋は、懸念するのは君が旅程に遅れて(第十三句の下三字「篤行李」に對する任淵注を踏まえ、上二字「念公」を「懸念するのは君が」と譯した)、野外で飲食し、道なかばで野宿することだ、となる。

次に、任淵注を岩瀬本例Bと比較してみよう。山谷詩第十三句「念公篤行李」の「篤」を任淵が、馬がなかなか進まない様子と注するのに對し、岩瀬本例Bでは「相構テ(往來ヲ)篤セヨ」、「能養生セヨソ」としている。さらに、任淵が「行李」を行人だと注した一方、岩瀬本例Bでは、「遠國汴京マテノ」行李」とし、旅路の意味として解釋している。また、任淵が注を附さなかつた第十四句「野飯中道宿」も、「日暮レハ、(有賊難)、只晝飯過ハ、雖中道可宿ソ」、つまりは道

中は暗くならぬうちに宿泊するようにと解釋していた。

漢文抄でも岩瀬本例Bと同じく、任淵注が『説文解字』と『春秋左氏傳』を引用することに否定的であり、『説文解字』引用に對しては「任淵注、引説文誤」（『帳中香』四葉表、「念公篤字注非也」（『幻雲抄』三葉裏）とし、『春秋左氏傳』引用に對しては「此句行李不用左氏之義、但裴旅行而已」（『帳中香』四葉裏）としている。

續いて、禪僧らが『説文解字』を引用する任淵注を否定した、具體的な根拠を挙げたい。それは、山谷の他の別集『山谷外集詩注』にある用例とその注である。

『山谷詩集注』は、洪炎が編纂した『山谷内集（豫章先生文集）』に任淵が注を附したものであり、『山谷外集詩注』は、『山谷内集』になり、い作品を李彤が編纂した『山谷外集』に史容が注を附したものである。なお、『山谷外集』は、『山谷内集』の補遺ではあるが、『山谷外集』の方が、山谷の若年時の作品を収めており、元豐元年（一〇七八）から山谷の没年である崇寧四年（一一一〇）までの作品を収めているのに對し、『山谷内集』は、嘉祐六年（一一〇五）から崇寧三年（一一一〇）までの作品を収めている。

そして、『帳中香』には、以下のようにある。

樵云、篤、敦篤也。使其慎行李、都加飡、又常談也。篤字、古詩謂、上言加飡飯之意也。（四葉表）

外集有吾以王事篤行李。注引鮑明遠詩、手迹可傳心、願爾篤行李。

任淵注引説文誤。（四葉表）

樵云ふ、篤は、敦篤なり。其の行李を慎みて、喰を加ふるを勧めしむるは、又常談なり。「篤」字、古詩に謂ふ、「上には飡飯を加へよと言ふ」の意なり。

『外集』に「吾王事を以て行李を篤くす」と有り。注に鮑明遠の詩「手迹 心を傳ふべく、願はくは爾行李を篤くせよ。」を引く。任淵注の『説文』を引くは誤れり。

惟肖は、山谷詩第十三句「篤」字を「敦」字の意でとるべきだとする。續いて、道中では氣をつけて、しっかり食事をとるように、というのは常套句であるとし、その例として漢・無名氏「飲馬長城窟行」の句、「上言加飡飯」（上には飡を加へよと言ひ／手紙の最初には食事をするように、と書いてある）を引用している。

續いて、『山谷外集詩注』から「篤行李」の用例として、山谷詩「彫陂」の句とそれに對する史容注にある六朝・鮑照（字は明遠）「代門有車馬客行」詩の句「手迹可傳心、願爾篤行李。」（手紙は心が傳わるものだから書いて寄せてほしいし、願うのは君が旅路で用心することだ）を相應しいとして引用し、山谷詩第十三句の「篤行李」を再解釋している。なお、同書からの引用が、惟肖によるものか、あるいは萬里によるのかは判然としない。

鮑照「願爾篤行李」句を山谷の該詩「寄裴仲謨」の「念公篤行李」句と比較すると、「篤行李」は兩詩に共通するのみならず、鮑照が「願爾」とするのに對して、山谷が「念公」とする共通性も見いだせることから、本邦の禪僧らが、山谷の該詩にある「念公」を、山谷が公（＝裴綸）のことが氣がかりであるという意味ではなく、公（＝裴綸）に心してほしいとする解釋、また、「篤行李」を旅路では氣をつけてとする解釋は、妥當であるといえよう。

さらに『帳中香』（四葉裏／五葉表）は、山谷の書簡文にある「行李」の用例を四條抄出している。「與東川提舉手書」から（前略）……澄清之氣、凜然光被於江山、願篤行李、以慰夷夏瞻仰。」の一

條、「與戎州新太守書」から二條、「答雍熙光禪師」から一條引用し、これらの用例について「各見山谷刀筆。」とある。『山谷刀筆』とは、既存の山谷の全集から書簡文のみを年代順に抜き出して別に発行したものであり、宋代にはすでに存在していた。本邦に伝わった時期は未詳だが、『帳中香』には、巻数を伴った同書からの引用文が散見されるため、當時の禪僧の讀書圈にあつたことが伺える。

そして、『帳中香』では以下のように結論づけている。

由是、則篤行李及不當行李之語、手書小簡等常例。而今公詩中、用此三字耳、不可訓困也。(四葉裏)

是に由れば、則ち「篤行李」及び「不當行李」の語は、手書・小簡等の常例なり。而して今公の詩中に此の三字を用ふるのみなれば、「困」と訓ずべからざるなり。

前掲の山谷の書簡文の用例を踏まえると、「篤行李」や「不當行李」という表現は、手紙にある常套句である、そしていま、この語をそのまま詩中に用いているわけだから、「篤行李」の「篤」字を、「困」と訓讀するべきでない、としている。

さらに『帳中香』では、惟肖の説を補強する説も確認できる。

瑞岩講時亦篤訓^{アツク}、不^レ訓^レ困^ム也。中道蓋指^下表之旅行、自^二河北德州邊^一至^レ汴京。(四葉裏)

瑞岩講せし時も亦篤は敦^{アツク}すと訓じて、困^{タシム}むと訓ぜざるなり。中道蓋し裴の旅行、河北の德州の邊りより汴京に至るを指す。

瑞岩龍惺(一三八四〜一四六〇)の講義では、山谷の該詩の「篤」字を「敦」と訓じて、「困」と訓じていなかった。岩瀨本にも見える「困」の訓は、禪僧らの讀書圈にある『古今韻會舉要』等が引用する『爾雅』に「篤」は「困」であると書かれていることから、任淵

注を踏まえた場合は「困」と訓じていたのかもしれない。また、該詩の「中道」を明確に「旅行」だとする解釋も重要である。

このように、「帳中香」は惟肖の説を補強する方向で纏めている。

『幻雲抄』(三葉表・裏)でも、岩瀨本書入れに沿って、「篤」字、如任注、則言途中勞也。下句謂驚沙等也。雙桂續翠篤爲敢義也。(「篤」字、任注の如くなれば、則ち途中の勞を言ふなり。下句は驚沙等を謂ふなり。雙桂續翠篤は敦の義と爲すなり)とし、「敦」との讀みは、惟肖のみならず、續翠こと江西龍派(二三七五〜一四四六)の説であるとしている。

その他、『幻雲抄』(三葉裏)では、「念公一行李、禪家所謂行李意也。」(念公一行李は、禪家の所謂行李の意也)とし、「行李」に荷物を持つて行脚すること、轉じて修行の意とする、禪家の視點からの説も提示している點が、『帳中香』とは異なる。

なお、彭叔『米澤抄』のこの箇所は、『帳中香』と『幻雲抄』から引用するのみで、私見を述べていない。これは彭叔が、先人の説に對して、新たに私見を述べる餘地はないと判断したからであろう。

本節を總括すると、岩瀨本と比較したところ、『帳中香』は、岩瀨本にある説を詳述し、補強する事例をあげている。『幻雲抄』は、岩瀨本と同じ説を示しつつ、他の視點からの説を付け加えている。『米澤抄』の抄者である彭叔は、多く私見を述べはしないが、これは、先人が述べる説の詳しさの程度によって、後人が新たに加えられる説に制限が働くものであるという、抄物の資料性による。

四、小 結

本稿では、岩瀨本書入れが、現存する山谷詩漢文抄の成立以前の説のみであることに着目し、岩瀨本書入れと漢文抄を照合することで、

本邦における山谷詩解釋史の對象となる年代を漢文抄成立以前にまで廣げた。結果、山谷詩漢文抄のみでは知ることでできなかった、現存する漢文抄の特徴として、主に下記の二點を明確にした。

一つは、『帳中香』が、先人の説を積極的に展開した可能性があり、さらに補強するような傾向にある點である。また一つは、『幻雲抄』が、先人の説を忠實に残しながら、別の視點からの説を付け加えている點である。

本邦の禪僧らは、任淵注を必ずしも鵜呑みにはせず、彼らの各世代において可能である、山谷詩の解釋や漢籍からの引用を獨自に積み上げて「篤」の例のような妥當な解釋に到達することもあった。岩瀬本書入れは、現存する山谷詩漢文抄成立の直前に位置づけられ、増えてゆく抄文を版本には書入れ切れなくなつた結果、獨立した書物としての抄物が誕生したものと推測される。

現存する最古の山谷詩漢文抄『帳中香』抄者、萬里からみると、瑞溪は一世代前の禪僧である。その瑞溪の説が、岩瀬本や大東急本において最も多く、溢れんばかりに書き入れられているのは、山谷詩漢文抄の誕生する兆しの一つであると看做せはしまいか。

今後、五山版書入れまで含めた抄文を研究することにより、山谷詩解釋史の實態を解明したい。

注

(1) 芳賀幸四郎『中世禪林における學問および文學に關する研究』(日本學術振興會、一九五六年)二八八頁。

(2) 以下、禪僧の生没年は、玉村竹二『五山僧傳記集成』(思文閣出版、二〇〇三年)を参照した。

(3) 阿部隆一「大東急記念文庫藏室町時代邦人撰述漢籍注釋書類について」『かがみ』卷四(一九六〇年、大東急記念文庫)。

(4) 川瀬一馬『五山版の研究』(日本古書籍商協會、一九七〇年)。

(5) 東洋文庫には、書入れの少ない同書の五山版十二冊本もある。

(6) 柳田征司「室町時代語資料としての抄物の研究」上册(武藏野書院、一九九八年)二二五〜三〇頁。柳田氏には、他にも「書込み假名抄一班」(『愛媛大學教育學部紀要第II部』第九卷、一九七七年)もあり、大東急本の詳細な書誌情報を述べている。

(7) 川瀬氏が書入れが多いとする穂久邇文庫藏本も調査すべきではあるが、同文庫の藏書は公開されておらず、筆者は未見である。

(8) 土井洋一「抄物の轉寫本と版本」『學習院大學文學部研究年報』十三輯(一九六六年)。

(9) 例えば、中國詩人の別集の五山版書入れと抄物との直接の(あるいは直接に近い)關係について述べたご論考には、太田亨氏「建仁寺兩足院所藏『柳文抄』の編纂者について—國立歴史民俗博物館所藏五山版『新刊五百家註音辨唐柳先生集』書き入れ作者との關係」(『國語國文』七八卷一號、二〇〇九年)がある。

(10) 寒山寺は元は滋賀縣石山にあった。開山は、近江膳所藩主・石川忠總の招きに應じた瑞南卜兆(一五九九〜一六六九)である。寒山寺所藏『寒山開基瑞南和尚塔銘』(末尾に貞享三年(一六八六)の年記あり)と『寒山禪寺歷世行狀象贊』(同寺十一世玉谿賢賻編輯。行狀記末尾に、天保十五年(一八四四)の年記あり)所收「寒山禪寺歷世行狀」の「開山瑞南和尚」によると、瑞南は、石川氏の移封を契機に、大阪城の西北に位置する天満の地に改めて寺を建て、再び寒山寺と命名したという。『寛政重修諸家譜』(國立國會圖書館藏)第一一八・石川家の項によると、慶安三年(一六五二)十二月に忠總が没し、嫡孫・憲之が伊勢龜山に移

封されたのは、慶安四年（一六五二）のこととある。さらに、瑞南の師、愚堂東寔の年譜『大圓寶鑑國師愚堂和尚年譜』（花園大學所藏。愚堂の弟子、雪潭豊玉編輯）慶安四年六月條には、愚堂が大阪寒山寺にて瑞南の迎待を受けたとの記録があることから、寒山寺の大阪移轉は、同年のことと推定できる。岩瀬本印記は、「攝州」とあるため、同年以降のものである。なお、寒山寺のご住職によると、同寺のご藏書の一つ『再住法山瑞南和尚語録附塔銘』には、岩瀬本と同じ印記が確認できるとのことである。

(11) 前掲注(4)川瀬氏書、四七二頁。

(12) <https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ1200/WJIS21U/2321315100>。「山谷詩集注」で検索。最終閲覧日は、令和元年九月九日。

(13) 『大日本古記録』臥雲日件録抜尤（岩波書店、一九九二年）参照。

『臥雲日件録』は現存せず、惟高妙安（二四八〇〜一五六七）が抄出した『臥雲日件録抜尤』のみが現存する。

(14) 岩瀬本巻六「見諸人唱和餘齋詩軹次韻戲詠」にある説は、「刻云、雪蕉謂……（下略）」として、瑞溪が蘭坡の説を紹介しているため、蘭坡の説として数えた。

(15) 蔭木英雄『中世禪林詩史』（笠間書院、一九九四年）三九三頁。

(16) 岩瀬本書入れは、九割方が漢文であるため、書入れ手が、講義を聞いた場で直接書き入れたものではなからう。

(17) ちなみに『幻雲抄』は岩瀬本と同じく、「愚按」と冠する一方、『米澤抄』は『帳中香』と同じく、「先輩説云」と冠している。

(18) 『幻雲抄』には、岩瀬本と文字の異動のない「抄云」と冠する抄文があるため、岩瀬本の指す「抄」は、『幻雲抄』でもない。

(19) 例えば、『帳中香』巻一（二九葉裏）には、『茗溪漁隱叢話』後集巻三一からの引用文が確認でき、また、『帳中香』巻一（四葉裏）には、『詩

人玉屑』巻二からの引用文が確認できる。

(20) 『文献通考』は、市立米澤図書館蔵本（二六葉裏）参照。

(21) 『茗溪漁隱叢話前集』（人民文學出版社、一九九三年）二八一頁。

(22) 荒井健氏は、山谷がこの蘇軾の詩句よりも杜甫の詩句を稱揚した理由を「滄浪詩話」と「潛溪詩眼」―宋代詩學おぼえがき』（『東方學報』第四四冊、一九七三年。後に『秋風鬼雨』詩に呪われた詩人たち（筑摩書房、一九八二年）に收める）一三五〜六頁において、以下のように述べている。「七言詩は四字十三字の形に分節するのが通例だが、范温（『山谷』）の詩學においては、とりわけこの分節がより完全たるべきことが強調される。千巖云々の杜甫の詩句（憶昔行）が耕田云々の蘇東坡の詩句（泗州の僧伽の塔）に勝るとみなされたのは、後者が一個のセンテンスで一句を形成するのに對し、前者は二個のセンテンスまたはフレーズで一句を形成するゆえにであろう（五言詩についても同じことがいえる）。」

(23) 陸機「文賦」には、「立片言而居要、乃一篇之警策。」（片言を立てて要に居る、乃ち一篇の警策なり。）とある。

(24) 田島柏堂「天童山十境と禪語―「拜登」・「警策」考―」（『禪研究所紀要』第一卷 愛知學院大學、一九八二年）。

(25) 萬里の別集、『梅花無盡藏』にも「警策」の用例がある。同書第一に「豊山之雲蒼指鼎之警策云、槩背雨聲長、……（下略）」の章題があり、第三に「石林詩話云、蔡天啓言、……（中略）……皆集中第一也。餘謂細雨騎驢入劍門、蓋劍南集中之警策邪」の章題があり、第六の「花菴序」に「茗溪胡漁隱曰、梨花一枝春帶雨。桃花亂落如紅雨。小院沈々杏花雨。梅子黃時雨。皆古今之警策欲作一亭子」とある。同書は『續群書類從』第十二輯下（一九七九年）八〇四、八六七、一〇〇三頁参照。なお、「花菴序」傍線部「梅子黃時雨」は、現行本『茗溪漁隱叢話後集』

卷十三（人民文學出版社、一九九三年）九七頁では、七言「黃梅時節家家雨」に作り、直前の三句と字数が揃っている。一方で、同書（人民文學出版社）の校勘記によると、「梅子黃時雨」に作るもの（北京大學藏殘宋本等）もあるという。現行本と「花菴序」の異同を他にもとりあげると、前者が「苕溪漁隱」に作る一方で、後者が「苕溪胡漁隱」に作り、前者が「古今詩詞之警句也。我曾欲一亭子也」に作る一方で、後者が「古今之警策欲作一亭子」に作っている。

(26) 同じく山谷詩五山版である市立米澤圖書館藏本（二葉表）は、岩瀬本の同詩の章題にある「仲謨」の「謨」字を「謀」に作る。

(27) 任淵「目錄」に「山谷在德平、與德州太守書云、某官局勉以不瘵。幸親老在都下、善眠食、兄弟無他。」とある。

(28) 史容は他にも、山谷詩の「篤行李」に對して當該の鮑照詩を引用しており、『山谷外集詩註』一（四部叢刊續編）（一九八四年）卷六では「再次韻呈明略并寄無咎」第二一句「寄聲小掾篤行李」に對し、「鮑照詩、手迹可傳心、願爾篤行李」と注している。

(29) 山谷詩第十三句の上二字「念公」に對して、任淵は注を附しておらず、また、禪僧らが「念公」の解釋について議論した痕跡は、筆者の管見に入らなかった。しかし、同句下三字「篤行李」を、任淵注、あるいは漢文抄が『山谷外集詩注』の注をもつて提示した鮑照の詩句のいずれを踏まえるかによつて、上二字「念公」の解釋も間接的に違いが生じることを補足しておく。

(30) なお、大東急本には、説者を明記せずに「先生刀筆多用篤行李也。」と指摘する書入れがある。また、『幻雲抄』（三葉裏）では右説に「刻云」と冠し、瑞溪の説として提示している。

(31) 「與東川提舉手書」と「與戎州新太守書」は、『山谷老人刀筆』（北京圖書館古籍珍本叢刊）第八六 書目文獻出版社、一九八八年）卷十一

に、「答雍熙光禪師」は同書卷九にある。なお、「篤行李」は、山谷以外の用例が少ない表現である。

(32) 『四庫全書總目提要 四』（商務印書館、一九三三年）三七四五〜六頁には、「宋黃庭堅撰。庭堅全集已著錄。此乃所著尺牘也。以年爲次。自初仕至館職四卷、居憂時三卷、在黔州三卷、戎州七卷、荆渚二卷、宜州一卷、皆於全集中摘出別行者。然是編向有宋槧本、非後人所爲。」とある。

(33) 現行の『爾雅』は、「篤、固也」に作る。

〔付記〕

本稿の執筆に際し、資料の各所藏先より、閲覽、醵刻及び書影掲載の許可を賜りました。特に、本稿における寒山寺の來歴に關しては、同寺ご住職、瀧瀬尙純氏からのご教示によるところが大きく、さらに、氏からは、貴重な資料のご提供がありました。ご協力くださった皆様に、深く御禮申し上げます。

本稿は、日本宋代文學學會第五回大會での口頭發表がもととなつている。また、科學研究費助成事業若手研究（課題番號：18K12284）の助成による研究成果の一部である。

「明月壁」と高野蘭亭

高山大毅

一 はじめに——『唐詩選』をめぐる

『唐詩選』は、服部南郭の校訂による和刻本が出版されて以来、唐詩の定番の選集として日本では現在に至るまで讀まれ続けている¹⁾。三百年に及ぶ日本での受容の歴史の過程で、『唐詩選』の讀まれ方にも當然變化はあつた。

現代とは異なる、江戸中期の『唐詩選』受容の大きな特徴としては、該書が編纂者とされる李攀龍の諸作とともに讀まれていたことが挙げられよう。たとえば、「草色秋迷彭蠡澤、不知何處弔番君（草色秋迷ふ彭蠡の澤、知らず何れの處にか番君を弔はん）」²⁾という李攀龍の詩句は、『唐詩選』所收の「日落長沙秋色遠、不知何處弔湘君（日落ちて長沙秋色遠し、知らず何れの處にか湘君を弔はん）」³⁾という李白の詩句を明白に下敷きとしている。このように李攀龍の詠作と『唐詩選』を照らし合わせることで、當時の讀者は、李攀龍の詩を解釋し、古文辭派の作詩の手法を學んだのだと考えられる。

『唐詩選』は偽作説があるものの、李攀龍の眞作とされる『古今詩刪』の唐詩の部と収録詩が大部分重なっており、李攀龍の好尚を反映

した選集といえる。よって、李攀龍の詩を解釋するに當たつて、李攀龍が材料とした詩を『唐詩選』に求めるのは間違ではない。熊阪台州『白雲館近體詩眼』は、『唐詩正聲』には収録されないが、『唐詩選』に採られている詩は、李攀龍の好みに適い、彼が作詩の参考にした詩であることを具體例を擧げて論證している⁴⁾。

ここで考えたいのは、江戸中期の人々が、李攀龍の詩を解釋するために『唐詩選』を参照するだけでなく、逆に『唐詩選』を解釋する際に、李攀龍の詩を参考にするにもあつたのではないか——ということである。明確に意識していなくても、李攀龍の作品を記憶していることで、唐詩の解釋がそれに引きずられることもあつたらう。李攀龍の詩が唐詩解釋に影響を及ぼしていると思われる例は實際に存在する。徂徠の弟子である入江南溟の『唐詩句解』は、『唐詩選』の楊炯「夜送趙縱（夜趙縱を送る）」に對していささか奇妙な解釋を施す。詩の本文は次の通りである。

趙氏連城壁 趙氏連城の壁
由來天下傳 由來天下傳ふ

送君還舊府 君が舊府に還るを送れば

明月滿前川 明月前川に滿つ

起句では旅立つ趙縱の姓にちなんで、戰國時代の趙の寶物であつた「連城璧」の故事が用いられている。趙の惠文王は「和氏之璧(和氏の璧)」を有し、秦の昭王は十五城と璧を交換することを願つた(「連城」の稱の由來である)。璧を奉じて秦に赴いた趙の藺相如は、秦が約束を履行せず、力に物を言わせて璧を奪おうとしていることを察し、應變の措置で璧を國に戻した——という故事である。この詩では、趙縱の才徳を「連城璧」に比している。

問題は、結句の「明月」の解釋である。南溟の『唐詩句解』は、「明月」に注して次のようにいう。

鄒陽書、「明月珠夜光玉」、借明月復比趙德輝而照題「夜送」。

鄒陽が書、「明月の珠夜光の玉」。明月を借りて復た趙が德輝に比す。而して題の「夜送る」に照らす。

南溟は「明月」を單に明るいう月であるとは解さず、鄒陽の上書が典故であると見る。鄒陽の上書は後引の詩とも關連するので、原文を引いておこう。

臣聞明月之珠夜光之璧、以暗投人於道、衆莫不按劍相盼者。何則無因而至前也。

臣聞く明月の珠夜光の璧、暗きを以て人に道に投ずれば、衆劍を按じて相盼みざる者莫し。何となれば則ち因ること無くして前に至ればなり。

闇夜に光り輝く寶物を人に投げつけたならば、投げつけられた人は誰でも劍に手をかけてにらむであろう——鄒陽はこの比喩を引き合ひに出すことで、貧賤の士は傑出した人物であつても、事前に彼を君主に紹介する人がいなければ、君主に憎まれてしまふと説いた。南溟によれば、結句はこの故事を踏まえており、「明月」は夜空に輝く月を指すだけでなく、趙縱の「德輝」をも喩えているのである。

もつとも、この南溟の解釋に對しては批判もあつた。戸崎淡園『箋註唐詩選』は、「已用趙璧又用明月珠。繁雜可厭也。恐非楊之本志也(已に趙璧を用ひ又明月の珠を用ふ。繁雜厭ふ可きなり。恐らくは楊の本志に非ざるなり)」と論じる。人の才徳を寶玉に喩える表現を起句と結句で繰り返し用いるのは繁雜であるという指摘は一定の説得力がある。『唐詩句解』に關しては、「徠翁ノ没後間モナケレハ、親炙ノ諸君モ多ク、ミナ句解ノ疵瑕ヲ指摘嗤笑シテ見ル者モ無カリシ」という惡評が傳わつており、これも杜撰な注釋の一例のように見えなくもない。

しかし、李攀龍の次の詩句(「重別魏使君(重ねて魏使君に別る)」の起承句)が南溟の念頭にあつたと考えるところであろうか。

君家明月楚江干 君が家の明月楚江の干
價動連城海色寒 價は連城を動かし海色寒し^①

楊炯の作と同じく「明月」「連城」の語を用いた送別詩であり、「趙氏

「君家」という表現も似ている。この句が楊炯の詩に基づく可能性は高い。

但徠の明詩注釋である『絶句解』は、起句の「明月」を「明月珠」の意であるとし、「順甫楚産。隋侯珠亦楚地事。故曰君家（順甫は楚産。隋侯の珠も亦た楚地の事。故に君が家と曰ふ）」という。但徠の説にしたがえばこの二句は、あなたの家の明月の珠は楚の川邊のもので、その價値は竝んだ城を動かすほどであり（魏裳〔字は順甫〕の優れた人品は朝廷から一郡數十縣を任されるほどであり）、彼の任地の海邊の景色はさえわたる——と解釋できる。

李攀龍の詩の「明月」が「明月珠」を指すのならば、それを楊炯の詩に遡らせて同様の解釋を行うことは不思議なことではない。むしろ『唐詩選』を李攀龍の『唐詩選』として讀むのならば、有力な解釋であるとさえいえよう。

二、「珠」「璧」の連結表現

(一)「珠」と「璧」

問題はさらにその先にある。前引の李攀龍の詩では、魏裳を喩える「明月珠」は「連城」の價値があるとなつていた。しかし、もともと「連城」の故事に登場した寶物は「和氏之璧」であり、李攀龍は「珠」と「璧」を混同しているように見える。「珠」は眞珠などを指すのに對し、「璧」は平たい輪の形をした玉器を指し、兩者は本來異なっているはずである。

李攀龍は他の詩（「寄茂秦（茂秦に寄す）」）でも、「珠」と「璧」の區別を無視した表現を用いている。

誰惜虞卿老去貧 誰か惜まん虞卿老い去りて貧しきを

平原食客一時新 平原の食客一時新なり

懷中白璧明月如 懷中の白璧明月の如し

何處還投投劍人 何れの處か還りて投ぜん劍を投ずるの人¹⁵⁾

李攀龍は、謝榛（字は茂秦）が宗室の趙王の食客であつたことから詩想を展開し、彼を戰國時代の趙に仕えた虞卿に擬する。虞卿は遊説の士で、趙の孝成王に入説し、一度目の會見で「黄金百鎰、白璧一雙」を賜り、二度目の會見で上卿に任ぜられた。起句は、謝榛が虞卿とは異なり、不遇をかこつていることを述べる。承句も趙からの連想で、趙王を趙の公子で多くの食客を擁した平原君になぞらえ、昔の食客が趙王の下にいないことをいう。轉結句は、前引の鄒陽の上書を典故に用い、謝榛が「明月」のように輝く「白璧」（＝才能）を有しているのにもかかわらず、それを受け入れてくれる人がいないことを歎いている。轉句の「懷中」は『老子』の「被褐懷玉（褐を被り玉を懷く）」に、また「白璧」は虞卿が下賜された「白璧」にも連關する表現であり、「璧」「玉」にまつわる複数の故事が巧みに組み合わされている。古文辭派はこのような共通點のある典故を連結させる技法をししばしば用いた。¹⁶⁾「珠」「璧」を區別しない表現も、その一つと見ることができよう。しかし、この詩の表現には批判もあつた。太宰春臺は次のように説く。

且白璧玉也。明月珠也。曰「白璧如明月」、造語誤矣。¹⁷⁾

且つ白璧は玉なり。明月は珠なり。「白璧 明月の如し」と曰ふは造語誤れり。

「明月珠」の「明月」を「白璧」に對して用いるのは「造語」の誤りであると春臺は説く。「珠」「璧」を區別しない李攀龍の表現は春臺にとつて受け入れ難いものであった。

ここで「珠」「璧」の故事について整理しておきたい。「珠」「璧」は典籍の中で竝んで登場することが多く、兩者の關係については、『文選』李善注においても既に議論されている。⁽¹⁸⁾

班固の「西都賦」に、「隨侯明月、錯落其間」《中略》懸黎垂棘、夜光在焉（隨侯明月、其間に錯落たり《中略》懸黎垂棘、夜光在り）という一節がある（「懸黎垂棘」は美玉の名で、『左傳』などには「垂棘之璧（垂棘の璧）」とある。「隨侯」「明月」「夜光」の關係が解釋上論點となる。李善注は、『淮南子』の高誘注の「隨侯之珠、蓋明月珠也（隨侯の珠、蓋し明月の珠なり）」という説、及び同書の許慎注の「夜光之珠有似明月。故曰明月也（夜光の珠明月に似たる有り。故に明月と曰ふなり）」という説を引く。高誘の説は、「隨侯之珠」∥「明月珠」、許慎の説は「夜光（之珠）」∥「明月（珠）」となる。李善注によれば、班固は「隨侯明月」と「夜光」を切り離していることから、「隨侯明月」は「夜光」ではないと認識しており、班固の見方は、「夜光（之珠）」∥「明月（珠）」とする許慎の説と食い違ふ。これについて李善注は、「夜光」に關する詳しい記載が「經典」にないために起つた齟齬であるとし、「夜光」は「璧」・「珠」のどちらに對しても用いられることを具體例を擧げて示している。

この議論の重要な點は、「明月」は「珠」の稱であることが自明視されていて、「明月」が「璧」を修飾する可能性は顧慮されていないことである。

ただし、「珠」「璧」を連結させた表現に先例が全くないわけではない。李白の詩に「白璧雙明月、方知一玉眞（白璧雙明月、方に知る一玉の眞なることを）」とある。⁽¹⁹⁾しかし、朱諫『李詩選注』は「蓋白璧是玉、明月是珠。上下辭意不相照應（蓋し白璧は是れ玉、明月は是れ珠。上下の辭意相照應せず）」と評し、この詩が李白の作であることに疑義を呈している。やはり「珠」「璧」の混用には相當の違和感が伴うのである。「珠」「璧」を區別しない李攀龍の表現の際たるものに、「明月璧」がある。李攀龍『雪溪徐山人（雪溪の徐山人）」に次のようにある。

不投明月璧 明月の璧を投ぜず
甘隱大雷山 甘んじて隠る大雷山⁽²⁰⁾

この「明月璧」の語の用例は非常に少ない。『四庫全書』を含む膨大な文献を収録する「中國基本古籍庫」を検索しても、宋代以降の用例しか見つからない。宋末から元初にかけての三つの別集（林景熙『霽山集』・黄庚『月屋漫稿』・張觀光『屏巖小稿』）に「有如明月璧、美價傾鴻都（明月の如き璧有り、美價鴻都を傾く）」という同一の詩句が見え（重出の理由は不明である）、元人郭經の詩に「孤電繞手明月璧（孤電手に繞ふ明月の璧）」とある（『陵川集』卷八）。詩における明代より前の時代の用例はこの二例に止まり、「如」字を伴う前者を除外すればたった一例となる。明代に入ると、絶対數は少ないものの用例は増える。

李攀龍『滄溟集』一例
羅洪先『念庵文集』一例
余翔『薛荔園詩集』一例

王世貞『弇州四部稿』三例
吳國倫『甌窺洞稿』四例

李攀龍・王世貞・吳國倫は盟友關係——いわゆる後七子——であり、また余翔の詩風は彼らの詩風と近いと評される。李攀龍・王世貞などいわゆる明代古文辭派は、言々唐詩を模倣したと思われがちである。しかし、實作に即してみると、彼らは「明月璧」のように唐詩には見られない特殊な表現を用いているのである。²³⁾

従来、古文辭派の文學は「擬古主義」や「復古主義」といた語で括られてきた。しかし、典故の連結表現——とりわけ「明月璧」のような典故の壓縮といつても良いような表現——には「擬古」や「復古」からはみ出す彼らの文學の特色が表れている。「擬古」や「復古」といった便利な言葉に頼らず、この種の表現が切り拓いた詩境の文學史上の位置について考えていくべきであろう。

(二) 江戸漢詩における「珠」「璧」の連結表現
徂徠學派は李攀龍らの影響を受け、「珠」「璧」を連結した表現を用いた。

還投白璧似明月 還た投ず白璧の明月に似たるを
誰道今無按劍人 誰か道ふ今劍を按ずる人無きと²⁴⁾

隙過白馬驍騰色 隙は過ぐ白馬驍騰の色
影沒明珠十五城 影は沒す明珠十五城²⁵⁾

「明月璧」と高野蘭亭

前者は徂徠の弟子で大名の本多猗蘭、後者は徂徠學派第二世代に屬する石島筑波の詩の一節である。少し變わつた例には、秋元澹園が嵐山に住む入江若水を詠んだ詩がある。この詩では、「連城」を城闕の意で用いており、「明月」と「連城」は縁語のような關係になつてゐる。

聞説君家接帝京 聞説く君が家は帝京に接すと
握中明月照連城 握中の明月連城を照らす
城頭那得無秋色 城頭那ぞ秋色無きことを得ん
作賦須成潘岳名 賦を作りて須く潘岳が名を成すべし²⁶⁾

「明月(珠)」を修飾するのに「握中」の語を用いるのは、「握中明月誰相賞(握中の明月誰か相賞ばん)」という王世貞の表現に基づいている。徂徠學派に限らず、李王の影響を受けた木門の詩人にも同様の表現は見られる。新井白石と室鳩巢の用例を擧げる。

朱絃堪奏陽春曲 朱絃奏するに堪ふ陽春の曲
白璧難酬明月輝 白璧酬ひ難し明月の輝き²⁷⁾
始信英材能照國 始めて信ず英材能く國を照らすを
何須明月購連城 何ぞ須ひん明月連城を購ふを²⁸⁾

「明月璧」に關していえば江戸漢詩においてもその用例は稀であり、管見の及ぶ範圍でこの語を複数回用いているのは高野蘭亭(『蘭亭先生詩集』七例)、横谷藍水(『蘭水詩草』二例)のみである。藍水は蘭亭の門下なので、藍水の二例には蘭亭からの影響があろう。蘭亭の用例を

いくつか引いておこう。

即ち懐く明月の璧

按劍總堪疑 劍を按じて總て疑ふに堪えたり⁽³⁴⁾

一抱誰か高し明月の璧

三盃應醉玉壺氷 三盃應に酔ふべし玉壺の水⁽³⁵⁾

爲汝便探明月璧 汝が爲に便ち探る明月の璧

暗投何必待先容 暗に投ずるに何ぞ必ずしも先容を待たん⁽³⁶⁾

蘭亭の七例は少ないと思われるかもしれない。しかし、中國の別集における最多の用例数が吳國倫『甌窰洞稿』の四例であったことを考えれば、蘭亭の用例数は際立っている、

ちなみに高野蘭亭は、「明月抱連城（明月連城を抱く）」、「明月千秋懸趙璧（明月千秋趙璧を懸く）」といったように、「明月璧」以外にも、「珠」

「璧」を連結した表現をたびたび用いている。

三、「明月」の詩人

(一) 蘭亭と「明月珠」「連城璧」

なぜ、蘭亭は多く「明月璧」の語を用いるのか。それは彼の閱歴と關係している。

蘭亭は十七歳頃に視力を失い、徂徠の助言にしたがい、詩人として一家を成すことを志した。『徂徠集』に見える蘭亭宛ての詩は一首のみで、蘭亭の失明に觸れている。

多病學詩詩已成 多病詩を學び詩已成る

沈吟何妨喪雙明 沈吟何ぞ妨げん雙明を喪ふを

且言徑寸珠無恙 且つ言ふ徑寸珠恙無し

論價還堪十五城 價を論ずれば還た十五城に堪へたり⁽³⁸⁾

起承句は、蘭亭は多病でありながら詩を學び、詩はひとかどのものになった。失明したことは詩を作る上で妨げとはならない——といった意味である。轉句の「徑寸珠」は、「隨侯之珠」||「明月珠」を指す。「隨侯之珠」は、隨侯が傷つけた蛇を助けたところ、蛇が恩に報いるために銜えてきた珠であると傳承されている。その珠の大きさは「徑寸」（直徑一寸）であった。

蛇銜明珠以報之。珠盈徑寸、純白、而夜有光明如月之照可以燭室。

故謂之隨侯珠、亦曰靈蛇珠。又曰明月珠。⁽³⁹⁾

蛇明珠を銜みて以て之に報ふ。珠は徑寸に盈ち、純白にして、夜光明有ること月の照らすが如くにして以て室を燭らす可し。

故に之を隨侯の珠と謂ひ、亦た靈蛇の珠と曰ひ、又明月の珠と曰ふ。

結句は、蘭亭が入門した時に徂徠が蘭亭を「連城璧」と目したことを踏まえる。この話は、松崎觀海「東里先生壽藏記」と藤山惟熊「東里先生墓誌銘」のいずれにも見え、蘭亭の人生において重要な出来事であった（「東里」は蘭亭の別號である）。

夫子奇之目以才抵連城^①。
夫子之奇として目するに才連城に抵たるを以てす。

先生初見奇之、目以趙璧抵連城^②。
先生 初めて見て之を奇とし、目するに趙璧 連城に抵たるを以てす。

つまり、轉結句は、失明してもあなたの「明月珠」（＝才智）は損われず、その價は變わらず十五城に匹敵するほどだ——といった内容であり、徂徠は「明月珠」「連城璧」の典故を連結して用い、蘭亭の不運を慰めたのである。

蘭亭が徂徠に贈った詩にも同様の表現が用いられている。

曾向荆山抱璧歸 曾て荆山に向かひて璧を抱きて歸る

懷中明月帶光輝 懷中の明月光輝を帶ぶ

應憐此日陵陽淚 應に憐むべし此の日陵陽の涙

更說連城識者稀 更に説く連城識者稀なりと

承句の「明月」は「明月珠」を指し、起句と轉結句は「下和泣玉」を典故とする。「連城璧」は別名「和氏之璧」であり、發見者の下和の名にちなむ。下和は荆山において璧の原石を發見し、楚の厲王と武王に獻上したが、信用されず、足斬りの刑に處せられて兩足を失った。三度目の獻上で原石の價値は認められ、下和はその功績によって「陵陽侯」に封ぜられたものの、それを辭退した。轉句の「陵陽淚」は、下和が自らが足斬りの刑に遭ったことよりも、玉の眞價が認められな

いことを嘆いて泣いたことを踏まえる。つまり、轉結句は、「明月珠」「連城璧」になぞらえられる自己の才能が世に認められないことの悲嘆を述べている。この詩でも「珠」「璧」は區別されていない。

このようなやり取りを通じて、蘭亭は「明月珠」「連城璧」の連結表現に深く愛着を懷くようになり、「明月璧」という奇語を自己の詩で用いたのであろう。

蘭亭を「連城璧」「明月珠」に比した徂徠の言葉と詩は、渾名を付けるような一種の名付けであると見ることでもできる。徂徠の門弟に對する名付けについては、安藤東野の事例が参考になる。徂徠は、安藤東野に「東璧」という字を與えており、命名の理由について次のように説いている。東野の家は三代にわたり亥年生まれであり、亥の方角にある星辰の「東璧」は圖書を象徴し、詩文に秀でた東野は「東璧」の「精」があつまつて生まれたと思われるので、「東璧」は彼の字に相應しい——と。

東野が早世した直後に書かれた徂徠の書簡には次のようにある。

去明十三日、藤煥圖遂下世矣。渠十年來時時嘔血。自謂吾終當從李賀之後、繼天上白玉樓記也。人咸笑、文人傲誕迺爾。何其信然。及病篤飲啖若平生。十二日、不佞往視、則相顧曰、「歲在大淵獻、吾歸東璧之期至也。世世肝既已嘔盡」。辭氣壯甚。渠蓋記不佞所爲字說中語云爾。

去明十三日、藤煥圖（安藤東野）遂に下世す。渠十年來時時嘔血す。自ら謂へらく吾終に當に李賀の後に從ひて、天上白玉樓の記を繼ぐべきなりと。人咸笑ひ、「文人の傲誕迺爾り。何ぞ

其れ信まことに然らん」と。病篤きに及ぶも飲啖平生の若し。十二日、不佞往きて視れば、則ち相顧みて曰く、「歳は大淵獻に在り、吾東壁に歸るの期至るなり。世心世肝す既に嘔き盡くす」と。辭氣壯なること甚し。渠蓋し不佞の爲る所の字說中の語を記して爾云ふ。

歿する前日に、東野は徂徠に「今年は亥年で、私が東壁に歸る時がやつて来たのです。俗人としての心肝は咯血で既に吐きつくしました」と述べたという。臨終の床で東野は、師から與えられた名にちなんだ物語に自己を託していた。尊敬する師の名付けは、弟子たちにこれほどに重い意味を持ったのである。

蘭亭は自己の居宅を「明月樓」と命名した。典據は庾亮が武昌の南樓の上で下僚とともに明月を眺めて楽しんだという故事であろう。さらにこの稱は「明月珠」「連城壁」の連結表現を意識していたと考えられる。「明月樓」での蘭亭の作には次のようにある。

懷裡難投明月壁 懷裡投じ難し明月の壁
詞場先動碧雲吟 詞場先づ動く碧雲の吟⁽⁸⁾
明月空懷和氏璧 明月空く懷く和氏の璧
陽春重唱郢人篇 陽春重ねて唱ふ郢人の篇⁽⁹⁾

「明月樓」の名は、蘭亭と「明月珠」「連城壁」の連結表現の関係を一層堅固にしたといえよう。

(二) 高野蘭亭と秋山玉山

蘭亭は「明月珠」「連城壁」の連結表現に格別の思い入れを有していた。しかし、彼はこの表現を自己にのみ用いたわけではない。旗本で太宰春臺門の土屋繩直に對して「連城明月懷和璧(連城明月和璧を懷く)」といった表現を蘭亭は用いており、また肥後細川家の儒者である秋山玉山の詩集に寄せた古詩には次のようにある(この詩は『玉山先生詩集』の卷末に掲載されている)。

一握明月夜光璧 一握明月夜光の璧
高價誰當十五城 高價誰か當たらん十五城
異代詩名長不朽 異代の詩名長へに朽ちず
吟來擲地金石聲 吟來地に擲てば金石の聲⁽¹⁰⁾

「高價誰當十五城」の句は、徂徠が蘭亭に贈った詩の「論價還堪十五城」を思わせる。この句には、玉山は自己に匹敵する詩才の持ち主であるといった含意があったのかもしれない。

秋山玉山の「明月珠」「連城壁」の連結表現に對する態度は興味深い。『玉山先生詩集』『玉山先生遺稿』所收の諸作を檢討すると、玉山は蘭亭に關わる詩二首おいてのみこの表現を用いていることが分かる。一首は「陪宇土侯宴高子式明月樓(宇土侯に陪して高子式の明月樓に宴す)」である。

峻嶒樓閣枕萱洲 峻嶒たる樓閣萱洲に枕し
小隊風流載酒遊 小隊風流酒を載せて遊ぶ
好是連城明月色 好し是れ連城明月の色

夜深偏向使君投 夜深くして偏へに使君に向けて投ぜん⁵²

起句の「萱洲」は明月樓のあつた茅場町をいう。承句の「小隊」は杜甫の「元戎小隊出郊坻、問柳尋花到野亭（元戎小隊 郊坻に出で、柳を問ひ花を尋ね野亭に到る）」という詩句を踏まえ、ここでは宇土侯（細川興文）とその供回りを指している。結句の「使君」も宇土侯を指しており、轉結句は「連城明月」のような優れた詩篇を宇土侯に贈るのにちやうど良い機會だ——と述べている。「連城明月」は「明月樓」にちなんだ表現であり、玉山は「明月樓」と「明月珠」の故事を結び付けて認識していたことが分かる。

もう一例は蘭亭の死を悼んだ七律の連作に次のようにある。

逝矣山人一草堂 逝く山人の一草堂

床頭詩卷動精靈 床頭の詩卷精靈を動かす

投珠終暗連城夜 珠を投じて終に暗し連城の夜

掛劍偏寒處土星 劍を掛けて偏に寒し處士の星⁵³

「連城」は前引の秋元澹園の詩のように縁語的に用いられており、ここでは茅場町から望む江戸城を指していると考えられる。よつて第三句は、「明月珠」のように光り輝く詩を作つていた蘭亭が逝去し、江城も夜の闇に包まれているといった意味であろう。

蘭亭と玉山は盛んに詩を應酬しており、「最も親しい詩友」の関係であつたと評される。玉山は、蘭亭の好む表現として、「明月珠」「連城壁」の連結表現を記憶しており、蘭亭に關わる詩においてそれを用いたのであろう。

四. おわりに

かつて日野龍夫は、徂徠學派は古人の詩文を模倣し、古人になりきること、自己を安定した様式の中に「收束」させようとしていたと論じた⁵⁴。詩文の制作の基底にある自己認識に光を當てた優れた議論である。

高野蘭亭と「明月珠」「連城壁」の連結表現の關係は、それとは異なる徂徠學派の人士の自己認識の在り方を示している。蘭亭は、古代の人物に自己をなぞらえることもあつたが、それだけでなく自己を特定の表現と結び付けて捉え、その連關に基づいて詩想を膨らますことがあつた。いふなれば、蘭亭は古文辭派の典據表現の體系の中に自己を定着させていたのである。

蘭亭以外にも服部南郭は、赤羽川の近くに居を構えたことから、『莊子』天地の「赤水玄珠」の故事をしぼしぼ用い、彼の周囲の學者・文人の間では南郭といえは「赤水玄珠」という連想が共有されている⁵⁵。自己を特定の典據表現と連關させて生き、その連關とともに人々に記憶される——このような生の在り方にとつて、同一表現の反復は自己と表現の連關を強固にするために欠かせない。性靈派などによる徂徠學派の詩を陳腐であるとする批判は、かかる生き方に對する否定でもあつたといえよう。

注

(1) 『唐詩選』の受容史については、有木大輔『唐詩選版本研究』（好文出版、二〇一三年）、大場卓也（編）『江戸人、唐詩選に遊ぶ——久留米大學文學部創立二十五周年記念特別企畫御井圖書館貴重資料展』（久留米

- 大學文學部、二〇一七年）参照。
- (2) 李攀龍「送吳郎中獻獄江西」第二首（荻生徂徠『絕句解』七絶上、三才、延享三年刊）。『絶句解』はこの句に注して「李白句法（李白の句法）」という。
- (3) 李白「陪族叔刑部侍郎曄及中書賈舍人至遊洞庭湖」（李攀龍〔編選〕・服部南郭〔考訂〕『唐詩選』卷七、四ウ、寛保三年刊、早稲田大學圖書館藏）。
- (4) 熊阪台州「白雲館近體詩眼」（寛政九年刊、慶應義塾大學圖書館藏）。
- (5) 楊炯「夜送趙縱」（入江南溟『唐詩句解』五言絶句、一ウ、享保二十年序）。
- (6) 『史記』卷八十一、藺相如列傳。
- (7) 前掲『唐詩句解』五言絶句、一ウ。
- (8) 鄒陽「獄上書自明」（『文選』卷三十九、上書）。
- (9) 戸崎淡園『箋註唐詩選』卷六、二才、天明四年刊。
- (10) 鈴木澹洲『撈海一得』卷下、二十五ウ、明和八年刊、慶應義塾大學圖書館藏。
- (11) 李攀龍「重別魏使君」（前掲『絶句解』七絶下、二十九ウ）。
- (12) 同右。
- (13) 同「寄茂秦」（前掲『絶句解』七絶上、十二才）。
- (14) 『史記』卷七十六、虞卿列傳。
- (15) 『老子』下篇、七十章。
- (16) 他の例については、高山大毅「古文辭派詩の修辭技法——縁語掛詞的表現と名にちなんだ表現」（『國語國文』第八十九卷、二號、二〇二〇年）参照。
- (17) 太宰春臺「詩論附録」、十二ウ（同『詩論』、安永二年刊、新潟大學附屬圖書館藏）。
- (18) 以下、『文選』卷一、賦甲。
- (19) 李白「繫尋陽上崔相渙」（李白〔著〕・王琦〔注〕『李太白全集』卷十一、六〇二頁、中華書局、一九七七年）。他には同「贈崔司戸文昆季」（「雙珠出海底、俱是連城珍（雙珠海底より出で、俱に是れ連城の珍）」とある（同右、卷十、五三八頁）。ただし、このような表現は稀である。
- (20) 朱謙「李詩選注」（裴斐・劉善良〔編〕『李白資料彙篇 金元明清之部』、中華書局、一九九四年、二五二頁）。
- (21) 李攀龍「滄溟先生集」卷六、上海古籍出版社、二〇一四年、一六五頁。
- (22) 「中國基本古籍庫 V.07.0」（愛如生）
- (23) 『四庫全書總目提要』は『薛荔園集』について、「其詩以雄麗高峭爲宗、聲調氣格頗近七子。故王世貞贈詩云《以下略》（其の詩雄麗高峭を以て宗と爲し、聲調氣格は頗る七子に近し。故に王世貞詩を贈りて云ふ《以下略》）」と説く。
- (24) 同様の例に王世貞らが用いる「歌中雪（歌中の雪）」という語がある。
- (25) 前掲「古文辭派詩の修辭技法」参照。
- (26) 本多猗蘭「懷子和」（同『猗蘭臺集』初稿、卷三、二十八才、享保十七年刊、慶應義塾大學圖書館藏）。
- (27) 石島筑波「哭倉美仲」第二首（同『菱荷園文集』卷四、三ウ、明和七年跋、國文學研究資料館藏）。
- (28) 徂徠學派の詩の縁語掛詞的表現については前掲「古文辭派詩の修辭技法」参照。ちなみに南郭は大坂について「連城尙匿荆人壁、巨海曾通漢使船（連城尙ほ匿す荆人の壁、巨海曾て通す漢使の船）」と詠じており、これも「連城」を城闕（大坂城）の意で用いていると考えられる（服部南郭「早春送人之泉南」（同『南郭先生文集』初編、卷四、三ウ、享保十二年刊（日野龍夫〔編集・解説〕『南郭先生文集』、近世儒家文集集成第七卷、べりかん社、一九八五年））。

- (28) 秋元澹園「懷江若水」(同「澹園初稿」卷中、三十ウ、享保十四年刊、國立國會圖書館藏)。
- (29) 王世貞「答張幼子」(『國朝七子詩集註解』卷二、九ウ、延享四年刊)。
この表現については前掲「古文辭派詩の修辭技法」で詳述した。
- (30) 新井白石「錦里先生宴上和南南山韻」(同「白石先生餘稿」卷一、二ウ、正徳五年序、早稲田大學圖書館藏)。
- (31) 室鳩巢「別賦呈一座諸君」第五首(同「後編鳩巢先生文集」卷三、十三才、寶曆十四年刊〔杉下元明「編集・解説」』鳩巢先生文集』、近世儒家文集集成第十三卷、ぺりかん社、一九九一年)。
- (32) 「日本漢詩」第一輯〜第三輯(凱希メディアデータベース)を用例の檢出に利用した。左に紹介する三例以外の四例は次の通りである。高野蘭亭「秋日宇土侯鑑水亭雨集、懷大川上人」(『蘭亭先生詩集』卷三、十才、寶曆八年刊、國文學研究資料館藏)、同「歲暮泉侯千秋館席上奉答見贈」(同右、卷六、三ウ)、同「明月樓集、贈菊庵禪師」(同右、卷六、十二ウ)、同「參議小倉公會惠書及詩兼索拙稿、懼疾久矣。終無奉復。頃因肥藩秋文學東遊、復賜書輒賦此奉答」(同右、卷七、七才)。蘭亭は生前に詩稿を自ら焼却したため、『蘭亭先生詩集』の收録詩は完備したものではない。しかし、殘存した詩にこれだけの用例があることは、充分な指標となる。蘭亭の傳記については、高橋昌彦「高野蘭亭傳攷」上下(『語文研究』第六十號、九州大學國語國文學會、一九八五年、同右、六十一號、一九八六年)参照。
- (33) 横谷藍水「夏日從桃源越君過鳥山老侯幽居」(同「藍水詩草」卷三、二十一ウ、安永九年刊、慶應義塾大學圖書館藏)、同「答大公達病中見寄」(同右、卷四、十ウ)。
- (34) 高野蘭亭「寄子祥」(前掲『蘭亭先生詩集』卷三、二十一才)。
- (35) 同「雨後登樓小酌得水字」(同右、卷六、十才)。
- (36) 同「雨中文卿昭德過明月樓得重字」(同右、卷八、一ウ)。
- (37) 同「卜居雜詠」第六首(同右、卷三、九才)。
- (38) 同「宇土侯凌霄閣」(同右、卷六、八ウ)。
- (39) 荻生徂徠「贈高生」(同「徂徠集」卷七、十六ウ、元文五年刊〔平石直昭「編集・解説」』徂徠集 徂徠集拾遺』、近世儒家文集集成第三卷、ぺりかん社、一九八五年)。
- (40) 干寶「搜神記」卷二十。『白孔六帖』卷七にも節略されてれた形で載る。
- (41) 松崎觀海「東里先生壽藏記」(前掲『蘭亭先生詩集』附録、一ウ)。
- (42) 藤山惟熊「東里先生墓誌銘」(同右、附録、四オ〜四ウ)。
- (43) 高野蘭亭「奉答徂來先生見寄」(同右、卷九、一ウ)。
- (44) 「韓非子」和氏を典故として「蒙求」などを介して良く知られた故事である。下和が「陵陽侯」を辭した話は、『藝文類聚』(卷八十三、玉)所引の「琴操」などに見える。
- (45) 荻生徂徠「膝煥圖字說」(前掲『徂徠集』卷十六、一オ〜二ウ)。
- (46) 同「與下館侯」(前掲『徂徠集』卷二十、十六才)。
- (47) 劉義慶(撰)・何良俊(增)・王世貞(刪定)『世說新語補』卷十三、容止、十二ウ、萬曆十四年序、早稲田大學圖書館藏)。
- (48) 高野蘭亭「明月樓集贈菊庵禪師」(前掲『蘭亭先生詩集』卷六、十二ウ)。
- (49) 同「石仲綠過訪明月樓、携詩見贈。不見仲綠已十餘年、話舊喜而爲答」(同右、卷六、十四ウ)。
- (50) 同「得士準夫駿中書及詩答寄」第二首(同右、卷六、二ウ)。
- (51) 同「題秋文學詩篇」(同右、卷二、九才)。
- (52) 秋山玉山「陪宇土侯宴高子式明月樓」(同「玉山先生詩集」卷六、五ウ、寶曆四年刊、國文學研究資料館藏)。本詩に關しては、「連城明月」

は「連城（璧）」「明月（珠）」を並列しただけで、兩者を連結させた表現ではないという解釋もあり得よう。しかし、玉山は、注(37)に挙げた「卜居雜詠」第六首の表現などを念頭に置いていたのではなからうか。

(53) 杜甫「嚴中丞枉駕見過」(邵傳〔集〕)『杜律集解』七言卷上、四十五才、元祿九年刊、早稻田大學圖書館藏。

(54) 秋山玉山「哭高子式山人」第三首(『玉山先生遺稿』卷三、十五才、安永三年序、早稻田大學圖書館藏)。第三句は難解で、第四句の「掛劍」と同じく、「投珠」の主語は玉山である可能性もある。蘭亭は松崎觀瀾の死を悼む詩で「明月連城失夜光(明月連城 夜光を失ふ)」いったように、「明月連城」が光を失うという表現を用いている(高野蘭亭「哭崎子允」、前掲『蘭亭先生詩集』、卷七、七ウ)。注(26)の石島筑波の詩も同趣向である。玉山のこの詩も同様の發想であると解釋した。

(55) 徳田武『江戸詩人傳』、ぺりかん社、一九八六年、一七五頁。

(56) 日野龍夫「演技する詩人たち——古文辭派の詩風」(同『江戸の儒學』、日野龍夫著作集第一卷、ぺりかん社、二〇〇五年)。學者・文人の自己認識の問題をめぐるのは島田英明『歴史と永遠——江戸後期の思想水脈』(岩波書店、二〇一八年)が示唆に富む。

(57) 南郭の諸作は、服部南郭「赤水春興」三首(同『南郭先生文集』二編、卷三、九才、元文二年刊〔前掲『南郭先生文集』〕)、同「中秋獨酌」(同『南郭先生文集』三篇、卷三、延享二年、十三ウ〔前掲『南郭先生文集』〕)など。同様の趣向の南郭以外の人物の詩には、石島筑波「九日早過芙蓉館賦奉南郭先生」(前掲『荳荷園文集』卷三、十四才)十四ウ)、千葉芸閣「哭南郭服先生二首」(同『芸閣先生文集』卷三、七才、安永六年刊、國立國會圖書館藏)、秋山玉山「芙蓉館看花留別服子遷」(前掲『玉山先生遺稿』卷三、八才)がある。

*漢詩文の引用に際し、文意を鑑み、板本の返り點・送り假名に従わなかった箇所がある。所藏機關を明記していない江戸期の板本は架藏本を用いた。本稿はJSPS科研費20K12910(「古文辭派詩の新研究」)の成果の一部である。

懷德堂の統治論——徂徠學との思想的接續——

黒田 秀 教

一、はじめに

日本近世の儒教史について、徂徠學を分水嶺とする學術史觀は江戸時代中期に既に登場している。即ち湯淺常山が「徂徠學ニテ世間一變スト。然ドモ徂徠一生ノ間ハ人半信半疑ヲ、今ノ世文物ノ開キタルヲ見セマセバ、サゾ悅ナルヲメ。」^①と云うが如きである。常山は荻生徂徠高弟の服部南郭に學んでおり、この言は徂徠學内部より發せられているが、しかし徂徠學の登場をエポックメイキングと看做すことは、今日においても首肯されていよう。この徂徠學は、小島康敬が「徂徠は従來の儒學——特に批判の對象としたのは朱子學——の政治的思惟の貧困を克服せんとして、儒教を私的な「心法の學」から公的な「經濟民の學」へと切りかえ^②」たと言うように、政治的志向性が高かつたことに特色がある。

ところで、徂徠學が席捲するようになると徂徠學への批判も巻き起こり、大坂にあつて反徂徠の急先鋒であつたのが官許學問所の懷德堂であつた。懷德堂は中井竹山・履軒兄弟の時に全盛期を迎えるが、兄弟の師であり懷德堂で教授していた五井蘭洲が、朱子學を擁護する見

地より反徂徠の旗幟を鮮明にしたことで、反徂徠という學派的傾向が形成された。懷德堂の反徂徠學という性格は、江戸時代中後期には廣く認識されていたようであり、原念齋『先哲叢談』五井蘭洲の條には「蘭洲朱學を家庭に承け、力めて徂徠を斥け宋儒を護る。(蘭洲承朱學於家庭、力斥徂徠護宋儒)」^③とあり、廣瀬淡窓『儒林評』中井竹山の條には「竹山ハ非徂・逸史等ノ書ヲ著シ、其名天下ニ傳ヘタリ。但シ非徂ハ壯年ノ作ニテ、晩年ニハ大ニ悔イシトカ承ル」^④と紹介され、徂徠『論語徵』を駁した『非徂』が竹山の主著とされている。

もつとも、後發の思想が先發の思想の影響を全く蒙らないということとはなく、懷德堂の朱子學にも徂徠學の政治的志向が受け繼がれていると指摘されている。即ち、平重道が徂徠學によつて學問の領域が經學と經世の學問との兩部門に分たれ、この體系が竹山に繼承されていったとし、藤居岳人が懷德堂の朱子學は政治を重視する點において、徂徠學と共通性を有していたと言うが如きである。^{⑤⑥⑦}

確かに懷德堂諸儒の言説を見ると、政治的發想に基づく所論が目につく。例えば懷德堂を代表する學說としては無鬼論が夙に著名であるが、鬼神の有無という宗教的・存在論的命題について、履軒は政

治的觀點より無鬼を主張するのである。⁽⁸⁾

しかし、實は經世の分野において懷德堂が徂徠學を襲つていたのは、政治を重視するという傾向・志向に止まる話では無い。統治の方法論という具體的内容も徂徠學を踏まえて展開されているのであるが、從來はこうした具體性について十分に検討されてこなかった。そこで本論では、懷德堂の統治論を朱子學・徂徠學と對照することで、徂徠學より懷德堂へと至る政治的儒教としての思想史的脈略について考へて行きたい。

具體的には、朱子學・徂徠學・懷德堂という三者の比較については、朱子學の統治論を朱子の言説及び朱子學の立場から徂徠を批判したこともある室鳩巢に確認し、次いで徂徠學を見ていき、それを踏まえて懷德堂の所説を検討していく。その際、統治論の具體的政策としては、奢侈抑制に注目する。これは江戸時代中後期にあつて極めて重大な政治問題になつており、室鳩巢・荻生徂徠・懷德堂諸儒は皆な儉約令の實效を目して政策案を述べていることから、三者の統治論を比較検討する上でまたとない好材料になるからである。

二、朱子學者の儉約論

統治に際し、人の心を改めていくことは、儒教思想としては有り觸れたものである。しかし、その方法論には學派の特色が表れやすく、朱子學では『大學』の「新民」を解釋して次のように説く。

新とは、其の舊きを革むるの謂ひなり。言ふところは、既に自ら其の明德を明かにすれば、又た當に推して以て人に及ぼし、之をして亦た以て其の舊染の汚を去らしむること有るべし。(新者、革其舊之謂也。言既自明其明德、又當推以及人、使之亦有以去其舊染之汚也。)

〔『大學章句』經一章〕

「新民」を、有徳者が自己の徳を押し廣げて民衆を教化することであるとし、その果てに治國平天下が齎らされると言う。それは、主體が君主に非ざる場合でも同様であつた。

曰く、治國平天下は天子諸侯の事なり。卿大夫以下は、蓋し與ること無からんか。……曰く、……。或いは勢は匹夫の賤に在ると雖も、而も以て其の君を堯舜とし、其の民を堯舜とする所以の者は、亦た未だ嘗て其の分の内に在らずんばあらざるなり。

(曰、治國平天下者天子諸侯之事也。卿大夫以下、蓋無與焉。……曰、……雖或勢在匹夫之賤、而所以堯舜其君、堯舜其民者、亦未嘗不在其分内也。)(『大學或問』卷一)

その身が卑賤な匹夫であろうとも、自己の明德によつて君主や民を堯舜のような有徳者たらしむることにより、治國平天下に貢獻するのである。

このように、朱子學における統治論では道徳的人物が主體になり、その有徳者が身に培つた徳性によつて民衆の心に働きかけることで、民衆をも道徳に目覺めさせ、太平の世を實現する。つまり、人の外部より心を拘束矯正せしめる制度法令の類は、基本的に統治の主要な方法論として教説に組み込まれることはない。

では、斯る朱子學的思惟に準據した場合、現實の政治的懸案事項に對して如何なる對策を考へることになるのか。江戸中期を代表する朱子學者であり、徳川吉宗の下で享保の改革を輔佐した室鳩巢は、奢侈抑制について次のように語っている。

されど古より太平百年に及び候へば、大かたは奢侈風をなし候。今奢侈を抑へ、儉素を崇んとならば、節儉廉直の士を撰んで官に

有しむるにあり。號令科條の及べきにあらず。第五倫いへらずや、「以身教者從。以言教者訟。」官長身正しければ、一官の畏愼ておのづからしたがひ、官長正しからねば言語をもて教といへど、其下争訟て心服せず。法令屢下れども、いよいよ多事になりて治まりがたし。所詮官長その人にあらざればなり。もとより國政は、法令を闕くべからずといへど、法は人をもて行はる。人なければ法虚しく行はれず。孔子も「爲政在人。其人存則政舉。其人亡則政息」とのたまへり。〔駿臺雜誌〕卷之二 天下の寶¹¹

奢侈を抑制したければ、質素儉約にして清廉な者を選抜し、これを官吏として登用すればよく、法令や命令などでは果たせぬと言う。官長が品行方正であれば、その下の官吏も畏れ愼み、自然に従うようになるが、官長が正しい人物でなければ、いくら言葉によつて教化しても、下の者は反發して従おうとしない。また法令を屢々降しても、ますます煩雜になつて治め難くなるが、これも官長が相應しい人物でないからである。そもそも國家を治めるために法令は缺かせぬが、法は人によつて運用される。相應しい人物が上にいなければ法も實體を伴わなくなり行われぬのである。

このように、鳩巢は有徳者を爲政者に据えることを奢侈抑制の要とし、その道徳性によつて下の者を畏服せしめ従わせるとして、法令制度の類を統治の根本的手法としては位置付けない。これが朱子學の統治原則を襲つたものであることは、言を俟たぬであらう。

また、命令や法令の無力さについては、次のようにも語る。
さる程に號令法度も、それにて一過は改るやうなれども、つひに風俗にけをされて、あまねく下へ達しがたく、ながく末まで遂ぎる程に、ただ局面ばかり取傳て、はては風俗のなりになりてやむ

ぞかし。……、政令の行はれん事を欲せば、風俗をととのふるにしくはなし。されば風俗のもと人君の身にあり。人君たる人、身をおさめて下を化するといふは、古今不易の道なり。……。風俗を維持する事は、君一人の力にては及がたし。時の執權をはじめ、もろもろ官長として群下の上ををる人、各君の意をうけて身をおさめ行を愼て、人の手本となるやうにだにあらば、其下にたつ人おのづから恐るる事あり恥る事ありて、法令もきくべき程に風俗も改りてゆくべし。〔駿臺雜誌〕卷之二 風俗は政の田地¹²

號令や法令によつて一時的に改まることはあつても、結局は風俗―世の風潮―に押し流されて下々まで達せず、長く効力は續かない。よつて、政令に實効性をもたせるには風俗を整えるしかないが、風俗の基礎は君主自身であり、君主以下の爲政者が人の手本となるようにしていれば、下にいる者も自然と従い、法令も效力を發揮できるような風俗に改まると言うのである。

鳩巢は、爲政者が法令などの政治的作爲によつて爲政者の意圖を實現するためには、それに先んじて風俗を整えねばならぬとし、そのために有徳の爲政者が道徳的行爲を實踐し、民を感化せねばならぬとする。つまり、民の心は政策によつて改めることはできず、爲政者の道徳性によつてのみ、それが可能とされるのである。風俗とは社會的環境と換言できようが、朱子學的思惟による統治論を圖式化すれば、「心↓行爲↓環境↓政策」ということにならう。

三、徂徠學の奢侈抑制論

次に、徂徠學の場合を見ていこう。徂徠は奢侈抑制について、斯く述べる。

制度ト云ハ法制節度ノ事也。古聖人ノ治ニ制度ト言物ヲ立テ、是ヲ以テ上下ノ差別ヲ立、奢ヲ押へ、世界ヲ豊カニスルノ妙術也。

〔『政談』卷之二〕

古の聖人―徂徠學では爲政者―は、法制や指示によつて制度を整え、それにより上下の身分を確立して奢侈を抑制し、世を豊かにしたと言ふ。

また、次のようにも語る。

一年儉約ノ被仰渡アレドモ、元來無制度故、可被仰出様ナシ。唯何百目以上ノ物ヲ用ヒ間敷キトノコト也。物ノ品ニテハ不分シテ、價ヲ分ルコト不審也。價ハ時ニ隨テ高下スル。畢竟商人ナラデハ價ハ知ヌコトナレバ、唯被仰出タル迄ニテ、人々はヲ守ヤラン、背ヤラン、知人ハナシ。免角制度ヲ不立シテ、儉約ハ決シテ立ヌコト也。〔『政談』卷之二〕

一年間儉約せよと命じたところで、制度がなければ實効性はないのであり、免にも角にも制度を立てねば儉約は實踐できぬと言ふ。

このように、徂徠の奢侈抑制の方策には爲政者の道徳性は織り込まれず、制度を整えることのみが唯一の手段とされる。なお、徂徠は朱子學の徳治主義を批判して、次のように語っている。

此故に聖人の道も専ら己が身心を治め候にて相濟み、己が身心さへ治まり候へば、天下國家もをのづからに治まり候と申候説は、佛老の緒餘と可被思召候。〔『徂徠先生答問書』上〕

修身して道徳性を身につければ太平の世を實現できるといふ學説は、佛教や道家の残りカスの如き代物なのである。

では、制度を整えれば人はどうなるのか。

蓋し先王は言語の以て人を教ふるに足らざるを知るや、故に禮樂

を作りて以て之を教ふ。政刑の以て民を安んずるに足らざるを知るや、故に禮樂を作りて以て之を化す。禮の體爲るや、天地に蟠り、細微を極め、物ごとに之が則を爲し、曲ごとに之が制を爲し、而て道焉に在らざる莫し。君子は之を學び、小人は之に由る。學ぶの方は、習ひて以て之に熟し、默して之を識る。默して之を識るに至れば、則ち知らざる所有ること莫し。豈に言語の能く及ぶ所ならんかな。之に由れば則ち化す。化するに至れば、則ち識らずならず、帝の則に順ふ。豈に不善有らんかな。是れ豈に政刑の能く及ぶ所ならんかな。夫れ人は言へば則ち諭る。言はざれば則ち諭らず。禮樂は言はざるに、何を以て言語の人を教ふるに勝れるや。化するが故なり。習ひて以て之に熟すれば、未だ諭らずと雖も、其の心志身體、既に潜かに之と化す。〔蓋先王知言語之不足以教人也、故作禮樂以教之。知政刑之不足以安民也、故作禮樂以化之。禮之爲體也、蟠於天地、極乎細微、物爲之則、曲爲之制、而道莫不在焉。君子學之、小人由之。學之方、習以熟之、默而識之。至於默而識之、則莫有所不知焉。豈言語所能及哉。由之則化、至於化、則不識不知、順帝之則。豈有不善哉。是豈政刑所能及哉。夫人言則諭。不言則不諭。禮樂不言、何以勝於言語之教人也。化故也。習以熟之、雖未諭乎、其心志身體、既潛之化。〕〔『辨名』禮 第一則〕

先王は言語による教化や刑罰では、民心を安堵させるに不十分であると分かっていたので、禮樂によつて物事に規則や制度を整え、道を作つた。小人であっても制度に依據すれば、知識として理解せずとも、心や志・身體は無自覺の内に何時しか化するのである。

なお、田原嗣郎は、徂徠のいう制度とは禮であつて禁令ではなく、よつて強いるものではないとしているが、これは政策により、民の取

り得る行動を民に覺られることなく誘導しているということになる。

そして、行爲を繰り返させることにより、民の心を改めていくのである。徂徠は心の問題にはさして感心がなかつたとされるが、この構圖より鑑みるに、行爲と心とは繋がっているという儒者の通念的觀念に、樂觀的に寄掛つていたのであろう。斯る徂徠の統治の方法論を圖式化すれば、「政策↓環境↓行爲↓心」となる。

なお、懷德堂以前における徂徠學の展開を確認するために、經學・經世の學における徂徠の後繼と目された太宰春臺についても、その所説を見ておこう。

中村春作は、伊藤仁齋や徂徠は、「人性」について語る際、つねに全體から、あるいは關わりにおいて人を見る視點、對象物として人や世界を見る視野を維持していた¹⁹⁾が、春臺の登場時期には、それが儒者個々人の内面の問題として捉えられるようになった²⁰⁾と言う。斯る春臺の學問について、尾藤正英は、徂徠の學說における不備―修養の缺如―を補つて個人道德の側面に注力しており、朱子學に近い方向へと逆戻りするような傾向があつたと評している²¹⁾。

しかしながら、春臺の説く修養は、徂徠を援用したものであつた。

又先王の道には、心を治ることをいはず。心は治れるか、治らざるかと問ず、只禮を守るを君子とす。禮を守て身を固むれば、心も漸漸に治まるなり。^(『六經略説』)

春臺は徂徠と同様に、行爲を繰り返すことにより、心も次第に變化して治まるとするのである。

但し、心の修養は目していなかつたことに、留意せねばならぬ。

凡聖人の道には、人の心底の善惡を論ずること、決して無き事なり。聖人の教は、外より入る術なり。身を行ふに先王の禮を守り、

事に處するに先王の義を用ひ、外面に君子の容儀を具たる者を、君子とす。其人の内心は如何にと問はず。^{(『聖學問答』卷之上)²²⁾}
人間の内面の心が如何様であるかは關係なく、外面さえ良ければ君子であると言う。

故に「修身」ですら、春臺は心から完全に切り離してしまふ。

先王の天下を治たまふに、身を修むると本とすといへども、禮儀を以て外を治むるのみにて、心を治むること無し。内心は如何にもあれ、外面に禮儀を守て犯さぬ者を君子とす。^{(『聖學問答』卷の下)²³⁾}

修身とて外面を正すのみであり、心の修養は問われないのである。

斯る春臺の道德論は君子に關するものであるが、尾藤はこれを「人々を社會秩序に馴化させる²⁴⁾」ものであつたと評している。

では、春臺の考える奢侈抑制の方策は如何と問えば、やはり政策によつて制度を整備するというものであつた。

農業ハ至テ艱難ナルコトニテ、終歲勞苦シテ、而モ利潤少ク、嘉穀ヲ食フコトモ能ハヌ故ニ、工商ノ勞苦輕シテ、利潤多キヲ羨ミ、農ヨリ工商ニ遷ル者多シ、縦ヒ住所ヲ城下杯ヘ不移トモ、田舎ニテモ買ヲスレバ、農業ヨリハ利得多キ故ニ、耕作ハ粗略ニシテ、買賣ノコトヲ精勤スル、是民ノ常ノ情也、左様ニアリテハ、國ノ衰微トナル也、子細ハ、農民漸々ニ減少スレバ、米穀乏クナル、工商多クナレバ、種々ノ貨物出生シ、四方ヨリモ聚ル故ニ、人ノ奢侈ノ心ヲ引起シ、金銀ヲ重寶スル風俗ニ成テ、國用漸々ニ匱クナリ、上下貧乏ノ端トナル、國家ノ大ナル害也、是二因テ聖人ノ政ニハ、天下ノ戸籍ヲ正シクシテ、四民ノ家數、人別ヲ度々改テ、農民ヨリ妄ニ他ノ業ニ遷ルコトヲ禁ズル也、當代ニハ此禁ナキ故

二、工商ノ輩日々數多クナリ、在々所々ニ徧滿シテ、人ノ用ヲ辨ズルハ便利ナル様ナレドモ、人ノ侈心ヲ引起シ、金銀ノ貨悉ク買人ノ藏ニ納マル、歎カハシキコトニ非ズヤ（『經濟錄』卷五）⁽²⁶⁾

農民は苦勞多くして利益が少ないため、苦勞少なくして利益多い工商に轉じる者が多いが、これは「民ノ常ノ情」である。工商が多くなれば様々な商品が四方より集まつてくるため、人々は奢侈に趨り、國家に重大な害が齎らされる。そこで聖人の治世では戸籍が整備され、農民が他業種に遷ることを禁じていたが、今の日本にはそのような禁令がないため、嘆かわしいことになっているのである。

また、今擧げた條文の次において、農民を勞苦に勤しましめんとするには、上よりの賞罰によつて民に怠惰の念を起さしめぬことが肝要であり、「畢竟民ハ小兒ノ如ナル者也、上ノ政ト教トニ依テ、善クモ惡クモ成也」と言う。即ち、統治者の政治的作爲によつてのみ民衆の行動は規律され、心情も操作されると言うのである。

このように、徂徠の誘導策に對し、春臺は禁令によつて民に強制するとしており、統治者が民衆を操作する手法には變化が確認し得る。また、春臺は個人道徳に意識を向けていたが、能動的に自己を規律するのは君子に限定され、被治者たる民衆は、統治者の政策によつてのみ規律される受動的な存在とされる。しかし、徂徠及び春臺は、被治者個々人を人格を有した能動的な存在とは認識しない點において差異は大きく、これは徹頭徹尾、上に立つ者が民衆を統御し、社會を護持するという觀點に依つていたとも評せよう。

四、懷德堂の儉約論

前節まで、朱子學と徂徠學とにおける奢侈抑制の方法論を確認して

きた。そこから抽出できる統治論を圖式化すると、朱子學では「心↓行爲↓環境↓政策」、徂徠學では「政策↓環境↓行爲↓心」となっており、見事な對照を描いている。

では、蘭洲以後は反徂徠を唱え、朱子學を宗としていた懷德堂の奢侈抑制策は如何なるものであったのか。まずは蘭洲から検討していこう。

蘭洲の遺稿集である『鷄肋篇』に、「郷校私議」という一篇が収録されている。その命題の由来は、冒頭の自注に斯く述べる。

昔鄭に郷校有り。土相ひ聚まり國政を非議す。黎明之を毀たんと欲す。子産曰く、其の善とする所は吾則ち之を行ふ。其の否とする所の者は吾則ち之を改む。之を若何ぞ其れ毀たんや、と。孔子之を聞きて曰く、人子産を不仁と謂ふも、吾信ぜざるなり、と。擬して郷校私議と爲す。（昔鄭有郷校。土相聚非議國政。黎明欲毀之。

子産曰、其所善者吾則行之。其所否者吾則改之。若之何其毀也。孔子聞之曰、人謂子産不仁、吾不信也。擬爲郷校私議。）（『鷄肋篇』郷校私議）

この逸話は『春秋左氏傳』襄公三十一年傳に見え、『新序』、『孔子家語』も収録し、後に韓愈もこれを題材として「子産不毀郷校頌」を作るといふように、夙に有名な故事である。民間において政策の是非は廣く議論されるべきであり、爲政者はそれを師にするという政治觀を蘭洲は開口一番に据えるが、このことから經濟に言立てせんとする強い政治的志向を有していたことが知れよう。

この「郷校私議」は、「書生」の問いに「文學」が答えるという問答體によつて話が進められ、冒頭では學問の重要性や閑閥による人材登用の非などが論じられた後、國際貿易の制限、及び奢侈の抑制方法が論じられていく。何方も當時における幕政の懸念事項であるが、で

は、儉約について蘭洲は如何なる主張していたのか。

書生曰く、奢を弭め儉に歸するの道之を如何せん、と。曰く、尊卑の章を定め、用度の制を約するに若く莫し。尊卑に章有れば、卑なる者財に富饒なると雖も、而も用ゐる所無し。用度に制有り、易簡なれば從ひ易し。用ゐる所無ければ、貪心消へ、從ひ易ければ爭心熄む。(書生曰、弭奢歸儉之道如之何。曰、莫若定尊卑之章、約用度之制。尊卑有章、卑者雖富饒財、而無所於用。用度有制、易簡易從。無所於用、貪心消、易從爭心熄。)(「郷校私議」)

奢侈を抑制し儉約を実現するためには、尊卑の法制を定め、入費の制度を簡約にするのが最も良い。尊卑の法制を定めれば、身分が低い者は財産があつてもその使い途がなくなり、入費の制度は簡約であれば従ひ易い。財産の使い途がなくなれば贅澤をする心も消え、従ひ易い制度であれば、人と争う心も息むと言う。

このように、蘭洲は制度の確立こそが人をして儉約せしむるために不可欠であるとし、政治的作爲によつて人心を變化させていこうとする。この後、蘭洲は實例として服装を挙げ、現在の衣服はその材料や紋の有無、形状などによつて仕様が細かく分かれ、煩雜な制になつており、薄給であつても體面の問題から一通りは揃えねばならぬが、もし仕様を整理して簡易な制にし、本來の素朴なものに戻せば、支出の負擔を軽減できると言う。⁽³⁴⁾つまり、蘭洲の統治論は過酷な刑罰などにより人民の行動をその意思に反して束縛・強制せんとする類のものでなく、環境を整え、人が自ら儉約するよう仕向けるという類のものなのである。

そして蘭洲は、法、心、行の關係について斯く述べていく。

書生曰く、頻年節用の令下ると雖も、而も人以て具文と爲し、未

だ其の效を見ざるは、何ぞや、と。曰く、法定らざればなり。法定まりて後儉乃ち行ふ可し。儉行はれて人心安んず。人心安んじて土農給す。土農給し、而る後人主豈に特だ上に於て貪れんや。

(書生曰、頻年雖節用之令下、而人以爲具文、未見其效者、何也。曰、法定也。法定而後儉乃可行。儉行而人心安。人心安而土農給。土農給、而後人主豈特貪於上矣哉。)(「郷校私議」)

法が定められて後に儉約が行われ、儉約が行われることで人心は安んずる。そして人心が安んじて始めて武士も農民も生計が成り行き、そうなれば君主も上において奢侈に耽るようなことはできなくなるであろうと言う。

ここで示される法と心、行との關係は、蘭洲を朱子學者として見た場合、違和感を禁じ得ぬであろう。先に確認したように、朱子學的爲政論では有徳の爲政者が人民を教化することで治世を實現させる。ところが蘭洲は、法により環境を整備して人民に望ましい行動を促し、その行動によつて心が治まるとするのである。しかも、人君は、「而る後人主豈に特だ上に於て貪れんや」と述べており、率先して儉約に努め民に範を垂れる存在としては描かれない。

但し、蘭洲も統治者の心については言及しないわけではない。「郷校私議」において書生は開口一番、「董仲舒に言有り、曰く、人君心を正し、以て朝廷を正し、百官を正す、と。心の道は如何。(董仲舒有言、曰、人君正心、以正朝廷、正百官。心之道何如。)⁽³⁷⁾と問うている。この『漢書』董仲舒傳に見える、人君が心を正すことによつて果ては庶民や四方をも正すことができるとする董仲舒の見解について、文學は「董氏正心の説、實に諸子の及ばざる所なり。(董氏正心之説、實諸子之所不及。)⁽³⁸⁾」と述べ、高評している。更に、本篇の總括部において文學

は、「之を本心慈愛の中に本づき、之を震霆斧鉞の下に行はば、何ぞ令の行はれざらん、何ぞ法の建たざらん。(本之本心慈愛之中、行之震霆斧鉞之下、何令不行、何法不建)」とも言う。

一見すると蘭洲は、統治者の心の有り様に主眼を置いており、朱子學者の一般的な議論と大差ないと考えることもできるかもしれない。しかし、具體的な統治論を説く際には、統治者の心が議論の表舞臺より外されていることに留意せねばならぬ。しかのみならず、實は『徂徠先生答問書』も冒頭部において「就中君子の道を申候はば、仁の外に又肝要なる儀無御座候。」と述べ、爲政者の心の問題から説き起している。無論、徂徠の言う君子の心とは朱子學とは異なっているが、統治者の心を枕詞に利用して爲政を説くことは、徂徠學でも行っていたことが知れよう。

翻つて朱子學者の鳩巢を案じてみれば、頻繁に出される儉約令に効果が無いのも爲政者の人間性に責任を求めていた。一方、蘭洲は法令の煩雑性からしか語らない。つまり、蘭洲の統治論における爲政者の心とは、枕詞に近いものになっていったと考え得るのであり、朱子學とは異質な發想に據つていたことが理解されると思う。

さて、制度を整えることで人民の行動における選擇肢を制限し、望ましい行爲へと誘い以て心を變えんとする統治論は、懷德堂において蘭洲のみに止まるものではない。次に履軒を見てみよう。

履軒は奢侈抑制の手段として均田制を唱えて『均田茅議』を著わし、また、履軒が假想した理想國家「華胥國」においても均田制が敷かれていとされる。ここでは『華胥國物語』における描寫を擧げておこう。

守の世をつけるはじめより、民の田おほく買ことぞかたく禁じけ

る。今までもたるはそのままにて、田もたぬものの、はじめて買は、一町をかぎりとしだめつ。されば田もちてうれぬなげきをつめるものは、守よりしろをあたへて買とりて、田もたぬものにかしてつくらせ、また買ものあればうりもしける。かのおほくもたるものも、あるは弟にわかち、あるはしぞくにあたへなどして、はたとせあまりがほどに、郡の内に田もたぬ民もなく、おほくもたるものもなくなりはてて、いづかたもゆきわたりて、おなじつらなるかまどの煙、おとりおまさりなく、うらやむ心もなく、なげく袖もあらで、ひとつ心にたのしき世をわたりける。(『華胥國物語』)

田を持たぬ者の田畑購入を一町までに制限することで、新規に多くの田を持つ者が現れぬようにした。すると、もともと廣大な田地を所有しているも、弟や子、一族に分け當たえ、二十年もすれば皆が均等に田を所有するようになり、竈の煙―生活レベルも同等になる。その結果、人を羨む心や劣等感に悲しむことがなくなり、太平の世が實現されたのである。

履軒は續けて、民心より羨望の念が消え失せる理屈を説明する。

げにもいたう富るものあるゆゑにこそ、いたう貧きもいできにけれ、富のすぎたるは、奢のもとあなり。おごるものあれば、うらやむものあり。かれをうらやめば、これをなげく。おごりのふりあれば、おごるものがとめるのみかは、貧しきかぎりも、ほどほどみならひて、これをよのなかのつとめと心得て、子をうりて身をかざるたぐひ、世におほかり。うらやむ心のなきこそ、まことのたのしみなれ。(『華胥國物語』)

頗る裕福な者がいるからこそ、頗る貧乏な者が現れる。富み過ぎていと奢侈に趨るが、奢る者がいればそれを羨む者が現れ、羨むこと

で我が身の窮乏を嘆く。贅澤な暮らしぶりをしていいる者がいると、金持ちのみならず、貧しい者もそれを眞似しようとし、これこそが世の普通であると思ひ込み、子供を賣つてまで身を飾り立てようとする者が世に多くなる。よつて、他人を羨む心がなくなつてこそ、眞實の樂しみを得られるのである。

『均田茅議』における説明も同様であり、履軒が均田制という政策によつて、人心より羨望の心を除去せんと企圖していたことが知れよう。そして、この奢侈抑制論には、統治者自身の道徳性や倫理的行爲の實踐が組み込まれていない。

但し、履軒は統治者の心構えを等閑視してゐるわけでもない。均田制によつて奢侈を抑制した南柯郡の郡守黄子染は率先して儉約に努めてゐる。ところが蘭洲と同様、具體的に統治論を説く際には統治者の道徳性が奢侈抑制に直接結び付けられず、詰まる所、枕言葉に止まつてゐる。

なお、兄の竹山も同様である。竹山には老中松平定信の求めに應じて獻上した經世書『草茅危言』があるが、そこにおいて「ただ都會の地は花美を専らとし、定りたる制度なき故、面々に外見を競ふやうになり、家柄は宜しく内分不勝手なる者の難儀となる事なり。」という社會分析をしており、制度が整えられていないからこそ、華美を競う競争が発生していると言ふ。つまり、政策により制度さえ整えれば、奢侈は抑制できると言いたいのである。

ところで、民衆に行爲を強制せず、また爲政者の徳性にも依らぬという統治論は、履軒の解經にも確認し得る。履軒は『周易』蒙卦九二において、爲政の方法について斯く述べる。

九二は蒙を治むるの主と爲る。然れども爻辭は唯だ「包」と言ふ

のみにして、「治む」と稱せざるは、治めざるに非ざるなり。蓋し包容を以て主と爲す。焉を長養し、焉を誘掖す。而ち治むるは其の中に在り。彼をして自ら明かたらしめ、自ら然るが若からしむる者なり。是れ蒙を治むるの尤も善き者なり。(九二爲治蒙之主。然爻辭唯言「包」、而不稱「治」者、非不治也。蓋以包容爲主矣。長養焉、誘掖焉。而治在其中。使彼自明、若自然者。是治蒙之尤善者。)(『周易逢原』蒙 初六)

蒙昧な者は包容の精神によつて養育し良い方向へと導いてやるのであり、蒙昧な者に物事を辨えさせ、自然にそうするように仕向ける。それが愚昧な者を治める最上の手段なのである。

均田制に關する言説も併せ考えれば、履軒は、制度を整えることによつて人民を望ましい行爲へと誘導し、その行爲を通じていつしか心も變化させられるという統治論を想定していたのであろう。つまり、爲政者の道徳性や教化は、統治システムに織り込まれない。蘭洲の統治論が、履軒に繼承されていたことが理解し得よう。

以上、奢侈抑制を軸に、蘭洲、履軒及び竹山の統治論を検討してきた。政治的作爲によつて社會制度を整え、民衆を望ましい行動へと誘導し、その行爲を取らせることで道徳心を養成するという統治論は、これを圖式化すれば「政策↓環境↓行爲↓心」となる。これは朱子學を顛倒させたものであり、徂徠學の圖式と見事に重なり合つてゐるのである。

五、懷德堂による徂徠學統治論の擴充

前節では懷德堂諸儒の奢侈抑制に纏わる言説を見てきたが、そこに見える統治の方法論は、宛も徂徠學かと見紛うものであつた。すると

議論は必然、徂徠學と懷德堂との關係を整理することに進まねばならぬ。

統治者の道徳性を統治の方法論に織り込まず、上の政治的作爲によつて制度を整え、被治者の行爲を誘導し、その行爲を繰り返すことで被統治者の心情を變化させるという懷德堂の構圖は、鳩巢の如き朱子學者の統治論を顛倒させており、徂徠學と符合していた。そうである以上、懷德堂の統治論が徂徠學を繼承していたことは首肯されるものと思う。

では、懷德堂の統治論が徂徠學と異なる點は、奈邊に求められるのか。それは、被治者にも視座を据えている點であろう。

徂徠學では、視座は統治者に固定され、被治者は主體者たる統治者に行爲を「させられる」存在に過ぎない。よつて、被治者個々人は人格を有した「する」存在であるとはされず、主體性は付與されない。

一方、確かに懷德堂は官許を得、竹山の盡力によつて町内から離脱して町人から獨立した存在であると幕府に認められている。また、竹山は志が確かな儒者には苗字帶刀を允許すべしとしており、武士―統治者―に準ずる立場であると自認していたと考えられる。ところが、懷德堂の主たる受講生は大坂町人であり、民衆の教化がその使命であった。つまり、被治者たる民衆に日々向き合つて教授し、道徳的行爲の實踐を説かねばならぬのである。

しかし、懷德堂諸儒は法令などの政治的作爲によつて民衆を教化する権限は有しておらず、言論によつて語りかけるしかない。蘭洲は文章を書く目的として、次のように述べている。

其の貨其の色、豈に人を誘ひ死地に陥とさんか。則ち人唯だ愚かにして覺らざるのみ。書に因りて以て之を警す。(其貨其色、豈誘

人陥死地。則ち人唯愚而不覺耳。因書以警之。)(觀四)

貨や色は人を破滅に誘うことがあつても、人は愚かであつてそのことに氣付かない。そこで、文章によつて警告を發するのである。

このように、蘭洲にとつて文筆活動は人民を啓發するための手段に位置付けられていたのであるが、竹山もまた文章を爲政に相當する行爲であると看做している。しかし、文章による啓發とは受容者がそれを吟味し、得心した場合にのみ効果が現れる。即ち、被治者が主體性を有することを前提にした教化なのである。

また、富裕となつた町人が自發的に學問をせんと欲して懷德堂を作つたのであるから、その自意識は、もはや統治者に道徳的行爲を強制され、無人格の存在に甘んじることを許さぬであろう。すると、懷德堂の儒教は徂徠學のように視座を統治者に固定することは難しくなり、被治者にも視座を据えることになる。

斯くして主體性を付與された被治者は、「させられる」ではなくして「する」存在へと轉換される。ここにおいて、徂徠學の枠組みの中において被治者も修養に勵むべきことが奨励されることになるのであるが、このように考えて行くと、履軒の性説も従来とは異なつた位置付けが必要になつてくる。

藤居岳人は履軒の性善説を分析し、「初めから性の中に完全な善があるのではなく、善の素質があり、その擴充が必要だと説くのが履軒の性善説であ」り、擴充された性Ⅱ「徳」が「外」として位置付けられていることから、「善を擴充することによつて、社會で承認された善に合致するよう、みずからをきたえてゆく」ことが、履軒の提示した人間の生き方であるとする。斯くして倫理の日常的實踐が重視されるわけであるが、しかし、履軒は徂徠學の觀念を繼承し、統治者が制

度を確立して人民に望ましい行動を取るよう誘導するとしていた。すると、社会的に求められる倫理的行為とは、実は制度によって自ずからそうするように仕向けられた行為に外ならぬことになる。

ここに至り、履軒の性説は俄に政治性を帯びることになり、もはや単に日常実践の倫理を重視することを説いた道德論に納まらなくなろう。即ち、統治者の整備した社会制度を、被治者が主體的に遵守するよう説いていたことになり、ここにおいて道德論は政治論に包攝され、被治者個々人が意識的に行う心の修養が、統治論に組み込まれてしまうのである。

これを懷德堂による徂徠學の繼承發展として捉えるならば、懷德堂は徂徠に缺けていた修己を、被治者の視座を導入することにより、萬民の行うべき心の修養としての修己を補ったことになる。これは、修己を徂徠學に導入した春臺を、その方向性においては襲っていたことになる。但し、春臺は君子たる統治者にしか修己を認めず、更には心を修己から切り捨てて「徂徠學」を展開させたのであるから、懷德堂は萬民のための、もう一つの「徂徠學」を展開させていたとも評せよう。

また、懷德堂の修己を統治システムの構成要素として把握すると、懷德堂の格物致知論もその思想的な位置付けを再吟味する必要がある。佐藤由隆は蘭洲や履軒の格物致知論を「知行並進」型とし、行いを實踐することで致知していくとする點に學派的特色があり、「行」を重視するが故に當時から陽明學的であると認識されていたのである⁽⁵⁵⁾。しかし、日本儒教は朱子學的・陽明學的という分別や思想闘争が漢土ほど鮮明ではなかったため、斯るカテゴリーイズに依據するのみでは諸學派の關連性を明瞭に描き難い。

懷德堂格物致知論における、行為の實踐を通じて致知していくとする圖式は、統治論における「行」によって「心」を改めるとするプロセスと符合している。すると、懷德堂は徂徠學の政治性を根底にして朱子學を再解釋し、道德論も政治論に従屬せしめていたと理解すれば、徂徠學より懷德堂へと至る政治的儒教の繼承發展という思想的文脈に整理できることになる。即ち、懷德堂の儒教は修己・治人ともに徂徠學の延長線上に位置付けし得るのである。中村春作は、「懷德堂儒學は、荻生徂徠らの學的資産を、批判を通じて實は「正統に」繼承しつつ、そのうえでもういちど生きた現實社會に即して朱子學に生命を與えようとした」と述べているが、その基軸は具體的には統治論に求められよう。

但し、徂徠學によつて朱子學を再解釋することで、大きな問題が発生したことにも留意せねばならぬ。小島康敬は、反徂徠學は徂徠學ほどの思想體系を有さぬとし、國學こそが思想として徂徠學と對峙し得たと評價して、懷德堂に關しても竹山は思想家として徂徠に對抗できていないとする⁽⁵⁶⁾。また、中村春作も、「反徂徠」について説明が難しくなるのは、懷德堂などの「反徂徠」勢力が「徂徠學の體系に取つて代わるもう一つの世界像を明快に提示したわけではなかった」からであると述べている。つまり、懷德堂の思想は體系性に缺けていると言うのである。

何故、このような評價がされることになるのか。その原因の第一は、統治者の道德性の扱いである。

蘭洲や履軒は、確かに統治者の心性を無視することはなく、寧ろ重視しているかの如きレトリックで記述する。しかし、民心に對して實効性を有するのは、統治者の道德性ではなく、政治的作為であった。

では、統治者の道徳性と政治的作爲と、何方がより統治の根本なのか。もし、非道徳的統治者が妥當な政策を布告し得た場合には、如何になるのであるうか。蘭洲が、政策により人心が安定し士農の生活に餘裕ができれば人主は奢侈に耽るようなことはできぬであろうと言っていたことを思い起こせば、理屈の上では統治者の道徳性とは無關係に、社會は安寧に導かれるということになるのであるうか。この問題は、儒教から道徳性を切り離していた徂徠學を、改めて朱子學の土壤に組み込んだがために發生している。

原因の第二は、視座の不統一である。本居宣長の國學が徂徠學の方論を換骨奪胎して繼承していたことは今日では定説であろうし、本論でも検討したように懷德堂も徂徠學を繼承している。國學は徂徠學に並び得るのに對し、懷德堂は思想として體系を缺くと評されるのは何故なのか。

宣長ら國學者は、治人を自己の學問より切り離し、被治者の立場から只管に統治者への服従を説き、視座を被治者に固定する。また、徂徠學は統治者の立場から語るのみで、被治者に視座は置かない。つまり、共に視座が一つに絞られた上で思想が構築されているのである。これに對し、懷德堂は朱子學に依つたため、統治者・被治者という二つの視座を抱えこむことになった。

抑も漢土における朱子學は、學問に従事する存在として士大夫層を想定するが、その士大夫層は、科擧に登臺すれば統治者に、そうでなければ被治者にとりうように、統治システムの中で地位を變動させる。換言すれば、統治者・被治者という二つの視座の共存は、士大夫層という存在を前提として、初めてリアリティを有した思想の基盤たり得るのである。

ところが、日本近世の社會は身分が固定され、武士階級でなければ基本的に統治者にはなれなかつた。それ故、統治者・被治者という二つの視座を有する存在の想定は現實社會に即さず、リアリティを持ち得えない。その結果、二つの立場は渾然としてしまつて曖昧になってしまうのである。

それを具體的に見て取れるのが、やはり、人民が儉約をすればやがて君主も儉約せざるを得なくなると言う蘭洲の發言である。儉約という世風に引摺られる形で君主が儉約を行うかの如き構圖になつており、被治者の側が人間社會を牽引しこれに性格付けているかのもある。なお、統治者は下々の生み出す世風に左右されるとする觀念は、蘭洲や履軒の王統觀にも見出せることから、懷德堂儒教の根底に横たわる觀念になつていたと思われる。然りとて、被治者が社會の主導者とされるわけでもなく、飽く迄も上の發する政令により行爲が規律される。つまり、統治者・被治者がともに主體性を有した場合の社會モデルが、未成熟であつたと言えよう。

統治者にしか視座を据えぬ徂徠學を、統治者・被治者の兩視点を有するよう擴充するためには、朱子學の枠組みは確かに都合が良い。しかし、この二つの視座を如何に整理して日本の實情に合わせるのかという點において、懷德堂朱子學はついで明瞭な解決ができなかつたのである。

六、おわりに

以上、奢侈抑制を軸に、朱子學・徂徠學・懷德堂の統治論を検討してきた。その結果、反徂徠を標榜して朱子學を宗としていた懷德堂が、實は統治の方法論としては朱子學の徳治主義を放棄し、徂徠學の

制度を確立することで人心を改めるといふ方法論を踏襲していたことが明かとなり、その上で懷徳堂が徂徠學を繼承し、朱子學を政治的儒教へと再構築していたことを論じた。

淡窓は竹山が後年、徂徠を駁した『非徴』を悔いたと記録しているが、その逸話の仔細は未詳であり、竹山が悔いた動機は臆測するしかない。本論で考察してきたように、懷徳堂の儒教は徂徠學を一つの起源として認定し得る。或いは竹山は、そのことに氣付いてしまったのかも知れない。

注

- (1) 湯淺常山『文會雜記』卷之三上(『日本隨筆大成』第七卷、吉川弘文館、昭和二年)、六四四頁。
- (2) 小島康敬『徂徠學と反徂徠學』(ベリかん社、昭和六十二年)、一一〇頁。
- (3) 原念齋『先哲叢談』卷之四(和泉屋金右衛門刊、文化十三年)、二十六葉表。引用に際し、變體假名などは適宜通用の表記に改めている。以下同じ。
- (4) 『増補 淡窓全集』中卷(日田郡教育會編、思文閣、大正十五年)、『儒林評』一〇頁。
- (5) 徂徠學より懷徳堂へ繋がる思想史的脈絡は、例えば兵學や漢作文論において顯著に認められる。拙稿「五井蘭洲「兵論」について」(『中國研究集刊稱號』總六十四號、平成三〇年)、「中井竹山に見る懷徳堂の漢作文―達意を軸として―」(『新しい漢字漢文教育』六十八號、平成三十一年)を参照。
- (6) 平重道「懷徳堂學の發展(Ⅱ)」(『宮城教育大學紀要』五、昭和四十年)

六年)、219(二〇二)頁。

- (7) 藤居岳人「尾藤二洲の朱子學と懷徳堂の朱子學と」(『懷徳堂研究』第八號、平成二十九年)、三十二頁。

- (8) 拙稿「懷徳堂無鬼論の再検討―祖靈を軸にして―」(『東方宗教』第一三一號、平成三〇年)を参照。

- (9) 『四書章句集注』(中華書局、西曆一九八三年)、三頁。

- (10) 『朱子全書 修訂本』六(上海古籍出版社・安徽教育出版社、西曆二〇一〇年)、五一三頁。

- (11) 『日本倫理彙編』七(井上哲治郎、蟹江義丸編、育成會、明治三十五年)、一六一頁。

- (12) 『日本倫理彙編』七、一六四～一六五頁。

- (13) 吉川幸次郎、丸山眞男、西田太一郎、辻達也校注『荻生徂徠』(日本思想體系36、岩波書店、昭和四十八年)、三二二頁(辻)。

- (14) 『荻生徂徠』、三二六頁(辻)。

- (15) 『荻生徂徠全集』一(みすず書房、昭和四十九年)、四三〇頁。

- (16) 『荻生徂徠』、二一九頁(西田)。
- (17) 田原嗣郎『徂徠學の世界』(東京大學出版會、平成三年)、六十八～六十九頁。

- (18) 尾藤正英「太宰春臺の人と思想」(家永三郎、頼惟勤校注『徂徠學派』、日本思想大系37、岩波書店、昭和四十七年)、四八七頁。

- (19) 中村春作『徂徠學の思想圈』(ベリかん社、令和元年)、二〇八頁。
- (20) 中村春作『徂徠學の思想圈』、二〇七頁。

- (21) 尾藤正英「太宰春臺の人と思想」、五〇七頁。
- (22) 『日本倫理彙編』六(井上哲治郎、蟹江義丸編、育成會、明治三十五年)、三四四頁。

- (23) 『日本倫理彙編』六、二六五頁。

- (24) 『日本倫理叢編』六、二八四頁。
- (25) 尾藤正英「太宰春臺の人と思想」、五一頁。
- (26) 『日本經濟大典』第九卷(鳳文書館、平成四年)、四九一〜四九二頁。
- (27) 『日本經濟大典』第九卷、四九二〜四九三頁。
- (28) 五井蘭洲『鶏肋篇』一(大阪大學附屬圖書館藏)、四十八葉表。なお、「其所善者」を底本は「其善則」に作るが、「左傳」他諸本に従い改めた。
- (29) 阮元校勘『春秋左氏傳』(嘉慶二十年重刊宋本影印、中文出版、平成元年)、四三七四〜四三七五頁。
- (30) 『文津閣四庫全書』六九五(商務印書館、西曆二〇〇六年)、九〇〜九十一頁。
- (31) 『文津閣四庫全書』六九六(商務印書館、西曆二〇〇六年)、二一〇〜二一一頁。
- (32) 馬其昶『韓昌黎文集校注』二(河洛圖書出版社、中華民國六十四年)、三十九頁。
- (33) 『鶏肋篇』一、五十四葉裏。
- (34) 『鶏肋篇』一、五十四葉裏〜五十五葉表。
- (35) 『鶏肋篇』一、五十五葉表〜裏。
- (36) 『鶏肋篇』一、四十八葉表。
- (37) 『漢書』卷五十六(中華書局、西曆一九六二年)、二五〇二〜二五〇三頁。
- (38) 『鶏肋篇』一、四十九葉裏。
- (39) 『鶏肋篇』一、五十五葉裏。
- (40) 『日本倫理叢編』六、一四七頁。
- (41) 履軒の均田制に關する梗概は、福田一也「中井履軒『均田茅議』に見える均田制作」(『懷德堂研究』第六號、平成二十七年)を参照。
- (42) 『日本經濟大典』第二十三卷(鳳文書館、平成四年)、七四三頁。
- (43) 『日本經濟大典』第二十三卷、七四三〜七四四頁。
- (44) 『日本經濟大典』第二十三卷、七〇三〜七〇四頁。
- (45) 『日本經濟大典』第二十三卷、七三八頁。
- (46) 『草茅危言』卷五 町方婚禮の事。『草茅危言』本文は、稻垣國三郎『中井竹山と草茅危言』(大正洋行、昭和十七年)に據った。三六五頁。
- (47) 『周易逢原』上卷(岡田利兵衛刊、大正十五年)、十二葉裏。
- (48) 小堀一正「近世大坂と知識人社會」(清文堂、平成八年)、六十頁。
- (49) 『草茅危言』卷二 儒者の事、一五二頁。
- (50) 『鶏肋篇』一、二十九葉裏。
- (51) 拙稿「中井竹山に見る懷德堂の漢作文―達意を軸として―」、三十七頁。
- (52) 藤居岳人「中井履軒の性論における仁齋學の影響―「擴充」の語をめぐって」(『中國研究集刊霜號』第四十四號、平成十九年)、十四頁。
- (53) 藤居岳人「中井履軒の性論における仁齋學の影響―「擴充」の語をめぐって」、十三頁。
- (54) 李基源「徂徠學と朝鮮儒學―春臺から丁若鏞まで」(ベリかん社、平成二十三年)、第三章 太宰春臺における徂徠人間論の讀み直し」を参照。
- (55) 佐藤由隆「五井蘭洲と中井履軒の格物致知論」(『東アジア文化交渉研究』十號、平成二十九年)を参照。
- (56) 中村春作『徂徠學の思想圈』、二五三頁。
- (57) 小島康敬『徂徠學と反徂徠學』、一五二頁。
- (58) 小島康敬『徂徠學と反徂徠學』、一四二頁。
- (59) 中村春作『江戸儒教と近代の「知」』(ベリかん社、平成十四年)、一三四頁。
- (60) 松本三之介「幕末國學の思想的意義―主として政治思想の側面につ

いて」(羽賀登、松本三之介校注『國學運動の思想』、日本思想大系
51、岩波書店、昭和四十六年)、六四五頁。

(61) 拙稿「懷德堂に見る華夷論の超尅」(『臺大日本語文研究』第三十六
期、中華民國一〇七年)を参照。

松崎慊堂の陶淵明享受について

——石經山房本『陶淵明文集』の刊行を中心に——

富 嘉 吟

松崎慊堂は江戸後期の儒學者であり、『縮刻唐開成石經』（以下、『縮刻唐石經』）によつてその名は廣く知れ渡つてゐる。慊堂は經書に精通してゐるのみならず、集部の文獻にも造詣が深く、彼が漢詩文に親しんでゐた様子はその文集や日記の至る所で視られる。特に注目に値するのは、慊堂が一讀者として漢詩文を人生の肥やしとただけでなく、自ら漢詩文集の校訂・刊行にも携わり、江戸後期における漢詩文の流布において多大な功績を残した點である。なかでも、天保十一年（一八四〇）に刊行された石經山房本『陶淵明文集』（以下、『石經山房本』）はその代表的なものであり、慊堂ないし江戸後期の中國文學享受の諸相を視させる絶好の例である。

石經山房本については橋川時雄の『陶集版本源流考』（『雕龍叢鈔』本、文字同盟社、出版年不明）などの陶淵明集の版本系統に關する論著においてしばしば言及されているが、それらにおいては和刻本の一種として簡単に紹介されているのみで、その成立背景や意義が深く論じられてはゐないのが現状である。小論では『慊堂全集』（館森鴻校訂『崇文叢書』本、崇文院、一九二六、以下、『全集』）や『慊堂日曆』（濱野知三郎校訂『日本藝林叢書』本、六合館、一九二九、以下、『日曆』）とともに

『松崎慊堂全集』に收める、冬至書房、一九八八）などの資料を踏まえ、石經山房本の刊行を中心に慊堂の陶淵明享受について検討してみる。¹⁾

一、慊堂の陶淵明享受と「和陶詩」

慊堂の著作のうち、陶淵明に關する最も早いものは『全集』卷二所收の寛政六年（一七九四）四月に著された「送葛西子英序」である。慊堂は其中で、陶淵明を古代の「俊髦豪傑」の代表として擧げ、次のように著している（下線は筆者）。

自古俊髦豪傑之士、往往好酒焉。衛武公之初筵、孔夫子之無量、鄭康成之三百盃、陶靖節之種秫田。（中略）然孔子之無量、則曰不爲酒困。武公之初筵、則曰飲酒溫克。康成之不亂、靖節之到醉而止、此皆飲不盡量、醉不踰節、世所謂善飲者歟。

（古より俊髦豪傑の士、往々にして酒を好む。衛の武公の初筵、孔夫子の量無き、鄭康成の三百盃、陶靖節の秫を種うる田。（中略）然るに孔子の量無きは、則ち酒の爲に困しまざるを曰う。武公の初筵は、則ち酒を飲みて溫克なるを曰う。康成の亂れず、靖節の酔いに到りて止む、此れ皆飲みて量を盡くさず、酔いて節を踰えず、世の所謂る善飲なる者か。）

「陶靖節之種秫田」は『宋書』（中華書局、一九七四）卷九三「隱逸傳」所收の「陶潛傳」（以下、「陶潛傳」）を典拠としている。

公田悉令吏種秫稻。妻子固請種秫、乃使二頃五十畝種秫、五十畝種稻。

（公田悉く吏をして秫稻を種えしむ。妻子固く秫を種えんことを請い、乃ち二頃五十畝に秫を種え、五十畝に稻を種えしむ。）

「秫」は「稷之黏者（稷の黏る者）」であり、酒造用の穀物である（段玉裁『說文解字註』、中華書局、二〇一三、頁三二五）。豪快な飲酒者としての人物像は、慊堂の陶淵明享受に初めて描かれた一面であり、その人生を理解する最初の手がかりとなる。

なお、「靖節之到醉而止」は、「陶潛傳」の「我醉欲眠、卿可去（我酔いて眠らんと欲す、卿去るべし）」を典拠とするものであり、飲みすぎないために來客を見送る姿を描いている。ここで、慊堂は陶淵明を鄭玄などの聖賢と併稱し、酒に酔つても禮節を正しく守っているという點を強調している。これは確かに『詩經』以來の儒者が唱える飲酒の理想像であるが、陶淵明の作品に見られる飲酒表現からは、酒に耽溺する一面が強く読み取れ、從來の儒者とは異なる姿が見られる。慊堂が「送葛西子英序」に描くのは、陶淵明の人生觀というより、儒者である自分が抱く理想の投影と見なしたほうが無難であろう。

當時の慊堂はまだ二十二歳の若さであったので、陶淵明の豪快な飲酒生活にひたすら注目しているが、後の文化五年（一八〇八）、三十七歳になった慊堂が陶淵明の隱逸生活に興味を持ったことは、『全集』卷一六「戊辰正月五日與諸同人遊原川、和陶公斜川韻、是歲予三十七（戊辰正月五日諸同人と原川に遊び、陶公の斜川の韻に和す、是の歲予三十七なり）」（以下、「和斜川韻」）によって覗える。

松崎慊堂の陶淵明享受について

開歲三十七、容光不少休。適及靖節年、緬懷斜川遊。欣然命勝侶、言詠循清流。適物觀魚樂、息機隨鳴鷗。感被大峨人、考亭又山丘。（註、蘇文忠、朱文公竝和陶公是韻。）斯人雖云遠、勝踐庶足疇。飲水亦陶然、畢景況唱酬。悲歡固無門、詎必問可否。歎息柴桑翁、一醉以忘憂。佳辰良可撫、此外余無求。

（開歲三十七なり、容光少くも休まず。適ま靖節の年に及び、緬かに斜川の遊を懷う。欣然として勝侶に命じ、言詠清流に循う。物に適（かな）いて魚の樂しみを觀、機を息めて鳴鷗に隨う。大峨の人を感被し、考亭又た山丘。（註、蘇文忠、朱文公竝びに陶公の是の韻に和す。）斯の人は遠しと云うと雖も、勝踐庶くは疇するに足らんことを。飲水亦た陶然たり、畢景況や唱酬をや。悲歡固より門無し、詎ぞ必ずしも可否を問わん。歎息す、柴桑の翁の、一醉以て憂いを忘るるを。佳辰良に撫ずべし、此の外余は求むること無し。）

「斜川韻」は陶淵明「遊斜川」詩に使われている韻字であり、慊堂はこれに次韻して本詩を詠唱したのである。自然との觸れ合いを通じて陶淵明の心境を體驗し、人生にはそれ以外の望みがないと感嘆している。

「和斜川韻」は慊堂が早くから陶淵明集の本文に強い關心を持つていたことを表す一例として大變興味深い。周知のように、「遊斜川竝序」の序文と本文の年月表記については長く論が交わされてきた。以下、宋刻遞修十卷本『陶淵明集』（『中華再造善本』影印本、北京圖書館出版社、二〇〇三。以下、「宋遞修本」）を底本として當該部分を引用する（括弧内は原校記）。

序文…辛丑（一作酉）正月五日、天氣澄和（一作穆）、風物閑美。本文…開歲脩五十（一作日）、吾生行歸休。

陶淵明の生卒年について、「陶潛傳」には「潛元嘉四年（四二七）卒、時年六十三（潛は元嘉四年に卒す、時に年六十三なり）」とあり、それによれば、その生年は東晉の興寧三年（三六五）で、辛丑年（隆安五年、四〇二）には三十七歳であったことになる。しかし、「遊斜川竝序」にある「辛丑（歳）正月五日」「開歲脩五十」に従えば、その生年は永和八年（三五二）となり、『宋書』との間に食い違いが生じる。「辛酉」「五日」の異文が現れたのは、『宋書』の記載と合わせるためであるとされている³⁾。

「和斜川韻」の詩題には「是歲予三十七」とあり、本文には「開歲三十七」とあるので、慊堂は『宋書』と「辛丑」の記載を信用して三十七歳説を採用したことが分かる。一方で、「開歲三十七」は明らかに「開歲脩五十」の構文を模倣して自身の年齢を述べているものであり、三十七歳説との齟齬をきたす。當時の慊堂が所持した陶淵明集の版本に關しては、詳しい資料が残されていないが、明曆三年（一六五七）菊池耕齋點本（以下、「明曆本」とその後印本・後修本などは恐らく架藏していたと考えられる。後で觸れるように、慊堂は文化四年より前に、明曆本を重印した寛文本および重刻紹興本について論じていたことがある。調べたところ、寛文本では「辛丑」「開歲脩五日」、重刻紹興本は「辛丑」「開歲脩五十」となっている。つまり、慊堂は「遊斜川竝序」の異文と『宋書』との食い違いにすでに氣付いていたようであるが、「和斜川韻」において明確な判断を下してはいなかった。後ほど石經山房本の校訂に際して、この問題を再度取り上げて長年温めてきた結論を記述する。詳しくは第三節を参照されたい。

隱逸者としての陶淵明は、慊堂によってその人生の理想像と見なされて、その出處進退にも影響を與えた。『全集』巻首所收の「慊堂松

崎先生行述」には、次のように述べられている。

時肥後國主以先生其國民也、將請諸掛川侯復之。先生謂出女可
以改嫁、而嫠婦不可再醮。君臣夫婦、其義一矣。（中略）於是作「和
陶飲酒詩」二十首以示志。

（時に肥後國主、先生其の國の民なるを以て、將に掛川侯に請いて之を復せんとす。先生謂う、出女は以て改嫁すべきも、嫠婦は再醮すべからず。君臣夫婦、其の義一なりと。（中略）是に於て「和陶飲酒詩」二十首を作りて以て志を示す。）

ここでは、慊堂は陶淵明「飲酒詩」を唱和することを通じて舊主への忠實を表白し、出仕の要請を拒絶した。ところが、現存する『全集』巻一六には「和陶公飲酒」の一首しか収録されていない。その事情について、『全集』巻一一「題和陶公飲酒詩摘錄二首後」で次のように述べられている。

余作「和陶公飲酒詩」二十首、既廿二年矣。余既忘之、而佐君仲澤猶能記之矣。（中略）仲澤千里寄書、請錄一通以代北海之尊焉。余衰病之餘、勉強纔錄中二首以往。此詩當時聊自遣耳、不足以醒世。（中略）天保乙未十二月廿日。

（余「和陶公飲酒詩」二十首を作りて、既に廿二年なり。余既に之を忘るるも、佐君仲澤猶お能く之を記す。（中略）仲澤千里より書を寄せ、一通を録して以て北海の尊に代えんことを請う。余衰病之餘、勉強して纔かに中の二首を録して以て往かしむ。此の詩は當時聊か自ら遣るのみにして、以て世を醒ますに足らず。（中略）天保乙未十二月廿日。）

「天保乙未」は天保六年（一八三五）であり、「佐君仲澤」は蘭醫の佐々木中澤である。「既廿二年矣」によって、慊堂が「和陶公飲酒詩」二十首を作ったのは文化十一年（一八一四）の四十四歳の頃であること

が分かる。その二十二年後、再び佐々木中澤の要請を受けて二首を鈔寫したが、本来自ら慰めるために作ったものであり、それほど價值がないと述べている。『全集』に一首しか収録されていないのは、恐らく自ら削除したからであると推測される。幸いなことに、羽倉簡堂（用九）の『従吾所好』（早稻田大學圖書館藏嘉永四年本）巻下には序文及び十二首が収録されており、其の九は次の通りである。

北窓高臥人、千古留清風。激貪不在多、唯此三盃中。斯人猶飢、余豈論窮通。一發不可回、歸心滿數弓。

（北窓高臥の人、千古清風を留む。激貪は多きに在らず、唯だ此の三盃の中。斯の人すら猶お飢す、余も豈窮通を論せんや。一たび發すれば回すべからず、歸心滿數の弓。）

ここで、陶淵明の隱逸者としての一面と禮儀正しい飲酒者としての一面が統合されており、慊堂の陶淵明についての全體的な認識が分かる。また、慊堂は陶淵明の人生を通じて窮達への執着を反省し、山林の志を固めたことが覗える。慊堂が隱逸したのは、確かに「和陶公飲酒詩」二十首を作った年である。

以上のように、「和斜川韻」は慊堂のはじめての和陶詩であり、單篇のものであるのに對して、七年後の「和陶公飲酒詩」は二十首からなる連作である。そこで、彼の和陶詩への情熱が長い間にずっと衰えていないことが覗える。慊堂が和陶詩を作ったことに、隱逸者としての陶淵明の人格を尊敬し、その怡然自若な生活を敬慕する思いがまず読み取れるが、和陶詩という體裁自體は陶淵明の受容史における看過できない一大主題であり、慊堂の陶詩享受のありかたを知りうる手がかりになる。「和斜川韻」には「感被大峨人、考亭又山丘」とその自註の「蘇文忠、朱文公竝和陶公是韻」があり、慊堂が蘇軾や朱熹の和

陶詩を意識しながら新たなものを作ったことが覗える。後述の『須溪校本陶淵明詩集』でも、慊堂は朱熹の陶淵明に關する詩論を鈔寫している。林家の門人である慊堂にとつては、陶淵明に唱和することが詩才を伸ばすだけでなく、朱子學の一學徒として先師の教えに従うことに繋がったことも大變意義深かった。

日本における和陶詩と言えば、江戸時代の元政上人と、木下順庵の弟子である室鳩巢のものが挙げられるが、慊堂の和陶詩はそれらに續くものである。元政上人は『草山集』（立命館大學圖書館藏延寶二年本）往之卷「和陶淵明榮木詩」の「序文」において「和陶之韻述志云（陶の韻に和して志を述ぶと云う）」と述べており、和陶詩を通じて自分の志向を伝えていたことが分かる。室鳩巢に關しては、「自身の實感を伴った考えや決意が、陶淵明詩の次韻、模倣である「和陶詩」という「型」に託されて述べられている」とされている⁵⁶。慊堂も和陶詩によつて人生の出處進退を詠唱し、さらに陶淵明の人格に魅了されて隱逸の身になった。慊堂の作品は元政上人と室鳩巢が作った和陶詩の内在的精神と同調しており、まさに彼らの作品の延長線上に置かれるべきものである。

なお、文政十三年（一八三〇）十二月十二日の『日曆』には、南畫家の谷文晁の弟子である横田（三好）汝圭が「和陶詩卷」を返却しに來たという記述があり、さらに天保二年（一八三一）三月四日には「千賀生携酒食來、持枝山和陶詩一幅去（千賀生は酒食を携えて來たり、枝山の和陶詩一幅を持ち去る）」という内容が書かれている。これらが言及しているのは、明の名高い書家の祝允明（號は枝山）が自ら陶詩に和して書寫したものであろう⁵⁷。そこで、晩年の慊堂の陶淵明への傾倒は單なる和陶詩の内容に留まらず、書道にまで及んで複合的な様態を

呈していたことが分かる。慊堂が石經山房本『陶淵明文集』の刊行にまで携わったことは、長年にわたる陶淵明とその詩文への憧れの表れであると考えられる。

二、石經山房本の刊行とそれをめぐる人々

慊堂がいつの時點で陶淵明集の刊行を決意したのかは不詳であるが、『全集』卷七「與卷大任書」には、

陶公集、是間寬文中所刻、惟一太歷中程氏刊本而已。是本蕪穢、每一披閱、信汚陶公面目。久欲會衆本定一善本、而年老無力、且近日世所最好在宋元古本。老眊所校、雖萃衆美、人亦視一程子耳。寬政・享和間、始得觀汲古閣影宋大字本、極佳。

(陶公の集、是の間の寬文中に刻する所、惟一太歷中の程氏刊本のみ。是の本蕪穢にして、一たび披閱する毎に、信に陶公の面目を汚す。久しく衆本を會(あつ)めて一の善本を定めんと欲するも、年老いて力無く、且つ近日世の最も好む所は宋元古本に在り。老眊の校する所、衆美を萃(あつ)むと雖も、人亦た一つの程子と視るのみ。寬政・享和の間、始めて汲古閣影宋大字本を観るを得るに、極めて佳なり。)

とある。「寬文中所刻」なるもの(以下、「寬文本」としては、まず武村市兵衛が寬文四年(一六六四)に明曆本によつて重印したものが想起されやすいが、これは寬文年間刻本ではない。明曆本は明天啓二年(一六二二)に萬曆七年(己卯、一五七九)の蔡汝賢本を翻刻したものを底本とするものであり、「太歷中程氏刊本」の記述と合わない。これは明曆本の蔡汝賢跋と天啓二年刊記が寬文本では削られたので、付録末の萬曆十五年(一五八七)の休陽程氏の刊記を原刊記と誤解し、さらに「萬曆」を「太歷」と誤記したからである。

ところで、寬文本には本文を妄りに改變している箇所があるので、そこに慊堂は不滿に感じ、新しく校訂する意欲が湧いたが、體力が衰えたことと、宋元の古本を利用できなかったことが理由で作業は進まなかつたという。これは「寬政・享和間」以前の話であると考えられるが、當時の慊堂はまだ三十歳を越えたばかりで、とても「年老無力」とは言えない。これは恐らく言い譯であり、本當の原因は「宋元古本」を利用できなかったことであろう。

慊堂がついに宋元の古本を閲覽しえたのは、寬政・享和の間に始めて「汲古閣影宋大字本」を目撃した時のことである。これは後に石經山房本の底本として利用された汲古閣重刻の紹興年間蘇寫本(以下、「重刻紹興本」)であることは疑いない。重刻紹興本は確かに大字で刊行されており、「大字本」という特徴と合致している。ただ、慊堂は重刻紹興本の優れた所を認めたが、陶淵明集の校訂に關する話は以後しばらく途絶えた。文政の終わりから再びその話が始まり、『日曆』文政十年(一八二七)七月には「終日理陶靖節事(終日陶靖節の事を理む)」とあり、後の天保四年(一八三三)には『晉書』卷九四「隱逸傳」所收の「陶潛傳」を抄録した記録や、陶集を抄録・校訂した記録が頻繁に見られるようになる。當時利用した陶集の版本は明記されていないが、『日曆』天保四年五月八日には、

掖齋書來、貸『陶淵明集』影宋本、及致大字本影鈔『爾雅』、山本頤庵本也。

(掖齋の書來たり、『陶淵明集』影宋本を貸し、及び大字本影鈔『爾雅』を致す、山本頤庵の本なり。)

とあり、『陶淵明集』影宋本は慊堂が寬政・享和の間に閲覽した「汲古閣影宋大字本」即ち重刻紹興本と同版であると思われる。その

所藏者の山本頤庵は掛川藩の醫師であり、慊堂とは付き合いが深く、彼に藥を渡すことも時々あった。『杏雨書屋藏書目錄』（武田科學振興財團、臨川書店、一九八二）には頤庵の舊藏本が収録されており、中には室生寺寫本から鈔寫された『日本國見在書目錄』や、師匠の多紀元簡の『藥性提要』を訂補して山本氏爲可堂から刊行されたものがある。多紀元簡は多紀氏の出身であり、その家族は醫學書の蒐集・覆刻に熱心に取り組んでいたことよって廣く知られている。頤庵が貴重本を蒐集したり、自ら刊行を行ったりしたのは師の影響を受けたからであろう。さらに、彼と慊堂との交際にも、古書への愛という共通點が働いていると思われる。

ところで、慊堂が直接、頤庵から重刻紹興本を借用するのではなく、狩谷掖齋の關係を通じてそうしたのは、當時すでに掖齋がその本を架藏していたからであると思われる。『經籍訪古志』（宮内廳書陵部藏明治十八年活版）卷六に著録されている求古樓所藏の明刊覆宋大字本『陶淵明文集』十卷がそれであろう。なお、慊堂が刊行した影宋本『爾雅』にも狩谷掖齋の參與が見られ、掖齋は慊堂の考證學への傾倒に影響を與えたのみならず、その漢籍刊行も大いに手助けしたことが覗える。

また、同年の九月六日・九日には陶淵明集を校正する記載が次のように見られる。

（六日）朝禺校淵明集。

（九日）鈔陶公文集卷尾顏延之誄、及楊（ママ）、宋、思悅、無名氏題跋、以代今日泥路登高之況。

（六日）朝禺淵明集を校す。

（九日）陶公文集卷尾の顏延之誄、及び楊、宋、思悅、無名氏の題跋を

松崎慊堂の陶淵明享受について

鈔し、以て今日の泥路登高の況に代う。）

各篇目の順番が、重刻紹興本の卷末にある顏延之の誄、陽休之、宋庠、思悅および無名氏の題跋と一致することを考えると、慊堂が校訂に用いたのは山本頤庵舊藏の重刻紹興本であると推測できる。寛政・享和の間に初めて重刻紹興本を目にしてからすでに三十年以上が経ち、老境に入った慊堂が遙か以前に出會った貴重本をついに手に入れて校訂を行い、宿願を叶えた時、その心はいかなる感激に溢れていたことだろう。後に石經山房本の底本として利用されたのも、その山本頤庵舊藏本であると考えられる。

重刻紹興本以外に、慶應義塾大學附屬研究所斯道文庫には慊堂が鈔寫した朝鮮本『須溪校本陶淵明詩集』（以下、「須溪本」「須溪鈔本」）がある。須溪鈔本には市野光彦が著した「文化丁丑秋」の跋文が鈔錄されているので、その底本は『經籍訪古志』卷六の青歸書屋所藏の朝鮮國刊本であると推測される。市野光彦（迷庵）は江戸後期の町人學者の代表であり、早くから慊堂と友情を結んでおり、互いに古書の鑑賞などでよく交流していた。その跋文によると、市野光彦は遅くとも文化十四年（一八一七）には須溪本を入手していたので、これが須溪鈔本の底本に當たるものであると考えられる。

須溪鈔本の卷末には「天保四年重陽」に始まり、『日曆』九月九日條とほぼ同内容の識語があるので、その鈔寫は天保四年九月に完成されたことが分かる。また、須溪鈔本は朝鮮本、即ち韓本を底本とし、同年二月十七日の日記には「鈔韓本陶詩數首（韓本陶詩數首を鈔す）」という記載があるので、その鈔寫は遅くとも天保四年二月から始まったと推測される。そこで、慊堂が須溪本を鈔寫した時期は、重刻紹興本を校訂した時期とちやうど重なっていることが覗える。實は須溪鈔

本の本文行間には、「宋本」と「程本」による朱墨校語が至る所に見られる。「程本」は前述の「太歴中程氏刊本」を底本とする寛文本である。「宋本」と重刻紹興本を照合してみると、これは重刻紹興本の本文あるいは割注にある「宋本」即ち宋庠本であることが確認される。なお、須溪鈔本巻中の末尾にある「戊戌臘七再校定（戊戌臘七再校定す）」という一文によつて、天保九年（一八三八）の年末に再校訂したことが分かる。

慊堂は陶淵明集二種の校訂を行うと同時に、その刊行の手配も日程に入れていた。ここで最も言及するに値するのは、友人の巻大任（號は菱湖、弘齋）に版下の書寫を依頼したことである。掖齋から重刻紹興本を受け取つた六ヶ月後、天保四年十一月十四日の日記には、「淵明、巻大任」という意味不明な一文があるが、これは彼に版下執筆を頼むというメモであろう。實際翌天保五年正月二十九日に「菱湖約爲余寫靖節集」（菱湖余の爲に靖節集を寫さんことを約す）とある。後の天保六年八月十七日には「訪卷弘齋託陶集（卷弘齋を訪ねて陶集を託す）」と記され、菱湖に書寫を依頼したことが明記されている。

周知のように、重刻紹興本が現存唯一の傳蘇軾手寫本『陶淵明文集』であり、その價值は高く評價されている。慊堂が石經山房本の刊行にあつてわざわざ書の名手の菱湖に依頼したのは、重刻紹興本を模倣するためであると考えられる。慊堂は「與卷大任書」で、菱湖の快諾を受けた喜ばしさを次のように述べている。

與賢兄言此事、誤蒙採取、欲許以親筆刊行、僕之喜可知也。（中略）以不世出之字傳陶公集、於陶公亦足洗近日塵垢面目、而世之得而讀之者亦可賀也。

（賢兄と此の事を言い、誤りて採取を蒙り、親筆を以て刊行することを

許さんと欲す、僕の喜び知るべきなり。（中略）不世出の字を以て陶公集を傳うるは、陶公に於いても亦た近日塵垢の面目を洗うに足り、世の得て之を讀むものも亦た賀すべきなり。）

「近日塵垢面目」は、當時の日本で流布していた陶淵明集の諸版、特に前述の「每一披閱、信汚陶公面目」の寛文本への不満を言い表している。菱湖は慊堂の要望を引き受けたが、天保六年八月から天保七年（一八三六）四月までの『日曆』には、慊堂が菱湖に催促する記述が何度も見られる。また、「與卷大任書」には、

但賢兄善飲似陶公、多不事事。則快事如此、亦付之悠悠、而使衰老之僕日日烏邑者、可恨耳。『道德經』五千言、義之爲道士寫、半日閒耳。又趙王孫翰墨妙世、猶懼鮮于伯幾云、伯幾早死、使余輩無佛處稱尊也。又云、伯幾墨妙之極、日作小楷三萬字。吾晚能作一萬字耳。賢兄、今日伯幾也、子昂也。此集不過三萬字、能如伯幾、一日可了、能如子昂、三日可了耳。

（但し賢兄の善飲は陶公に似て、多く事をせず。則ち快事此くの如きも、亦た之を悠悠に付して、衰老の僕をして日日烏邑せしむるは、恨むべきのみ。『道德經』五千言、義之道士の爲に寫すこと、半日閒のみ。又た趙王孫の翰墨世に妙なるも、猶お鮮于伯幾を懼れて云く、伯幾早く死に、余輩をして佛無き處稱尊せしむるなりと。又た云う、伯幾墨妙の極み、日に小楷三萬字を作る。吾晚に能く一萬字を作るのみ。賢兄、今日の伯幾なり、子昂なり。此の集三萬字を過ぎず、能く伯幾の如くんば、一日にして了るべく、能く子昂の如くんば、三日にして了るべきのみ。）

とある。慊堂は菱湖のことを王羲之、趙孟頫、鮮于樞らに喩え、仕事を早く終わらせるよう彼を説得したかったが、『日曆』天保九年十二月十六日には、

萩原只助返陶集書板費二圓金、而歎於心可奈何。

(萩原只助陶集の書板費二圓金を返すも、心に歎(あきた)らなきを奈何(いかん)すべき)

という一文がある。萩原只助は菱湖の弟子の萩原秋巖である。この「陶集書板費二圓金」は、恐らく菱湖が石經山房本の書寫をうまく進められず、潤筆料を返したという記事であると推測される。

さて、石經山房本の書寫は結局どうなったのか。『全集』巻一二「題陶淵明集後」には、

自序目至第三卷首、老友卷子大任臨。自第三卷二頁至第六卷之半、小島氏知足臨。自六卷之半終第八卷、學子三浦汝楫臨完。

(序目より第三卷首に至るまで、老友卷子大任臨す。第三卷二頁より第六卷の半ばに至るまで、小島氏知足臨す。六卷の半ばより第八卷に終るまで、學子三浦汝楫臨し完る。)

とあり、石經山房本の書寫が結局、菱湖と小島成齋(知足)、三浦汝楫の三人に分擔された形になったことが分かる。小島、三浦の二人は同時期に慊堂が主事した『縮刻唐石經』の書寫にも携わった人物であり、彼らは菱湖の作業が豫想通りに進捗しなかつたために、改めて頼まれたと考えられる。

慊堂が石經山房本の書寫を卷菱湖に依頼した一方で、その題序を師匠の林述齋に託したことは、巻頭に置かれた林述齋が天保十一年「小春(陰曆十月)に題したもの(以下、「題序」)によって分かる。その中で、

既訂定六藝經本以貽後生、又以孔子興於詩之旨、採陶謝之佳本以繼之。

(既に六藝の經本を訂定して以て後生に貽り、又た孔子の詩に興るの旨

松崎慊堂の陶淵明享受について

を以て、陶謝の佳本を探りて以て之に繼ぐ。)

とある。「六藝經本」は無論『縮刻唐石經』であり、「陶謝之佳本」は『三謝詩』を附する石經山房本である。述齋は石經山房本を『縮刻唐石經』と並列し、同じく儒家の教化を反映するものであると論じている。

石經山房本には天保十一年の題序があるが、『日曆』には同年の十一月五日まで「夜校陶集(夜に陶集を校す)」の記載があり、慊堂が石經山房本の上梓まで倦まず弛まず校訂を行っていたことが覗える。そして、自分の心血を注いだ石經山房本が出来上がって最初に渡した相手は、やはり師匠の林述齋にほかならなかつた。『日曆』天保十一年十二月十四日には、

過師門、二公登衙不在、呈賀餅及陶集、書懷詩。

(師門に過ぎるも、二公登衙して在らず、賀餅及び陶集、書懷詩を呈す。)とあり、「二公」は林述齋とその息子の櫻宇である。ここで、慊堂が石經山房本を歳暮のお祝いの餅とともに述齋親子に進呈したことが分かる。その後も石經山房本をよく親友に贈り、追加印刷するまでに至った。

三、石經山房本の底本・校訂とその意義

陶淵明集は由緒正しく傳來してきた数少ない六朝時代の別集の一つである。宋代に入ると、宋庠本とその後の思悅本という新しい整理本二種が世に現れ、その版本系統の基礎を築き上げた。宋庠本も思悅本も現存しないが、前述の宋遞修本や紹熙三年(一一九二)曾集刻本『陶淵明詩』、元刻本『箋註陶淵明集』など、その流れを汲む宋元刊本は現存する。

慊堂が宋代諸本のうち、思悦本に最も高い評價を與えたことが、「題陶淵明集後」の冒頭で次のように見られる。

陶公淵明集實爲風騷亞匹、故後世傳刻尤多。要之、北宋治平中思悦所校爲最古善本。(中略) 故予校陶集、一依思悦本。

(陶公淵明集は實に風騷の亞匹たり、故に後世に傳刻すること尤も多し。之を要するに、北宋治平中の思悦の校する所は最古の善本たり。(中略) 故に予陶集を校するに、一に思悦本に依る。)

慊堂が思悦本を「最古善本」と評價し、それを校訂の底本としたことがここに覗える。

思悦の「書靖節先生集後」には「時皇宋治平三年五月望日」という日付があるので、「治平本」とよく略稱されている。石經山房本の扉紙には「縮臨治平本」と題され、これ以降の漢籍目録でも石經山房本は「縮臨治平本」と著録されていることがほとんどであるが、すべて誤りである。「題陶淵明集後」には、

顧其原本今不可復得、而近世汲古閣所模雕南宋紹興本、係其重刻、又傳爲東坡先生板書。

(顧だ其の原本今復た得べからざるも、近世汲古閣模雕する所の南宋紹興本、其の重刻に係り、又た傳えて東坡先生の板書と爲す。)

とある。つまり、思悦本は散逸してしまったので、慊堂が利用したのは前述の重刻紹興本である。重刻紹興本は思悦本所收の陶詩元號に関する議論を収録しているので、その一部は思悦本まで遡ることができると考えられる。これが、慊堂が紹興本を思悦本の重刻であると判断し、石經山房本を「縮臨治平本」と呼ぶ理由であらう。ところが、卷末所收の紹興年間の刊語には、

僕近得先生集、乃群賢所校定者。

(僕近く先生の集を得るに、乃ち群賢の校定する所の者なり。)

とある。これによって、重刻紹興本の本文は複数の人の校訂を總合したものであると分かり、思悦一人で校訂した思悦本と同一視できないことには贅言を要しない。

しかも、紹興本に十八年先だつて蘇體寫刻本『陶靖節集』がある。宣和四年(一一二二)の王仲良刊本(以下、「宣和本」)がそれである。宣和本は現存しないが、胡仔『苕溪漁隱叢話後集』(人民文學出版社、一九八二)卷三および宋遞修本の卷末所收の「曾紘說」によつてその様子はある程度覗える。そして、重刻紹興本は今知りうる宣和本の特徴と一致するので、宣和本を覆刻した可能性が高いとされている(郭紹虞、頁二七四)。「苕溪漁隱叢話後集」所收の宣和本「後序」には「陶集行世數本、互有舛訛、今詳加審訂(陶集世に行わるる數本は、互に舛訛有り、今詳らかに審訂を加う)」とあることから、宣和本は當時流布していた數本を踏まえて校訂されたものであり、その流れを汲んだ重刻紹興本は治平年間に成立した思悦本ではないことが改めて確認される。

前述の通り、慊堂は天保四年前後、すでに寛文本、須溪鈔本、重刻紹興本など複数の刊本と鈔本を持つていた。特に須溪鈔本の底本である須溪本は成化十九年癸卯(一四八三)の刊行であり、重刻紹興本にも劣らぬ價值があると認めざるを得ない。慊堂は須溪鈔本において寛文本と重刻紹興本によつて丁寧な校訂を行ったが、最後に重刻紹興本を石經山房本の底本としたのは、それを北宋時代の思悦本の重刻と見なし、甚だ貴重であると考えていたからであらう。

慊堂は重刻紹興本を思悦本の重刻と間違えたが、その優れたところをよく認識して「題陶淵明集後」において次のように述べている。

前於思悅諸本異同、皆備於思悅本。後於思悅諸刻異同、釐以思悅本、紕繆脫漏、一一可辨。(中略) 文字雋朗尤可喜、而卷冊重大、不便挾帶、故擇良史、縮臨傳刻。

(思悅より前の諸本の異同、皆思悅本に備わる。思悅より後の諸刻の異同、釐むるに思悅本を以てすれば、紕繆脫漏、一一辨ずべし。(中略) 文字の雋朗は尤も喜ぶべきも、卷冊重大にして、挾帶に便ならず、故に良史を擇び、縮臨して傳刻す。)

つまり、重刻紹興本は異文を補充的に収録しており、それに先立つ陶淵明集の校訂成果を受け継ぎ、それに續く諸版の正誤を見分けるのに役立つ貴重さがある。これは重刻紹興本所收の思悅の「書靖節先生集後」の「愚嘗採拾衆本以事讎校(愚嘗て衆本を採拾して以て讎校を事とす)」という一文にある見解であろう。また、重刻紹興本の美しい書寫を高く評價し、その刊行の藝術的價値を重視している一面も見られる。

慊堂の評價自體はなお検討する餘地があるが、重刻紹興本には異文が數多く収録されており、また、寫刻の宋本の様子を傳える唯一の版本としてその價値が認められる。蘇軾の書寫か否かは疑問であるが、蘇軾は和陶詩を數多く殘しており、彼に關連する陶淵明集は陶詩の受容史においてこの上なく大切な意義を持つものである。前述のように、慊堂の和陶詩は蘇軾・朱熹を意識しながら作られたものであり、これも蘇軾の書寫と傳えられる重刻紹興本を、石經山房本の底本とする一大理由になると考えられる。

また、慊堂が須溪鈔本を石經山房本の底本としないのは、これは陶淵明の詩集であり、文などを収録しない方針をとっているからである。須溪鈔本の目録および本文には、慊堂が「宋刊十卷本系の本によ

つて賦辭記傳贊述傳贊疏祭、集聖賢群輔錄竝に諸本の跋を手寫し附綴した」内容があり、その不備を補う意圖が感じ取れる。それに對して、重刻紹興本は宋刊十卷本系のものであり、陶淵明の詩文を漏れなく収録しているので、石經山房本の底本として最適であると思われる。

なお、國立公文書館所藏の元刊李公煥註『箋註陶淵明集』(以下、「李公煥本」)は、市橋長昭が文化五年(二一八〇)に昌平坂學問所に獻上した宋元版三十種の一つに數えられる。李公煥本には宋の張績が著した『吳譜辨證』が引用されたことがあり、僅かだが現存唯一の『吳譜辨證』の佚文である。須溪鈔本の欄外には張績の文が引用されており、しかも李公煥本の所收と一致するので、慊堂は李公煥本を一度見たことがあると推察される。ところが、前述のように、慊堂が陶淵明集の校訂に着手したのは天保四年であるので、當時はすでに隱退していて、學問所の所藏本を利用する條件は揃ってはいなかったと考えられる。それに對して、重刻紹興本は比較的に入れやすいように、汲古閣の見事な彫版技術によつて宋本の様態がよく傳えられており、宋本と同一視されてもよいほどの高い價値を有する。

慊堂は重刻紹興本を石經山房本の底本としたが、一部の篇目の眞偽については疑念を持った。まず、『集聖賢群輔錄』について、「題陶淵明集後」には、

第九、第十爲『集聖賢群輔錄』所謂『四八目』也。(中略)而近世所定『四庫全書』以爲依託、黜之子部類書內、是也。故今亦刪之。

(第九、第十は『集聖賢群輔錄』の所謂『四八目』たり。(中略)近世定むる所の『四庫全書』は以て依託と爲し、之を子部類書の内に黜く

るは、是なり。故に今亦た之を刪る。）

とあり、四庫館臣がそれを依託とする意見に賛同し、石經山房本を刊行する際にも重刻紹興本の卷九、卷十所收の『聖賢群輔錄』を削除することになった。

また、「孝傳贊」について、「題陶淵明集後」には、

如其「孝傳贊」與上文「扇上畫贊」「讀史」九章、俱是一類。

雖昭明本失載、亦當入集部。而『全書』同「群輔錄」一齊刪去、非也。陶公既是忠臣孝子、於所錄五孝之人亦皆有意思。諷讀之際、油然可以興學者孝思。縱是依託、亦所不忍刪、故謹存之。

（其の「孝傳贊」と上文の「扇上畫贊」「讀史」九章との如きは、俱に是れ一類なり。昭明本失載すと雖も、亦た當に集部に入るべし。而るに『全書』は『群輔錄』と同じく一齊に刪去するは、非なり。陶公既にはれ忠臣孝子、錄する所の五孝の人に於ては亦た皆意思有り。諷讀の際、油然として以て學者の孝思を興すべし。縱いはれ依託なるも、亦た刪するに忍びざる所、故に謹しみて之を存す。）

と述べており、「孝傳贊」は前卷末尾の「扇上畫贊」「讀史」と同じ種類のものであり、集部に入れるべきだと主張している。依託であつても教化的な効果があり、結局は石經山房本に保留されている。

篇目を削除した以外は、慊堂は須溪鈔本などによつて丁寧な校訂を行い、陶淵明集の本文校訂に對して強い意欲を有していることが覗える。「題陶淵明集後」には、重刻紹興本の本文三例を擧げてその正否を論じている。例一は「贈長沙公族祖序」に關する考證であり、その内容は須溪鈔本の「贈長沙公族祖序」の書き入れを寫したものである。例二は前述した「遊斜川竝序」に關する考證であり、その一部は次の通りである。

然以五十七歲、詩云開歲修五十、語涉歌後、當破作癸丑。是歲、公滿五十歲、罷官既八年矣。（中略）如改爲五日、不但與序文五日相重複、全首興象亦索然也。後來諸刻、皆從馬永卿所引廬山東林繆本、此亦杜杜孟八郎矣。²¹⁾

（然るに五十七歳を以て、詩に「開歲修五十」と云うは、語歌後に涉ればなり、當に破りて癸丑に作るべし。是の歲、公は滿五十歳、官を罷めて既に八年。（中略）如し改めて五日と爲せば、但だ序文の五日と相い重複するのみならず、全首の興象も亦た索然たり。後來の諸刻、皆馬永卿の引く所の廬山東林の繆本に従うは、此れ亦た杜杜孟八郎なり。）

前述のように、慊堂は文化四年にすでに「遊斜川竝序」の異文に氣付いていたが、ここで初めて自分の見解を詳しく書き下した。結局、慊堂が採用したのは、現存諸本のいずれにも見られない「癸丑歲」である。その結論自體の正否はさておき、慊堂の學風には考證學者としての精密性がある一方で、詩人としての直感に任せたまだ一面もあることが覗える。例三の卷五「歸去來兮辭」の「農人告我以春」に關する考察でも、諸本の「春下擠入及字（春の下に及の字を擠入す）」の異文に反對し、「以意屬讀自妙（意を以て屬讀すれば自ら妙なり）」と主張しており、その自由な學風がはつきり感じ取れる。

残念なことに、慊堂は陶淵明集の本文の校訂・考證を行つていたが、結局石經山房本にはその痕跡がまったく見られない。ただ、重刻紹興本の避諱による缺畫を復元することがあつたが、これは『縮刻唐石經』にも見られる刊行規定であり、讀者の便宜を圖るためであつたと考えられる。校訂を施さない理由について、慊堂は「題陶淵明集後」の末尾で次のように述べている。

余嘗欲以是例比衆本作考異、頭緒頗多、衰邁荏苒。既而思之、

夫子以多聞闕疑、爲學問實際。諸葛於書、又獨觀大略、與此老讀書不求甚解、先達自有神解。何又區區生此蕪穢、招具眼者笑乎。今既定是策、爲最古善本。後之君子、儻取以訂晚出諸本、自知余言之不誤耳。

(餘嘗て是の例を以て衆本を比べて考異を作らんと欲するも、頭緒頗る多く、衰邁在再たり。既にして之を思う、夫子は多く聞き疑わしきを闕くを以て、學問の實際と爲す。諸葛の書に於けるや、又た獨り大略を觀るのと、此の老の讀書して甚だしくは解するを求めざるとは、先達自ら神解有ればなり。何ぞ又た區區して此の蕪穢を生じ、具眼の者の笑いを招かんや。今既に是の策を定めて、最古の善本と爲す。後の君子、儻し取りて以て晚出の諸本を訂すれば、自ら餘の言の誤らざるを知るのみ。)

つまり、慊堂は重刻紹興本の價値をよく認めており、校訂を加えるとかえつてその價値を損すると確信している。これも『縮刻唐石經』「跋文」にある「從多聞闕疑之訓、不必強爲之說(多聞闕疑の訓に従い、必ずしも強いて之が説を爲さず)」と相通じるものがある。陶淵明集の校訂成果が石經山房本に反映されていないことは極めて遺憾であるが、慊堂が貴重な文獻を本來の姿で保存し、流布せしめた苦心がよく理解できよう。

なお、石經山房本には『三謝詩』が付されており、また、卷末には天保十一年に作られた「題三謝詩後」がある。石經山房本に先立つ陶謝の合刊本と言えば、曹陶謝三家詩本『陶靖節集』や乾隆年間の陶謝四家詩本『陶彭澤詩』が擧げられる(郭紹虞、頁三二三)。慊堂は言及しないが、石經山房本に『三謝詩』を附したのは、大陸の風習の影響を受けたからであると考えられる。

むすび

陶淵明の詩文は早くも平安時代から日本に傳來し、上代漢詩や五山文學に深い影響を與えた。『日本國見在書目錄』には『陶潛集』十卷が見られるが、和刻本の刊行は江戸時代に入って初めて世に現れた。現存する最も早いものには、明曆三年本『陶靖節集』とその重印本・後修本などがあり、これらは日本における陶淵明集の流布にそれなりの功績を収めている。しかし、明曆本の底本になつた蔡汝賢本は明の萬曆年間のものであり、石經山房本が利用した重刻紹興本とは比べものにならない。したがつて、石經山房本は明曆本に遅れて刊行されたものではあるが、和刻本陶淵明集の最善本であることには贅言を要しない。

石經山房本が和刻本陶淵明集の最善本になれたのには、まずその刊行を主事した慊堂の功績によるものが認められる。慊堂は若い頃から陶淵明の詩文に心酔し、その高潔な人格を尊敬していた。さらに、和陶詩を通じて自分の志向を表明しており、慊堂の人生が陶淵明からいかに大きな影響を受けていたかが覗える。石經山房本の成立背景には、慊堂の陶淵明への愛好が最も大切な要因としてある。

石經山房本の刊行の背後には、慊堂の親友の大きな支えがある。底本になつた重刻紹興本は、狩谷掖齋から借りたものである。また、慊堂は市野光彦所藏の須溪本を鈔寫・校訂したものの、結局は石經山房本に利用してはいないが、陶淵明集の版本系統についての認識を深める一助になつた。さらに、その版下は友人の巻菱湖と『縮刻唐石經』に參與した小島成齋と三浦汝楫によつて書寫されている。なお、石經山房本の題序は、當時の大學頭で慊堂の師匠でもあつた林述齋が著し

たものである。このように、石經山房本の刊行は慊堂一人による偉業ではなく、その親友の協力を得て初めて成立したことが確認できる。特に狩谷掖齋らは江戸後期の考證學と書誌學の勃興・發展に加わった人物であり、石經山房本もその新しい學風の下で成立したものであると考えられる。慊堂が長年精力を注いで成し遂げた校訂成果を放棄し、底本に最も近い形で刊行したのは、石經山房本が従來の和刻本と異なり、實證主義に基づいて成立したのだからであろう。

前述のように、慊堂が陶淵明に傾倒したのには、儒者としての理想像を見たこともあり、その和陶詩の作成にも先賢の朱子の教えに従おうという意圖がある。そこで、石經山房本の刊行は單に漢詩を樂しむためだけに留まらず、儒家の詩教を施す目的も大きかったと思われる。特に石經山房本は同時期に刊行された『縮刻唐石經』と同じく縮刻という技術を用い、その刊行の方法もよく通底している。さらに、その書寫を分擔した小島成齋と三浦汝楫は『縮刻唐石經』にも參與した人物である。なお、『日曆』天保十三年六月二十二日には、「以陶集納澁谷聖廟（陶集を以て澁谷聖廟に納む）」とあり、この「澁谷聖廟」とは澁谷の孔子廟であろう。慊堂が石經山房本を孔廟に奉納したのは、まさに林述齋が評價するように、これが孔子の「興於詩」の旨に従つて刊行されたものだからである。つまり、石經山房本の刊行は同時期の『縮刻唐石經』と同じように、慊堂による儒家の先賢への敬慕と詩教という理念への賛同がその背後にあり、両者は内在的に連係していると考えられる。

なお、慊堂が官版の刊行によく關與していたことは知られているが、官版で朱熹が高く評價した陶淵明集を刊行しなかった。これは官版集部の刊行が文政末期から激減²⁰⁾、その餘裕がなかったからである

う。石經山房本が縮印で携帯に便利であり、教科書として相應しかつたので、官版の肩代わりとして刊行された意味もあつたかもしれない。つまり、石經山房本は私的な出版でありながらも、官版と連携していたことが推測される。

注

- (1) 一部の異文の検討を除き、小論が引用する陶淵明の詩文は全て石經山房本に従う。
- (2) 例えば、卷三「止酒」には「平生不止酒、止酒情無喜」とある。
- (3) 袁行霈『陶淵明集箋註』（中華書局、二〇〇三）卷二「遊斜川一首」校勘（一）を参照されたい。
- (4) 長澤規矩也・長澤孝三『和刻本漢籍分類目録（増補補正版）』、汲古書院、二〇〇六、頁一六四。
- (5) 蕭統「陶淵明傳」の末尾には、「朱子曰、作詩須從陶柳門中來乃佳。不如是、無以發蕭散沖澹之趣、不免局促塵埃、無由到古人佳處。」又曰、陶淵明詩平淡出於自然、後人學他平淡、便去遠矣（後略）。と鈔寫している。
- (6) 山本嘉孝「室鳩巢の和陶詩」、『アジア遊學』二二九號、勉誠出版、二〇一九、頁七一・七五。
- (7) 祝允明『懷星堂集』（『文淵閣四庫全書』本）卷三に「和陶淵明飲酒」二十首があり、その詩冊幾種かが現存している。
- (8) 小論が利用したのは國立國會圖書館藏重刻紹興本である。
- (9) 『日曆』天保四年二月十七日「鈔韓本陶詩數首。」天保四年二月二十八日「手鈔陶詩畢。」天保四年二月二十四日「校陶詩一冊。」天保四年二月二十五日「終日理陶詩一過、甚樂也。」天保四年三月三日「諸生謁、畢

寫陶靖節、當今日修禊、夜召諸生與酒。」などがある。

- (10) 矢島明希子「松崎慊堂校刊影宋本『爾雅』について」（『斯道文庫論集』第五四輯、二〇二〇）参照。

- (11) 吉田篤志「近世後期の考證學」（『近世の精神生活』、大倉精神文化研究所編、續群書類従完成會、一九九六）参照。

- (12) 底本は「□」に作るが、『東洋文庫』本（山田琢譯註、平凡社、一九七〇～一九八三）によって補正する。

- (13) 『日曆』天保六年九月二十七日「大槻土廣來、屬釋詞分寫、及促菱湖寫陶集。」「過弘齋、促陶淵明集。」天保七年二月二十六日「使文蔚往取弘齋所寫陶集、伊云、必持入山自致。」天保七年四月十四日「訪弘齋、陶集未寫上、語至初更辭去。」

- (14) 『縮刻唐石經』「跋」には、「各經首卷、友人小島知足所臨、第二卷以下學子河瀬汝船、三浦汝楫臨完。」とある。

- (15) 『日曆』天保十三年十二月十四日「命印陶集十部。」

- (16) 郭紹虞「陶集考辨」、『照隅室古典文學論集』、上海古籍出版社、一九八三、頁二七一。以下、本文中に「郭紹虞、頁〇〇」とあるのはこれによる。

- (17) 『濱野文庫并近菟本展觀書目錄』創立二十周年記念、慶應義塾大學附屬研究所斯道文庫、一九八〇、頁一九。

- (18) 長澤孝三『幕府のふみくら』、吉川弘文館、二〇一二、頁一四〇。

- (19) これは宋の吳仁傑が著した『陶靖節先生年譜』の誤謬を訂正するものである。

- (20) 顧農「馬永郷論陶淵明」（『中華讀書報』、光明日報報業集團、二〇一七年三月二十二日）参照。

- (21) 『佛祖歷代通載』（國立國會圖書館藏五山版）卷一九「荊門玉泉皓長老塔銘」には、「師叱曰、杜杜。又曰、孟八郎孟八郎。」とある。丁福保

『佛學大辭典』（文物出版社、一九八四）によると、「孟八郎」は行儀の悪くて亂暴な人の代名詞である。「杜杜」の意味は収録されていないが、「孟八郎」の同意語であろう。

- (22) 『縮刻唐石經』「例言」には「唐諱缺筆者、依字填之」とある。

- (23) 『日本教育史資料』第一卷（文部省總務局、一九八〇）所收の明治十四年（一八八二）の「舊藩學政ノ儀ニ付舊大參事平野知秋ヨリ家令依田柴浦ヘ回答書」を参照されたい。

- (24) 市川任三「松崎慊堂と官版」、無窮會『東洋文化』復刊三〇～三二合併號、一九七三・五。

- (25) 福井保「昌平坂學問所官版分類目錄」（『江戸幕府刊行物』、雄松堂出版、一九八五、頁一四八）参照。

- (26) 堀川貴司「官版集部について」、『國語と國文學』特集號「近世後期の文學と藝能」、二〇一四、頁一四一～一四二。

*本研究はJSPS科研費19K13074の助成を受けたものです。

執筆者紹介（掲載順）

- 有馬 卓也 廣島大學大学院人間社會科學研究科教授
關 俊史 早稲田大學大学院文學研究科博士後期課程
王孫 涵之 京都大學大学院文學研究科
日本學術振興會特別研究員D C
早川 太基 上野學園大學日本音楽史研究所
日本學術振興會特別研究員P D
東 英寿 九州大學大学院比較社會文化研究院教授
金 博男 北海道大學大学院文學院博士後期課程
表野 和江 鶴見大學文學部准教授
○上田 望 金澤大學人文學類教授
田中 雄大 東京大學大学院人文社會系研究科博士課程
日本學術振興會特別研究員D C
○佐藤普美子 駒澤大學總合教育研究部教授
小川 主税 大阪大學大学院文學研究科博士前期課程
橋本 陽介 お茶の水女子大學助教
大島繪利香 名古屋大學大学院人文學研究科博士候補研究員
○高山 大毅 東京大學大学院總合文化研究科准教授
黒田 秀教 明石工業高等専門學校助教
富 嘉吟 立命館大學衣笠總合研究機構専門研究員
- ：執筆委囑

編集後記

- 前年度から引き續き門脇廣文（大東文化大學）が編集を擔當しました。また今年度は、同大學の小塚由博・高橋睦美をメンバーに加え、編集作業を行いました。
- 本號の掲載論文の總數は十六篇です。彙報欄等は學會事務局にご擔當いただき、學界展望につきましては、コロナ禍という事情もあり、今年度は哲學部門・文學部門は掲載せず、次年度に二年分ご執筆頂くこととなり、語學部門のみの掲載となりました。語學部門は日本中國語學會（擔當は同學會理事の秋谷裕幸先生）に執筆していただきました。また英文提要は東方學會に依頼して作成していただきました。ご協力いただきました各位に厚く感謝申し上げます。
- 今年は全世界に未知のウィルスが蔓延し、社會は外出自粛とテレワークという未曾有の状況となり、生活スタイルが一變致しました。我々の界限でも、従来の學會大會や研究会の開催が困難となり、延期や中止を餘儀なくされたり、或いはリモート開催となったりしており、また教育現場においてもライブやオンデマンド等によるリモート授業が行われております。研究とは、教育とは何か、ということを改めて考えさせられる年となりました。一日も早い終息を願うばかりです。そのような中で、本號が變わらず無事發刊できましたこと、何よりほつとしております。
- 本號の印刷は例年通り株式会社サンセイに依頼しました。このような事態にも拘わらず、こちらの面倒な依頼にいつも快く迅速に對應していただきました。とりわけ實務擔當の近野裕一様には大變お世話になりました。感謝の言葉もございません。
- これにて二年間の編集擔當を終え、來年度は明治大學の甲斐雄一先生にバトンをお渡し致します。

大東文化大學文學部中國文學科 門脇廣文・小塚由博・高橋睦美
〒一七五―八五七一 東京都板橋區高島平一―九一―

(昭和 62 年 10 月 11 日制定)
(平成 13 年 5 月 13 日修正)
(平成 14 年 10 月 13 日一部修正)
(平成 15 年 10 月 5 日一部修正)
(平成 19 年 10 月 7 日一部修正)
(平成 20 年 5 月 17 日一部修正)
(平成 21 年 10 月 11 日一部修正)
(平成 22 年 6 月 6 日一部修正)
(平成 22 年 10 月 10 日一部修正)
(平成 23 年 10 月 9 日一部修正)
(平成 24 年 10 月 7 日一部修正)
(平成 25 年 3 月 31 日一部修正)
(平成 25 年 10 月 13 日一部修正)
(平成 27 年 10 月 10 日一部修正)
(平成 29 年 6 月 12 日一部修正)
(平成 30 年 6 月 3 日一部修正)

括弧内を9ポイントにする場合および内容上特に異体字であることが必要な場合は、当該箇所にも明記する。特に必要とするものについては、簡体字等での引用も可とする。

9. 注は、各章・節ごとにつけず、通し番号を施して全文の末尾にまとめる。割注は用いない。注の表記については、本学会が定めたガイドラインに沿うことが望ましい。
10. 中国語のローマ字表記は、執筆者の選択にゆだねるが、同一論文にあっては、ウェード式・漢語拼音方案等何らかの統一があることが望ましい。ただし、特殊な綴りで通用している固有名詞（例：孫逸仙 Sun Yat-sen）、本人が自分の名前に使用している綴りについてはその使用も認める。日本語のローマ字表記は、ヘボン式の使用を原則とする。

論文要旨

11. 応募時の原稿には2000字以内の和文の論文要旨を添付する。
12. 学会報掲載の論文要旨は、英文とする。論文掲載者は、完成原稿提出時に、1200字程度の日本語要旨を添付する。

原稿提出

13. 原稿などは必ず書留により下記に郵送するものとし、毎年1月15日までの消印のあるものを有効とする。持参は認めない。

〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25

斯文会館内 日本中国学会

14. 応募の際、審査を希望する部門（哲学・思想、文学・語学、日本漢学）の別を原稿第1ページに朱書する。ただし、論文の内容により、複数部門にわたる審査を希望することができる。
15. 応募時には、本文・要旨をそれぞれ4部ずつ提出する。原稿は原則として返却しない。
16. 応募時には、①原稿のやりとりをする際の連絡先（住所、電話、メールアドレス）、②現在の所属先、③最終出身大学及び修了（退学）年を書いた紙を提出する。（書式は自由。）

校正

17. 執筆者校正は再校までとする。校正時の加筆・訂正は初校段階に限り、必要最小限のものについてのみ認める。

抜刷

18. 論文抜刷に関わる作成費用等は本人負担とする。

その他

19. 掲載論文については、電磁的記録として記録媒体に複製する。これを日本中国学会の会員、図書館、研究機関、それらに準ずる組織及びその他の公衆に譲渡、貸与、送信すること、またその際に必要と認められる範囲の改変を行うことがある。

「日本中國學會報」論文執筆要領

日本中国学会

応募資格

1. 日本中国学会会員に限る。

使用言語等

2. 応募原稿（以下「原稿」と略称）は和文によるものとし、未公開のものに限る。ただし、口頭で発表しこれを初めて論文にまとめたものは未公開と見なす。

原稿枚数等

3. 原稿は校正時に加筆を要しない完全原稿とする。
4. 原稿枚数は、本文・注・図版等を合わせて、以下のように定める。ワープロ使用の場合、用紙サイズはA4、1行30字、毎ページ40行、文字は本文、注ともに10.5ポイントによって印字し、18ページ以内（厳守）とする。この書式に合わないものは、受理しないこともあるので、注意すること。採用論文刊行の段階で、規定のページ数を超過した場合には、調整を求められることがある。なお、手書き原稿提出の場合は400字詰原稿用紙54枚以内（厳守）とし、論文が採用された場合、電子データを別途提出する。電子データ入力を学会に依頼する場合、加算費用は執筆者負担となる。
5. 図版を必要とする場合、『學會報』の組版における占有面積により文字数を換算する。『學會報』半ページ分が、ほぼ25行（1行30字）である。図版原稿は原則としてそのまま版下として使用できる鮮明なものとし、掲載希望の縦・横の寸法を明示する。

体裁・表記等

6. 原稿は縦書きを原則とする。特に必要とするものについては、横書きも可とする。
7. 引用文は内容に応じて原文、訳文、書き下し文のいずれかを用いるものとする。原文の場合は該当する訳文または書き下し文を、訳文または書き下し文の場合は該当する原文を本文中または注に明示する。ただし、一読して疑問の生ずる余地がないものについては、省略することを認める。中国語以外の外国語の引用もこれに準ずる。校勘・版本研究等内容上適切と認められるものについては、原文のみ引用することを妨げない。原文に返り点・送り仮名をつけることは原則として認めない。日本漢学・日本漢文等に関する内容のもので、訓点の施し方自体を論ずる場合はこの限りではないが、加算された印刷費は執筆者の負担とすることがある。
8. 原稿は旧漢字体・常用漢字体のいずれの使用も可とするが、刊行にあたっては全文を原則として旧漢字体（印刷標準字体）に統一する。ただし、本人の申し出によって、常用漢字体での印刷を認める。刊行にあたっては、本文9ポイント、括弧内は8ポイントを、注はすべて8ポイントの活字を使用する。特に本文

e 大学入試（漢文・中国語）・中国語教育等の問題

f その他

4 委員会の細則

各種委員会の運営上の細則は、各種委員会が別に定める。

る。その結果は理事長が評議員会に報告するものとする。

- (3) 出版委員会
 - a 学会報編集
 - b 学会便り編集
 - c 名簿編集
 - d 出版物発送（業者依託）
 - e 翻訳出版
 - f 学会出版部設置問題
 - g 外国文要旨の作成
 - h その他
 - (4) 選挙管理委員会
 - a 評議員選挙の管理
 - b 理事長選挙の管理
 - c 監事選挙の管理
 - d その他
 - (5) 研究推進・国際交流委員会
 - a 科学研究費補助金
 - b 日本学術会議との関連
 - c 漢文資料センター
 - d 他学会との関係
 - e 中国書データベース化等
 - f 国際シンポジウム
 - g 国際学術情報
 - h 客員会員候補者（外国人を含む）選定
 - i その他
- ただし、hは評議員会の審議と承認とを必要とする。
- (6) 広報委員会
 - a ホームページ（日本語版・英語版・中国語版）の作成と更新
 - b 学会諸事業の予告と案内、各種委員会の議事報告、電子メールによる照会・問い合わせの窓口対応、中国学関連のホームページへのリンク、などを行う
 - c データベースの作成・管理・公開（学会報や学会発表要旨を含む）など
 - d 大会に関する広報
 - e その他
 - (7) 将来計画特別委員会
 - a 新会則施行後、問題点の検討
 - b 事務所問題
 - c 社団法人化
 - d 学会の新規事業計画

- (3) 監事は3名とし、必要に応じて主席監事は評議員会議長と合議の上、臨時に監事を委嘱することができる。

委員会規約

- 1 会則第12条による委員会は、理事長が会員を委員に委嘱してこれを構成し、その構成は理事会の審議・決定を経るものとする。各委員会は次の如く定める。
 - (1) 大会委員会
 - (2) 論文審査委員会
 - (3) 出版委員会
 - (4) 選挙管理委員会
 - (5) 研究推進・国際交流委員会
 - (6) 広報委員会
 - (7) 各種特別委員会

(1)～(6)は常置とし、必要に応じて特別委員会を置くことができる。当分の間、将来計画特別委員会を置く。
- 2 委員会の構成と所在
 - (1) 各種委員会の委員長は理事とする。
 - (2) 理事長・副理事長は各種委員会に出席できる。
 - (3) 各種委員会の委員は若干名とする。
 - (4) 委員の任期は2年とする。
 - (5) 各種委員会に幹事を置く。幹事は委員会の会務を掌る。
 - (6) 各種委員会の事務局は、原則として委員長の所属している大学・研究機関に置く。事務上の適切な必要経費は学会本部が負担する。
- 3 委員会の任務
 - (1) 大会委員会
 - a 開催校決定
 - b 実行委員会に協力
 - c その他
 - (2) 論文審査委員会
 - a 査読者を決定・依頼
 - イ 一編につき3名
 - ロ 査読者氏名は明かさない
 - b 査読者の報告に基づいて登載論文を審査・決定
 - c 登載決定論文に対する修正意見の提示と修正の確認
 - d 投稿者への対応
 - e 学会賞受賞者選定
 - f その他

ただし、eは評議員による推薦をもとに行い、さらに理事会にはかって決定す

平成 11 年 4 月 1 日までの移行措置は別に定める。

平成 18 年 4 月 1 日改正

平成 23 年 4 月 1 日改正

平成 26 年 4 月 1 日改正

平成 29 年 6 月 12 日改正

平成 30 年 10 月 28 日改正

選挙規約

1 会則第 11 条による役員の内選は次の如く行う。

(1) 評議員

通常会員により、無記名で 10 名以内を連記して投票し、上位 60 名を当選者とする。ただし北海道、東北、関東、中部、近畿、中国・四国、九州の各地区の会員最少 3 名を含むこととし、上位 60 名の中に当該地区選出者が 3 名に満たない時には、当該地区会員の最高得票者から順に評議員に加える。また女性の評議員会参加を促進するため、女性会員最高得票者から第 12 位得票者まで 12 名を評議員に加える。

(2) 理事長

評議員により、無記名で 1 名を単記して投票し、最高得票者を当選者とする。

(3) 得票数の同じ場合は、年長者を当選者とする。

2 役員の内選は選挙管理委員会が管理する。ただし、選挙管理委員会の規約は別に定める。

3 各当選者は、総得票数によって決定する。

4 当選者が辞退した場合は、次点者を繰り上げる。

評議員会・理事会・監事会規約

会則第 12 条による評議員会・理事会・監事会の任務と運営とを次の如く定める。細則は各会が定める。

1 (1) 評議員会は、理事会の提案に対する最高議決機関とする。

(2) 評議員会は議長・副議長各 1 名を選出する。議長は評議員会を代表し会務を統べる。副議長は議長を補佐し、議長に事故ある時は副議長がその任を代行する。

(3) 定例評議員会は、大会前日に開催する。

2 理事は当面 10 名程度とする。

3 (1) 監事は、本部事務局ならびに各種委員会事務局の経理を監査し、評議員会に報告する。その細則は別に定める。

(2) 監事は理事長と副理事長と理事の三者を除く評議員の内選により、最高得票数を得た者を主席監事とする。

8. 各種委員会委員は会員に限られ、理事長の委嘱を受けて各種委員会を構成し、会務を立案執行する。ただし、委員会および委員・幹事については別に定める。

第13条（役員任期）

1. 役員（顧問を除く）の任期は二年とし重任することができる。
2. ただし、理事長は連続三任はできない。
3. 役員（顧問を除く）は満70歳を超えて在任できない。
4. ただし、年度の途中で満70歳に達した役員は当該年度末日まで在任するものとする。
5. 顧問の任期は終身とする。

第14条（会計年度）本会の会計年度は毎年4月に始まり翌年3月に終わる。

第15条（臨時評議員会の開催）全通常会員数の100分の5以上が評議員会開催を要求した場合、理事長は随時評議員会を開催しなければならない。

第16条（会員総会）理事会は会員総会を年に一回開催して会員に会務を報告すると共に、会員の自由な提案を受けなければならない。

第17条（会則変更）本会則の変更は理事会の議を経て、評議員会において全評議員の3分の2以上の賛成をもって決定する。

〔付則〕

1. 本会は事務所を当分の間、東京都文京区湯島1丁目4番25号斯文会館に置く。
2. 本会則は昭和24年10月22日より施行する。

昭和34年10月11日改正

ただし、第13条但し書きは昭和34年選出の理事より適用される。

昭和36年10月1日改正

昭和37年10月28日改正

昭和39年12月6日改正

昭和41年10月30日改正

昭和42年10月8日改正

昭和45年10月10日改正

昭和50年10月6日改正

昭和51年10月11日改正

昭和53年10月14日改正

昭和58年4月1日改正

昭和63年10月9日改正

ただし、第13条第3項の定年規定は平成元年4月1日より適用される。

この第3項の施行に伴う経過措置は別に定める。

平成2年10月20日改正

平成7年10月7日改正

平成10年10月10日改正

通常会員	
普通会員	7,000 円
普通会員 (満 70 歳以上)	4,000 円
学生会員	4,000 円
賛助会員	1 口 (10,000 円) 以上
国外会員	7,000 円
準会員	7,000 円

第 9 条 (会員の権利)

1. 通常会員・国外会員は本会定期刊行物の頒布を受け、大会等に出席することができる。また学会機関誌および大会等において研究を発表することができる。
2. 賛助会員・準会員は本会定期刊行物の頒布を受けることができる。
3. 客員会員は本会定期刊行物の寄贈を受ける。

第 10 条 (役員) 本会は次の役員を置く。

1. 理事長 1 名
2. 副理事長 2 名
3. 理 事 若干名
4. 監 事 若干名
5. 評議員 60 名
6. 顧 問 若干名
7. 幹 事 若干名
8. 各種委員会委員・幹事 若干名

第 11 条 (役員を選出・委嘱)

1. 評議員は通常会員の互選による。
2. 理事長は評議員の互選による。
3. 副理事長および理事は評議員の中から理事長が委嘱し、評議員会の承認を得る。
4. 監事は理事長と副理事長と理事の三者を除く評議員の互選による。
5. 顧問は評議員会の定めるところにより評議員会が推薦する。
6. 幹事および各種委員会の委員・幹事は理事長の委嘱による。

第 12 条 (役員職掌)

1. 理事長は本会を代表して理事会を組織し会務を統べる。
2. 副理事長は理事長を補佐し、理事長に事故ある時または任期中に役員定年を迎える時は副理事長がその任を代行する。
3. 理事は理事長の委嘱を受けて理事会を構成し、会務を掌る。
4. 監事は監事会を構成し、経理を監査する。ただし、監事会については別に定める。
5. 評議員は評議員会を構成し、理事会による本会の運営について審議・決定・委任する。ただし、評議員会については別に定める。
6. 顧問は随時理事長の諮問に応ずる。
7. 幹事は会務を処理する。

日本中国学会会則

第1条（名称）本会は日本中国学会と称する。

第2条（目的）本会は中国に関する学術の研究と普及および会員相互の親睦を図ることを目的とする。

第3条（事業）本会はその目的を達するために次の事業を行う。

1. 毎年1回学術大会の開催
2. 学会機関誌およびその他刊行物の発行
3. 海外の学術団体との交流
4. 会員の研究に対する援助
5. 斯学の啓蒙と普及
6. その他必要な事項

第4条（会員の名称）本会の会員は次の7種とする。

1. 通常会員
普通会員と学生会員と特別会員とがある。
学生会員とは大学・大学院・研究機関等に正規学生として在籍しているもの。
特別会員とは会員歴30年以上で前年度内において満80歳に達したもの。
2. 賛助会員
3. 国外会員
4. 客員会員
5. 準会員

第5条（会員の定義）

1. 通常会員は斯学を攻究するものとする。
2. 賛助会員は斯学を賛助するものとする。
3. 国外会員は外国に定住して斯学を攻究するものとする。ただし一時的な在住の場合は含まない。
4. 客員会員は本会が招聘する、学術上の功績が顕著なものとする。
5. 準会員は斯学に関係ある大学・研究機関とする。

第6条（入会等）

1. 客員会員を除き会員の入会は通常会員または国外会員1名の紹介により理事会において審議・決定し、評議員会の承認を得る。
2. 客員会員の推薦については別に定める。

第7条（経費）本会の経費は会費・寄付金およびその他の収入をこれに充てる。

第8条（会費）

1. 会員は下記会費を年度始めに納入するものとする。
2. ただし顧問・客員会員および特別会員はこれを免除する。また、前年度までに満70歳に達した普通会員で会費3万円を一括納入した会員についても、会費を免除する。

あることを指摘したうえで、眼球運動計測による注視時間や注視頻度等进行分析した結果、中国語母語話者には“**强动结式**”が“**弱动结式**”の処理より難度は高いが、中国語学習者には、“**强动结式**”が“**弱动结式**”の処理より難しいとは限らず、場合によっては“**弱动结式**”のほうが難しい点が指摘され、さらに、中国語学習者の第一言語に“**强动结式**”が存在するか否かによって、とくに“**弱动结式**”の処理難度に相違が生じることを指摘する。

(鈴木慶夏)

learning) の連鎖を観察し、日本語母語話者が漢字を活かした知識源を多用している点について利益と不利益の双方を論じる。李佳「日本初級汉语教材中の典型动宾搭配考察—从在日汉语教学视角出发—」(『中教』)は、日本で出版された初級教科書で提示される「動詞+目的語」によるコロケーションを調査し、テキストに母語話者の使用実態が必ずしも反映されていないこと、新出単語を母語話者がよく使うコロケーションの形で提示する頻度が低いこと等を、具体例とともに示す。黄勇「框式介词“从……起/开始”中的隐现规律试探」(『中教』)は、“从……起/开始”での“从”または“起/开始”が省略される規則性を統語論、意味論、語用論の面から記述し、“*从四月学习汉语”とする誤用から前置詞“从”は“起/开始”とともに教授すべきだという先行研究の主張に対し、“从”が省略された実例を挙げながら、むしろ後続成分“起/开始”に比重をかけた導入方法も検討してよいのではと述べる。

次の実践報告は、中国語教育、ひいては外国語教育の存在意義について、学習者自身が他者との相互交流や社会との関わりを意識する過程を考察する。島村典子「基于大学生中文能力差异的小组合作学习策略与实践」(『中教』)では、経済開発協力機構(OECD)が2018年に発表した「新たな価値を創造する力」「緊張やジレンマを解決する力」「責任をもつ力」を身につけるには、他人と協同する力と個人の責任能力の涵養が必要だと論じる。胡玉华「关于“能动学习”效果的实践研究—以汉语初级班的教学活动为例」(『中教』)は、学習者の多くが「自分で調べて発表する演習形式の授業」より「教員が知識・技術を教える講義形式の授業」を希望しているという、アクティブ・ラーニングに対する教員側の高い期待と学生側の低い評価との間にあるギャップについての論考である。

ところで、第二言語としての中国語に関する言語習得過程・言語処理過程の認知的基盤を探究する認知心理学的研究は、非常に重要な研究分野でありながら国内では現在進行中のものがわずかに存在するだけで、今のところ研究成果がほとんどない。そこで、この研究上の空白部を補填するものとして、海外の研究者たちによるものであるが、以下3篇の共同研究に言及したい。靳洪刚等3名による「事件相关电位(ERP)技术在第二语言句法习得研究中的应用」(『世』4)は、言語刺激に対応する脳の反応として脳電位(Electroencephalogram: EEG)を分析するもので、事象関連電位(Event-Related Potentials: ERP)の測定によって被験者の言語処理と言語習得の過程を追究する。陈路遥等6名による「基于词类信息的语标标示对汉语二语句法规则建构的影响研究」(『世』2)は、注音字母による視覚的人工文法学習(artificial grammar learning)を利用した実験の結果、品詞情報を与えられたグループと与えられなかったグループとでは、前者のほうが複雑な統語規則の構成に有利であり、その有利性は統語構造の複雑性が増すほど顕著になることを論じ、第二言語の処理過程における品詞情報のラベル表示能力が有する重要性の直接証拠を示したと述べる。何美芳等3名による「不同语言类型的二语学习者汉语动结式加工的眼动研究」(『世』2)では、“动结式”を動詞の語義から形容詞の語義を推測し得る“弱动结式”(例：“张三擦干净了桌子”)と推測し得ない“强动结式”(例：“张三哭湿了手绢”)とに二分し、“弱动结式”が言語類型論上の無標形式で

Distance in Chinese」(Papers) は全 88 語に対して語彙変化の進度を 0～3 の実数値で定義して、各語の進度の平均値を全 42 方言について算出し、南方方言の保守性と官話の周辺的変種の改新性を指摘する。

言語接触に関する研究として、川澄哲也「漢語甘溝方言の形成過程再考」(『言語文化研究』38-2) は、青海省海東市民和回族土族自治県の甘溝方言に、モンゴル系言語の他、チベット語からの影響が見出されると述べる。佐藤直昭「上海人の「普通話」に対する言語意識」(『開』) は地方普通話の一種である上海普通話に対する上海人の態度や容認性判断を、アンケート調査を通じて社会言語学的に考察する。

このほか、秋谷裕幸「**闽东区方言的 {手指} 义词及其相关的词语**」(『開』) は閩東区の諸方言における指・親指・小指・(手の) 爪の閩東祖語の祖形を再建し、語幹の本字を「指」と同定するとともに、祖語から各方言への音変化や語形の発達過程を復元する。邵兰珠「**广东吴川吉兆村双语人粤方言同音字汇**」(『開』) は、広東省吳川市吉兆村の粵語・黎語の二言語話者が話す粵語の報告であり、張勇生・汪玲・张文娟・彭爱华「**东乡县马圩镇方言同音字汇**」(『開』) は江西省撫州市東郷県の贛語の報告である。両地域とも多言語・多方言の雑居地であり、記述的研究の成果発表の意義は大きい。西田文信「現代香港粵語における上声の変異について」(『開』) は、1993 年と 2018 年に採録した同一の話者 4 名の音調を比較し、近年の広東語に見られる陰上・陽上合流現象を実証する。飯田真紀『**広東語文末助詞の言語横断的研究**』(ひつじ書房) は、広東語の文末助詞の網羅的記述を行ったうえで、音韻的・形態統語的観点から文末助詞の分類体系を構築し、そのカテゴリが必ずしも意味的特徴と一対一対応を示すとは限らないことを指摘する。さらに同書は、伝達態度を表示する義務度が高いという特徴を広東語や日本語が共有することを指摘し、文末助詞という語類の存在が東アジア・東南アジアに特有の言語的特徴である可能性に言及するなど、示唆に富む言語横断的展望を示す。濱田武志『**中国方言系統論**』(東京大学出版会) は粵語と桂南平話の共通祖語「**粵祖語**」を再建し、各地の変種の系統関係を分岐学的方法で推定するとともに、共通祖語の情報の一部を系統樹から導き出す方法についても論ずる。(濱田武志)

七、教育

2019 年は、教授法や指導法を再考・追究しようとする実践的な研究が目立った。

『中国語教育』第 17 号での「身近な言語をもっと知ろう—〇〇語は 90 分でここまでできる—」は、ドイツ語・スペイン語・ロシア語・フランス語・韓国語・日本手話をゼロから始め、初回授業の 90 分後にコミュニカティブな成果をあげる極小スパンの学習設計を、ふだん中国語教育に従事する者が体験したワークショップの特集である。90 分で到達すべき能力の目標とその目標に対応する教育的タスクとともに、課題の遂行能力を身につけたことを客観的に評価できるルーブリックを明示する。

小川典子「日本語を母語とする中国語学習者の L2 読解における付随的語彙学習—10 名の学習者のケーススタディー—」(『中教』) では、思考発話法 (think aloud) によるプロトコル分析を運用して、読解における付随的語彙学習 (incidental vocabulary

ラマール)「西文資料與客家語研究」(『中』)は宣教会の客家語文献や同資料を用いた客家語の研究成果を紹介し、資料との比較を通じて客家語訳聖書の言語資料としての価値を論ずる。千葉謙悟「西文資料與官話研究」(『中』)は明末以降の欧文資料を比較し、資料中における「官話」の多義性、および意味・用法の変遷について論ずる。吉川雅之「ある中露字典の漢字音について」(『東洋』)については「一、音韻」を参照。林素娥「一百多年来吴语“没有(无)”类否定词的类型及演变」(『開』)は、この百数十年間に上海方言などで起きた「没有(无)」が「勿曾」を代替する現象について、今も未発生の方言(金華方言など)と、百数十年前に既に発生している方言(寧波方言)が呉語に見られることを指摘し、馬之涛「关于19世纪宁波方言牙喉音顎化及尖团合流的问题」(『開』)は、寧波方言における牙喉音の口蓋化や尖端合流、およびこの音変化と関連して発生した韻母の chain shift の進行過程について考察する。遠藤雅裕「論臺灣海陸客語“再次”義「過」的語法化」(『開』)は欧文資料や和文資料を用いて、海陸客語(客家語海陸片)の「過」の副詞用法「ふたたび」が、「再・過」の連用に起源を持つという新たな仮説を提示する。復刻資料としては、『日本統治下における台湾語・客家語・蕃語資料』シリーズ(第1巻『台湾語法』(中川仁解説)、第2巻『語苑』にみる客家語研究)(羅濟立解説)、第3巻『蕃語研究』(中川仁・王麒銘解説)が近現代資料刊行会より刊行された。

言語地理学的研究については数多くの成果が、『*东部亚洲地理语言学论文集* (Collected Papers on Eastern Asian Geolinguistics)』、および国際中国語言学学会第27回年会プレワークショップの成果に基づく *Papers from the Workshop “Phylogeny, Dispersion, and Contact of East and Southeast Asian Languages and Human Groups”* の2論文集にて発表された。例えば遠藤光暁「汉语及周边语言中“南瓜”和“马”两个借词的地理分布」(『东部』)は、借用時期が大きく異なる南瓜と馬の語形変化のメカニズムや伝播の過程を対比的に考察する。黄河・吴雅寅「参考行政层级观察方言特征的扩散方式」(『东部』)は葉祥苓『蘇州方言地图集』(1981年)所載の方言地図のうち Cascade model (級联模型。地理的に隔絶した地点間の伝播モデル)を体現する27枚をもとに、都市化の進捗と“行政扩散模型”の成立との相関関係を立証したうえで、類似度行列で地点間の類似度を計量的に分析する方法を提唱する。鈴木史己「Characteristics of the Geographical Distribution of Words Denoting Cultural Items in Sinitic Languages」(*Papers*)は鉄、稲、高粱、トウモロコシの語形分布のパターンの相違が、気候的差異や語彙の進入時期、他の語との関係などによって条件づけられていることを実証する。このほか、八木堅二「山西方言における軽声と語末変調」(『中』)は山西方言の軽声が南北でそれぞれ独自に発達した蓋然性が高いと推定したうえで、軽声が語末変調の中和の結果生まれ、軽声を持つ方言の分布域が山西省の周辺から中央へと拡大している可能性を述べる。遠藤光暁「山東方言二字組変調の地理言語学的研究」(『経済研究』11)は山東方言について、調類の組み合わせごとに作成した言語地図の対照、そして過去の音韻資料との比較等から、各変調の発生順序や発生原因、および変調現象の拡散過程の解明を試みる。数理的性格が強い研究として、岩田礼・植屋高史「Lexical Innovation and Inter-Dialectal

者の主観的な評価（属性 A の内的要因としては、X の重要性が候補として想定される同類の成員の中で最も高い）を表す形式である、とする見解を示しながら、“A 在 X”との相違の核心はこの種の焦点的特徴の有無に認められるとする、独自の説を提示している。

また、前田真砂美「“比”構文における〈A + V〉と数量句」（『現代』）は二つの〈A + V〉の形式（“多 + V”及び“早 + V”）を取り上げ、“**我比他早起了十分钟**”のように、“比”構文において〈A + V〉と共起する数量句の機能を考察するものである。当該構文中の数量句は、その具体的数量によって二者間の差を明示することで、程度性の表現としての再分析を促し、これにより、〈A + V〉のもつ「デキゴト性」をキャンセルし、程度や差のあり方を表現しようとする“比”構文の要求を満たす。当該の議論では、“比”構文中の数量詞の機能はこのような再分析のメカニズムを通じて、当該構文への〈A + V〉の適合性を高めることにありと結論される。

森雄一・西村義樹・長谷川明香編『認知言語学を拓く』（くろしお出版）には、他の言語に関する論考と共に、中国語の現象を扱う論文が多数収録された。広く認知言語学の領域において中国語に関する研究成果が問われることにより、双方の学術領域における議論の活性化と理論的発展が期待される。紙幅の都合上、以下に2篇のみ取り上げる。三宅登之「行為の評価からモノの属性へのプロファイル・シフトについて」は、本来行為に対する評価を述べる“容易”“难”等の形容詞が、モノを修飾したり、それについて叙述したりする用法を併せ持つ現象をプロファイル・シフトの例として扱い、行為に対する同一の評価をする人が多く評価が恒常的であることが、この現象の基盤となっている、とする見解を示している。また李菲「中国語の攻撃構文における臨時動量詞の意味機能」は、先行研究において指摘された借用動量詞の適用条件を、構文論的観点から捉え直すことにより、借用動量詞の適用動機について、より核心に迫る修正案を提示している。

語彙研究の分野では、牛彬「基于口语语料的“拜托”新用法分析」（『日中語彙研究』8）が、現代中国語の口語コーパスに観察される“拜托”の新用法を論じている。「聞き手の観点や何らかの事柄に対する話し手の否定的態度を表す」とされる“拜托”の用法において、その動詞性が消失し、新たに修飾副詞としての機能を獲得したことを、統語機能や伝達機能等の観点から考察している。また、その成立要因についてはイギリスの言語学者ジェフリー・リーチ（Geoffrey Neil Leech, 1936～2014）が提唱するポライトネスの原理（Politeness Principle）との関連が認められると指摘している。

（加納希美）

六、方言

まず、近代の文献資料に基づく研究を紹介する。『中国語学』266号にて、口語（粵語、客家語、官話、日本語）を反映した欧文資料の研究が特集された。吉川雅之「西文資料與粵語研究」（『中』）は近代粵語（早期粵語）の通時的变化や多様性の研究方法を論ずるほか、新発見の18世紀半ばの粵語資料を紹介する。柯理思（クリスティーン・

の解題・影印・翻刻を掲載するが、パリのフランス国立図書館（BNF）、ヴァチカンのヴァチカン図書館（BV）、ローマのイエズス会ローマ総本部アーカイブズ（ARSI）、トレドのトレド・イエズス会歴史文書館（APHTCJ）など欧州各地に所蔵された一連の写本・刊本の分析を基礎とする。上掲三書の継承関係から、イエズス会の著作が宗派對立を超えてドミニコ会やプロテスタント系宣教師にも受け継がれたことを指摘する。

愛知大学の雑誌『日中語彙研究』8では英国人中国学者サマーズ（James Summers, 1821-91）の特集が組まれている。サマーズは西洋人による漢語教科書を詳細に検討して *A Handbook of the Chinese Language*（1863）を書き上げ、欧人による漢語教育の到達点の一つと位置づけられる。特集では伊伏啓子氏が名詞、朱鳳氏が六書（漢字）、奥村佳代子氏が代名詞と人物呼称、千葉謙悟氏がムードとテンス（動詞）、塩山正純氏が副詞を分析している。また伊伏啓子「近代欧文資料にみられる“一個”について」（『北陸大学紀要』46）は、19世紀の欧人による著作に中国語の量詞が計数機能や類別機能のみならず、個体化機能をも有するという認識が反映されていたと論じる。また服部隆「十九世紀の文法研究：オランダ語・日本語の品詞分類に与えた漢語学の影響」（『国語と国文学』96-5）は、19世紀の蘭語・日本語文典の品詞分類に漢語学の分類観が反映し、明治以降の文法研究にも影響を及ぼしたと指摘する。

「訳語」分野における最大の収穫は陳力衛『近代知の翻訳と伝播—漢語を媒介に』（三省堂）である。本書は日本の近世における漢学の流行から、新漢語の創出と拡大、新中国成立以降の現代中国語への影響まで、近代に成立した新たな概念が東アジアで双方向的に展開していく様子を実証するとともに、日中英の資料に基づき東アジア全体の語彙交流を俯瞰的に論じている。また沈国威「Evolution 如何译为“天演”？」（『関西大学東西学術研究所紀要』52）は、嚴復が Evolution を“天演”と訳した要因を考察し、cosmic process の訳語“天演”がのちに evolution に借用されたと指摘する。

（石崎博志）

五、文法・語彙（現代）

本分野においては、既に一定の結論をみている問題を、認知言語学、対照研究等の隣接領域の枠組みの中で問い直す試みにおいて、各領域の発展に資する顕著な成果が報告された。

日中対照研究では、井上優「中国語のとりたて表現」（野田尚史編『日本語と世界の言語のとりたて表現』くろしお出版）がある。意味、統語的位置（語順）、運用面等の各側面から、中国語と日本語におけるとりたて表現の特徴を対照的に論じたものである。一連の分析を通じて中国語の言語的特徴が改めて確認されると共に、とりたて表現の多様性と普遍性を言語横断的に捉える上での有益な知見が提供されている。

「とりたて」の現象を扱う論考には、この他に池田晋「A 就 A 在 X」结构的焦点特征」（『現代』）がある。単音節の属性形容詞（A）を用いる“A 就 A 在 X”と“A 在 X”の比較により、両構造における X の焦点的特徴の差異を論じるものである。“A 就 A 在 X”は、“卓立焦点（とりたて）”の手法を通じて X を焦点化し、これにより発話

のであり、〈疑念〉の意味は、「将」の〈直前相〉というアスペクツ的意味から派生したものであると推測する。この2つの論考は、研究対象は異なるものの、疑問文に対するその共通した捉え方は、他の言語現象を扱う際にも示唆に富む。

なお、2019年は新元号「令和」が発表されたことで、その出典である『万葉集』が踏まえた張衡「埤田賦」が俄かに注目を浴び、関連する論説がいくつも発表された。ここでは、齋藤希史「「令和」をめぐる考察①」（東京大学新聞オンライン、4月30日）を挙げておく。（戸内俊介）

四、文法・語彙（近代）

ここでは宋代から民国期の文法・語彙に関する研究を対象とし、以下「白話資料」・「満漢資料」・「域外資料」に分類して概観する。

白話資料は2本の論文を挙げる。木津祐子「「箇」の個別化機能と定指“量名”構造」（『開』）は、「箇（个）」が後続名詞を個別化して文脈が要求する属性に焦点を当てる機能を分析し、『朱子語類』や『祖堂集』の用例から、“箇”が量詞機能より先に定指指示用法を補強する機能をもっていたことを指摘する。そのうえで安徽、貴州、湖南、蘇州など現代諸方言の用例を援用し、数詞“一”を持たない定指指示用法は、数詞“一”が省略された用法ではない可能性を指摘する。また刘晓晴「语气助词“就是（了）”的词汇语法化途径」（『中国語研究』61）は、現代中国語の文末助詞“就是（了）”が語彙文法化したプロセスを考察する。文末の“就是”と“就是了”は明代中期に増加し、明末清初に語彙化と文法化を経てVP + 就是（了）の動詞用法と、S + 就是（了）の語気助詞の用法を獲得したとする。とりわけ“就是了”は副詞“就”と形容詞の変種“是了”の結合から成立したと結論づける。

満漢資料は竹越孝により英国所蔵の満漢対訳資料の校注が2本公開されている。『問答語 fonjin jabun leolen i bithe』（1827年、大英図書館（BL）蔵）に対する「校注『問答語』（『神戸外大論叢』70-2）と『満漢合璧集要 manju nikan hergen in kamciha isabuha oyonggo bithe』（1764年、東洋アフリカ研究学院（SOAS）蔵）に対する「校注『満漢合璧集要』（上）（下）」（『神戸外大論叢』71-1）である。また Takashi Takekoshi, Grammatical Descriptions in Manchu Grammar Books from the Qing Dynasty (*Histoire Epistémologie Langage* 41-1) は、漢語の分析とは対照的に、清代の漢人による満州語の文法分析には近代的文法概念が適用されていたと指摘する。

次に中国以外で編纂・利用された資料を「域外資料」とし、「唐話・日本資料」・「泰西資料・訳語」の順に解説する。奥村佳代子『近世東アジアにおける口語中国語文の研究：中国・朝鮮・日本』（関西大学出版部）は、18、19世紀の中国語の口語と白話の境界を明らかにすべく、中国、朝鮮、日本で「話し言葉」として記述された漢語を分析する。とりわけ中国と欧州所蔵のキリスト教檔案と、朝鮮への中国漂着船の尋問記録を取り上げ、両者の相違を考察した点が特筆される。

泰西資料では、内田慶市『『拜客訓示』の研究』（関西大学出版部）が上梓されている。これは『拜客問答』、『拜客訓示』、Paul PERNYのDialogues Chinois-Latins（1872）

之」の合音) とどのように繋がるかはなお未解決の問題であり、今後の展開が待たれる。

宮島和也「淺談《逸周書・皇門》“開告于予嘉德之說”以及相關問題」(『東京』)は、『逸周書』皇門篇「開告于予嘉德之說」の「于」を言説内容をマークする成分と見なした上で、清華簡『皇門』の対応箇所「維莫余嘉德之說」についても検討を加える。本論文は出土文献と伝世文献をバランスよく用いつつ、上古の特殊な文法現象を文法化の類型論的パターンに当てはめることで無理なく解釈しており、説得力に富む。

大西克也「論上古漢語代詞“之”和“其”的替代功能」(『歴史語言學研究』13)は、上古後期の指示代名詞「之」と「其」の指示機能を代示と理解した上で、文中或いは話し手の頭の中にある先行詞を照応することを通して中心語に属性を付与することがその基本的機能であることを示しつつ、従来から議論のあった、先行詞のない例、「之、其」が二人称を指示する例、「しかるべき」を表す例、「其」の定冠詞的用法などが、いずれもこの基本機能を軸に解釈可能であることを論ずる。

雷塘洵「古汉语动词“假”“借”的音义、句法及其演变」(『中』)は、貸借関係を表す「借」と「假」が「与奪不明」—「借りる」と「貸す」双方の意味を表す—になる過程を、文法と語音の両面から通時的に追究したものである。本論文は語彙研究のみならず、上古の形態論、四声別義、二重目的語文の研究にとっても高い参照価値を有する。

高柳浩平「中古早期の「使」構文について」(『人文研紀要』92)は上中古間の「使」が内容語的な派遣義・命令義から機能語的な使動義へと変化する過程を文法化理論に沿う形で描きつつ、中古以降、直接使役を表す「使役者+使/令+非指示的名詞 or Ø + V2」において被使役者が「使/令」とV2の間に具体的に表出しないのは、原因事象と結果事象が概念的に近接している直接使役に対応して、それらの言語形式上の距離が縮約された、謂わば結合の類像性(iconicity)に起因すると推定する。使役については多くの研究の蓄積があるが、類像性という観点からその文法化を捉えなおした点は注目に値する。

楊安娜「早期漢譯佛典中的處所詞考察—以“所”、“處”為中心」(『饕餮』27)は、三国南北朝期の初期漢訳仏典に見える「X所」「X處」の前接成分Xの性質や、両者の統語分布の違いを仔細に調査した上で、「所」は実質的意味が弱化した粘着成分である一方、「處」は実質的意味が強い成分であったと述べる。類義語の研究は、基礎資料に対する丁寧な分析が必須であるが、本論考はそれを体現していると言える。

次の2本は、疑問文を〈疑念〉と〈問いかけ〉の2種に分割しつつ立論する。松江崇「汉语疑问数词“多少”的生产机制—兼谈中古疑问数词系统的复杂性」(『中国语言文学研究』25)は、「多少」は元来、数量の多寡を表す語で、後漢魏晋南北朝期では〈疑念〉のみを示し、〈問いかけ〉の機能は弱かったが、それが疑惑や疑問の語気を帯びたコンテクストに頻出したことで、コンテクストの含意を取り込み、唐宋以降、〈問いかけ〉を表すようにもなったと推定する。山田大輔「中古漢語に見える“將+否定詞”の機能及びその成立過程に関する一考察」(『饕餮』27)は、一語化した「將+否定詞(不、非、無)」形式が、しばしば独言や内心発話に見えることを手掛かりに、その機能を〈疑念〉を表すものと位置付ける。さらにこの形式は仏典の翻訳によって成立したも

也氏が「**试论上古汉语否定词的多样性及其体系**」を報告した。近年、古漢語分野では否定詞関連の研究が活況を呈しており、否定詞が甲骨文から西周、そして春秋戦国、秦漢にかけてどのように変遷していくのか、今後の研究に期待したい。

大西克也「**雅言獻疑**」（『東京』）は「雅言」という語が「官話」や「標準語」を表すようになった背景を詳らかにする。「雅言」という語は春秋戦国時代の共通語、すなわち *lingua franca* の存在を容易に想起させるが、当該論文は「雅言＝共通語」という図式に疑義を呈し、「雅言」が真に意味するところは未だ謎のままであると結論づける。

陳少明（張瀛子訳）「**訓詁に因って義理に通ず—戴震、章太炎などを手がかりに清代漢学の哲学方法を論じる—**」（『中国—社会と文化』第34号）は副題にもあるとおり清朝における哲学的議論を論じることに主軸が置かれたものであるが、戴震らの訓詁学的手法を仔細に論じており、歴史言語学の立場からも大いに参考になる。

このほか漢字そのものを対象としたものではないが、吉川雅之「**ある中露字典の漢字音について**」（『東洋』）、濱田武史「**論《蒙古字韻》所反映的漢語方言音系**」（『集刊』）があり、前者はキリル文字、後者はパスパ文字からなる対音資料を研究対象としたものである。前者については「一、音韻」を参照。

漢文に関する書として、宮本徹・松江崇『**漢文の読み方—原典読解の基礎—**』（放送大学教育振興会）が出版された。前半部分には豊富な用例と解説が付されており、辞書のように用いることもできるため重宝されるだろう。

なお諸般の事情により、『中国研究集刊』李号（第65号、大阪大学中国学会）を手にとることができなかったが、目次を見る限り今号も充実しているようである。

（野原将揮）

三、文法・語彙（上中古）

まず単刊本から繙読する。宮本徹・松江崇『**漢文の読み方—原典読解の基礎—**』（放送大学教育振興会）は、上中古中国語の文法規則を解説した上で、代表的な文献の訳注を掲載し、さらに日本での漢文の受容をも取り上げた、漢文の総合的概説書である。概説書と雖も、その文法解説は訓読方法などのテクニカルな説明に留まらず、個々の機能語や構文を詳説する。特に疑問詞や目的語前置構文、数量表現の項目は従来のテキスト類を遥かに超える充実ぶりである。

次に論文に移る。戸内俊介「**再び甲骨文の「不」と「弗」について—使役との関わりから—**」（池田巧編『シナ＝チベット系諸言語の文法現象2 使役の諸相』、京都大学人文科学研究所）は同氏の「**甲骨文の非對格動詞から見る「不」と「弗」の否定機能差異**」（2018年）の結論を一部修正したもので、甲骨文の動詞句の語彙的アスペクトを手掛かりに、「弗」を動詞句の表す事象の展開がその内在的終結点に至らないことを示す否定詞であると位置づける。戸内俊介「**再議甲骨文中の否定詞“不”與“弗”的語義功能區別—兼論甲骨文中的非賓格動詞—**」（『文字・文獻・文明』、上海古籍出版社）は上記2論文を合わせたダイジェスト版である。なお、甲骨文の否定詞の機能が春秋戦国以降のそれと異なることは広く知られているが、前者の「弗」が後者の「弗」（＝「不＋

(『集刊』)を挙げる。更科論文は『華夷訳語』乙種本と丙種本の「雑字」部分の音訳漢字について、両者の間に時代的差異、方言的差異、文体的差異に加えて、音訳手法の差異が存在することを『女真館訳語』を例に論じる。欧文資料では、吉川雅之「ある中露字典の漢字音について」(『東洋』)、田野村忠温「中国初期英語学習書における英語発音の漢字表記：流音の知覚と表記」(『大阪大学大学院文学研究科紀要』59)がある。吉川論文はライデン大学図書館所蔵の中露字典(抄本)について初めて調査報告を行うとともに、この資料中にキリル文字で記された漢字音を推定し、そこに19世紀中期の北京音と共通する特徴が見られることを指摘する。

方言音韻では、秋谷裕幸「原始閩北區方言裡的 *ə」(*Language and Linguistics* 20-3)がJerry Normanおよび孫順両氏による閩北方言祖語に対する修正案として、主母音 *ə 系列の韻母(*ə, *iə, *əu, *əŋ, *iəŋ)を提案し、それらを含む44の韻母からなる韻母体系を再構している。閩北方言祖語の単母音韻母 *ə が上古音の *ə とよく対応する点が注目される。進行中の音韻変化を調査したものとして、大西博子「江蘇通州方言における入声舒声化—金沙と二甲の比較分析—」(『近畿大学教養・外国語教育センター紀要 外国語編』10-1)、西田文信「現代香港粵語における上声の変異について—同一話者の経年調査の結果から—」(『開』)がある。西田論文については「六、方言」の項を参照。(橋本貴子)

二、文字・訓詁

『漢字學研究』第7号は「金文通解」に加え、「字説」として大形徹「醫について」を掲載する。このほか翻訳として、村上幸造「甲骨文法—陳夢家『殷虛卜辭綜術』第三章文法(上)一」、訳注に笠原直樹「子彈庫「楚帛書」十三行文釋注」がある。「古文字學研究文獻提要」は甲骨文に関する裘錫圭氏の論考をまとめており、特に注目される。

『中國出土資料研究』(中国出土資料学会)第23号に掲載の李筱婷「馬王堆漢墓帛書『春秋事語』用字研究」は馬王堆帛書『春秋事語』に見える用字法を整理したものである。当該論文は『春秋事語』と齊系資料の用字習慣に関連性があるとし、さらにそれを根拠として『春秋事語』のテキストが齊に由来するという可能性を示唆する。史傑鵬「利用詞源分析破解《楚辭》和《史記》中的兩個疑難問題」は楚辭や史記に見える諸問題について訓詁学的手法を駆使してアプローチしており、興味を掻き立てられる。このほか同誌は、曹方向「上博簡『靈王遂申』再研究」、「嶽麓書院秦簡」の釋文・編聯を整理したものとして陶安「嶽麓書院秦簡《爲獄等狀四種》第三類、第四類卷冊釋文、注釋及編聯商榷」も掲載しており、充実した内容となっている。

文法に関わるものとしては、雷塘洵「古汉语动词“假”“借”的音义、句法及其演变」(『中』)、宮島和也「淺談《逸周書·皇門》“開告于予嘉德之說”以及相關問題」(『東京』)がある。また否定詞に関して戸内俊介氏が精力的な研究を展開している。これらについては、「三、文法・語彙(上中古)」の項を参照。否定詞については、神戸市外国語大学で開催された国際中国語言学会(IACL)においてワークショップ(The Diversity of Sino-Tibetan Negation Phenomena)が企画され、古漢語に関して宮島和

『中教』 『中国語教育』第17号（中国語教育学会）
Papers *Papers from the Workshop “Phylogeny, Dispersion, and Contact of
East and Southeast Asian Languages and Human Groups”*
（アジア・アフリカ言語文化研究所）

なお、本稿執筆期間が新型コロナウイルスへの対応期間と重なったため、例年通りの文献収集が行いがたい状況下での執筆を担当者は余儀なくされた。万全を期したつもりではあるものの、必要な場合には次集において追補を行いたい。（秋谷裕幸）

一、音韻

まず中国語学研究『開篇』に言及したい。1985年以来34年もの間、国内外の中国語史および中国語方言関係の論文を中心に掲載してきた国際的な研究誌であるが、編集長・古屋昭弘氏の退職にともない、2019年に惜しまれながら閉刊となった。最終号かつ鄭張尚芳、楊耐思両氏の追悼記念号となったvol.37には、音韻史および方言音韻の論文が実に10数本掲載されており、当該分野の研究を志す者としては感慨深いものがあった。

上古音についてはまず、秋谷裕幸・野原将揮「上古唇化元音假说与闽语」（『中国語文』2019年第1期）および野原将揮「構擬“泉”字音—兼論“同義換讀”」（『集刊』）を挙げる。前者は円唇母音仮説を閩語の音韻データによって支持するとともに、閩語の最も早期の層が紀元前3世紀にまで遡ることを示す。後者は、中古音でu介音を持ち、上古音では円唇母音oを主母音として想定される“泉”が、非円唇aを主母音としていたことを考証し、-anから-onへの変化を「同義換讀」（ある語を意味が同じかまたは類似する別の語の発音により読み替えること）によるものと説明する。次に吉池孝一・中村雅之「烏弋山離とアレクサンドリア（1）～（4）」および「漢語上古音の-r介音（1）～（3）」（『KOTONOHA』194、195、197、200、201、203、204）を取り上げる。前者はAlexandriaの音訳とされる「烏弋山離」を端緒として、対音資料や南方方言音を用いて漢代の音価について考察する。前漢と後漢の音価の違いを時代差でなく地域差によるものとする点に独自性が見られる。後者はシナ・チベット祖語再構を視野に入れた近年の上古音研究の議論を批判的に検討する。

中古音では、太田斎「『玄應音義』反切と『切韻』反切—中古效攝所屬字の分析」（『日本中国学会報』71）を挙げる。玄応『一切経音義』が『玉篇』反切のみならず『切韻』の反切をも書名を挙げずに引用していることを指摘し、更に玄応が『韻集』を引用した可能性についても検討を加える。なお玄応の『玉篇』利用については太田斎「玄応音義に見る玉篇の利用」（1998年）を参照のこと。橋本貴子「対音資料から見た初唐期の匣母の音価について—義浄の音訳漢字を中心に—」（『開』）は梵漢対音と漢訳マニ教文献の音訳讃歌とを用いて初唐期の匣母が有声性を保っていたことを示す。

近世音では、対音資料に関する丹念な研究として、更科慎一「『華夷訳語』の音訳法の諸問題—『女真館訳語』を中心に」（『山口大学文学会志』69）、鋤田智彦「『御製増訂清文鑑』における漢字音」（『開』）、濱田武志「論『蒙古字韻』所反映的漢語方言音系」

学 界 展 望

この項を編集すべき2020年春、突如新型コロナウイルスによる感染の危機に世界中がみまわれた。大学など日本の研究教育機関では入学式の中止を皮切りに、学生や教職員の自宅待機など、4月以降、多くの予期せぬ事態に対応が急がれた。また、これに伴う図書館の閉鎖も相継ぎ、今回、この学界展望を執筆することが困難となった。幸い語学部門については担当者各氏の努力により、この通り掲載が実現したが、哲学と文学については、次号第73集に2年分をまとめて掲載することとする。

●語 学

はじめに

学界展望（語学）は、今回より日本中国語学会・学界展望編集委員会（委員長・秋谷裕幸）が担当する。令和2年度から新設された本委員会は、昨年度までの学界展望ワーキンググループが発展的に改組されたものである。

これまでと同様、本稿は原則として2019年1月から12月までに日本国内で公開された著書および学術論文を対象とするともに、重要な研究成果については海外で公開されたものも取り上げる。

研究分野の分類は昨年と同様であり、「はじめに」、「音韻」、「文字・訓詁」、「文法・語彙（上中古）」、「文法・語彙（近代）」、「文法・語彙（現代）」、「方言」、「教育」となっている。執筆者は、項目順に、秋谷裕幸（愛媛大学）、橋本貴子（神戸市外国語大学）、野原将揮（成蹊大学）、戸内俊介（二松学舎大学）、石崎博志（佛教大学）、加納希美（金沢大学）、濱田武志（三重大学）、鈴木慶夏（神奈川大学）である。はじめに、音韻、文法語彙（現代）、方言については執筆者が昨年度から交代した。全体の調整は秋谷が担当した。

文中で用いた学術誌の略号は以下の通り。いずれも2019年に出版されたものである。

- | | |
|-----------|--|
| 『东部』 | 『东部亚洲地理语言学论文集 (Collected Papers on Eastern Asian Geolinguistics)』(アジア・アフリカ言語文化研究所) |
| 『東京』 | 『東京大学中国語中国文学研究室紀要』22号 |
| 『東洋』 | 『東洋文化研究所紀要』第174冊 |
| 『開』 | 中国語学研究『開篇』vol.37 (好文出版) |
| 『世』2、『世』4 | 『世界汉语教学』2019年第2期、第4期 (北京语言大学) |
| 『中』 | 『中国語学』266号 (日本中国語学会) |
| 『集刊』 | 『中國語言學集刊 (Bulletin of Chinese Linguistics)』Volume12 Issue1 (Brill) |
| 『現代』 | 『現代中国語研究』第21期 |

『穀梁伝』がいかに位置するかを『今古学考』を中心に明らかにする。その上で廖平は『穀梁伝』の成立と伝承についてどのように考えたかを『穀梁古義疏』の検討から考究する。

まず、廖平は礼制によって諸経伝を「今学」・「古学」に分類し、それは「孔子の年齢による主張の変化に由来するもの」であるとした。このとき判断の基準となったのが、『礼記』王制と『周礼』であった。そのうち、『穀梁伝』中の礼制が『礼記』王制とことごとく合致することから、他の二伝よりも『穀梁伝』を高く評価する。

そこで、廖平が『穀梁伝』をどのように修めたかが問題として立ち上がる。氏は『穀梁古義疏』成立までに二つの段階があるとする。まず、初変期の学説が形成される以前に『穀梁先師遺説考』としてまとめられた、范寧以前の『穀梁伝』解釈の探求である。次に、自身の学説に『穀梁伝』を位置づけ、解釈するという段階である。これが、上述の『礼記』王制に合致するという廖平の学説である。そして、廖平の『穀梁伝』研究は『穀梁古義疏』初変期の学説形成とは没交渉に開始された」と氏は述べる。これは重要な指摘であろう。

次に、『穀梁古義疏』に検討対象を移して伝の成立・伝承過程について検討が加えられる。そこには初変期学説が形成される以前の内容を含んでいるものの、注意が必要であると氏は述べる。それは、上述の『穀梁伝』を高く評価するという廖平の初変期の学説にもとづく見解という点である。この行論についても精緻な文献の検討にもとづいて周到に行われている。特に伝承過程については、『穀梁伝』に五家の異本があったとされる「五家本説」にもとづいて、劉向を穀梁学に位置づけようとしたという指摘は注目に値する。

『今古学考』と『穀梁古義疏』を中心とした文献資料の検討・分析によって、初変期の「平分今古」という廖平の学説の形成過程を明らかにしたことは、廖平研究の新たな一歩として大きな意味を持つ。加えて、論旨も実に明快で、行論も理路整然としており、実証的な検討がなされている。以上の理由より、日本中国学会賞を受賞するに値する水準の論文であると考えられる。

に『中庸』、『孟子』の朱熹編集本を多く使用していた。

さらにコボは「無極とは天・地・人・物を統括・主宰する者である」と述べ、朱子学の文脈における絶対善であり、形而上の「天理」の意味的な内実を、天地万物を生み出す、無形のキリスト教の「神」に変容させていた。

その他、本論文は、コボが宋学上の重要な「道統」や「道心」等の概念をキリスト教の教理説明に援用しており、『真伝実録』の執筆時には、朱熹の『四書集注』がコボの手元にあり、マニラ在住の知識人、士大夫との交流から「四書」や集註の重要性を知っていた可能性があると推測している。このようなかたちで、コボが儒家・宋学を先立てたことは、世界哲学史的に見て特筆すべきことと考えられる。

またキリスト教の神 Deus の訳語「天主」は、ルッジェーリが『天主実録』で初めて使用したもののだが、コボはこの「天主」が大明国の「無極にして太極」に当たる、つまり「無極」が「天主」の同義語、ないし「天主」の備える「無極なる」形而上性を表す言葉として理解・受容したのである。「無極」概念は、周敦頤による『太極図』に基づくが、コボは生成論および神の無限・無窮な性質を重視するキリスト教否定神学的な視点から「無極」概念を中国哲学のうちから見出した可能性がある。

以上、『真伝実録』では宋学の概念を多用し、『真伝実録』の中国古典を多く引用して、キリスト教の教義に関わる議論に組み込んだ点は、リッチの『天主実義』と類似している、あるいはむしろ先行していた。他方、コボは「天主」等の概念を説明する際に「無極」等、当代中国知識人の共通認識たる宋学の最重要概念を用いており、リッチの古典重視のアプローチとは明らかに異なっていたと指摘する。

以上、本論文が、文献学的、哲学的考察により、明確でなかった中国宣教初期キリスト教の中国哲学の重要概念理解とキリスト教との適合の試みをあぶり出したものといえる。以上の理由より、本論文は、日本中国学会賞を授与するのに値するものとする。

[哲学・思想部門]

韓淑婷「佐久間象山の『喪礼私説』について——幕末における『家礼』受容の一例」

本論文は、廖平の初変期の学説をまとめた『今古学考』および、同時期に著された『穀梁古義疏』の検討を通して、廖平の初変期の学説において『穀梁伝』がいかに位置づくかを闡明せんとするものである。

これまでの廖平研究は、「六変」に着目したものを中心に行われてきた。だが、氏も述べるように「その経学に関する研究」が「これまで必ずしも十分になされてきた」というと、巨視的・総論的研究であった憾みがある。たしかに、廖平の思想全体を把握する営為も必要ではある。しかし、同時にそれぞれの廖平の言説にもとづいた、微視的な研究も行われる必要があろう。本論考はかかる視座より廖平の初変期の学説と、『穀梁伝』の関係を詳細に検討した意欲的な研究である。

本論考の問題意識と方法は、次の二つに要約されよう。まず、廖平の学説において

に仮託した信念や思いが多方面に影響を与え、通俗小説を取り巻く環境を変えていった可能性に言及し結びとしている。

本論文は一言で言えば郭助の文学活動に関する研究ということになるだろうが、武人の立場から小説を捉え直す視座と、政治的文脈から小説を読み返す視座とを交錯させ、そのうえに粘り強く積み上げた数多の新史料と独創的な着眼から、二大小説出版の背後に隠された意図と影響を鮮やかに描き出して間然する処がない。以上、本論文は日本中国学会賞を授与するに値するものと判断する次第である。

[哲学・思想部門]

王雯璐「マニラ刊行『無極天主正教真伝実録』(1593)の研究——同時代カトリック教理書との関連を中心として」

本論文では、1593年フィリピンのマニラにおいて漢文で刊行出版されたカトリック、ドミニコ会士ファン・コボによる教理書『無極天主正教真伝実録』の内容が検討される。その際、同時代に中国大陸で出版されたイエズス会士たちによる教理書と比較対照することで、本書の性質や特徴の一端を明らかにしている。

明末中国においてヨーロッパの宣教師が作成した漢文カトリック教理書については、イエズス会神父マテオ・リッチの『天主実義』に関する研究は汗牛充棟の観がある。これに先んじては、同会士ルッジェーリが『新編天主実録』を著しており、こちらも従来注目されてきた。

他方、コボ『真伝実録』は1593年にフィリピンのマニラで出版されたもので、出版史・書籍史の研究者に注目され、天文地理の知識をアジアにもたらしたことが強調されてきた。さらに、本書のファクシミリとともに全面的に本書を紹介する研究は、スペインの研究者ピラロエル等によりなされてきた。

一方本論文では、従来、本格的研究がなされてこなかった、カトリック教理面・哲学面の内容に注目し『天主実録』や『天主実義』と比較しつつ、概念翻訳において如何に中国哲学が咀嚼理解され、それがキリスト教義とすりあわされたかの実情を解明している。

『真伝実録』では先行するルッジェーリの表現を基礎にしながらも、内容をより充実させている。たとえば天地自然の道が盛大で、万物が相害せず、相悖らないのは「無極之所爲大」と述べ、これを神の大いなるしわざと読み換えた。このように儒教の根本概念を援用してキリスト教理論に組み入れることは、ルッジェーリの『天主実録』には見られず、むしろリッチの『天主実義』の方針に先立つものであった。

『真伝実録』はいわゆる自然神学、すなわち被造物とその自然本性を秩序づけた唯一絶対の神の論証に至る、という手法を取っており、コボの『真伝実録』ではこうした方法が全書に貫かれていた。論述の際、コボは様々な儒教古典を引用している。具体的には『中庸』、『史記』、『書経』、『孟子』、『論語』からの引用が見られる。コボは四書、特

〔日本中国学会賞〕 選定の結果ならびに理由

[文学・語学部門]

井口千雪「武定侯郭勛による『三国志演義』『水滸伝』私刻の意図」

本論文は明代嘉靖期の権臣郭勛という人物がなぜ、当時蔑まれていた通俗小説『三国志演義』『水滸伝』の両書を、政治的地位を危険にさらしてまで私費で自主的に出版したのか、その刊行動機を緻密な郭勛の生平考証と小説の読解から解き明かした労作である。

郭勛なる人物が『三国志演義』『水滸伝』を刊刻したことについては、嘉靖後期から万曆初期の間に成立した『晁氏寶文堂書目』中巻に「『水滸伝』武定版」「『三国通俗演義』武定版」の文字が見え、これらは郭勛による家刻本と見做されていたものの、明確に特定できる刊本が伝存せず、「郭武定本」の研究は着手しにくいテーマであった。また郭勛その人についても、彼の生平や文学活動に焦点を当てた先行研究は乏しく、網羅的な調査は行われていなかった。

本研究ではまず、井口氏のこれまでの郭勛生平研究の基礎のうえに新しい史料の発見とあわせ、武定侯郭家の高い社会的地位、高い文化水準、豊富な刻書活動を次々に明らかにしていく。特に郭勛がわざわざ医書『千金寶要』を刊刻した意図として、出版事業が人々と社会に与える影響を熟知していたとする指摘や、李開先、高儒など通俗小説と関わりのある人物との交遊関係を見出した点は興味深い。今後、郭勛を研究しようとする者にとっては、本研究の到達点から出発することになるであろう。

次に本論文の前半部では二つの面から郭勛が『三国志演義』を私刻する動機を解明する。一つ目は、郭家に関連する詩句を丹念に掘り起こし、郭勛が武臣の立場から諸葛孔明や関羽といった三国志物語の英傑を敬愛し、彼らへの共鳴感が『三国志演義』刊刻に駆り立てる要因となった可能性を示唆する。もう一つは、筆者のこれまでの研究に基づき『三国志演義』の所謂嘉靖壬午序本の関中修髻子を郭勛の号と見做し、郭勛自身が序を書いたとする前提から、明朝中葉において蜀漢正統論を改めて強調する背景には、当時の朝廷の一大論争であった「大礼の議」における皇統の正統性の問題が関わっており、議礼派に属していた郭勛が世宗や議礼派を擁護する目的で意図的に序文を附して『三国志演義』を私刻したのではないかと推察する。

そして後半部では、郭勛と『水滸伝』との内在的な繋がりを三つの側面から明らかにする。一つは、郭勛が抱く武官軽視の明代社会への不満を史料の中から浮かび上がらせ、武官の社会集団に帰属していた郭勛が、『水滸伝』中の文官に虐げられる武官の現実に共感し、『水滸伝』の私刻に至ったのではないかと述べる。次に、郭勛の行動は国のためとはいえ無頼漢を招集するなど『水滸伝』の登場人物の境遇と符合する部分が多く、水滸的好漢を模倣する一方で、自らの不法行為を正当化する狙いがあったのではないかとする。続けて、郭勛が世宗の庇護する上清宮の邵元節ら正一教の道士と共同体を成していた事実を明らかにし、その称揚を目的の一つとして龍虎山上清宮的一幕から始まる『水滸伝』を私刻したのではないかと指摘して、最後に郭勛が『三国志演義』『水滸伝』

- ④ 選挙管理委員会
- ⑤ 研究推進・国際交流委員会
- ⑥ 広報委員会
- ⑦ 将来計画特別委員会
- (5) 入会申込者の審査
- (6) 退会申出会員等の承認
- (7) 顧問の嘱任について
- (8) その他

通信による臨時評議員会 (5月22日付)

- 一、報告事項
 - (1) 2020年度日本中国学会賞授賞者の決定について
- 二、審議事項
 - (1) 新入会員の決定について
 - (2) 顧問嘱任の件について

2020年度臨時理事会

○5月25日(月)20時～21時

Zoomによるオンライン会議

- 一、審議事項
 - (1) 緊急時対応案の補足について
 - (2) 慶弔内規について
 - (3) 全国大会の代替案について
- 二、報告事項
 - (1) 評議員選挙の再延期について

通信による臨時評議員会 (6月1日付)

- 一、審議事項
 - (1) 大会時の緊急事態対応ガイドラインについて
 - (2) 本年度の大会について

通信による臨時評議員会 (7月19日付)

- 一、審議事項
 - (1) 本年度大会の開催形態について

- (4) 2019 年度総会次第について
- (5) その他

第 71 回大会は台風の影響により中止

通信による臨時評議員会 (11 月 6 日付)

- 一、審議事項
 - (1) 大会参加費等の払い戻しについて

2020 年 4 月～ 8 月

通信による臨時評議員会 (4 月 29 日付)

- 一、審議事項
 - (1) 「学界展望」の延期について

通信による臨時評議員会 (4 月 30 日付)

- 一、審議事項
 - (1) 評議員選挙の延期について

2020 年度第 1 回理事会

○ 5 月 18 日 (月) 20 時～ 21 時 10 分

Zoom によるオンライン会議

- 一、報告事項
 - (1) 理事長報告
 - (2) 各種委員会報告
 - (3) 学会報編集担当校・大会開催校等について
 - (4) 日本学術会議報告
 - (5) 会員動向について
 - (6) その他
- 二、審議事項
 - (1) 2020 年度学会賞受賞者の決定について
 - (2) 2019 年度決算・監査報告
 - (3) 2020 年度予算案
 - (4) 2020 年度各種委員会事業計画
 - ① 大会委員会
 - ② 論文審査委員会
 - ③ 出版委員会

彙 報

2019年9月～2020年3月

2019年度第2回理事会

○10月11日(金)13時～14時50分

於関西大学千里山キャンパス第1学舎1号館3階A301教室

一、報告事項

- (1) 理事長報告
- (2) 各種委員会報告
- (3) 『日本中国学会報』第71集及び会員名簿の発行について
- (4) 学会報編集担当校・大会開催校等について
- (5) 会員動向について
- (6) その他

二、審議事項

- (1) 入会申込者の審査
- (2) 退会申出会員の承認
- (3) 2019年度評議員会議事次第について
- (4) 2019年度総会次第について
- (5) 各種委員会提案審議事項
- (6) その他

2019年度評議員会

○10月11日(金)15時～16時50分

於関西大学千里山キャンパス第1学舎1号館3階A301教室

一、報告事項

- (1) 理事長報告
- (2) 各種委員会報告
- (3) 『日本中国学会報』第71集及び会員名簿の発行について
- (4) 学会報編集担当校・大会開催校等について
- (5) 会員動向について
- (6) その他

二、審議事項

- (1) 2018年度決算・監査報告
- (2) 2019年度予算案
- (3) 新入会員の承認

had considerable influence on early Sinitic poetry and Gozan 五山 literature, but Japanese reprints appeared only during the Edo period. Although the Sekikyō Sanbō edition was published comparatively late among Japanese reprints of Tao Yuanming's writings, its origins go back a long way, and its value as the finest Japanese reprint must be recognized by all. In particular, the Sekikyō Sanbō edition is intrinsically linked to the *Shukukoku Tō sekikyō* 縮刻唐石經 that Kōdō published around the same time, and it is to be supposed that its publication was undertaken not merely for the sake of enjoying Chinese poetry and that the goal of bringing about Confucian education in poetry also played a large part in its publication.

房 edition of the *Tao Yuanming wenji* 陶淵明文集 published by Kōdō in 1840 (Tenpō 天保 11).

Kōdō was an avid reader of Tao Yuanming's writings already in his early twenties and was strongly drawn to his life of hearty drinking. But in his thirties and forties he came to take an interest rather in Tao Yuanming's life as a recluse and gave expression to his own aspirations in life through twenty poems "matching the rhymes" of poems by Tao Yuanming. Worthy of particular note is the fact that Kōdō was fully cognizant of the format of poems modelled on those of Tao Yuanming and was attuned to the inner spirit of earlier such poems by Gensei Shōnin 元政上人 and Muro Kyūsō 室鳩巢, and Kōdō's poems could be said to have been an extension of their works. In his later years, Kōdō's devotion to Tao Yuanming was directed not only at the contents of poems modelled on those of Tao Yuanming but also at his calligraphy, and it exhibited a composite modality. It is to be surmised that the publication of the Sekikyō Sanbō edition of the *Tao Yuanming wenji* was a manifestation of Kōdō's long-standing admiration of Tao Yuanming and his writings.

During his thirties, Kōdō became dissatisfied with existing collections of Tao Yuanming's writings and set about editing them himself, but because he was unable to make use of old Song and Yuan editions, this task came to a standstill. Kōdō had an opportunity to view a Shaoxing 紹興 reprint for the first time in the Kansei 寛政 to Kyōwa 享和 eras, and he was finally able to resume editing in the late Bunsei 文政 era. At the time, Kōdō made use of a Shaoxing reprint owned by Kariya Ekisai 狩谷掖齋 and the Xuxi 須溪 edition held by Ichino Mitsuhiko 市野光彦. The block copies were prepared on this occasion by Kōdō's friend Maki Ryōko 巻菱湖 and his pupils Kojima Seisai 小島成齋 and Miura Joshū 三浦汝楫, while the epigraph and preface were produced by his teacher Hayashi Jussai 林述齋. In other words, the publication of the Sekikyō Sanbō edition was not an achievement accomplished by Kōdō alone and was achieved only with the cooperation of some close acquaintances.

When editing Tao Yuanming's writings, Kōdō had in his possession several published and manuscript editions, including the Kanbun 寛文 edition, the Shaoxing reprint, and a manuscript copy of the Xuxi edition. In particular, the Xuxi edition, the base-text of the manuscript copy, had been printed in 1483 (Chenghua 成化 19) and could be said to be just as valuable as the Shaoxing reprint. But in the end Kōdō used the Shaoxing reprint as his base-text. This was because he was well aware of its textual and artistic value. However, he had doubts about the authenticity of titles such as the *Ji shengxian qunfu lu* 集聖賢群輔錄 included in the base-text and ended up removing them. But in the end there were preserved no signs whatsoever of Kōdō's textual criticism in the Sekikyō Sanbō edition. It is evident from this that Kōdō took meticulous care in order to preserve and circulate valuable works in their original form.

Tao Yuanming's writings had been brought to Japan already during the Heian period and

Riken's and Chikuzan's theory of governance was based on that of Ranshū, and it can be confirmed that theirs was a theory in which social institutions are developed through laws, people are guided towards desirable behaviour, and by making them take such action they cultivate a sense of morality. The theory of governance of Confucians of the Kaitokudō can be schematically expressed as policy → environment → action → mind, and it thus overlaps exactly with that of the Sorai school.

In this fashion the Kaitokudō's theory of governance took over that of the Sorai school, but it differed from the latter in that it also paid attention to those who are ruled. This was because the Kaitokudō educated townspeople through discussion, in which case it becomes necessary to reposition Riken's theory of human nature. That is to say, Riken's theory of human nature maintained that the ruled conformed of their own volition to social institutions put in place by the ruler, and here moral theory becomes subsumed by political theory. If this is taken as a further development of the Sorai school on the part of the Kaitokudō, then it could be considered that the Kaitokudō added to the Sorai school self-cultivation to be practised by all people and developed a form of the Sorai school that was for all people.

But because the Kaitokudō reinterpreted Neo-Confucianism on the basis of the Sorai school and was also unable to decide whether morality or political artifice was the basis of governance and to sort out the twin perspectives of the ruler and the ruled, in later times it was considered to have lacked systemicity as a body of thought.

On Matsuzaki Kōdō's Reception of Tao Yuanming: With a Focus on the Publication of the Sekikyō Sanbō Edition of the *Tao Yuanming Wenji*

FU Jiayin

Matsuzaki Kōdō 松崎慊堂 was a Confucian scholar in the latter part of the Edo period, and he is widely known for the Shukukoku Tō Kaisei sekikyō 縮刻唐開成石經. Not only was Kōdō well versed in Confucian canonical texts, but he also had a profound knowledge of literary works. He not only enriched his own life as a reader through Chinese prose and poetry, but was also involved in the editing and publishing of anthologies of Chinese prose and poetry and made an enormous contribution to the circulation of Chinese prose and poetry in the latter part of the Edo period. In this article, drawing on materials such as the *Kōdō zenshū* 慊堂全集 and *Kōdō nichireki* 慊堂日曆, I endeavour to elucidate aspects of Kōdō's reception of Tao Yuanming 陶淵明 and one aspect of the reception of Chinese literature in the latter part of the Edo period, with a focus on the Sekikyō Sanbō 石經山

The Kaitokudō's Theory of Governance: Its Connections with the Sorai School in Terms of Intellectual Thought

KURODA Hidenori

The school Kaitokudō 懷德堂, established in Osaka, Japan, in the early modern period, reached its peak under the brothers Nakai Chikuzan 中井竹山 and Nakai Riken 中井履軒, and because their teacher Goi Ranshū 五井蘭洲, who taught at the school, took a clearly anti-Sorai 徂徠 stance from a vantage point that defended Neo-Confucianism, there was formed at the Kaitokudō a sectarian tendency opposed to the Sorai school. The Neo-Confucianism of the Kaitokudō is in fact said to have carried over the political orientation of the Sorai school, but this has never been examined in concrete detail. In this article, I accordingly consider the line of connections from the Sorai school to the Kaitokudō in terms of the history of thought by comparing the Kaitokudō's theory of governance with that of Neo-Confucianism and the Sorai school, with a focus on the crackdown on extravagance, which was a political issue in the middle and latter part of the Edo period.

In the theory of governance in Neo-Confucianism, a virtuous person exerts influence on the minds of the populace by means of the virtuous qualities that he has cultivated in his own person and thereby also awakens people to moral virtues and brings about a realm that is at peace. Therefore, the likes of institutions and laws are not incorporated in its doctrines as primary methods of governance. Thus, Muro Kyūsō 室鳩巢, a representative Neo-Confucianist of the mid-Edo period who was also involved in the Kyōhō 享保 reforms, considered the appointment of virtuous men as administrators to be the key to cracking down on extravagance, and the theory of governance based on Neo-Confucianist thinking can be schematically expressed as mind → action → environment → policy.

In contrast, Ogyū Sorai 荻生徂徠 did not take into account the morality of administrators in his methodology of governance and made the development of institutions the sole means of cracking down on extravagance. According to Sorai, by influencing by means of institutions the actions people are able to take without their becoming aware of this and making them repeat this behaviour, people's minds will eventually change for the better. Sorai's theory of governance can be schematically expressed as policy → environment → action → mind.

In the case of the Kaitokudō, Ranshū maintained that the establishment of institutions was indispensable for making people frugal, and he sought to change people's minds by means of institutions. Furthermore, he also argued that if the general populace is able to practise frugality, then ultimately the ruler, too, will not indulge in extravagance, and the sovereign is not regarded as someone who takes the lead in practising moral behaviour.

Panlong's poems the word "bright moon" is used in the sense of "bright-moon pearl."

In section 2, I consider expressions in which literary allusions to *zhu* 珠 (pearl) and *bi* 璧 (jade disc) are linked in the Kobunji school. Li Panlong was indifferent to the distinction between *zhu* and *bi*, and he used expressions in which literary allusions to "bright-moon pearl" and "jade disc worth a string of cities" (連城璧) are linked. Dazai Shundai 太宰春臺 criticized such expressions that fail to distinguish between *zhu* and *bi*, considering them to be wrong. The prime example of an expression linking *zhu* and *bi* is "bright-moon jade" (明月璧). There are very few examples of this expression, but it was used in exceptional cases by poets of the Ming Guwenci 古文辭 school. Poems of the Ming Guwenci school are often considered to have thoroughly imitated Tang poems, but there also exist in these poems unusual expressions such as this that are not found in Tang poems. Expressions linking *zhu* and *bi* are also found in poems of scholars and literati of the Edo period, who revered the Ming Guwenci school. However, there are also few examples of the use of "bright-moon jade" in Sinitic poetry of the Edo period, and Takano Rantei 高野蘭亭 uses it with conspicuous frequency when compared with other poets.

In section 3, I discuss the relationship between Takano Rantei and expressions linking "bright-moon pearl" and "jade disc worth a string of cities." Expressions linking "bright-moon pearl" and "jade disc worth a string of cities" are found in poems sent to Rantei by his teacher Sorai, and similar expressions are used in poems sent by Rantei to Sorai. It is to be surmised that through such exchanges Rantei formed an attachment to expressions linking "bright-moon pearl" and "jade disc worth a string of cities" and began to use the strange term "bright-moon jade" in his own poems. Rantei understood the literary allusions to "bright-moon pearl" and "jade disc worth a string of cities" by linking them to himself, and he called, for example, his own home "Bright-Moon Mansion" (Meigetsurō 明月樓). He also used expressions linking "bright-moon pearl" and "jade disc worth a string of cities" with reference to other people, too, one of whom was Akiyama Gyokuzan 秋山玉山. It is interesting to note that Gyokuzan used expressions linking "bright-moon pearl" and "jade disc worth a string of cities" only in poems pertaining to Rantei. He remembered these expressions by associating them with Rantei.

In section 4, I provide an overview of the type of self-perception that, rather than modelling oneself on people of yore, establishes oneself within a system of authoritative allusive expressions, as can be seen in the case of Takano Rantei.

With regard to the native Japanese reading of *du* 篤, the *Chōchūkō* quotes Ishō's view, similar to that given in the Iwase edition, and in order to lend weight to this interpretation it quotes an example of the phrase 篤行李 from the *Shangu waiji shizhu* 山谷外集詩注, another collection of Shangu's poems, and also quotes an example of the use of the word *xingli* 行李 in one of Shangu's letters from the *Shangu laoren daobi* 山谷老人刀筆. The *Sankoku gen'un shō*, on the other hand, cites Ishō's view, similar to that given in the Iwase version, but presents a new interpretation from the perspective of a Zen monk, namely, that *xingli* means "cultivated practice." Hōshuku's *Yonezawa Commentary* does not have anything in particular to say in this regard.

To summarize the characteristics of Sinitic commentaries on Shangu's poems as seen through a comparison with the Iwase version, the *Chōchūkō* sets out in detail the views of earlier Zen monks and quotes corroborative examples. The *Sankoku gen'un shō*, on the other hand, presents views similar to those of earlier Zen monks but also adds views from a different perspective.

Zen monks in Japan each accumulated interpretations of Shangu's poems and quotations from Chinese works, and it was probably because they were unable to write all of their comments in a printed edition that there were born commentaries (*shōmono* 抄物) as independent works that recorded only their own interpretations and quotations from Chinese works. In the view of Banri, the compiler of the *Chōchūkō*, the oldest extant Sinitic commentary on Shangu's poems, the fact that the Iwase version is filled almost to overflowing with the views of Zuikei 瑞溪, a Zen monk of the immediately preceding generation, may have presaged the birth of Sinitic commentaries on Shangu's poems.

“Bright-Moon Jade” and Takano Rantei

TAKAYAMA Daiki

By focusing on distinctive expressions to be seen in poems of the Kobunji 古文辭 school, this article sheds light on the self-perceptions of poets of this school.

In section 1, by way of introduction I examine the influence of the poems of Li Panlong 李攀龍 to be seen in Edo-period commentaries on the *Tang shixuan* 唐詩選. The *Tōshi kukai* 唐詩句解 by Irie Nanmei 入江南溟, one of Ogyū Sorai's 荻生徂徠 pupils, gives a rather strange interpretation of the poem “Ye song Zhao Zong” 夜送趙縱 (“Seeing Off Zhao Zong at Night”) by Yang Jiong 楊炯. It says that the word “bright moon” or “moonlight” (明月) in the final line (明月滿前川) embodies the meaning of “bright-moon pearl” (明月珠). It is to be surmised that this interpretation derives from the fact that in Li

On Interlinear Glosses in a Gozan Edition of the *Shangu Shi Jizhu*
Held by Iwase Bunko Library, Nishio:
In Connection with Sinitic Commentaries on Huang Shangu's Poems

ŌSHIMA Erika

Among Japanese Sinitic commentaries on the poems of Huang Tingjian 黃庭堅 (1045–1105; hao 號: Shangu 山谷), there have survived the *Chōchūkō* 帳中香 by Banri Shūku 萬里集九 (1428–?), the *Sankoku gen'un shō* 山谷幻雲抄 by Gesshū Jukei 月舟壽桂 (?–1533), and the *Sankokushi shūchū* 山谷詩集注 (hereafter *Yonezawa Commentary* on account of its being held by Yonezawa City Library) by Hōshuku Shusen 彭叔守仙 (1490–1555). But it is unclear from these three Sinitic commentaries alone what sort of views there existed prior to their composition and how these earlier views were incorporated into these commentaries. In order to answer these questions, in this article I take up from among Gozan 五山 editions of Shangu's poems the interlinear glosses in the Gozan edition of the *Shangu shi jizhu* 山谷詩集注 held by Iwase Bunko Library, Nishio (hereafter Iwase version), which includes in its interlinear notes a considerable number of interpretations attributed to named Zen monks who belong, moreover, to earlier generations than Banri Shūku, the compiler of the *Chōchūkō*, and I analyze them by comparing them with the above Sinitic commentaries.

The gloss on the lines 西風挽不來、殘暑推不去 in the poem “He da waijiu Sun Shenlao” 和答外舅孫莘老 in fasc. 2 of the Iwase version, taking into account the *Qianxi shiyan* 潛溪詩眼 by Fan Wen 范溫, states that the way in which this couplet has a break between the first two characters and the last three characters is a type of line structure of the Jiangxi 江西 school of poetry that began with Shangu. The *Chōchūkō* gives a more detailed explanation of the interpretation given in the Iwase version, again stating that the particular combination of the first two characters and the second three characters represents a line structure of the Jiangxi school. The *Sankoku gen'un shō* gives the same interpretation as the Iwase version, while Hōshuku compares both commentaries and quotes the more detailed explanation of the *Chōchūkō* in his own *Yonezawa Commentary*.

Again, as regards the line 念公篤行李 in the poem “Ji Pei Zhongmou” 寄裴仲謀 in fasc. 2 of the Iwase version, in his *Shangu shi jizhu* Ren Yuan 任淵 quotes the *Shuowen jiezi* 說文解字 for the character *du* 篤, in which case this line can be taken to mean “I am concerned that you will be delayed in your journey.” The Iwase version gives a different interpretation (相構、往來ヲ、篤セヨ; 能養生セヨソ), saying that it is the same as the interpretation of Ishō Tokugan 惟肖得巖 (1360–1437). In addition, the Iwase version rejects the native Japanese reading *tashinamu* (kun 困) for *du* 篤, based on Ren Yuan's commentary, and adopts the reading *atsū su* (*dun* 敦).

it that some sentences in Chinese feel like “flowing water”?

In this regard, mention may be made of the fact that the way in which one sentence is set off from another sentence in Chinese differs from other languages such as English and Japanese. Taking into account the fact that sentence breaks in Chinese differ from Japanese, English, and so on, in this article I discuss the rhetorical characteristics of sentences deemed to be “sentences like flowing water.”

Ever since Lǐ Shuxiang coined the designation “sentence like flowing water,” such sentences have in subsequent research in the area of linguistics been considered to be complex sentences made up of several clauses in which the links between individual clauses are relatively weak, conjunctions and so on are not used, and there are usually several subjects. But it is unclear how long a sentence should be for it to be considered a “sentence like flowing water,” nor has it been strictly defined how weak the links between individual clauses should be. What would seem to be important when considering sentences such as those deemed to be “sentences like flowing water” is “continuous structure” as defined by Givón (1997). According to Givón, there are two methods for achieving grammatical complexity, namely, embedding and continuity. Chinese is a language in which it is relatively difficult to adopt methods of embedding such as adnominal modification and continuative modification. Conversely, not only is the structure common in which several verbal phrases follow one another, but elements that semantically speaking could be embedded as modifiers form clauses that are comparatively independent. Chinese could be said to be a language that favours a “continuous structure.”

It can be supposed that Chinese has also developed rhetorical structures in a form that makes use of “continuity.” Among complex sentences using this kind of “continuity,” in this article I examine in particular sentences of the type that is felt to be “like flowing water.” In instances of “continuity,” new elements are added to elements that have previously appeared, and for this reason the semantic subject may change partway through or there may be a shift from static description to dynamic description. And because the elements are arranged paratactically in this kind of “continuity,” the reader, too, takes cognizance of them in the order in which they appear in the sentence. This is the reason that such a sentence is felt to be “like flowing water.” Having discussed these points, lastly I compare such sentences with examples of their translation into Japanese and English and also reconsider, in terms of Chinese, expressions used in Gao Xingjian’s “stream of words.”

In section 7, I discuss the meaning of “love,” which suddenly appeared before Chuanqing, who was struggling to become a “Chinese youth.” This “love,” directed at Yan Ziyue’s daughter Yan Danzhu 言丹朱, was not the “free love” practised by “Chinese youth” and was instead a self-righteous emotion discovered solely in order to form a family relationship with Yan Ziyue, Chuanqing’s ideal. Having mistaken the meaning of modern love, the tale of Chuanqing’s pursuit of the image of “Chinese youth” begins to unravel.

Section 8 focuses on Chuanqing’s behaviour after the breakdown of his “love” for Danzhu. The breakdown of his “love” not only makes it impossible for him to form a family relationship with Yan Ziyue, after whom he aspires, but also has the decisive meaning of making it impossible for him to pursue the illusory image of “Chinese youth.” What Chuanqing, driven into a corner, ultimately found was irrational violence. In this section, I point out that the domineering violence exhibited by Chuanqing was closely related to patriarchal control.

In the final section, having confirmed that the image of “Chinese youth,” as well as being the aspired-for image of a male, could also become a heavy burden for men living during the Republican period, I conclude that “Jasmine Tea” is a story that ironically caricatures the way in which a protagonist hoping to become a “Chinese youth” ultimately destroys himself.

“Sentences Like Flowing Water” in Chinese and Their Rhetorical Characteristics

HASHIMOTO Yōsuke

In an earlier article (“The Flow of Narrative Voice and the ‘Stream of Words’ in Gao Xingjian’s *Soul Mountain*,” *Nihon Chūgoku Gakkai* 60, 2008), I analyzed Gao Xingjian’s 高行健 style in line with his concept of “stream of words.” Gao Xingjian is a writer who has been strongly influenced by Western literature, but he has also said with regard to his own style that he has made use of the characteristics of the Chinese language. That being case, what are these characteristics? In research in the area of linguistics, the form used in Gao Xingjian’s style has been called “sentences like flowing water” (*liushui wen* 流水文) by Lü Shuxiang 吕叔湘. Lü’s “sentence like flowing water” is a characteristic of Chinese such that “one clause is followed by another clause, and in many instances the sentence may either end there or continue.” However, it has not been given a formally strict definition, and Lü referred to it as “sentences like flowing water” largely on the basis of his own impressions. It is true that in Chinese sentences unfold “like flowing water.” But why is

provided discoveries and prompted self-reflection.

The Reverberating Voice of “Chinese Youth”: The Collapse of Ideals in Zhang Ailing’s “Jasmine Tea”

OGAWA Chikara

This article focuses on the short story “Jasmine Tea” (“Moli xiangpian” 茉莉香片) by Zhang Ailing 張愛玲 (Eileen Chang), an author who was active in Shanghai during the Japanese occupation, and it examines how much of a heavy burden the concept of “Chinese youth,” regarded as an ideal during the Republican period, was.

“Jasmine Tea” is the story of Nie Chuanqing 聶傳慶, a male student who has come to Hong Kong to escape wartorn Shanghai after the outbreak of the Sino-Japanese War. In this article, I interpret “Jasmine Tea” as the tale of how Chuanqing, ridiculed for being feminine and suffering from an identity crisis, struggles to become a “Chinese youth” and ultimately destroys himself. Through such an interpretation, I consider the meaning of the pursuit of the ideal of “Chinese youth” and its collapse.

In sections 2 and 3, I focus on Yan Ziye 言子夜, a university professor whom Chuanqing idolizes. Yan Ziye possesses the “beauty” of a literatus and is endowed with both bravery and ambition, and Chuanqing regards him as an ideal male. That with which Yan Ziye, Chuanqing’s ideal male, confronts Chuanqing, mentally distressed on account of being ridiculed for being feminine, is the concept of “Chinese youth.”

In sections 4 and 5, I first summarize discourse about “Chinese youth,” a concept that was born during the Republican period, and then examine Zhang Ailing’s perception of this concept. “Chinese youth” was a model of a new masculinity that rebelled against the feudal system and sought to reform state and society by running away from old-fashioned homes and practising love based on the free will of men and women (i.e., free love). On the basis of Zhang Ailing’s prose writings, on the other hand, I show that she displayed a derisive attitude towards this concept of “Chinese youth.”

From section 6 onwards, I essay an interpretation of “Jasmine Tea,” taking into account Zhang Ailing’s perception of “Chinese youth.” In section 6, having touched on the setting of “Jasmine Tea” and the situation at the time, I point out that Chuanqing discovered in the image of “Chinese youth” a strong and imposing “manliness” such as might become involved in rebuilding the state. But whereas the concept of “Chinese youth” was regarded as the aspired-for image of a male, this ideal image also became an obsession for Chuanqing, who yearned for “manliness.”

through to civil war. Works regarded as the quintessence of his *œuvre* were produced one after another in wartime Kunming 昆明, including a collection of twenty-seven sonnets called *Shisihang ji* 十四行集 (1st ed. 1942, 2nd ed. 1949), the prose collection *Shanshui* 山水 (1st ed. 1943, 2nd ed. 1947), and the novella *Wu Zixu* 伍子胥 (1946). His writing is underpinned by speculation and poetical sentiment about life and death, humans and nature, and destiny and decision-making. Almost all prior research has concentrated on these two periods. The third period corresponds to the 1950s, after the establishment of the People's Republic, and the tendency towards self-reflection and contemplation to be seen in his earlier writings disappears, to be replaced by a simple and clear poetic style praising new things of the age of socialism. The representative anthology of this period is the *Shinian shichao* 十年詩抄 (1959).

Research on Feng Zhi in recent years, while centred on his writings of the 1940s, has extended its subject matter to the periods before and after this time and is characterized by studies that focus on the individuality of a writer who found himself in a period of transition. Studies that see the literary spirit consistently underlying Feng Zhi's writings in "relentless self-negation" (Zhang Hui 張輝, 2005) or probe distinctive features of his lyricism in a self-reflective tendency and the image of metamorphosis (Wang Dewei 王德威, 2017) have offered fresh perspectives in the study of Feng Zhi.

This article, drawing on the prose collection *Shanshui* (Landscapes) written in the 1940s, examines the states discovered by Feng Zhi in landscapes (including people) in distant realms far from his home. He would later call the natural features and people of small European and Chinese towns and villages described in *Shanshui* "the mountains and rivers in my soul" (我靈魂裏的山川 [postscript to *Shanshui*]). Until now, the *Shanshui* has been regarded as a lyrical travelogue written during the war of resistance against Japan and has not necessarily been adequately examined when compared with the *Shisihang ji* and *Wu Zixu*. But the influence of Rilke is the most pronounced in the *Shanshui* in its attitude towards "seeing" foreign realms in the outside world, and it is an uncommon work of prose that through precise observation gives expression in simple language to the beauty of "nameless, commonplace, simple, and sincere existence." Feng Zhi himself, moreover, states that he cherished it like his own life.

This article first ascertains the atmosphere of Kunming and Southwest Associated University in the 1940s as the background against which this work was born. It then examines the inspiration provided by Rilke's "seeing," not only through the prose of the *Shanshui* but also through "The Story of a Childhood," in which Feng Zhi looks back on his childhood as a temporally "foreign realm." On this basis, I suggest that the time-space longed for by Feng Zhi in order to "organize" his desultory ideas and thoughts in the midst of unease and chaos as he stood at a crossroad in the late 1940s was the foreign realms of the *Shanshui*, that is, a simple state, interwoven by commonplace people and nature, that

importance on the poet's individuality. In both cases the discussions have the shared premise of a framework consisting of a poet endowed with individuality, poems created by such a poet, and readers who savour and critique these poems, and the analogy likening a poem to a dream is used in both cases. But by analyzing in detail differences in their use of this analogy, I show that, while carrying over Zhou Zuoren's and Guo Moruo's discussions, Fei Ming further developed them and thereby shaped his own theory about new poetry.

Further, in addition to the characteristic of placing importance on the poet's individuality, there also appears in the *Tan xinshi* the question of universality, taking into consideration the existence of readers, and here too the analogy of dreams continues to be used. There is developed the argument that maintaining a balance between the twin directions of individuality and universality is important for new poetry, and a state in which the poem, likened to a dream, is suspended in midair, as it were, between the poet, who guarantees its individuality, and the reader, who guarantees its universality, is presented as a model for an ideal new poem. Moreover, this fact indicates that while Fei Ming's theory of poetry was an extension of Zhou Zuoren's and Guo Moruo's discussions about self-expression, it was established by shifting these earlier discussions in a direction that pointed towards the autonomy of the text. Fei Ming's theory of poetry, which was thus turning its attention to the autonomy of the text, was unusual when compared with other contemporary theories of poetry, and such a perspective could be said to have possessed great significance in modern Chinese poetic theory, in which the analysis of a poem's text *per se* seldom became a subject of discussion.

The Distant Realms of Feng Zhi: With a Focus on His Prose Collection *Shanshui*

SATŌ Fumiko

The creative writings of the poet Feng Zhi 馮至 (1905–93) can be broadly divided into three periods. The first period was from the waning of the May Fourth movement to the late 1920s, and many of his works from this period give sensitive expression in plain language to the melancholy and sense of helplessness of youth. Distinctive are lyric poems such as “The Snake” (“She” 蛇), which makes use of striking similes (“My loneliness is a snake” 我的寂寞是一條蛇), and narrative poems that draw their material from tragedy. Lu Xun's 魯迅 assessment of him as “the most outstanding lyric poet in China” was made of him during this period. The second period, which followed a blank of about ten years, corresponds to the 1940s, from the war of resistance against Japan

yanyi. Further, judging from statistical data, literacy improved enormously during the Meiji era, and this may be considered to have led to an expansion of the male readership of the *Sanguozhi yanyi*. The *Sanguozhi yanyi* publishing boom of the Meiji era, when these conditions came together, could be described as a cultural phenomenon peculiar to the Meiji era, a time when Japan pushed forward to build a modern state.

When one surveys the cultural activities related to the *Sanguozhi yanyi* that were undertaken by people of the Edo and Meiji periods, the novel *Sanguozhi yanyi* may be said to have become part of Japan's national literature, even though it was a work of foreign provenance, and the time has come, I believe, to regard Japanese translations of the *Sanguozhi yanyi* and derivative works of fiction as Japanese "classics" and reassess them from a viewpoint separate from that of Chinese literature.

The Importance Placed on the Poet's Individuality in Fei Ming's *Tan Xinshi*: His Further Development of "Dreams" as Self-Expression

TANAKA Yūta

The *Tan xinshi* 談新詩, the only book on new poetry by Fei Ming 廢名 (1901–67), brings together transcripts of his lectures when he was teaching at Peking University from the 1930s to 1940s. It discusses various kinds of new poetry from the time of Hu Shi 胡適, but its core thesis is simply that "the content of a new poem must be the content of a poem." However, Fei Ming gives only a simple definition of the "content of a poem," stating that it represents the completion of the "poem's emotion" on the part of the poet, based on actual experience, and with regard to its substance he takes the vague approach of indicating it indirectly while commenting on actual examples of new poetry.

Past research has endeavoured to understand this discussion of new poetry, the crux of which is difficult to grasp, in line with the image of Fei Ming as a writer who was considered to be experimental and abstruse. But at the same time insufficient attention has been paid to an important characteristic of the *Tan xinshi*, namely, the importance attached to the poet's individuality. In this article, I take note of the fact that the existence of sentiments based on the poet's individuality is repeatedly emphasized in the *Tan xinshi* as a condition of outstanding new poetry, and I show that this idea followed on from discussions about self-expression that were developed by Zhou Zuoren 周作人 and Guo Moruo 郭沫若 in the first half of the 1920s.

But there are not only points in common but also differences between Zhou Zuoren's and Guo Moruo's discussions about self-expression and Fei Ming's discussion placing

in Japan during the Edo period in the form of the *Tsūzoku Sangokushi* 通俗三國志, translated by Bunzan 文山 in 1691 (Genrokū 元祿 4), and the illustrated *Ehon tsūzoku Sangokushi* 繪本通俗三國志. Then, during the Meiji era, these earlier translations as well as new translations, abridgements, and illustrated versions were letterpress printed in large quantities, and the culture of the *Sanguozhi* in Japan grew dramatically. Typeset translations of the *Sanguozhi yanyi* published during the Meiji era number sixty-four, including reprints, but their publication tended to be concentrated in certain periods, and one can differentiate three periods, namely, a first boom, a period of stagnation, and a second boom.

In 1877 (Meiji 10), prior to the first boom, Nagai Tokurin 永井徳鄰 published the first typeset translation of the *Sanguozhi yanyi* in Japan, and this was followed by the first boom from 1882 (Meiji 15) to 1890 (Meiji 23). During these nine years thirty-seven translations were published, and it becomes evident through an examination of information about the publication of the *Ehon Tsūzoku Sangokushi* by Shimizu Ichijirō 清水市次郎, a translation bound in Western style and published by Senshindō 潛心堂, and other translations brought out by publishers such as Seibunsha 成文社 and Bunjidō 文事堂 that the translators and publishers, while influencing one another, sought to differentiate themselves in their original illustrations and in their commentaries, binding, and so on and engaged in keen competition. Another distinctive feature of this period was the publication of a great variety of translations to meet readers' demands, including an abridged version by Tsukinoya Shūri 月の舎秋里 and a pocket-sized illustrated version.

The number of published translations declined from 1891 (Meiji 24) to 1906 (Meiji 38), marking a period of stagnation. But the *Tsūzoku Sangokushi*, for example, published in the Teikoku Bunko 帝國文庫 series by Hakubunkan 博文館, a leading publishing house, was reprinted several times during this period.

Then from 1907 (Meiji 39) the situation changed completely, and the second boom arrived, lasting until the end of the Meiji era. Not only did earlier translations and so on continue to be published, but the recension of the *Sanguozhi yanyi* edited by Mao Zonggang 毛宗崗 was translated into Japanese for the first time by Kubo Tenzui 久保天隨. This was also a period during which academic research on the *Sanguozhi yanyi* made enormous progress through the writings of Kubo and Kōda Rohan 幸田露伴.

Several reasons can be posited for the popularity of the *Sanguozhi yanyi* and its dissemination during the Meiji era. One reason is that, because a translation was completed relatively early in the Edo period and various illustrated versions in the form of *kibyōshi* 黄表紙 and so on had been produced, it became possible to immediately embark on typeset versions in the early Meiji era. Another major factor was that during the forty-five years of the Meiji era the number of typeset publications steadily increased throughout Japan, as a result of which it became possible to publish cheap versions of the *Sanguozhi*

a letter sent to him by Zhang Pu 張溥, the leader of the Fushe. But while past research has recognized this influence, negative views about this influence have predominated on the grounds that there is no material proving actual contact between them.

In this article, I present material showing Lu Yunlong's association with the Fushe and Jishe, as well as pointing to concrete evidence of the influence of this association on his publishing activities. In addition, with regard to the *Qingye zhong*, for which there has been no decisive proof that it was written by Lu Yunlong, I present material corroborating his authorship. The structure of the article is as follows.

In section 1, I first ascertain actual references to the Fushe and Jishe in Lu Yunlong's writings and so on.

In section 2, I take up Feng Yuanzhong 馮元仲, a publisher in Cixi 慈谿, Ningbo 寧波, as a figure who holds the key to demonstrating Lu Yunlong's direct association with the Fushe and Jishe, and I describe his friendship with Lu Yunlong and his life.

In section 3, I first present materials pertaining to the relationship between Feng Yuanzhong of Cixi and the Fushe. I also point out that the names of large numbers of people associated with the Fushe and Donglin 東林 faction, shared with these materials, are found in books for examination candidates published by Feng Yuanzhong, that there exist several materials corroborating their relationship with him, and that he himself was a member of the Wenchangshe 文昌社, a branch of the Fushe. In addition, I show that in fact Lu Yunlong was himself involved in proofreading books for examination candidates, and I conclude that, judging also from other relevant materials, Lu Yunlong would seem to have formed concrete associations with the Fushe through these activities.

In relation to the above, in section 4 I examine the question of the authorship of the *Qingye zhong*, a collection of vernacular short stories about which there has been discussion as to whether or not it was composed by Lu Yunlong. In connection with the two figures Wang Wei 汪偉 and Zhu Jian 朱健, about which questions have been raised in these discussions, and the seal affixed after the preface, I present some convincing materials that lend substance to the view that Lu Yunlong was the author of the *Qingye zhong*.

The Translation and Publication of the *Sanguozhi Yanyi* during the Meiji Era

UEDA Nozomu

The *Sanguozhi yanyi* 三國志演義, composed during the Ming period, circulated widely

奇門遁甲 and undertake an inquiry into the consciousness of time among the Chinese people as reflected in the theory about telling the time by a cat's eyes. I show that this theory, popular during the Ming-Qing period, was more closely related to divination techniques reflecting changes in *yin-yang* 陰陽 and the laws of nature. In other words, the Chinese chose a conceptual mode of time rather than actual observations. I also present the possibility that the idea of dividing into three the twelve branches in the theory about telling the time by a cat's eyes (*zi wu mao you* 子午卯酉, *yin shen si hai* 寅申巳亥, and *chen xu chou wei* 辰戌丑未) may have evolved under the influence of a certain dynamic that is probably ubiquitous in Chinese culture, namely, the tripartite division of time such as is seen in the "one pneuma and three primes" of *qimen dunjia*.

The Publishing Activities of Lu Yunlong, the Commentator of the *Xingshi Yan*, and the Fushe

HYŌNO Kazue

The brothers Lu Yunlong 陸雲龍 and Lu Renlong 陸人龍 were booksellers who were active in Hangzhou 杭州 in the Chongzhen 崇禎 era of the late Ming. They leapt into fame on account of the *Xingshi yan* 型世言, a collection of vernacular short stories which, ever since its discovery in the 1980s in the Kyujanggak 奎章閣 Library at Seoul National University in Korea, has been mentioned alongside the *Sanyan* 三言 and *Erpai* 二拍 collections as a work that had a great influence on the fiction of the late Ming and early Qing. But there is much that remains unclear about its publication, and little is known about the lives of the Lu brothers.

As well as being known for having written the preface to the *Xingshi yan* and having commented on it, the elder brother Lu Yunlong (1587–1666; *zi* 字: Yuhou 雨侯) was well known at the time as a publisher who published many books in the late Ming and early Qing, and because he is also regarded as the author of the novels *Wei Zhongxian xiaoshuo chijian shu* 魏忠賢小說斥奸書 and *Qingye zhong* 清夜鐘, he has been the main subject of research in the past. What has been pointed out by many scholars is the promotion of patriotism and loyalty underlying his writings and publications and the influence on them of the politico-literary society Fushe 復社 and the Jishe 幾社, which was under its umbrella.

In point of fact, references to the Fushe and Jishe often appear in books published by Lu Yunlong. The anthology of his poems called *Cuiyuge jinyan* 翠娛閣近言 includes close to fifty poems with comments such as "uses the rhyme of Chen Wozi" (用陳臥子韻) and "also uses the rhyme of the Jishe" (俱用幾社韻), and his biography written by his son mentions

the Imperial Library of Peking, it has become clear, when one also takes into account the number of poems and its format, such as the page frames, the number of lines per page, and the arrangement of the lines, that the incomplete Song edition of the *Ouyang Wenzhong gong ji* seen by Wu Changshou was identical to the *Jinti yuefu* included in the *Ouyang Wenzhong gong ji* held by Tenri Central Library. Since this latter edition is an enlarged edition that was published after the publication of Zhou Bida's original edition of the *Ouyang Wenzhong gong ji* in 1196, it is clear that the Jizhou edition of the *Jinti yuefu* that is identical with the Tenri version is not the version published in 1196.

The Jizhou edition of the *Jinti yuefu* is the *Jinti yuefu* that was included in an incomplete Song edition of the *Ouyang Wenzhong gong ji* held in the Imperial Library of Peking (and misidentified by Wu Changshou as Zhou Bida's original edition of the *Ouyang Wenzhong gong ji*), and it is not the *Jinti yuefu* included in the *Ouyang Wenzhong gong ji* compiled by Zhou Bida and published in 1196 in Jizhou, as had been thought to be the case in past research. It is, moreover, an enlarged edition to which thirteen poems were added in the Southern Song and is therefore not the archetype of the received text of the *Jinti yuefu*, and it is identical to the *Jinti yuefu* included in the *Ouyang Wenzhong gong ji* currently held by Tenri Central Library.

Chinese Consciousness of Time as Seen in the Theory about Telling the Time by a Cat's Eyes

JIN Bonan

In Ming-Qing China, the theory that one can tell the time by changes in the shape of a cat's pupil was popular. According to my past investigations, this theory circulated widely among the general populace during the Qing period, but it was not generally used as a method for telling the time, and it has become clear that with the introduction of scientific knowledge it became a target of criticism during the Republican period and gradually disappeared. But the most important questions relating to this theory—the arrangement of the twelve terrestrial branches of the sexagenary cycle to indicate time in accordance with changes in the shape of a cat's pupil and the underlying consciousness of time—still remain unclear.

In this article, I survey developments that led to the establishment of the theory about telling the time by a cat's eyes and, comparing it with its reception in Japan, I draw attention to its relationship with the concept of time seen in the idea of “one pneuma and three primes” (*yiqi sanyuan* 一氣三元) in the divinatory technique called *qimen dunjia*

metaphors involving the woodpecker and in raising the possibilities of their expressiveness to the utmost limits.

A Study of the Jizhou Edition of the *Jinti Yuefu*

HIGASHI Hidetoshi

The 3-fascicle *Jinti yuefu* 近體樂府 is included in fasc. 153 of the *Ouyang Wenzhong gong ji* 歐陽文忠公集, compiled by Zhou Bida 周必大 in 1196 (Qingyuan 慶元 2), and because its date of publication and compiler are clear, it is considered to be highly reliable and anthologies of Ouyang Xiu's 歐陽脩 *ci* 詞 poems published in later times have in almost all cases taken his poems from the *Jinti yuefu*.

When considering the *Jinti yuefu*, importance has until now been attached to the existence of the Jizhou 吉州 edition of the *Jinti yuefu*. The Jizhou edition is included in the *Ouyang Wenzhong gong ji* compiled by Zhou Bida that was published in 1196 in Jizhou, the home district of Ouyang Xiu and Zhou Bida, and it has been regarded as the source of the *Jinti yuefu* transmitted down to the present day and has accordingly been viewed with importance. But there is the question of why the number of poems contained in the Jizhou edition differs from the *Sibu congkan* 四部叢刊 edition and *Siku quanshu* 四庫全書 edition of the *Jinti yuefu* compiled in later times, and there have also been doubts about whether it is really possible to ascertain an actual copy of the Jizhou edition published in 1196.

In this article, I accordingly undertake an examination based on differences in the number of poems contained in the Jizhou edition of the *Jinti yuefu* and in the received text of the *Sibu congkan* and other editions, and having added the results of additional investigations at the National Library of China, I show that the Jizhou edition of the *Jinti yuefu* was not compiled in 1196, as has hitherto been maintained. In the past, when utilizing the Jizhou edition, instead of checking an actual copy of the version compiled in 1196, researchers have based themselves on the Jizhou edition included in the *Renhe Wushi shuangzhaolou jingkan Song-Yuan benci* 仁和吳氏雙照樓景刊宋元本詞 (*Jingsong Jizhou-ben Ouyang Wenzhong gong Jinti yuefu* 景宋吉州本歐陽文忠公近體樂府), a collection of *ci* poems of the Song and Yuan periods compiled in 1911–17 by Wu Changshou 吳昌綬, and have conducted their discussions as if this were the *Jinti yuefu* published in 1196.

The *Jinti yuefu* edited by Wu Changshou was a version included in an incomplete Song edition of the *Ouyang Wenzhong gong ji* 歐陽文忠公集 held at the time in the Imperial Library of Peking, and as a result of my examination of a Song edition of the *Ouyang Wenzhong gong ji* currently held by the National Library of China, the successor to

Further, in the late Tang, with the establishment of the perspective of “woodpeckers, insects, and trees,” there emerged the contradictory two-sidedness of the woodpecker, which both eradicates harmful insects and damages trees.

By the Song period the woodpecker was being taken up as a symbol of justice defeating evil, as can be seen in the early Song in the poem “Zhuomu ge” 啄木詞 by Wang Yucheng 王禹偁. Further, as is indicated by Sima Guang’s 司馬光 assessment of “Zhuomuniao” 啄木鳥 by Wei Ye 魏野 as an “admonishment,” there had been established a shared perception that this topic possessed social and political implications.

It was Mei Yaochen 梅堯臣 who decisively impressed upon readers the political implications of the woodpecker in Song poetry, and he wrote of two major political incidents in the Jingyou 景祐 and Qingli 慶曆 eras by associating them with the woodpecker. Further, in some works the element of “humans” was added to the earlier interrelationship between woodpeckers and insects. This schema, with the addition of “humans,” was used the most effectively in the “Zhuomu ci” 啄木辭 by Ouyang Xiu 歐陽脩, who argued that, when considering the protection of trees, the greatest threat was in fact human beings. A hopeless situation is depicted in this work, with insects eating trees, woodpeckers continuing their futile efforts, people cutting down trees, and forests being destroyed. There also emerged in literary circles antipathy towards this political and complex image of the woodpecker, and in the poems of Li Zhi 李廌, an ill-fated genius, the cruelty of the woodpecker is criticized.

Thus, Northern Song literature saw developments in which existing images of the woodpecker were redrawn while keeping the central focus on its ecological characteristics. Instead of following existing patterns, their basic structure was freely adapted and these patterns were broken down. Further, when analyzed from the aspect of the structure of the relationships among the entities appearing in these works, headed by the woodpecker, there was a gradual development from the early emphasis on the single entity of the woodpecker to a multistratified structure through the addition of the elements of insects, then insects and trees, and finally insects, trees, and humans.

Those responsible for these literary developments were all politicians holding important posts and their acquaintances. The “literature of the woodpecker” was, as it were, a microcosm of the political history in which the writers themselves had been caught up. But that to which these men of letters managed to give expression in this microcosm went far beyond the background to a particular period. The fruitlessness of good intentions and efforts, the inverse proportion between goals and reality, the variability of the sense of good and evil, and so on are able to act as fundamental satires of or warnings to human society. The creative acts in which literati of the Northern Song continued to search for a course of action that conformed to the complexity of the actual world in which they lived could be said to have resulted in the formation of diverse imagery in methods for creating

as a standard for examinations. It was confirmed that the adoption of Kong Yingda's commentary in Xing Bing's commentary reflected not only this criterion but also the canonical scholarship of the compiler himself and his contemporaries.

In section 3, I examine the character of canonical studies in the early Northern Song—so-called “scholarship on commentaries”—to be seen in Xing Bing's commentary and clarify the following two points. First, scholarship on commentaries was confined to quotations from government-approved commentaries and belittled thinking about their contents. Secondly, when compared with earlier scholarship on commentaries, it was wanting in understanding of the structure of canonical texts. Through these two points it becomes clear that scholarship on commentaries was centred on government-approved commentaries and deviated from and differed in character from the earlier scholarship reflected in Huang Kan's and Kong Yingda's commentaries.

In section 4, I examine the relationship between scholarship on commentaries and the turning point in canonical scholarship in the Tang-Song period. Taking Book 1 of the *Lunyu* as an example, I consider the reasons for Xing Bing's adoption of interpretations that differ from those of Huang Kan's commentary and show that contemporary scholars saw no value in interpretations like those of Huang Kan's commentary, which placed importance on structural analysis. In conjunction with this change in views, the theories of earlier scholarship on commentaries were rejected and new interpretations emerged. Scholarship on commentaries was a conservative form of scholarship for the civil service examinations, and one can ascertain in it a shift in Tang-Song canonical scholarship.

The Woodpecker in Northern Song Literature: Increasing Depth in Its Connotations

HAYAKAWA Taiki

The woodpecker has a distinctive type of behaviour, using its long beak to peck at trees and extract insects living under bark and in wood to feed on. Exploring changes in how the woodpecker has figured in Chinese literature is also an exercise in delineating the history of the development of the connotations of certain things in poems about such things or objects (*yongwu* 詠物), and in particular developments in Northern Song literature merit attention.

The woodpecker first emerges in Chinese literature in the Western Jin, and initially it was a noble, self-sufficient bird or was depicted in terms of the schema of “woodpeckers and insects,” and basically the woodpecker was an entity that got rid of harmful insects.

Scholarship on Commentaries in the Early Northern Song: On the Compilation of Xing Bing's *Lunyu Zhengyi*

WANGSUN Hanzhi

The *Lunyu zhengyi* 論語正義 by Xing Bing 邢昺, a commentary on the *Lunyu* 論語, was compiled in the early Northern Song (960–1022), and it was a government-approved commentary following on from the *Wujing zhengyi* 五經正義 by Kong Yingda 孔穎達 of the Tang. Unlike other commentaries on canonical texts, the base-text used by Xing Bing when compiling his commentary—the *Lunyu yishu* 論語義疏 by Huang Kan 皇侃—is extant, making it possible to compare the two, and therefore Xing Bing's commentary has from early times attracted attention in research on the transitional period between Han-Tang exegetics and Song-Ming metaphysics. The characteristics of Xing Bing's commentary have been summarized in prior research, but there remains scope for further examination of the policy adopted in its compilation. In addition, it has already been shown that Kong Yingda's commentary is frequently quoted in Xing Bing's commentary, and there is a need to further investigate the question of what Xing Bing's intentions were when quoting Kong Yingda's commentary. Starting out from such an awareness of the issues, this article considers the relationship between the compilation of Xing Bing's commentary and the scholarship on commentaries in the early Northern Song.

In section 1, I focus on passages in which Xing Bing has substituted Kong Yingda's interpretation for that of Huang Kan and consider the position of Kong Yingda's commentary in the compilation of Xing Bing's commentary. As a result, the following two points become clear. First, there are instances in which Xing Bing ignores Huang Kan's commentary when it provides appropriate comments on the *Lunyu jijie* 論語集解 by He Yan 何晏 and instead adopts a different interpretation given by Kong Yingda. Secondly, even when Huang Kan's commentary gives the same interpretation as Kong Yingda's commentary, Xing Bing does not adopt Huang Kan's interpretation and instead always uses Kong Yingda's interpretation. It is to be concluded from these two points that the preferential adoption of Kong Yingda's commentary over Huang Kan's commentary, Xing Bing's base-text, was due to the former's authoritativeness.

In section 2, I discuss the relationship between the compilation of Xing Bing's commentary and the civil service examination system. The compilation of Xing Bing's commentary as part of policies for the unification of literary education in the Northern Song was aimed at establishing a standard for the civil service examinations. The fundamental principle underlying the choices made in the course of its compilation was conformity with existing government-approved commentaries that had served

well versed in prosody, calligraphy, and astronomy. This article examines where the distinctiveness of his perspective on calligraphy lay and why he felt a need to discuss calligraphy.

The reason that Wang Sengqian discussed calligraphy was that he had “doubts” about the “assessments of earlier generations.” “Assessments” (*chengmu* 稱目) of a person or the specific talents of a person were commonly made among people of the Six Dynasties. I examine the distinctive qualities of Wang Sengqian’s assessments that come to light through a comparison with the “Gulai nengshu renming” 古來能書人名 by Yang Xin 羊欣. This was an evaluation centred on Wang Xizhi 王羲之, and for this reason reference is made to the relationship with Wang Xizhi.

Meanwhile, Wang Sengqian was also renowned for his actual works of calligraphy, and his ideas about calligraphy are shown in his “Shu fu” 書賦, which discusses the genesis of calligraphy. It begins by stating that inner aspects such as “emotion” and “thought” are “empty” and locates the origins of calligraphy in an extremely abstract place, and Wang Sengqian proclaims its connections with skill and rules. He also endeavours to gain a grasp of the question of “mind” and “hand” going back to Zhao Yi 趙壹 by discussing it in still greater detail. In line with the relationship between “beauty” and “strength” alluded to in his “Lun shu” 論書, it can be inferred from the “Shu fu” that he endorsed the possession of both of these qualities.

In the final analysis, what was Wang Sengqian’s view of calligraphy? It may be concluded that it was the simultaneous possession of different qualities (*jian* 兼). His praise of Wang Xizhi is such that even Cui Yuan 崔瑗 and Zhang Zhi 張芝 come together in Wang Xizhi. This is because among these elements, Wang Sengqian attached importance in his assessment of calligraphy to “beauty” and “strength,” the simultaneous possession of which he regarded as the ideal, and he presumably considered Wang Xizhi to have embodied this ideal. It may be supposed that it was for this reason that he had “doubts” about the “assessment of earlier generations,” which did not touch on this point.

It was able to be confirmed that the “Wen fu” 文賦 by Lu Ji 陸機 had a strong influence on the origins of the ideas underpinning the “Shu fu.” Whether or not these connections with the “Wen fu” and Wang Sengqian’s arguments tie in with the transformation of calligraphical studies into a form of metaphysics (*xuanxue* 玄學), or aesthetics, as proposed by Zhang Tiangong, is a question that will need to continue to be carefully examined in the future.

discussions developed in different directions, with, for example, other elements being added or the reason for change being sought in a lack of ethical behaviour. In particular, from around the time of the Wei, Jin, and Northern and Southern Dynasties there appear many examples of human beings turning into something else. When a human being, a being that does not normally turn into something else, does so, there arises the question of why this has happened, and moral laws were given as an answer to this question. The view that change occurred as a result of violation of a moral code had originally been present in Chinese culture, but it may be said to have become more prominent through Buddhism and Daoism. The mechanism of change as a form of punishment, discussed in the context of various factors such as punishment by the Buddha or Heaven, differs from that of change explained rationally by means of *yin-yang* and *wuxing* theory in the course of time, as was formerly seen in theories underpinning seasonal ordinances. The objects of change are limited in their variations, but developments came to be seen in the causes of change. Especially in the case of Daoism, there were instances in which the element of transformation into an immortal (*xianhua* 仙化 or *yuhua* 羽化) played an even more important role than any moral code. This was change as recompense or change through the techniques of immortals. A perusal of works of later times in the Ming and Qing periods reveals many passages that enumerate changes in the manner of natural science, with an emphasis on how to classify change, and there is no attempt to discuss change as something that occurs in reality.

Wang Sengqian's Views on Calligraphy: "Assessments" and the Genesis of Calligraphy

SEKI Toshifumi

The Southern Qi was a time when culture flourished during the Six Dynasties. This was because Xiao Ziliang 蕭子良, the Prince of Jingling 竟陵王, established a salon where various forms of culture were fostered and, in the field of literature in particular, a style called "Yongming 永明 literature" evolved around Shen Yue 沈約 and others. In recent years, Zhang Tiangong 張天弓 has argued that the study of calligraphy also developed in conjunction with these moves, and he has proposed the designation "Yongming calligraphical studies." Moreover he said, according to Zhang, Wang Sengqian 王僧虔 played a central role in "Yongming calligraphical studies."

Wang Sengqian (426–485) lived during the Song and Southern Qi dynasties and was born into the Wang clan of Langye 琅邪. He was accomplished in various arts and was

日本中國學會報

THE
NIPPON-CHŪGOKU-GAKKAI-HŌ

No.72 2020

SUMMARY 提要

Ideas about “Change”

ARIMA Takuya

Phenomena expressed by the word “change” (*hua* 化) are wide-ranging and include changes through education, changes in the trends of the times, changes of mind, and changes in physical constitution through medicines. The type of change taken up here is the phenomenon of something changing from A to B, and it is moreover changes in which no emphasis is given to rational explanations based on *yin-yang* 陰陽 and *wuxing* 五行 theory, that is, change that has little connection with the *Yijing* 易經. I explore primarily what sorts of changes were naïvely trusted and spoken of among the general populace and how these changes were discussed in later times.

First, in section 1, taking a lead from changes appearing in “seasonal ordinances” (*shiling* 時令), I consider change on the basis of the criterion of whether it occurs regularly or irregularly. Next, in section 2, in contrast to seasonal ordinances, which belonged to the political realm, I consider change at the level of the general populace with reference to the *Huainan wanbishu* 淮南萬畢術. Then, in section 3, I discuss passages in works such as the *Lunheng* 論衡, *Liezi* 列子, *Soushenji* 搜神記, *Baopuzi* 抱朴子, *Yuzhitang tanhui* 玉芝堂談薈, and *Shuyin congshuo* 書隱叢說 and trace changes in how this type of change was discussed. I also examine examples of the use of the expression “Niu Ai turned into a tiger” (牛哀化虎).

On the basis of the above investigations, the following conclusions were reached. Initially something that caused change (such as Heaven, *yin-yang*, or time) was posited, and it was considered that change could be understood only by a sage who had become one with the Way. But at the same time there were also moves to bring about such change by human agency, and these were called “technical arts” (*shu* 術).

However, discussion of matters that had initially been at issue eventually waned, and

日本中国学会 役員 (2019-20年度 五十音順)

理事長	金 文京					
副理事長	釜谷武志		小島 毅			
理事	赤井益久		浅見洋二		吾妻重二	
	垣内景子		佐竹保子		宇佐美文理	
	渡邊義浩				大木 康	
監事	牧角悦子(主席)		市來津由彦		内山精也	
	評議員		赤井益久		阿川修三	
顧問	市來津由彦		伊東貴之		上田 望	
	大西克也		岡崎由美		小川恒男	
	釜谷武志		神塚淑子		稀代麻也子	
	小松 謙		小松建男		近藤浩之	
	佐藤大志		佐藤普美子		佐藤正光	
	末永高康		竹村則行		谷口 洋	
	永富青地		野村鮎子		萩原正樹	
	牧角悦子		松尾肇子		松原 朗	
	柳川順子		山口 守		湯浅邦弘	
	池田秀三		池田知久		石川忠久	
	興膳 宏		土田健次郎		戸川芳郎	
	村山吉廣		吉田公平			
	幹事		浅野雅樹		松倉梨恵	
					吉永壮介	
					吾妻重二	
					宇佐美文理	
				大木 康		
				小川恒男		
				静永 健		
				松尾肇子		
				松原 朗		
				小川恒男		
				垣内景子		
				加藤 敏		
				狩野 雄		
				金 文京		
				小島 毅		
				木津祐子		
				齋藤希史		
				坂口三樹		
				佐竹保子		
				齋藤鍊太郎		
				静永 健		
				小路口 聡		
				種村和史		
				鶴成久章		
				中里見 敬		
				東 英寿		
				濱田麻矢		
				藤井省三		
				松村茂樹		
				三浦秀一		
				三上英司		
				弐和順		
				和田英信		
				渡邊義浩		
				今鷹 真		
				加地伸行		
				川合康三		
				富永一登		
				野間文史		
				三浦國雄		

各種委員会 (◎委員長 ○副委員長)

大会委員会	◎赤井益久	○吾妻重二	市瀬信子	坂井多穂子	谷口真由実	種村和史
	土谷彰男	東 英寿	(幹事) 鈴木崇義			

論文審査委員会

◎渡邊義浩	○浅見洋二	○中島隆博	井川義次	伊東貴之	上田 望
大西克也	稀代麻也子	近藤浩之	末永高康	高山大毅	竹越 孝
武田雅哉	谷口 洋	中里見 敬	濱田麻矢	堀川貴司	町 泉寿郎
松江 崇	横手 裕	(幹事) 伊藤 涼			

出版委員会	◎静永 健	○宇佐美文理	門脇廣文	小塚由博	齋藤希史	佐々木勲人
	三浦秀一	渡邊義浩	(幹事) 池田恭哉			

選挙管理委員会

◎松原 朗	○松尾肇子	恩田裕正	河野貴美子	高橋幸吉	陳 捷
吉田篤志	(幹事) 松野敏之				

研究推進・国際交流委員会

◎垣内景子	○小川恒男	内山精也	野村鮎子	(幹事) 阿部光麿
-------	-------	------	------	-----------

広報委員会	◎大木 康	○木津祐子	閻 淑珍	鶴成久章	山下一夫
	(幹事) 笠見弥生				

将来計画特別委員会

◎佐竹保子	○弐和順
長尾直茂	萩原正樹
早坂俊廣	柳川順子
(幹事) 高戸 聰	

2020年10月10日 発行

〒113-0034 東京都文京区湯島1丁目4-25 斯文会館内

日本中国学会 代表者：金 文京

FAX (03)3251-4853 振替口座 00160-9-89927

印刷者：株式会社サンセイ 〒162-0818 東京都新宿区築地町19-4

TEL (03)5227-8333 FAX (03)5227-8331

編集担当 門脇廣文(大東文化大学)、小塚由博(大東文化大学)、高橋睦美(大東文化大学)

THE NIPPON-CHŪGOKU-GAKKAI-HŌ

Bulletin of Sinological Society of Japan

No.72 2020

CONTENTS

ARIMA Takuya : Ideas about “Change”	3
SEKI Toshifumi : Wang Sengqian’s Views on Calligraphy: “Assessments” and the Genesis of Calligraphy	17
WANGSUN Hanzhi : Scholarship on Commentaries in the Early Northern Song: On the Compilation of Xing Bing’s <i>Lunyu Zhengyi</i>	32
HAYAKAWA Taiki : The Woodpecker in Northern Song Literature: Increasing Depth in Its Connotations	46
HIGASHI Hidetoshi : A Study of the Jizhou Edition of the <i>Jinti Yuefu</i>	62
JIN Bonan : Chinese Consciousness of Time as Seen in the Theory about Telling the Time by a Cat’s Eyes	77
HYŌNO Kazue : The Publishing Activities of Lu Yunlong, the Commentator of the <i>Xingshi Yan</i> , and the <i>Fushe</i>	89
UEDA Nozomu : The Translation and Publication of the <i>Sanguozhi Yanyi</i> during the Meiji Era	104
TANAKA Yūta : The Importance Placed on the Poet’s Individuality in Fei Ming’s <i>Tan Xinshi</i> : His Further Development of “Dreams” as Self-Expression	119
SATŌ Fumiko : The Distant Realms of Feng Zhi: With a Focus on His Prose Collection <i>Shanshui</i>	134
OGAWA Chikara : The Reverberating Voice of “Chinese Youth”: The Collapse of Ideals in Zhang Ailing’s “Jasmine Tea”	148
HASHIMOTO Yōsuke : “Sentences Like Flowing Water” in Chinese and Their Rhetorical Characteristics	162
ŌSHIMA Erika : On Interlinear Glosses in a Gozan Edition of the <i>Shangū Shi Jizhu</i> Held by Iwase Bunko Library, Nishio: In Connection with Sinitic Commentaries on Huang Shangu’s Poems	176
TAKAYAMA Daiki : “Bright-Moon Jade” and Takano Rantei	191
KURODA Hidenori : The Kaitokudō’s Theory of Governance: Its Connections with the Sorai School in Terms of Intellectual Thought	203
FU Jiayin : On Matsuzaki Kōdō’s Reception of Tao Yuanming: With a Focus on the Publication of the Sekikyō Sanbō Edition of the <i>Tao Yuanming Wenji</i>	218
Contributors and Editorial Postscript	232
Guidelines Regarding Contributions	(51)
Regulation of the Sinological Society of Japan	(44)
Trends and Activities in Sinological Studies	(32)
Miscellaneous Reports	(25)
Summary	(1)

Published by
The Sinological Society of Japan
Tokyo